

## 第4章 昆布山谷地区の調査成果

### 第1節 第1地点

#### 第1項 調査の概要 (Fig. 7・9)

第1地点は昆布山谷の入口付近に位置する佐毘売山神社の南側に設定した。標高は228m程度で、平坦面の北側は傾斜の急な斜面となっている。第1地点の東側には坑道(間歩番号229番)が開口しており、その坑口の北側に露出した岩盤には長方形の加工痕が見られる。南側には石積みや井戸がある。

本地点では、主に坑口周辺における利用状況を明らかにするため、平成22年度にはトレンチを2つ設定した。第1トレンチは、地表面で確認されていた坑口

の西側に設定したトレンチで、東西3.3m、南北5.5mである。第1トレンチの南部に設定したサブトレンチでは石積み遺構(SX01)の基部が確認できたほか、基壇状の盛土や石列、礎石建物の一部が検出された。

第2トレンチは、平坦面の北側における遺構検出を目的として設定した。調査によって炉跡が検出されたため、遺構保護の観点よりそれ以上の掘削はせず、検出遺構の記録を行なった。

平成23年度には、平坦面の南側において遺構の様相を確認するために、第2トレンチの南西に第8トレンチを設定し、調査を行なった。平成23年度の調査

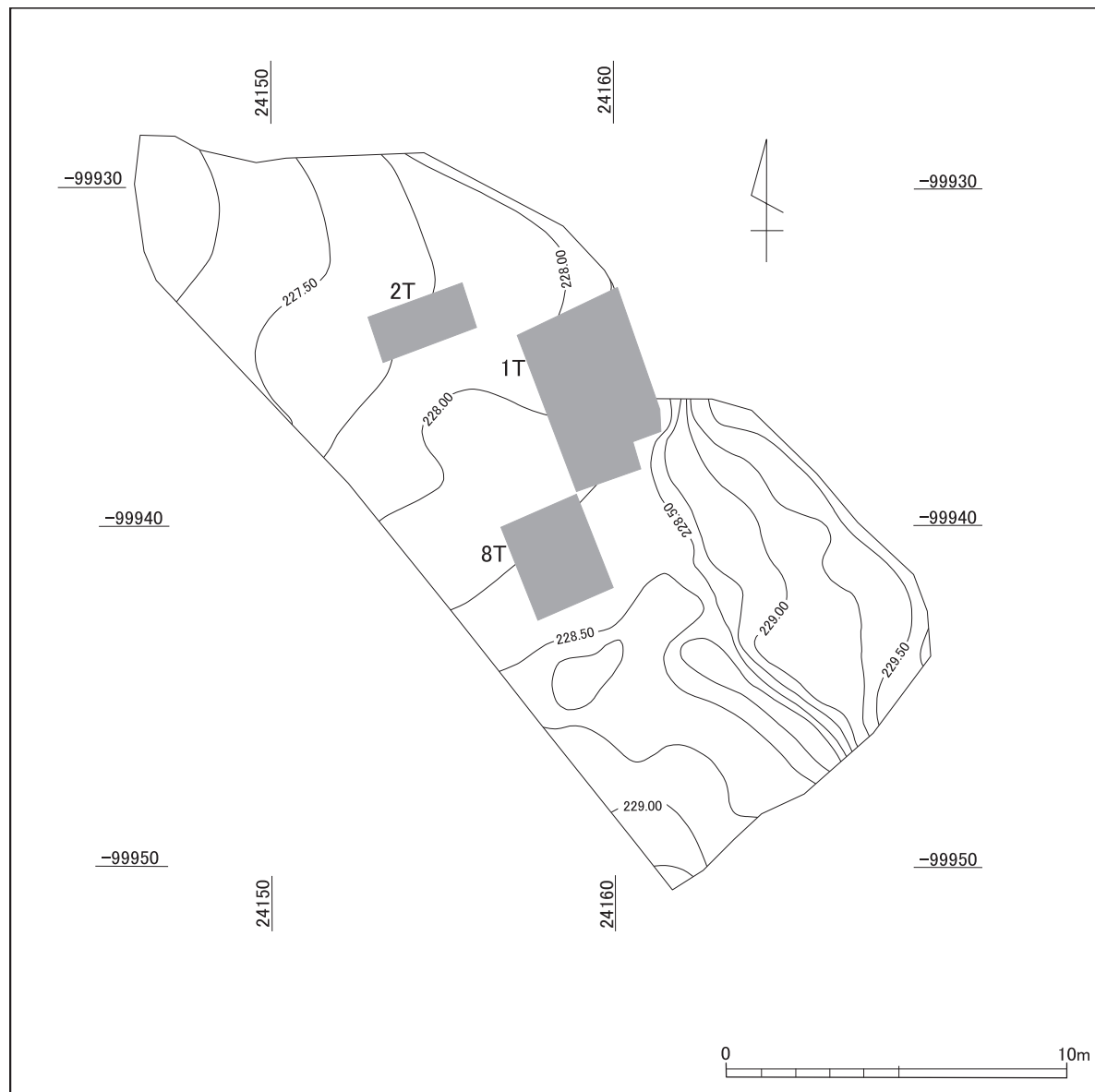


Fig. 7 昆布山谷地区第1地点地形図 (S = 1 / 200)

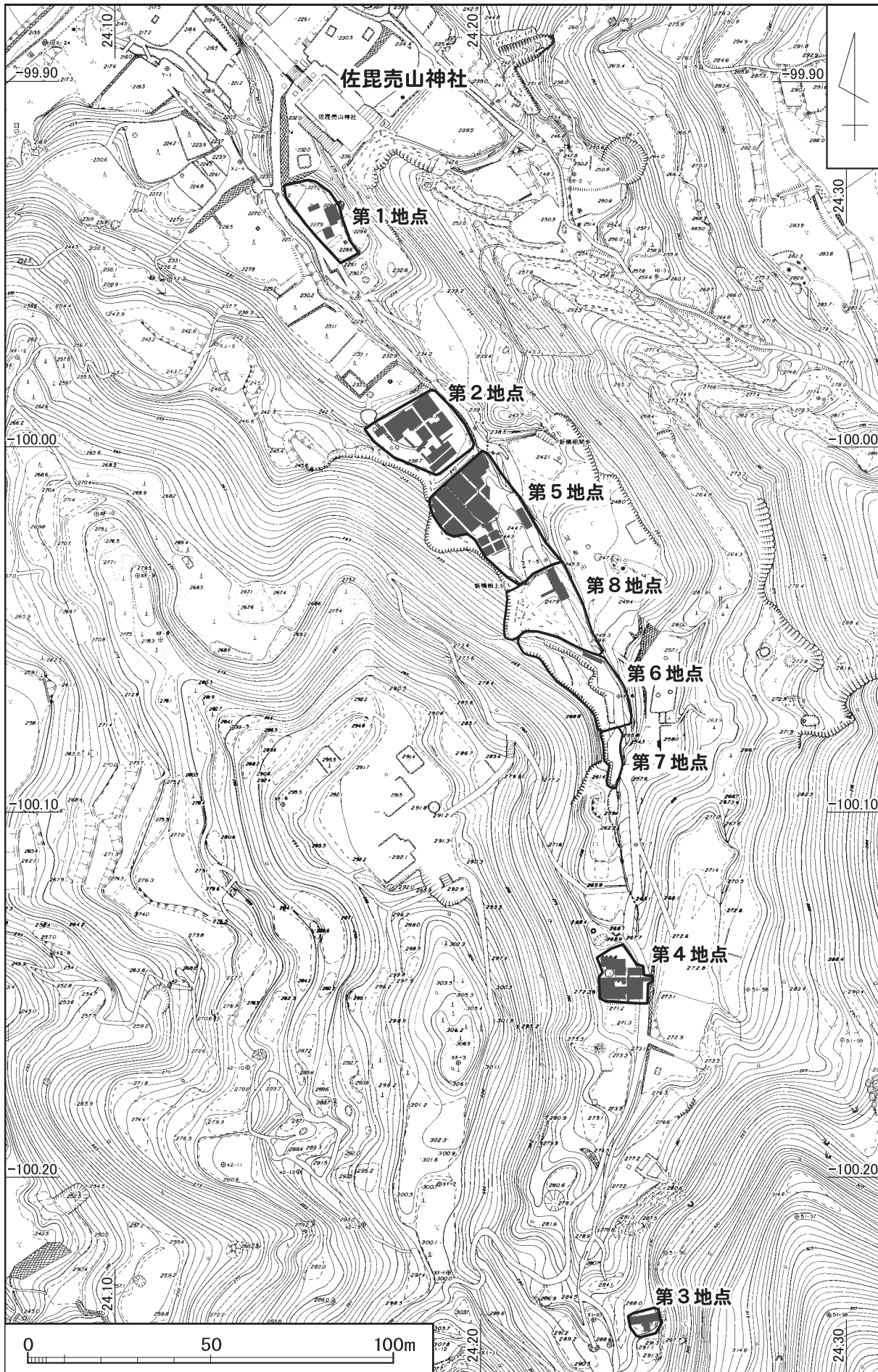


Fig. 8 昆布山谷地区調査地点位置図 (S = 1 / 1,500)

では、SB01よりも下位で、礎石とみられる上面が扁平な石が1点検出され、遺構が重層的に存在する可能性が示唆された。また、本地点における下層の堆積状況が確認できた。

**第2項 層序**

【第1・2トレンチ】(Fig.10・13)

第2トレンチでは第6層上面で焼土SX03が検出されたため、それ以下の掘削を行っていないが、第

1トレンチではサブトレンチで複数の硬化面を確認している。第16層はSX01の構築層である。第26層はSB01の構築面である。ただし、出土遺物に大きな時期差はない。

第30層の下層からは、青花が1点出土している。発掘調査では遺構の検出状況や調査範囲などの要因によって確認できなかったが、本地点の下層には古い時期の遺構が残存している可能性も考慮される。

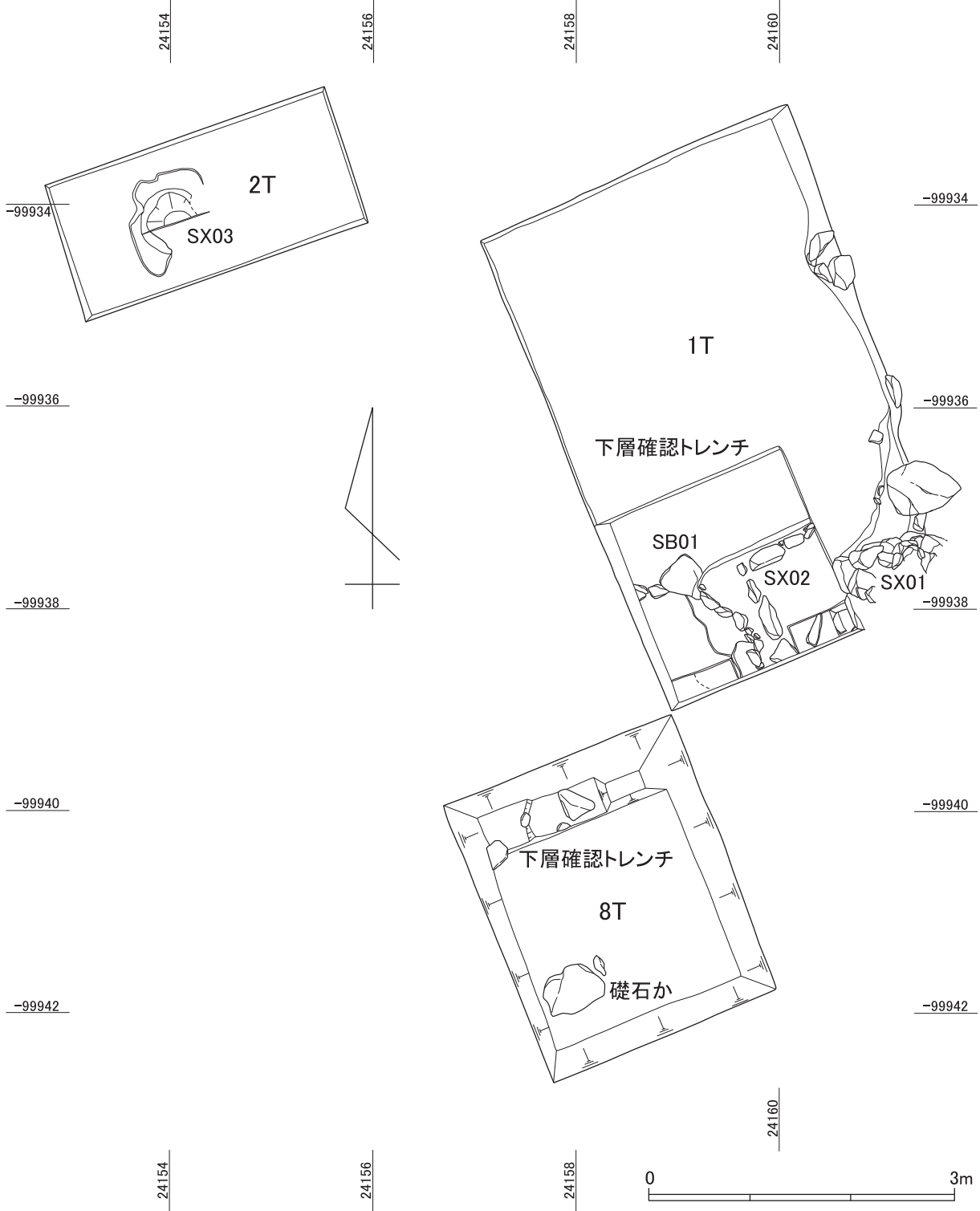


Fig. 9 昆布山谷地区第1地点遺構配置図 (S = 1 / 60)

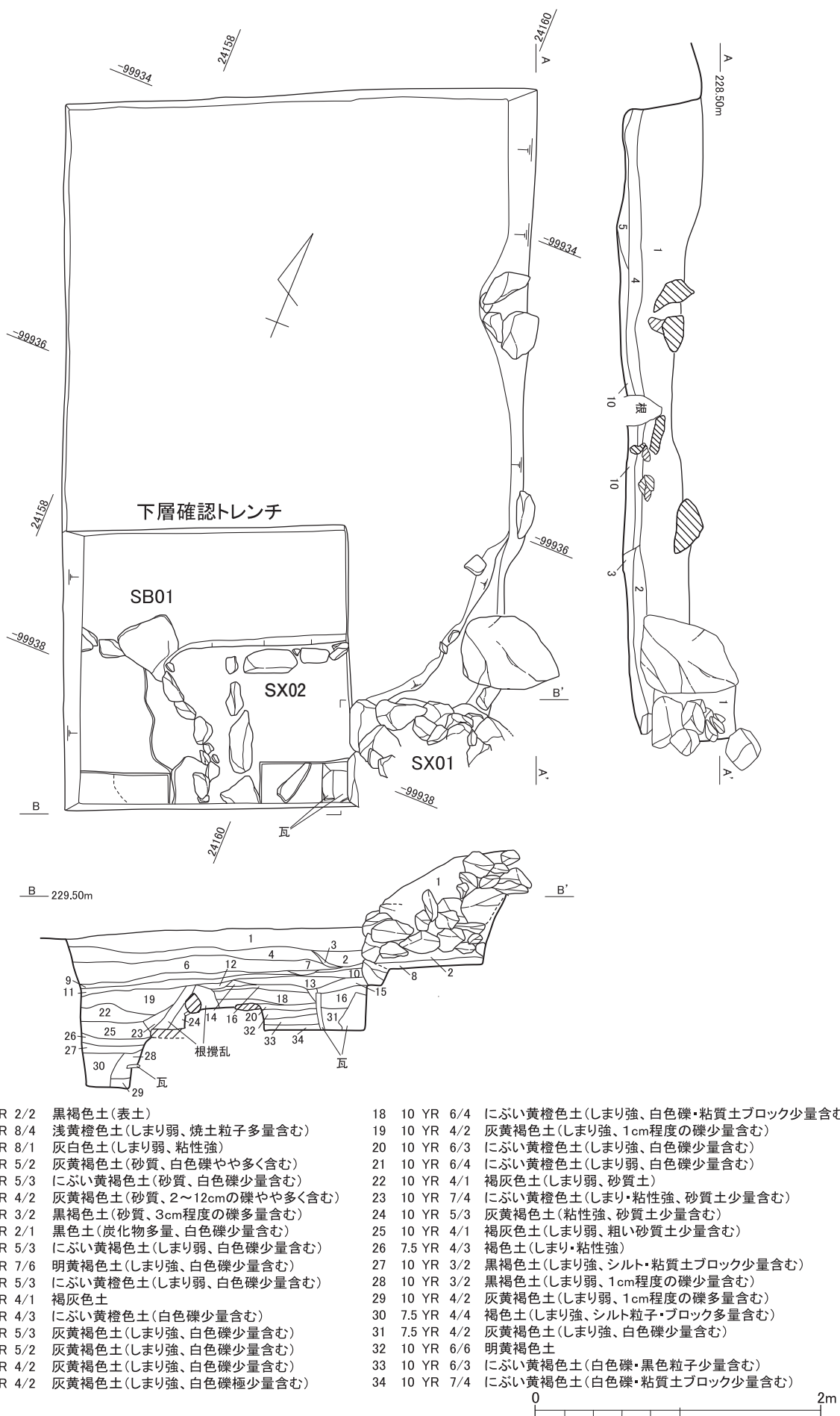


Fig.10 昆布山谷地区第1地点第1トレンチ平面・断面図 (S = 1 / 40)

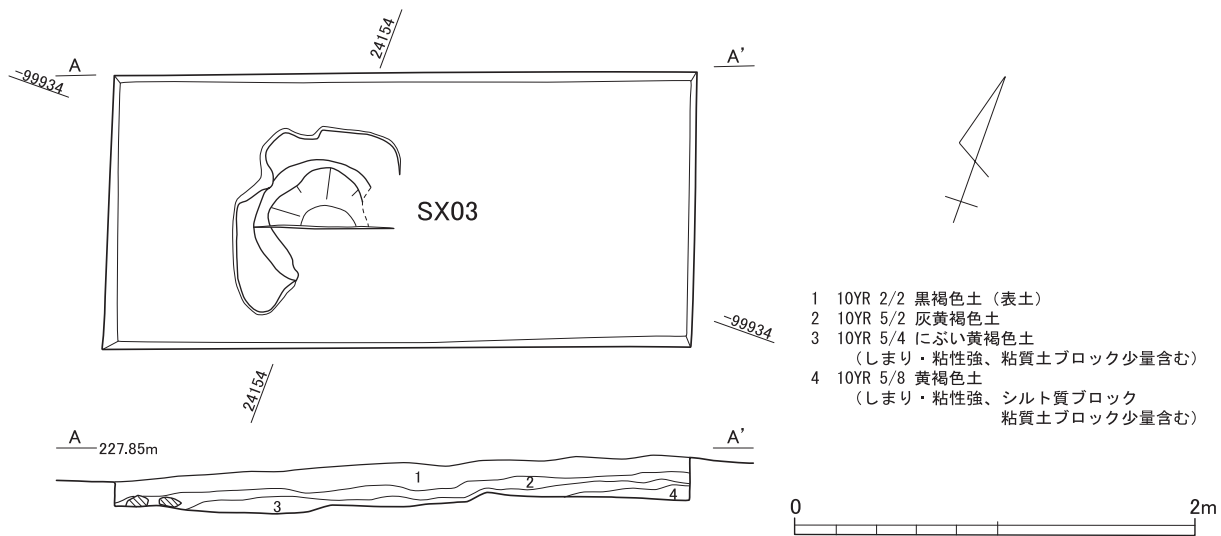


Fig.11 昆布山谷地区第1地点第2トレンチ平面・断面図 (S = 1 / 40)

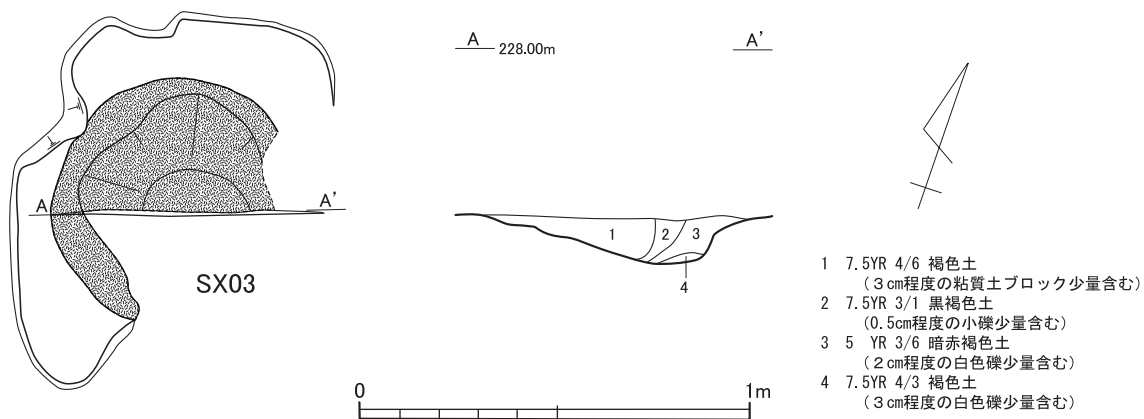


Fig.12 昆布山谷地区第1地点第2トレンチSX03平面・断面図 (S = 1 / 20)

【第8トレンチ】(Fig.13)

地表面より約80cm下位で、硬化面(第14層)が確認できた。第14層よりも下位の第15～17層はズリとみられる礫を主体とする堆積層で、人為的に埋められたとみられる。さらに下層にも遺構面の存在が想定されたが、調査範囲が狭かったことと、地表面からの深さが1.4mを超えてしまい、これ以上の掘削には危険を伴うと判断されたため、下層の確認はできなかった。

第3項 検出遺構

【SB01】(Fig.10)

第1トレンチの東部に設定したサブトレンチの中央から南端部で礎石とみられる扁平な石が2点検出された。礎石の間隔は、約90cmである。本遺構の床面はFig.10の第26層である。サブトレンチの南壁沿いに断ち割りを入れて下層を確認したところ、第28・29

層や、古い整地層とみられる第30層を整地して形成されていることが確認された。また、第8トレンチの西壁付近でも上面が扁平で礎石の可能性のある石が1点出土しているが、SB01に比べて検出位置が低いため、一連の遺構ではないと判断される。

【SX01】(Fig.10)

本地点の東側にある坑口の南にあり、地表面に露出していた遺構である。積石は東端が坑口に接し、坑口から東方向に1.6m程度伸びたのち、西側へと屈曲している。積石の大きさは10～20cm程度で、表面に加工痕は残っていない。断面で確認したのみではあるが、SX01の直下には掘込みのような堆積層(16・31)があり、SX01を構築する際の根固めであった可能性がある。

【SX02】(Fig.10)

SX02はサブトレンチの南東部で検出された石列

である。全体が検出されていないが、調査範囲においては10～40cm程度の割石を直角に並べた状態を確認した。本遺構の目的・性格等は明確にできなかった。  
【S X 03】(Fig.11・12)

S X 03は第2トレンチの中央部で検出された炉跡である。東部の一部が木根によって壊されているが、大部分は残存していた。炉跡の直径は約50cm<sup>2</sup>、周囲の約1.1m、深さ約30cmの範囲が、被熱により赤く変色している。その周囲20～50cmの範囲には白色の礫を含む堆積層があり、下部構造の一部とみられる。本遺構の検出面からは幕末の肥前磁器と砥石が出土しており、利用時期を示す可能性がある

#### 第4項 出土遺物 (Fig.14, Tab.5)

出土遺物としては、肥前磁器、肥前陶器、石見焼、

備前焼、貿易陶磁が出土した。陶磁器類はいずれも石見銀山編年の6期にあたる。在地系陶器については時期の比定が難しいが、おおむね肥前磁器と同等の時期に相当するとみられる。近代に比定できる資料がほとんど含まれていないことから、本地点で検出された遺構は幕末頃のものだと判断できる。また、1点のみではあるが青花が出土しており、本地点の下層には古い時期の遺構の所在が推定される。なお、磁器については、特に断りがない限り全て肥前磁器である。

#### 【第1トレンチ】

1は型打による輪花の皿で、口唇部に呉須をつけている。内面には、見込みに二重の圏線と竹や植物を並べた風景の文様、体部に太い波線と半円にいくつか線を並べた花のような文様がある。外面には、体部に

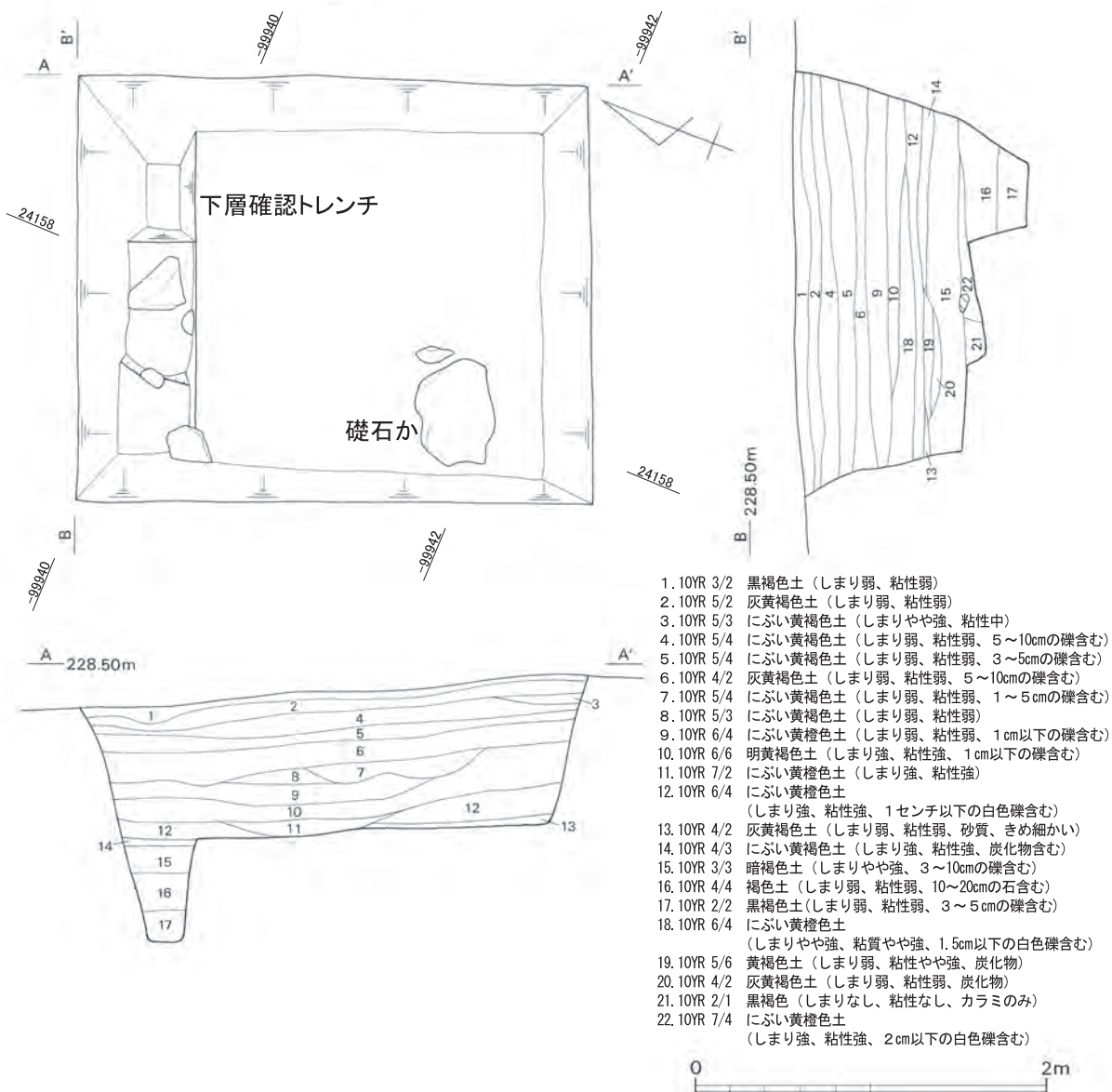


Fig.13 昆布山谷地区第1地点第8トレンチ平面・断面図 (S = 1 / 40)

4つ昆虫文がある。2は端反碗で、外面には雲、内面には退化した雷文がある。3は香炉である。体部には手描きによる、簡略化された雲の文様がある。

4は広東碗の底部である。外面底部に朱書きされているが、文字は判読できない。5は大型の輪花皿で、口縁部がやや外側に開く。破片ではあるものの、本来は内面全体に絵付けがされているとみられる。外面にも線状の文様があり、唐草文とみられる。6は石見焼の壺である。器壁が薄く、小型の資料とみられる。7は蓋で、石見の可能性はあるが確定的ではない。8は漳州窯系青花の碗である。内面に簡略化された四方禳文がある。断面には黒色の付着物があり、漆継の痕跡の可能性もある。9は火入れである。口縁部が固いものを打ち付けられて欠けていることから、煙草盆として使用されていたとみられる。10は紅皿である。11は棧瓦で、ややくすんだ来待釉がかかっている。

#### 【第2トレンチ】

12は湯呑で、家や水場・木などを描いた風景文、内

面には雷文がある。13・14は石見焼の土瓶である。15は端反碗の蓋で、内面・外面ともに植物の文様が大きく描かれている。16は須佐焼の壺である。

#### 【第8トレンチ】

17は石見焼の蓋である。18は香炉で、外面体部に手描きの文様がある。19は内面が露胎しており、小型の甕・徳利・香炉のいずれかとみられる。20は備前焼の壺である。

#### 【金属製品・石製品】

金属製品・石製品はほとんどが第8トレンチから出土した。ただし、21は第1トレンチ、27は第2トレンチよりそれぞれ出土した。

21は和釘である。22はキセルの雁首だが、火皿を欠失している。23～26は銭貨で、いずれも新寛永である。27は粘板岩製の砥石で、片面のみ砥痕があり、もう片面は割れている。側面の一部には切り取った際の痕跡が認められる。28は灰色の川原石を円形・平滑に加工しており、碁石とみられる。

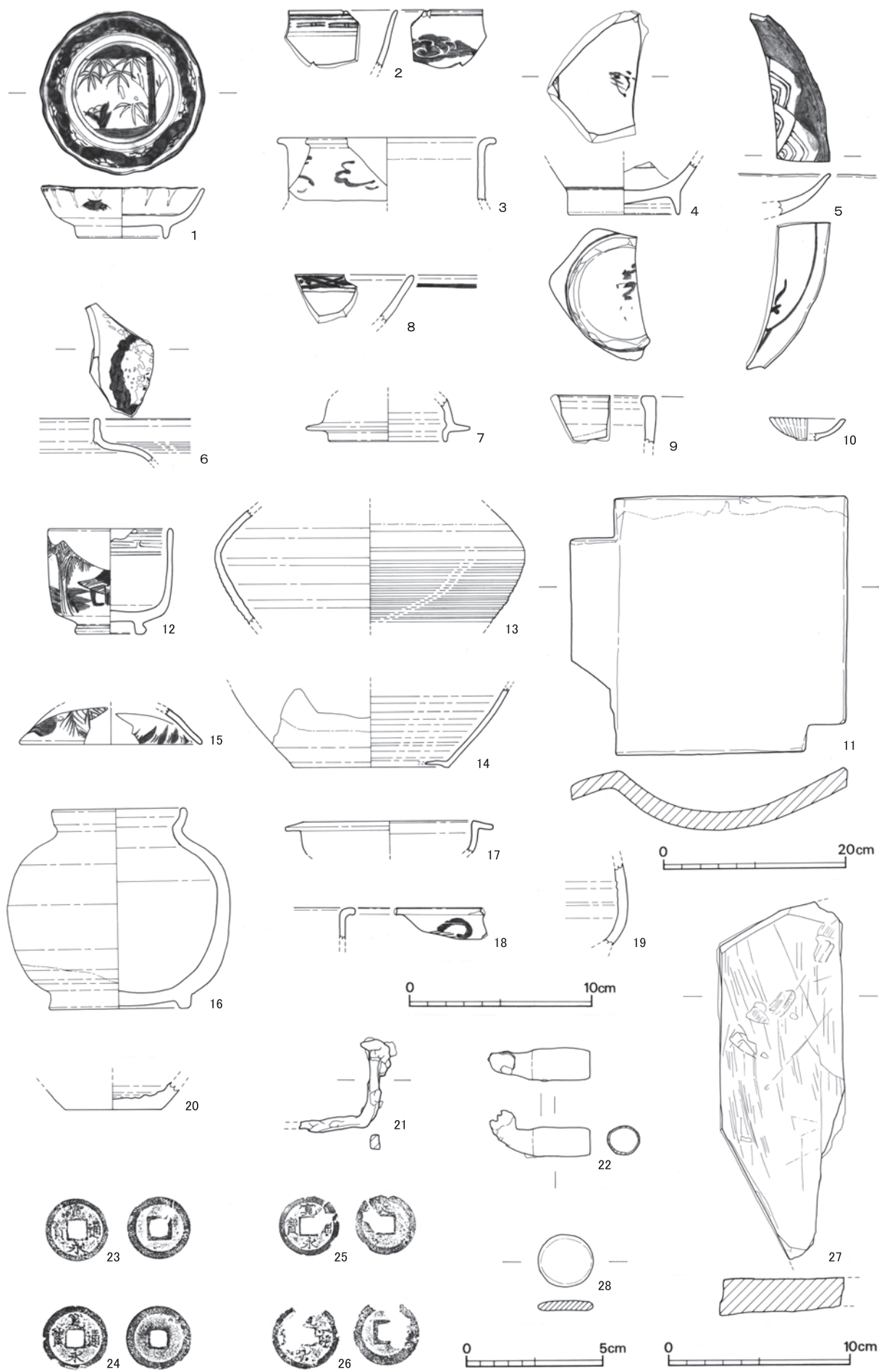


Fig.14 昆布山谷地区第1地点出土遺物Ⅰ (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 6)



Tab. 3 昆布山谷地区 1 地点出土遺物観察表

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	1 T	肥前磁器?	皿	8.8	2.9	4.8	透明釉	輪花	
2	1 T 表土	肥前磁器	碗		(3.2)		透明釉	退化した雷文か	
3	1 T 表土	肥前磁器	香炉	(11.8)	(3.5)		透明釉		
4	1 T 表土	肥前磁器	碗		(2.9)	(6.0)	透明釉	朱色の文字	
5	1 T 表土	肥前磁器	皿		(2.3)		透明釉	輪花	
6	1 T 流土	石見	壺	(12.4)	(2.4)		透明釉		
7	1 T 流土	石見?	蓋か	(6.4)	(2.4)		(内) 灰釉 (外) 来待釉		
8	1 T 29 層灰黄褐色土	青花	碗		(2.7)		透明釉	四方禪文	
9	1 T 造成土	肥前陶器	火入れ		(2.7)		灰釉		
10	1 T 造成土	肥前磁器	紅皿	(4.2)	1.2	(1.1)	透明釉		
11	1 T 盛土構築瓦	瓦	棧瓦	現存長 28.5	現存幅 30.3	現存厚 7.6	来待釉		3260 g
12	2 T 表土	肥前磁器	湯呑	(6.6)	5.8	3.6	透明釉	雷文	
13	2 T 整地層	石見	土瓶		(6.3)		長石釉		
14	2 T 整地層	石見?	土瓶		(4.3)	(8.5)	灰釉?		
15	2 T 遺構面直上	肥前磁器	蓋	(9.0)	(2.1)		透明釉		
16	2 T 遺構面直上	須佐	壺	7.2	11.0	7.6	灰釉		
17	8 T	石見	蓋	(9.4)	(2.8)		長石釉		
18	8 T 第 6 層	肥前磁器	香炉?		(1.7)		透明釉		
19	8 T 第 6 層	肥前磁器	甕?		(4.5)		灰釉		
20	8 T 第 6 層	備前	壺		(1.5)	(5.2)	赤褐色		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
21	1 T 表土	鉄製品	釘	5.5	0.4	0.5		4.1	
22	8 T 第 6 層	金属製品	キセル (雁首)	3.7	1.2			7.1	
23	8 T 第 16 層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.0	
24	8 T 第 16 層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			3.0	
25	8 T 第 18 層	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3			1.2	
26	8 T 第 18 層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4			1.2	
27	2 T 遺構面直上	石製品	砥石	19.8	6.8	2.0	黄褐色	360	
28	8 T 第 1 遺構面直上	石製品	基石	1.9	2.0	0.4	灰色	2.1	

## 第2節 第2地点

### 第1項 調査の概要 (Fig.15)

第2地点は、第1地点から約50m南東で、標高約238m付近に位置する。本地点の西端部には丘陵上へと上がる道があり、妙本寺上墓地へと続いている。本地点から道と流路を挟んだ東側には新横相間歩が、南側の第5地点には新横相上坑があるなど、周囲に坑口が点在しており、それらの鉱業活動の痕跡が検出されることが期待されたため、平成22～23年度の2か年にわたって発掘調査を実施した。また、平成24年度には検出遺構の正確な範囲の確認を目的として追加調査を実施した。本地点では時期の異なる建物や敷地境とみられる石積みが検出されたほか、水溜や炉跡など、金属生産に関連する遺構が検出された。

調査に着手した平成22年度は平坦面の中でも地表面上で遺構が確認できる場所を中心に3～7トレンチを設定して調査を実施した。平成23年度には遺構の検出状況を元に各トレンチを拡張し、A～F区とした。さらに、平成24年度の追加調査ではC区の西側をさらに拡張してC拡張区とした。その後、平成26年度の調査にあたって昆布山谷地区の各地点における調査区名称を整理した際に、第2地点の各調査区をI区～VI区と改称した。その詳細な経緯については、平成26年度に刊行した概要23を参照されたい。

### 第2項 検出遺構

#### 【SB01】(Fig.16～19, 21～25)

SB01は2地点のI区からIV区にまたがって検出された逆L字形の礎石建物である。北側は約13.8m、



Fig.15 昆布山谷地区第2地点地形図、調査区配置図 (S = 1 / 200)

東側は約12 m、南壁は約8 mである。西側は北端部から南に約6 mの箇所から東へ折れ、約5.8 m西へ伸びたのちに、南へと折れる。礎石やその抜き取り痕が確認されなかった箇所もあるものの、一間を6尺5寸とすると東西7間、南北6間、西側3間、南側4間の建物とみられる。

I区の北側付近には、レンガが6つ並べて埋設されていた。これらの内4点は、広い面を上に向けて並べているが、最も東側の2点は直角に立てており、本来は箱状になっていた可能性もある。検出された当初は

排水や通気口などとして機能していた可能性も考慮されているが、検出位置より、壁を貫通するような構造とはなっていないと判断されるため、その可能性は低く、構築意図・機能の推定は難しい。

SB01に伴う遺構の一つである、石積み構造物の南側には、幅約40cm、長さ約3.5 mの東西に延びる浅い溝があり、溝の北側には白色の砂粒を含む粘質土の高まりが認められることから、本来はこの位置に壁もしくは扉のようなものが立っていた可能性が想定される。なお、この高まりの北側にも黒色でベルト状の堆

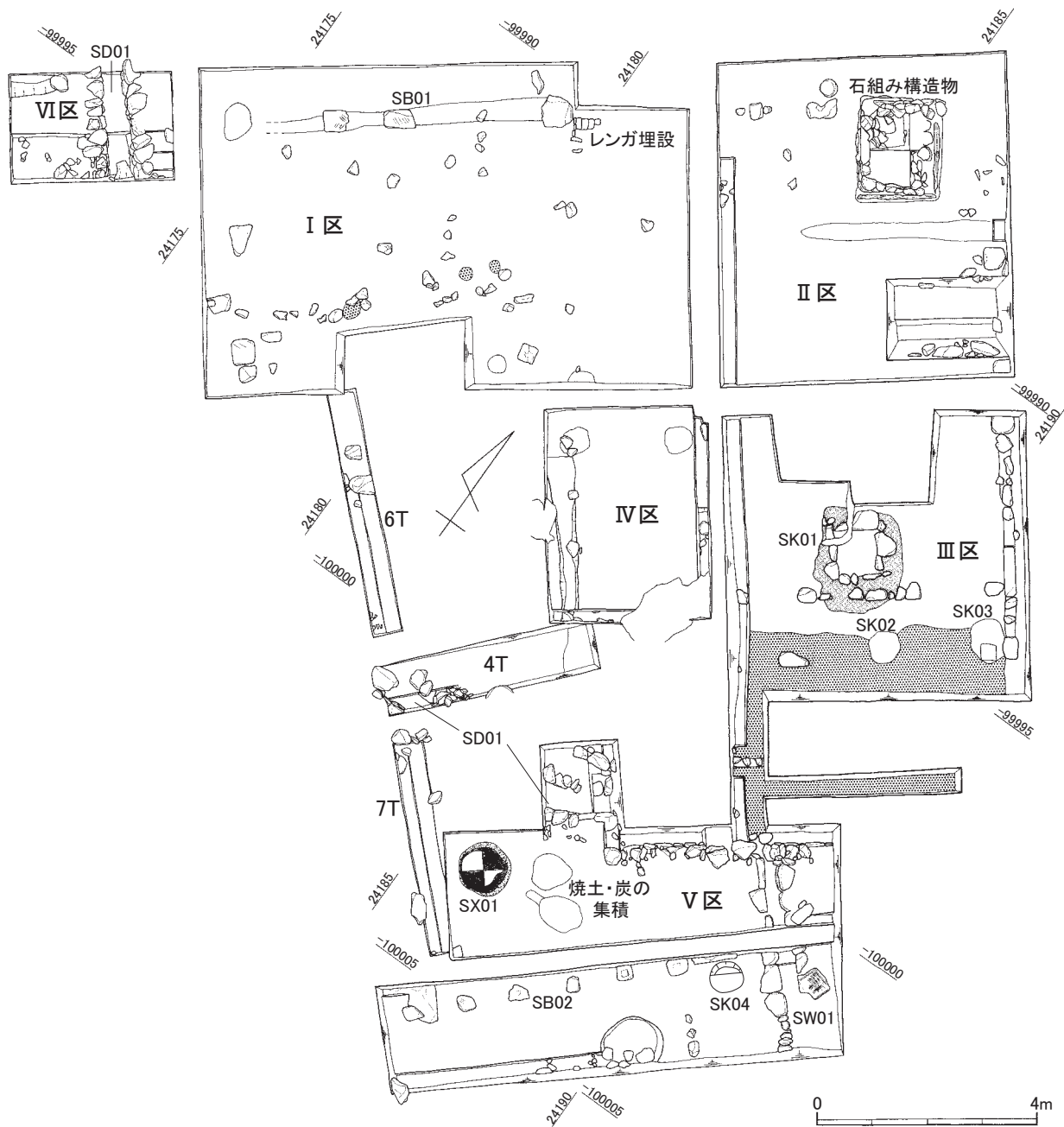


Fig.16 昆布山谷地区第2地点遺構配置図 (S = 1 / 120)

積があり、壁もしくは扉の両側に溝を掘っていた可能性もある。

第2地点の番地と、SB01の規模・形は、藤田組の『要書録』に記載されている選鉱場とそれぞれ一致している。さらに、内部には選鉱作業に関連するとみられる遺構が複数検出されていることから、要書録に記載のある選鉱場に比定することができる。なお、この建物について『要書録』では「平屋 雑木葺 建坪 33坪」とされており、簡素な建物であったことが窺われる。

【石積み構造物】(Fig.19・21)

Ⅱ区の北部で検出された石積みの構造物である。SB01の床面に構築されており、SB01に伴う遺構の1つと判断される。平面形は長辺1.6m、短辺1.35

mの長方形である。30～50cmの自然石を垂直に積み上げ、北壁と西壁はモルタルによって補強されている。埋土は砂質土と炭化物を含む黒色土で、廃棄された際に埋められた可能性もある。この構造物の上には、縁辺に煉瓦をつけた板状のモルタル片が残っていた。

【SK01】(Fig.22・23)

Ⅲ区の中央部から検出された土坑で、SB01に伴う遺構の一つである。平面形は整った方形で、内法の大きさは東西80cm、南北75cmで、中央部での深さは20cmである。13～45cm程の石を組み、外側を粘質土で固めている。北側の一部に木の根が侵入しているもの、組石はほぼ原位置を保っていた。SB01の床面を掘り込んで構築されていることから、SB01

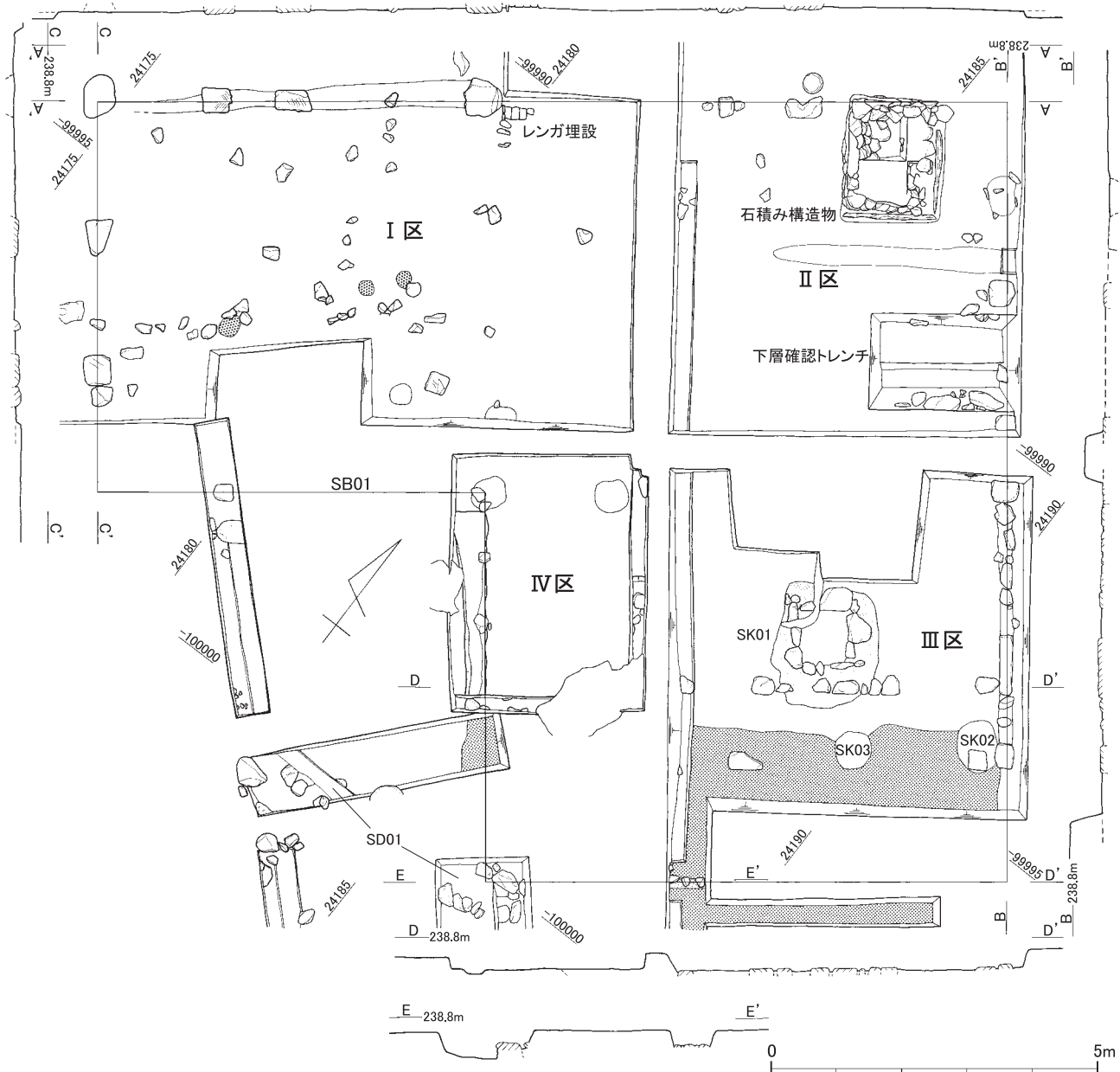


Fig.17 昆布山谷地区第2地点SB01平面図・断面図 (S=1/100)

に伴う遺構の一つと判断できる。埋土には炭化物層や焼土などが含まれている。内面には粘土が貼られておらず、SK01 本体には水が溜まるような構造にはみえない。しかし、石見銀山地内でも栃畑谷地区においては、土坑に木製の桶を埋設した遺構が検出されており（栃畑谷Ⅱ区、SK01）、選鉱作業に関連する遺構の可能性が指摘されている。そのため、本遺構も同じく内部に木枠や木製の箱を設置していた可能性も想定される。先述したように、SB01 は要書録に記載のある「選鉱場」に比定できることから、選鉱に使用する水溜であった可能性が高い。なお、SK01 の埋土は、第2地点の覆土と様相が異なっており、廃棄される際、意図的に埋められた可能性が指摘できる。

【SK02・03】(Fig.22・24)

いずれもⅢ区の南側で検出された土坑で、SB01 に伴う遺構の一つである。東側の SK02 は長径 75cm、短径 63cm、深さ 18cm の東西に長い楕円形で、西側の SK03 は直径 57cm、深さ 16cm のいびつな円形である。いずれも SB01 の床面を掘り込んで構築されている。また、いずれの内部にも同質の粘質土が意図的に充てんされていることから、SK02・03 は同時期に廃棄されたと判断できる。

SK03 に伴うかどうかは十分に確認できていないが、SK03 には表面に窪みのある石が埋まっていた。SK03 が検出された当初は、礎石の可能性も考慮されていたが、SB01 の範囲・規模が明確になったことで、

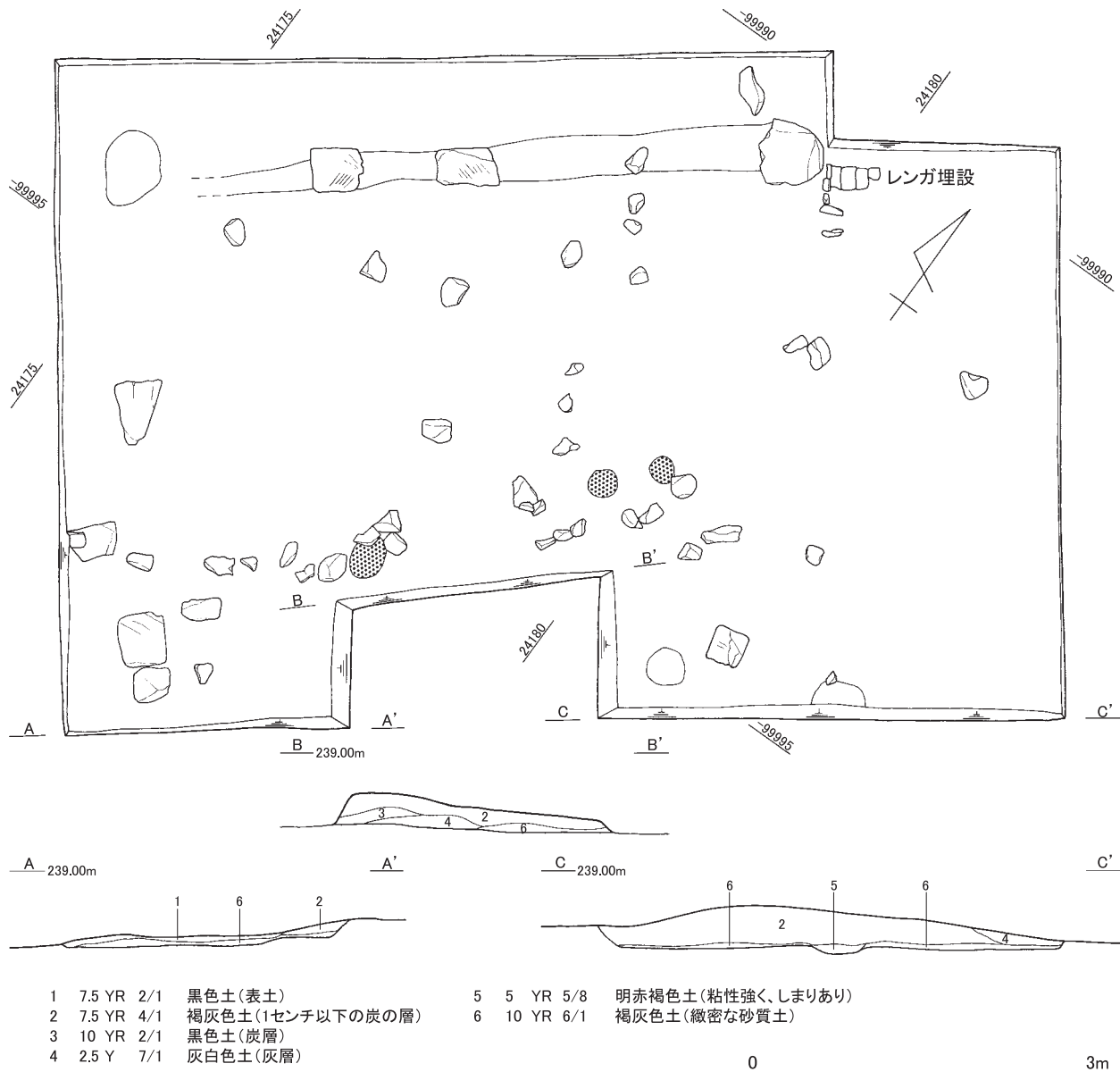


Fig.18 昆布山谷地区第2地点Ⅰ区平面図・断面図 (S = 1 / 60)

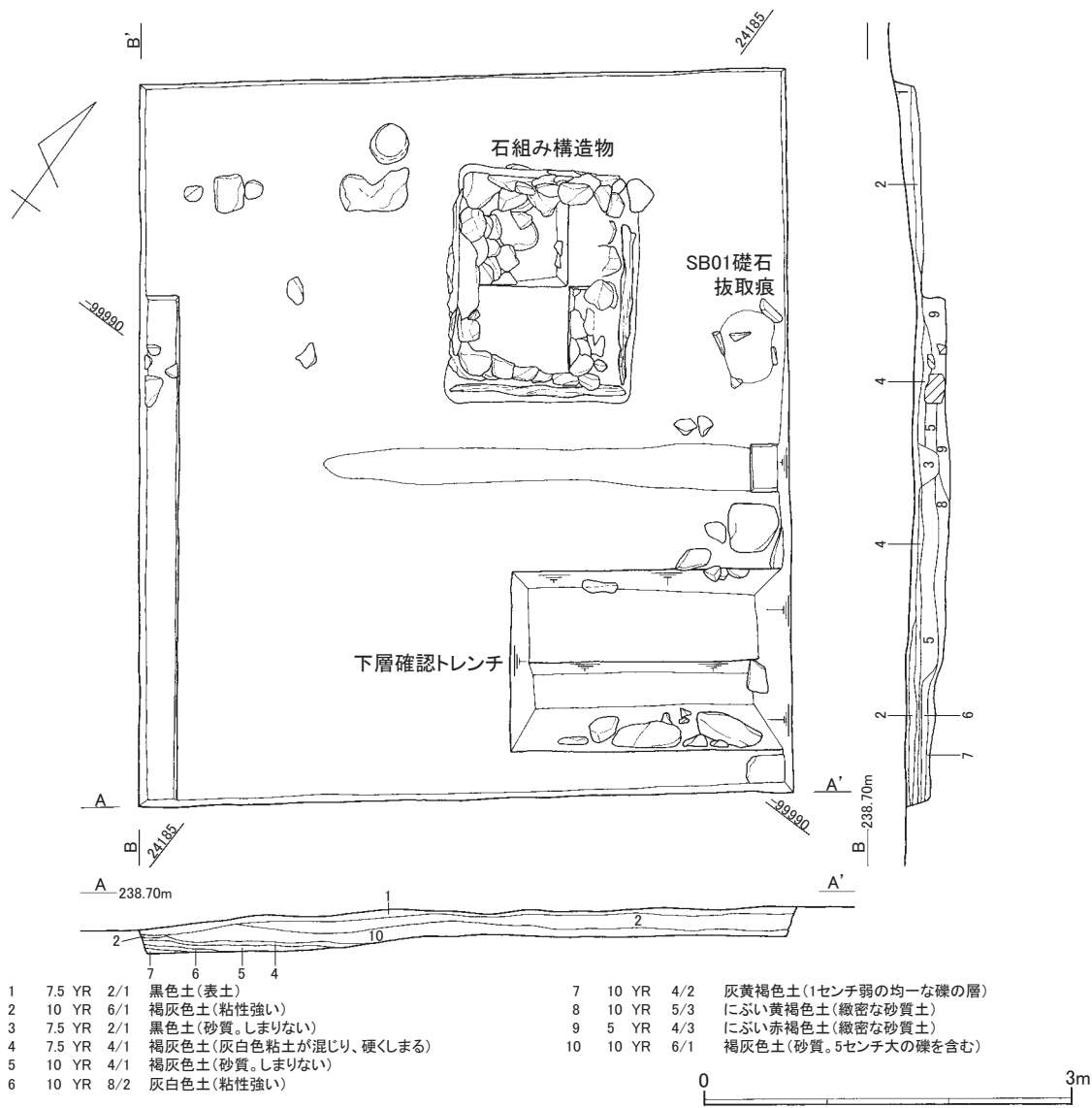


Fig.19 昆布山谷地区第2地点Ⅱ区平面図・断面図 (S = 1 / 60)

礎石ではないと判断された。この石は昆布山谷の近辺で採取できる石材とは異なり、かなめ石に使用される固い石である。意図的に埋設された石と判断でき、選鉱に先立って、鉱石を摺り潰すための場所であったと考えられる。SK03はSK02との位置・距離から石搗き石を埋設した遺構の可能性が指摘でき、SK02・03は鉱石を搗いて砕くための唐臼と考えられる。唐臼については、銀山絵巻などでは確認できるものの、遺構として確認された例はこれまでになく、貴重な検出事例といえる。

【SB02】(Fig.16・26・27)

SB02はV区の中央で検出された礎石建物跡である。上面が扁平で、長径30cm程度の礎石が6点確認でき、それらの内2つには一辺12cmの柱跡が残っていた。礎石の間隔は1m前後で、大森地内でよくみら

れる一間を6尺5寸とする建物と同規格である。検出された礎石の東側には延石があり、犬走りの縁石、もしくは袖壁の基礎などの可能性が考えられる。V区南壁際には土坑状の落ち込みが確認できたが、内部には土砂や腐植土が流入していた上、壁面の状態も悪かったことから、本来の形態や用途の推定まではできなかった。遺構面からは陶磁器片が数点出土しているが、最も新しい年代の遺物としては端反碗の破片が含まれている。SB02の東側には割石を積んだ溝(SD02)があり、敷地境を示していると考えられる。SB02は黄褐色土層によって覆われており、一方でこの堆積層はSB01の下層で確認できることから、2地点においてはSB01に先行する建物遺構と判断できる。また、内部に炉跡とみられる遺構(SX01)を伴うことから、製錬作業に関連する建物とみられる。

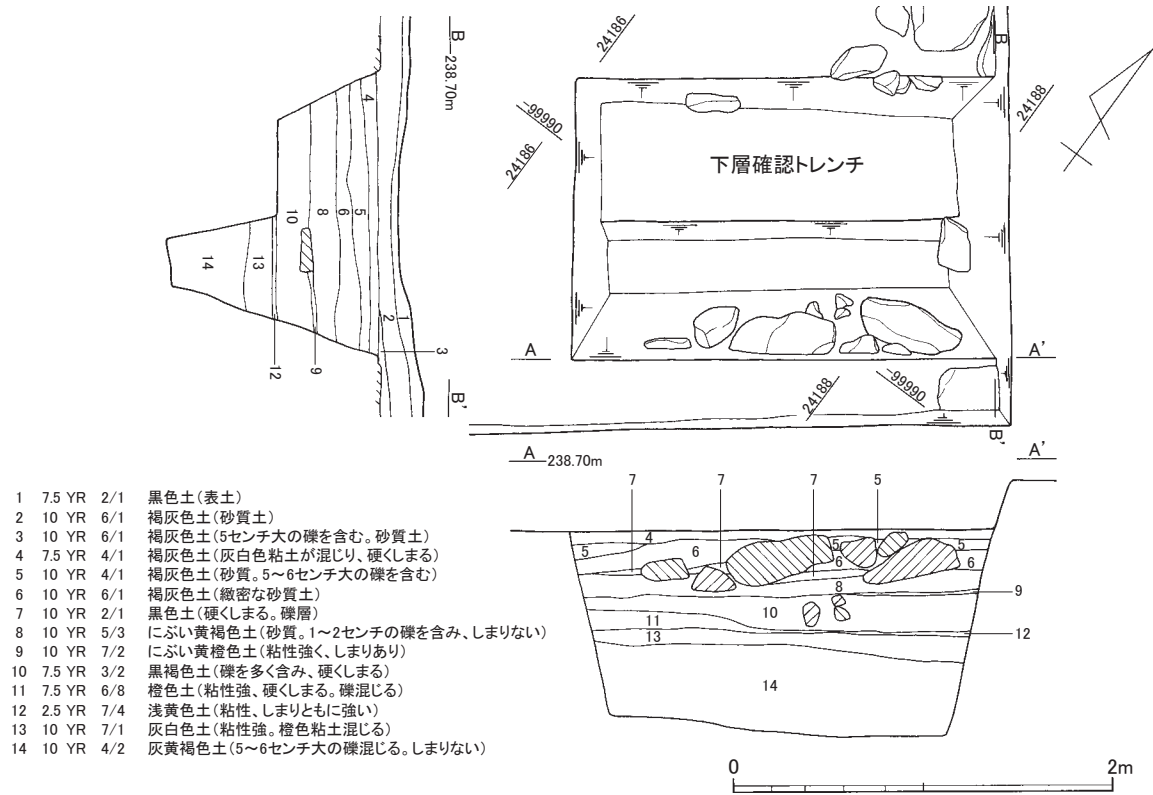


Fig.20 昆布山谷地区第2地点II区下層確認トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 40)

【SX01】 (Fig.28)

SX01は、V区の南西部で、SB02の西側から検出された。平面形は円形で、直径65cm、深さ15cmである。遺構の外縁部は被熱によって赤く変色している。埋土は炭化物を主体とする炭層(2層)と灰層(3層)だが、上面は粘質土で覆われており、人為的に充てんされたとみられる。遺構の形態や、被熱痕を伴うことなどから、炉跡の可能性が高い。SX01の東側には粘質土が円形に隆起している箇所があり、炉壁の一部の可能性もある。SX01の東側には、被熱した粘土や炭の集積が2箇所あり、概報ではそれぞれSX02・03とし、SX02は炉跡、SK03は炉跡に関連する土坑の可能性が考慮されていた。しかし、いずれも平面形態・掘形ともに不明瞭であり、明確に遺構と断定できる状況とはならなかった。これらについては、SX01から掻き出された焼土や炭の集積などの可能性が考えられる。SX01はSB02と同一の遺構面上で検出されており、本来はSB02の内部にあった炉跡と考えられる。

【SK04】 (Fig.16・26)

SK04はV区の東部で、SB02の延石付近から検出された、径約40cmの土坑である。埋土にはユリカスが詰まっており、ユリカスを廃棄した土坑とみられる。

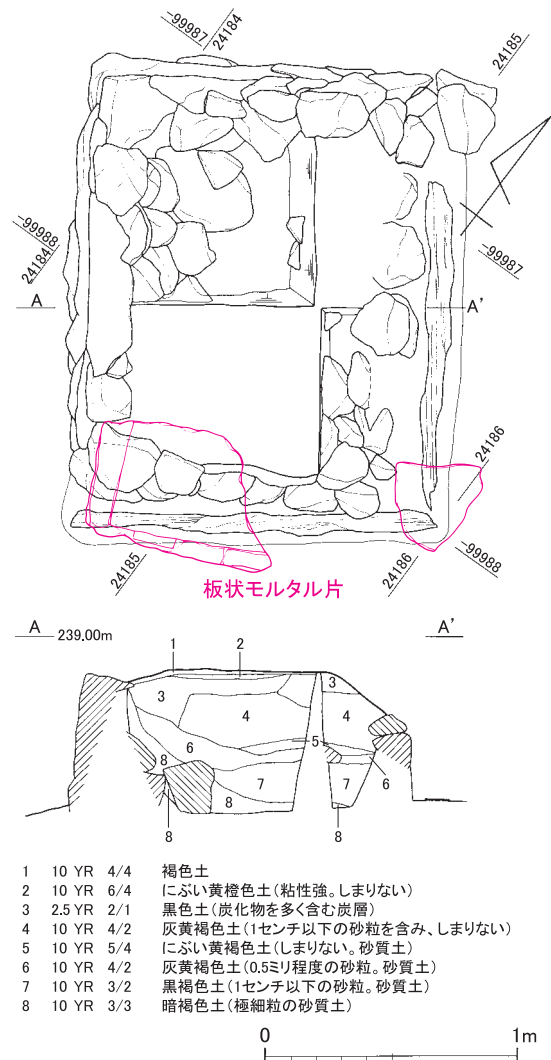


Fig.21 昆布山谷地区第2地点II区石組遺構 (S = 1 / 30)

SB02を覆う堆積土から掘り込まれており、SB02が廃棄された後に構築された遺構と判断できる。前述したSB01は藤田組の選鉱場とみられる建物であり、そこから排出されたユリカスが廃棄されていた可能性がある。

【SD01】(Fig.16・29)

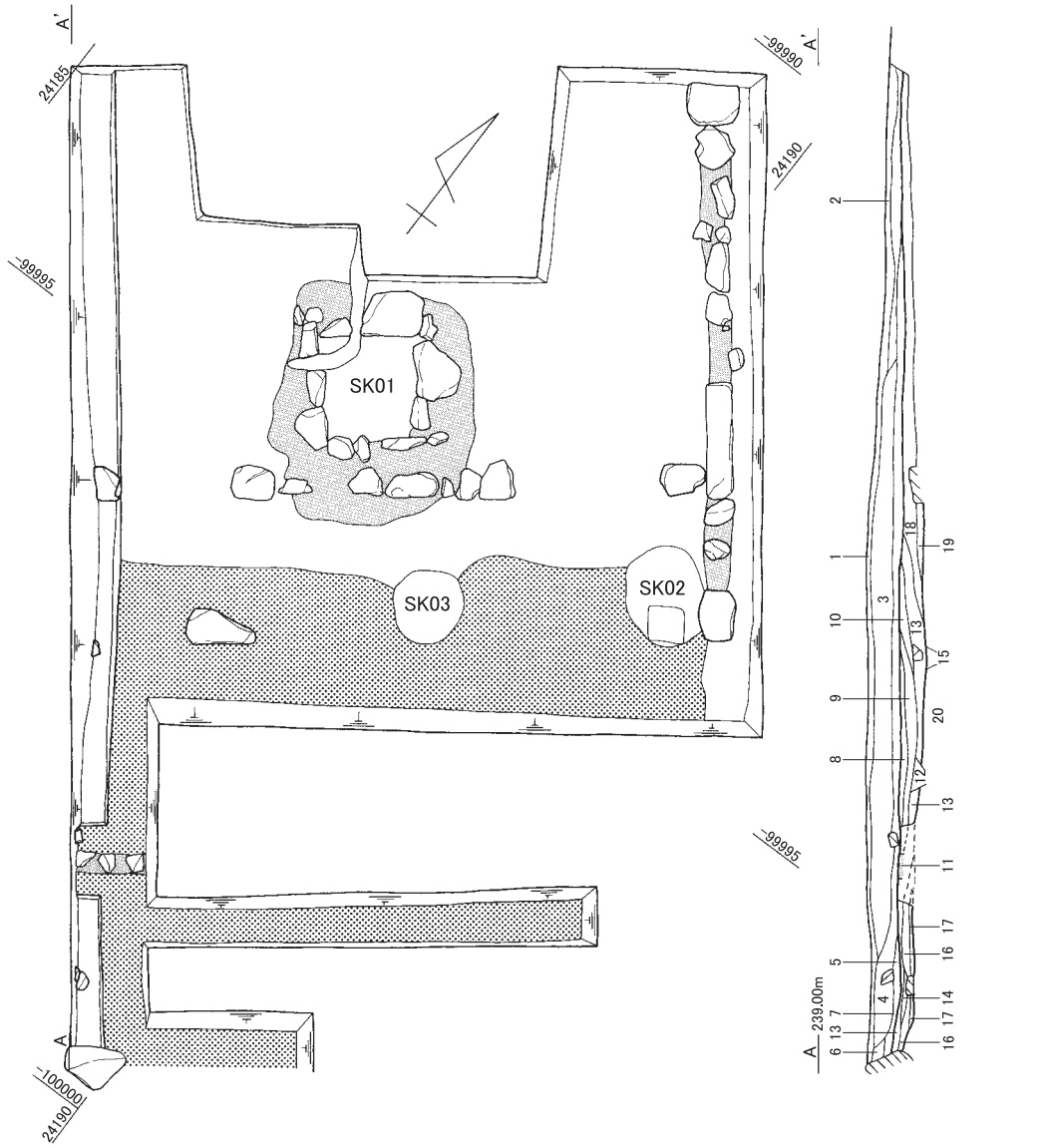
SD01は、第2地点の西側で、4トレンチ及びV・VI区にまたがって検出された石積みの溝である。発掘調査に着手する以前より地表面上で確認できており、SB01が建っていた頃にも機能していたとみられる。

割石を2段もしくは3段積み上げており、幅約40cm、深さ約60cmである。

VI区では南北方向に延び、山側からの水を敷地へと入れないように下段の水溜りに流すようになっている。

V区では石積みの北側に杭が打たれており、石積みの崩落防止、もしくは胴木の固定などの目的が考えられる。

SD01は区画境と排水を兼ねており、SB01が建っていた頃にも機能していたと考えられる。SD01



- |                                  |                                  |                                    |
|----------------------------------|----------------------------------|------------------------------------|
| 1 7.5YR 2/1 黒色土(表土)              | 8 10 YR 7/6 明黄褐色土(粘性強、5ミリ程度の礫含む) | 15 10 YR 6/2 灰黄褐色土(粘性強)            |
| 2 10 YR 6/1 褐灰色土(砂質)             | 9 7.5YR 4/2 灰褐色土(粘性強)            | 16 10 YR 6/2 灰黄褐色土(硬くしまる)          |
| 3 10 YR 6/1 褐灰色土(5センチ大の礫含む)      | 10 10 YR 6/4 にぶい黄橙色土(硬くしまる)      | 17 2.5YR 5/8 明赤褐色土(硬くしまる)          |
| 4 10 YR 6/1 褐灰色土(極細粒の砂質土)        | 11 10 YR 6/2 灰黄褐色土(粘性強)          | 18 7.5YR 4/1 褐灰色土(灰白色粘土がまじり、硬くしまる) |
| 5 7.5YR 3/1 黒褐色土(2~3センチの礫の層)     | 12 10 YR 6/4 にぶい黄橙色土(粘性強)        | 19 10 YR 3/2 黒褐色土(しまりない、1センチ程度の礫層) |
| 6 2.5YR 3/4 暗赤褐色土(5ミリ程度の礫層)      | 13 2.5YR 5/8 明赤褐色土(硬くしまる)        | 20 10 YR 7/1 灰白色土(5ミリ大の小礫を含む)      |
| 7 5 YR 4/3 にぶい赤褐色土(3ミリ大の白色砂粒を含む) | 14 5 YR 8/1 灰白色土(5ミリ大の小礫を含む)     |                                    |

Fig.22 昆布山谷地区第2地点III区平面図・断面図 (S = 1 / 60)



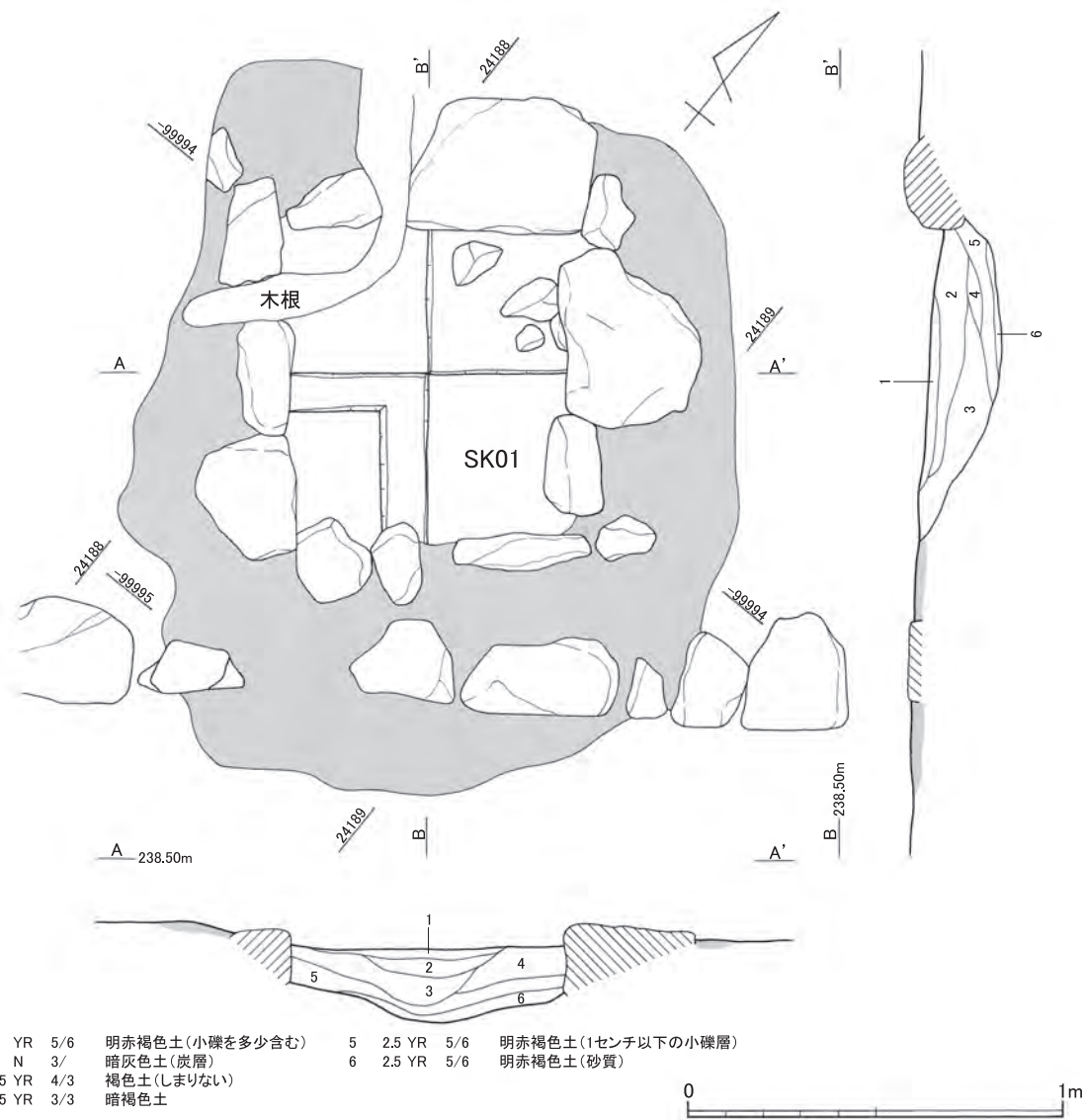


Fig.23 昆布山谷地区第2地点Ⅲ区SK01平面図・断面図 (S = 1 / 20)

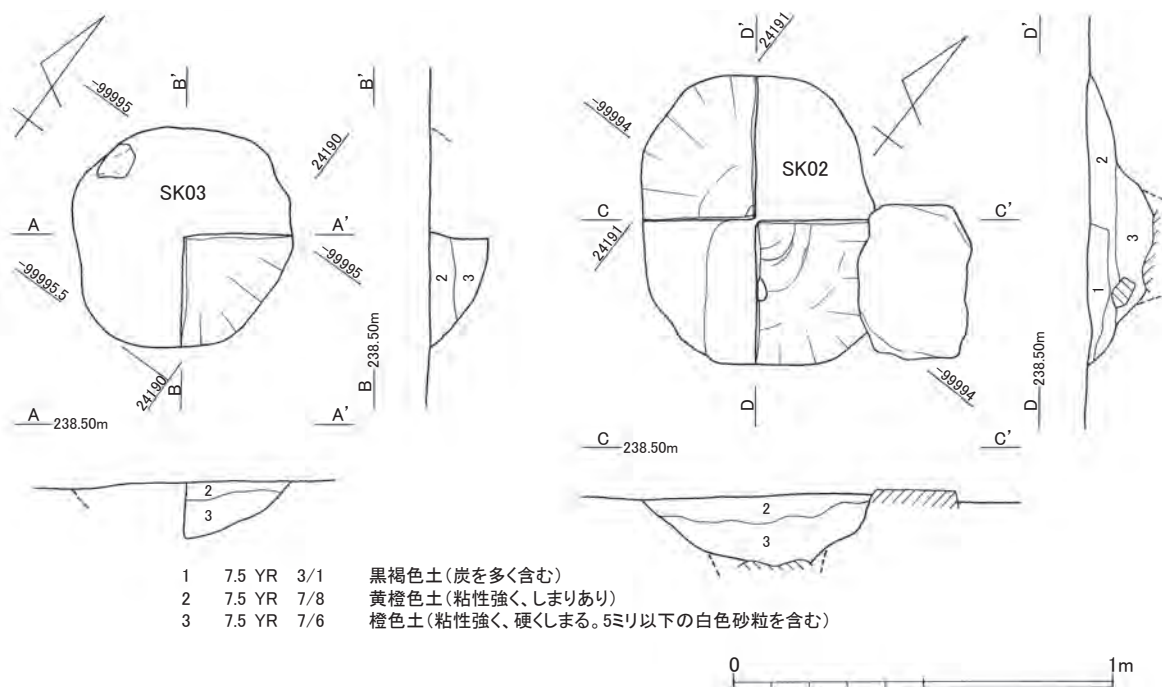


Fig.24 昆布山谷地区第2地点Ⅲ区SK02・03平面図・断面図 (S = 1 / 20)

は、SB01の建築に影響を与えていた可能性もあり、SD01を避けるためにSB01を逆L字の特異な形としたのかもしれない。

#### 【SW01】(Fig.16)

SW01はV区の東部で検出された石積み遺構で、SB02を含む土地の境を示す石積みと考えられる。V区の東側では対面側に同様の石積みがあり、石組の溝となっているが、南側では片側のみである。20～40cmの大小の割石を2・3段積み上げており、表面の調整などはなされていない。北側の石積みの下には直径5cm程度の杭の痕跡が約30cm間隔で3本確認されており、SD01で確認された杭と同じく積石の崩落防止のためとみられる。

SW01の南東部では、黒化した灰とみられる藁製品の痕跡が検出された。土圧によって藁のスタンプが地面に刻まれた後に、本体が腐食・炭化して失われ、その痕跡のみが残っていた。この灰の痕跡は、ほとんどが遺構面上にあるほか、一部がSW01の側石に張り付いていることから、SB02の埋没と共に残されたと考えられる。

#### 第3項 下層確認トレンチ(Fig.20)

下層の堆積状態および遺構の有無を確認するため、II区の南東部に東西2.2m、南北1.4mの下層確認ト

レンチを設定して調査を実施した。

SB01の遺構面より下層には、まず多少の遺物を含む流土による堆積層が複数あり、その下で硬化面が2枚確認できた。1つ目は9・10層上面である。この面では上面が扁平な石が検出されており、何らかの遺構があった可能性が考慮される。2つ目は11・12層上面だが、遺構等は検出されなかった。11・12層の下には整地層とみられる13層があるなど、本地点では何度かの整地や土地の整備があったことが想定される。

#### 第4項 出土遺物(Fig.30～34, Tab.6～9)

I～IV・VI区からは主にSB02に伴う遺物が出土している。陶磁器類、土製品、金属製品、石製品がある。陶磁器類には、青花などの古い遺物がわずかに含まれるが、ほとんどは肥前磁器でも新しいものや、石見焼を中心とする在来系陶器であるなど、石見銀山編年7期に相当する。また、煉瓦が複数出土しており、近代以降の様相を示している。

29・30は瀬戸の新製焼である。29は碗で、コバルトの発色より近代に比定できる。30は仏飯器で、外面に色絵がある。32は萩焼風で、底部には径9mm程の孔がある。32は肥前陶器の瓶である。

#### 【I区】

**陶磁器類** 33は石見焼の碗である。34は碗で、外面に鳥が描かれている。35は皿で、口縁部を手でひねるなぶり口になっている。36は青花の碗である。表土直下より出土したが、他の遺物に比べて著しく古いため、流れ込みによるとみられる。37は石見焼の土瓶である。38は碗で、外面に圈線が2本ある。39は外青磁の碗である。40～42は端反碗である。40には外面に波もしくは風を含む風景が、内面には雷文が描かれている。43は湯呑である。鳥の足のような文様がわずかに残っているが、よく分からない。44～46は広東碗の蓋である。44・46の外面には蓮弁のような文様がある。47は萩焼の碗である。48は石見の碗である。外面に鉄絵で「水」と書かれている。49は石見焼の碗で、外面に鉄絵の文様がある。50・52～54は皿である。53・54は蛇の目凹形高台を持つ。51は猪口で、外面には七宝文、内面には雷文がある。55は石見焼の瓶である。56は在来系陶器で甕とみられるが、産地・器種とも確証はない。

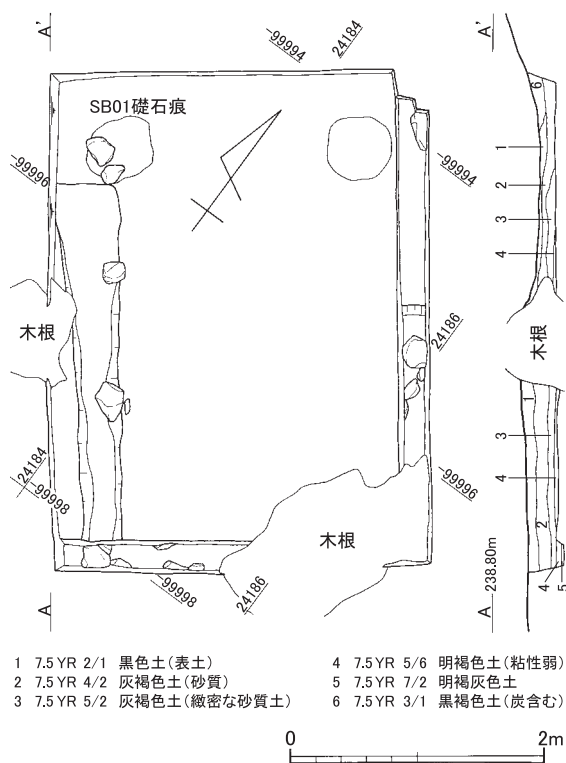


Fig.25 昆布山谷地区第2地点IV区平面・断面図 (S=1/60)

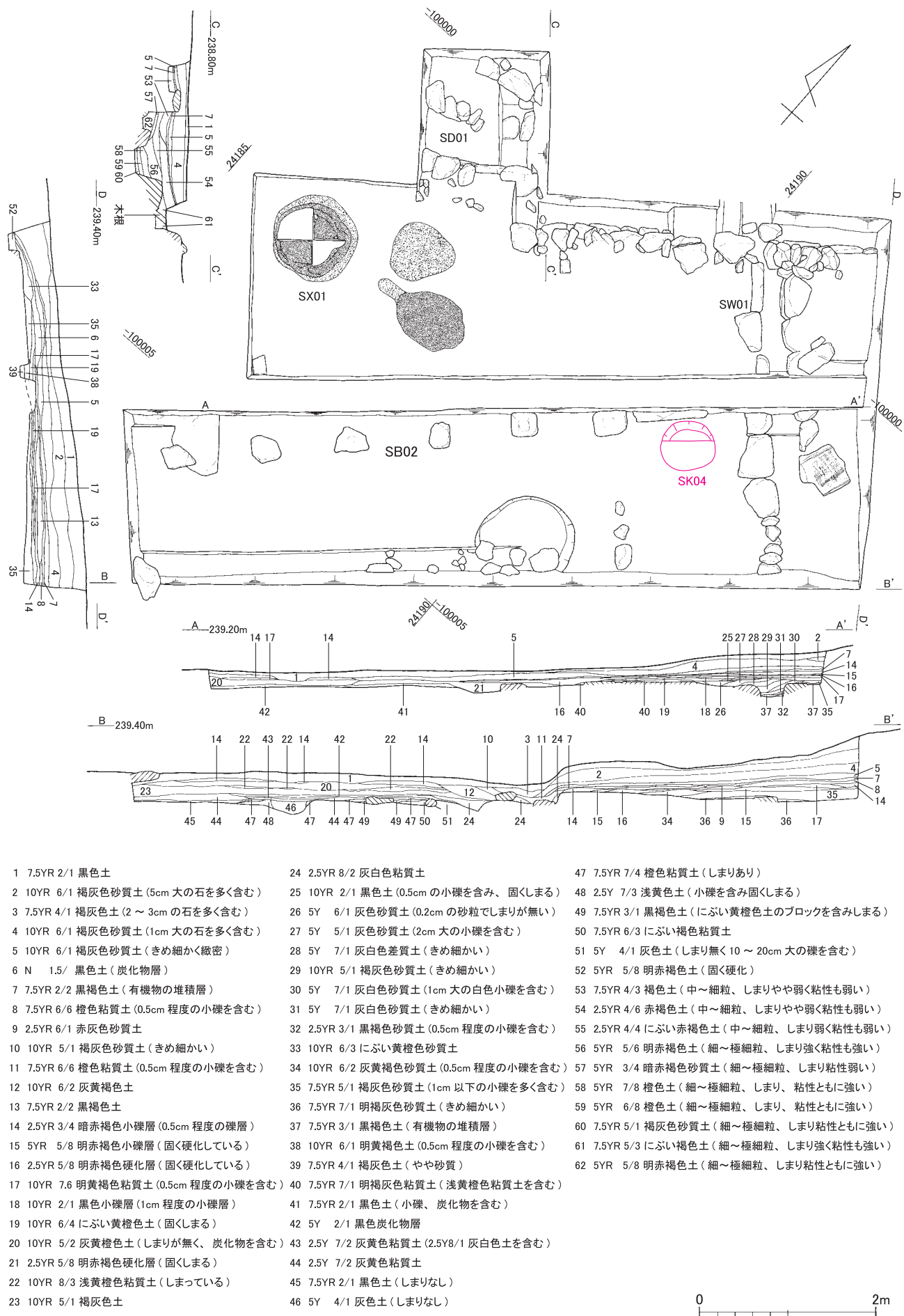


Fig.26 昆布山谷地区第2地点V区平面図・断面図 (S = 1 / 60)

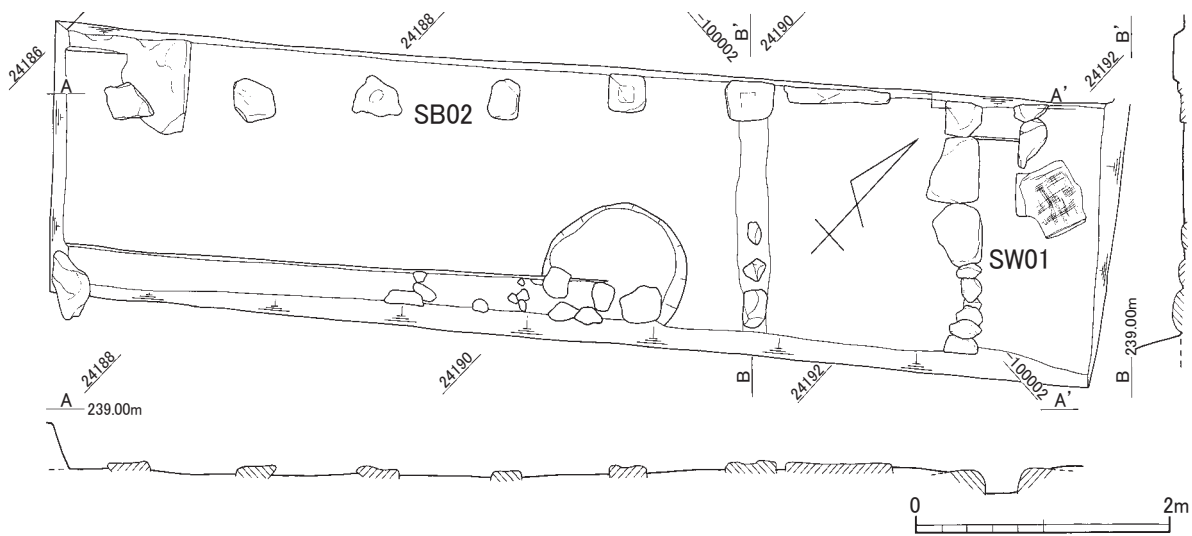
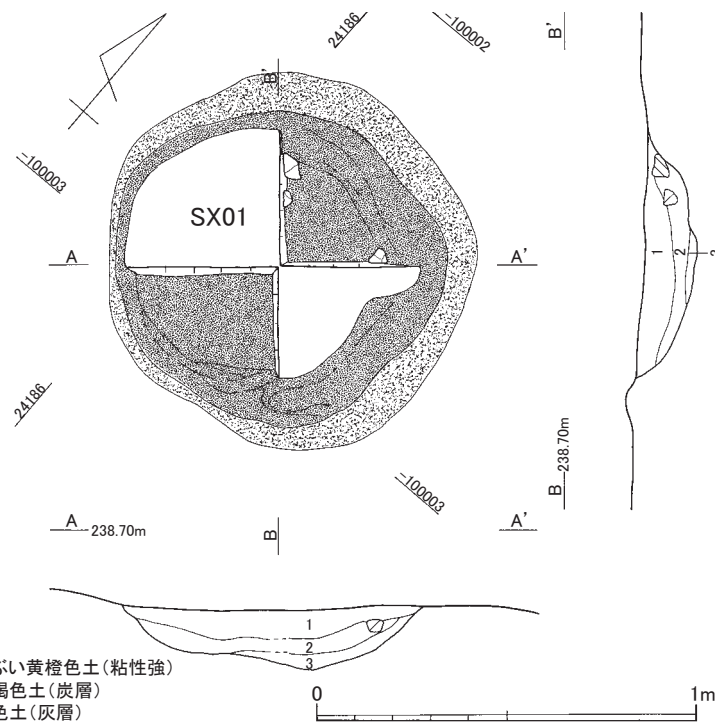


Fig.27 昆布山谷地区第2地点V区SB02平面図・断面図 (S = 1 / 60)



- 1 10YR 6/3 にぶい黄橙色土(粘性強)
- 2 10YR 3/1 黒褐色土(炭層)
- 3 10YR 4/1 褐色土(灰層)

Fig.28 昆布山谷地区第2地点V区SX01平面図・断面図 (S = 1 / 20)

**土製品・金属製品** 57は煉瓦である。59は真鍮製の  
のべ煙管で、首部から火口が滑らかな器形である。

【Ⅱ区】

**陶磁器類** 60は皿で、見込みに砂目がある。61は広  
東碗の蓋である。外面に鳥が描かれている。62は在  
地系陶器で、壺の蓋である。68～70はいずれも端反  
碗で、70は瀬戸の新製焼である。71は見込みがやや  
凹む形の碗である。見込みには笹を丸くあしらった  
文様があり、底部には朱書きがある。72・73は小碗  
もしくは仏飯器である。72の外面に扇のような文様  
が、73には簡略化された鳥のような文様がある。74  
は猪口である。75は端反碗の蓋である。76は在地系  
陶器の灯火具で、底部には糸切の痕跡がある。77～  
81は石見焼である。82は産地不明の陶器で、蓋であ  
る。外面には飛鉋による装飾があるほか、全体にスス  
が付着している。85は外青磁の碗である。86は窯道  
具で、重ね焼きの際に融着を防ぐためのザンギリであ  
る。87は肥前陶器の碗である。88は在地系陶器の皿で、  
内面のみ釉がかかり、外面は露胎している。

**土製品・金属製品** 63～66は煉瓦である。63は片  
面に、65は両面にモルタルが付着している。66はモ  
ルタルによって接合している。64・65は普通の直方  
体だが、63と66は長辺の片側がやや薄くなる縦迫の  
セリ型である。67は棒状の鉄製品で、建築部材の可  
能性がある。89は平瓦で、くすんだ来待釉がかかる。

【Ⅲ区】

**陶磁器類** 90・91は漳州系の青花の皿で、91は碁筭  
底である。92は広東碗で、見込みには非常に簡略化  
された五弁花文があるほか、朱が付着している。断面  
に焼継の痕跡が認められる。93は端反碗で、外面に  
は七宝と格子文、内面には格子文がある。94は皿で、  
内面全体に植物が描かれている。外面には唐草、見込  
みには一部のみで判読が難しいが「福」を丸くあしらっ  
ているとみられる。95・96は備前焼で、95はすり鉢、  
96は壺である。97は端反碗の蓋で、外面は七宝文の  
上下に格子文、内面は口縁部に格子文、底部に丸文が  
ある。文様のモチーフが93と共通していることから、  
セットであったかもしれない。98は萩焼の碗である。  
99は瓦質土器で、火鉢とみられる。外面に柳をあし  
らった文様がある。

**石製品** 100は石盤で、破損している箇所を除いてい  
ずれの面にも線状痕がついていることから、砥石の可  
能性がある。101はのし瓦である。

【Ⅳ区】

**陶磁器類** 102は碗で、外面には松のような文様があ  
るが、簡略化されている。102は皿で、口縁付近がや  
や開く形状としている。104は肥前陶器の皿で、残っ  
てはいないが砂目がつくタイプである。105・106は  
碗で、105の外面には亀甲文、内面には四方嚢が描か  
れている。107は、産地は不明だが陶器の鍋である。

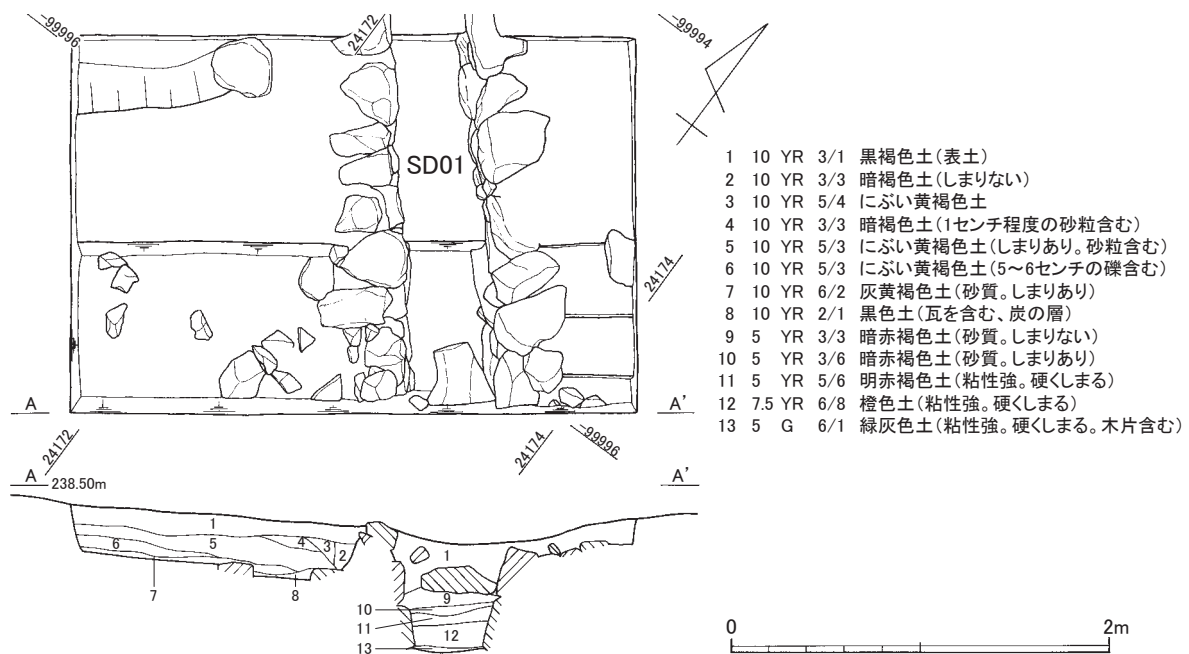


Fig.29 昆布山谷地区第2地点Ⅵ区平面図・断面図 (S = 1 / 40)

内面に胎土目のような痕跡がある。

【V区】

V区からは主にSB02及びその周辺から陶磁器類や土製品・金属製品・石製品が出土した。中国の白磁など、古い遺物がわずかに含まれるが、混入によるとみられる。多くは端反碗の時期まででまとまっていることから、石見銀山編年6期に該当すると判断でき、I～IV・VI区よりも一段階古い。

**陶磁器類** 108は蓋である。口縁部が残っていないため断定できないが、持ち手の広いことから、広東碗

の蓋の可能性がある。109は口錆びの輪花皿である。110は白磁の皿である。111は石見の碗である。112は湯呑で、コバルトの発色が強いことや、文様をゴム版で付けているとみられることから、近代でもかなり新しい時期の資料とみられる。産地の推定は難しいが、胎土の様相から瀬戸の新製焼きの可能性がある。113～117は碗で、113・114には網状の文様がある。118はかけ流しがされた皿である。119は端反碗で、内面に雷文がある。120は小碗で、瀬戸の新製焼とみられる。内面に朱書きで「固」の文字がある。121は

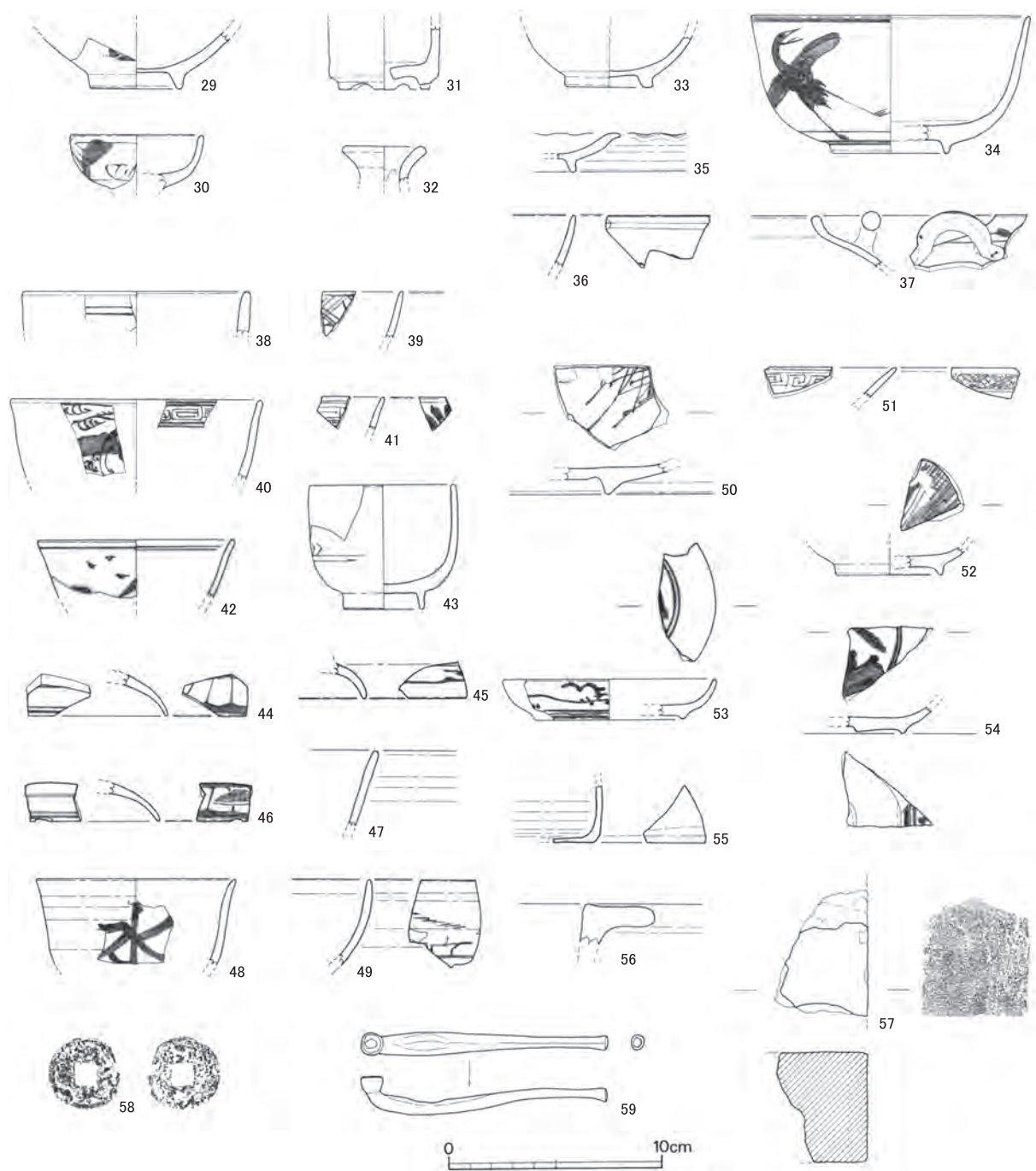


Fig.30 昆布山谷地区第2地点出土遺物I (S=1:2, 1:3)

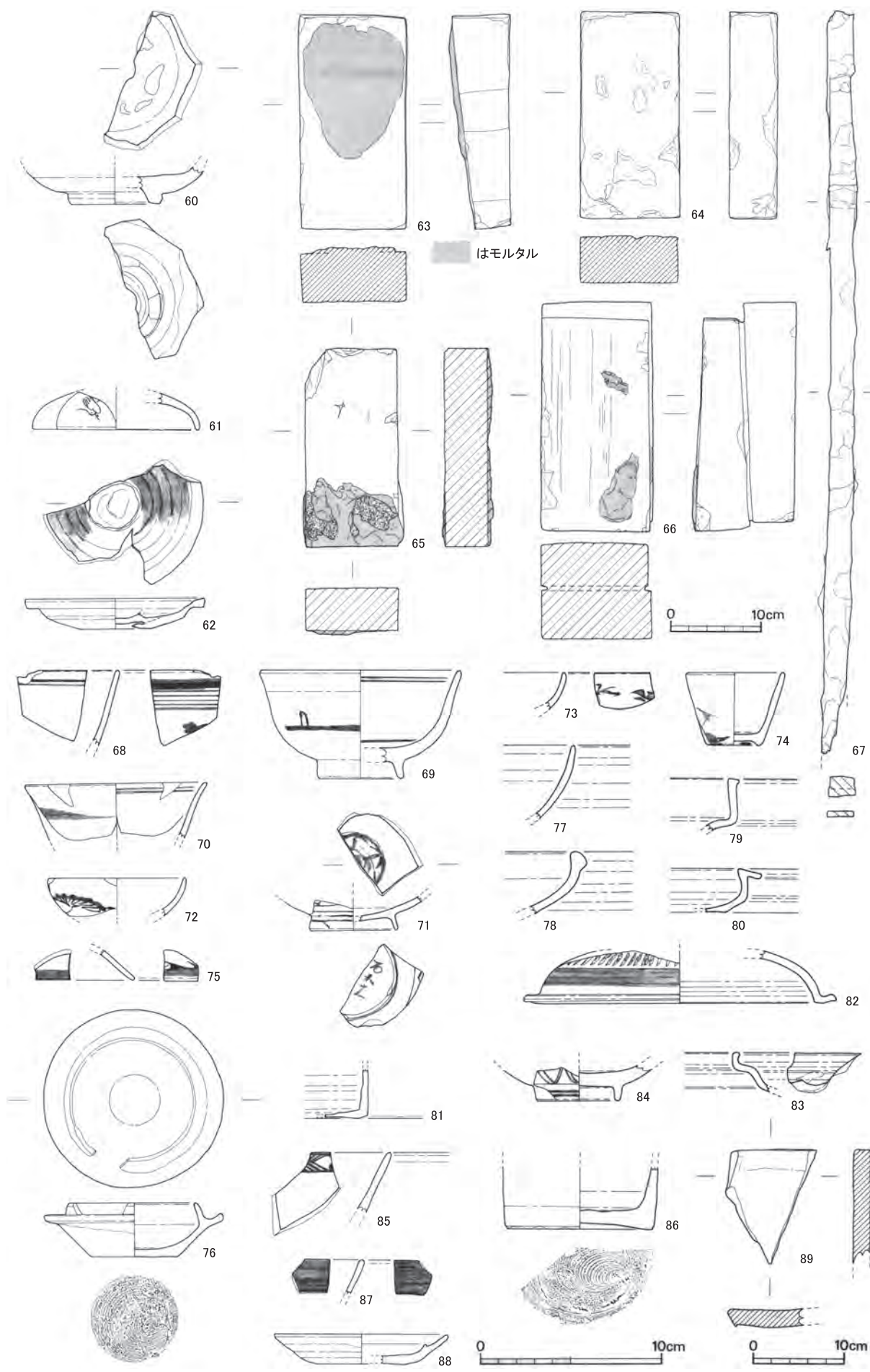


Fig.31 昆布山谷地区第2地点出土遺物Ⅱ (S = 1 : 3, 1 : 6)

口錆びの輪花皿である。122は段重で、色絵とした部分ごく一部が残っている。123は石見もしくは須佐の瓶である。126は内面のみ施釉された陶器で、全体にススが付着していることから、灯明皿として使用されていたとみられる。127は端反碗で、外面には植物の文様、内面には雷文がある。128は猪口もしくは小碗である。130は色絵の皿だが、ゴム版によって施文されており、近代でも新しい時期の資料である。131は肥前陶器の皿である。132は白磁の皿で、底部には重ね焼きの際の砂が付着している。133は石見の皿で、内面に胎土目がある。134は土鍋とみられる。底部にススが付着している。135は陶器の鍋で、底面にススが付着している。137は、産地は不明であるが壺など

の蓋である。

**土製品・金属製品・石製品** 124はサナの一部、125は火鉢である。138は土師質土器で、焜炉とみられる。139は銭貨で、古寛永である。140は鉄製品で、瓢箪型をしているが用途等は不明である。141は凝灰岩製の墓石の台座で、表面には幅6cm、深さ1cm程で、器形に合わせて90°に曲がる溝がある。裏面には軽量化のためと見られる、鑿による削り込みがある。

【Ⅵ区】

**陶磁器類** 142は端反碗で、外面には縦に二条の波線と六条の線を交互に描く。内面には、口縁部に格子文があり、見込みにも文様があるが非常に簡略化されており、モチーフの判別はできない。143は丸碗で、外

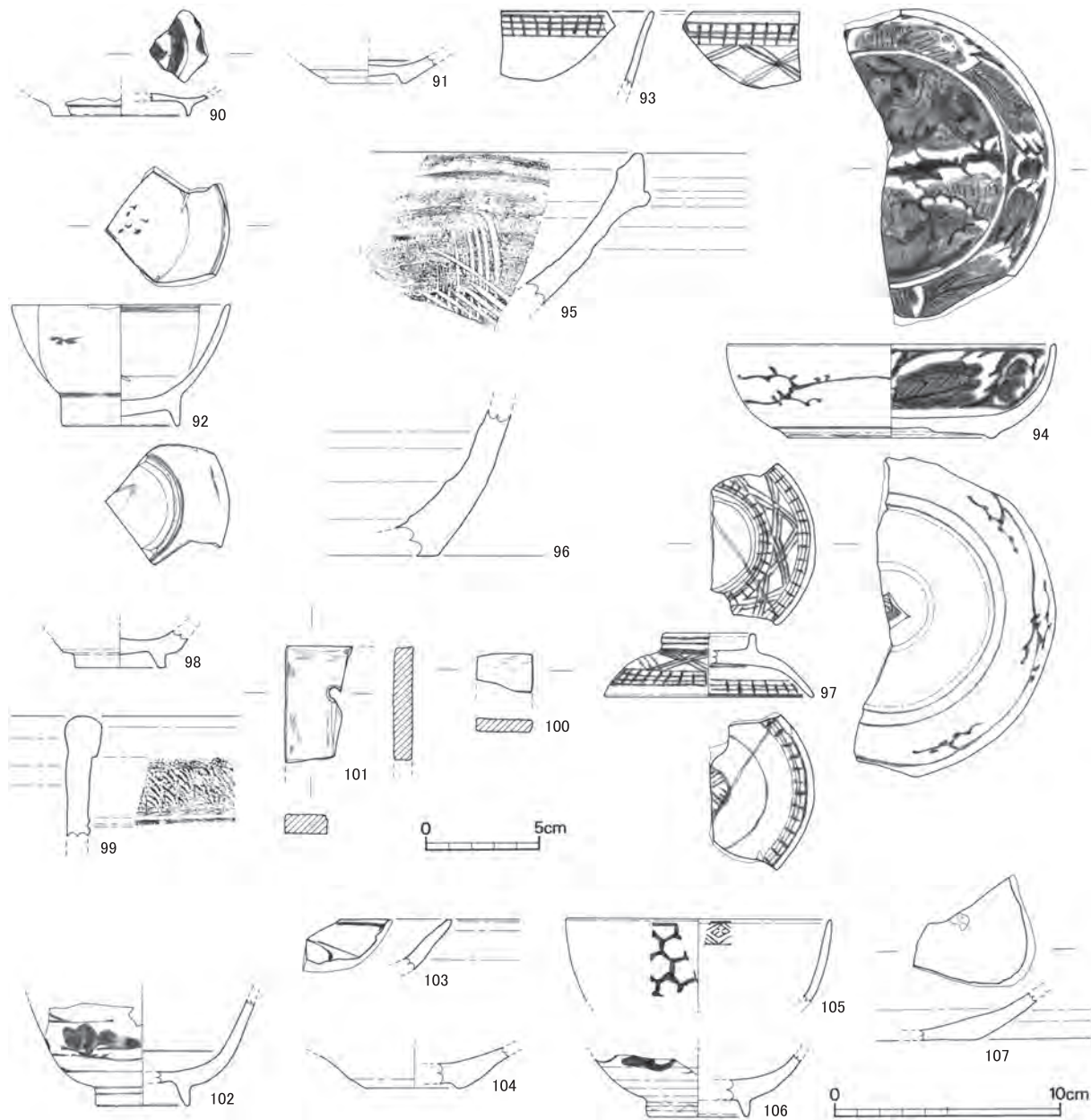


Fig.32 昆布山谷地区第2地点出土遺物Ⅲ (S = 1 : 3, 1 : 6)



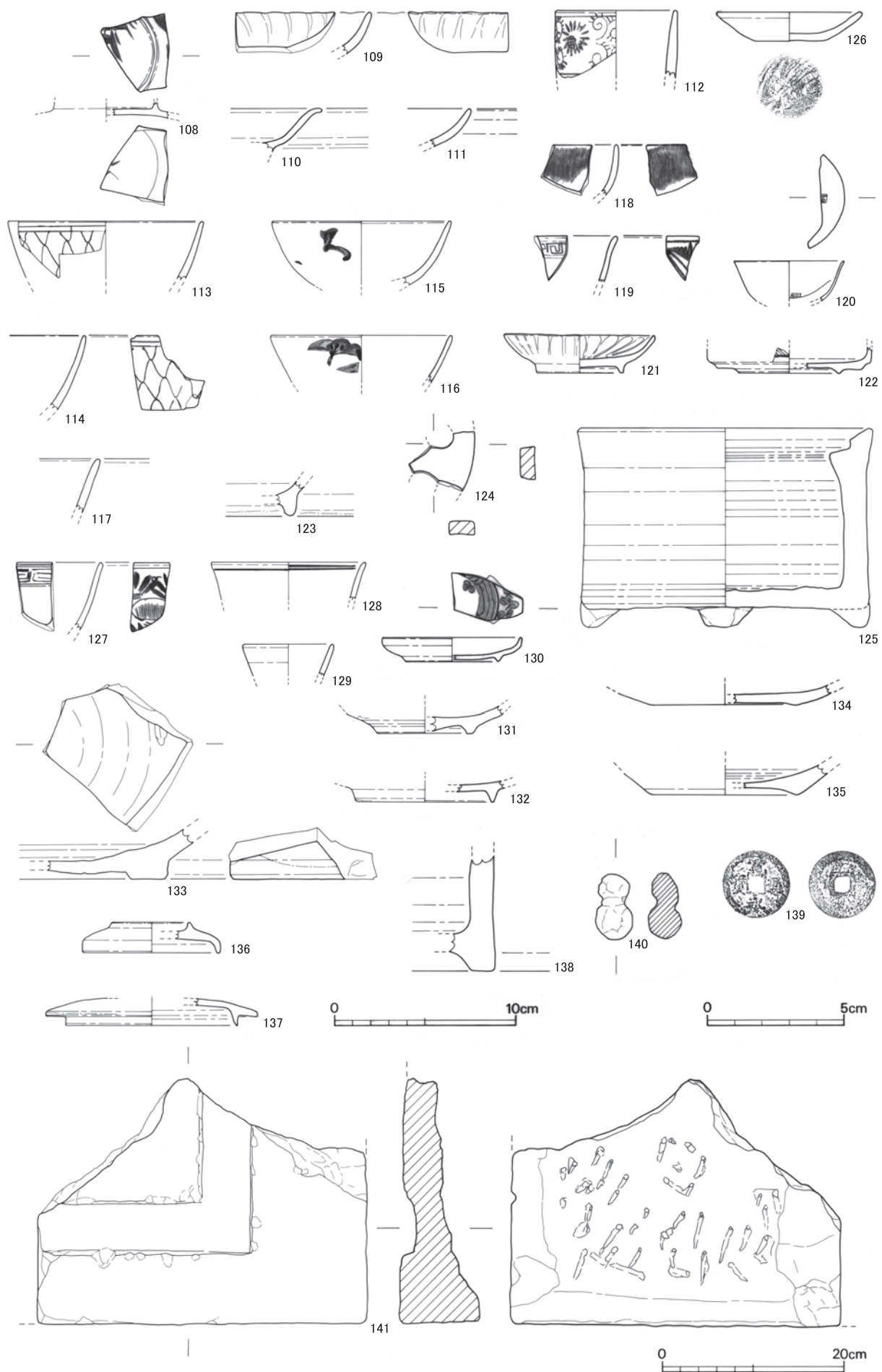


Fig.33 昆布山谷地区第2地点出土遺物Ⅳ (S=1:2, 1:3, 1:6)

面には雲、内面には四方禳文がある。144～146は在地系陶器で、144は石見の碗とみられる。145・146は鍋で、外面にススが付着している。147は大型の輪花皿で、内面の口縁部に梅の文様がある。148・149は肥前陶器で、148は皿、149は坏である。150は端反碗の蓋で、外面には七宝と笹のような植物を交互に描き、内面には雷文がある。151は在地系陶器の甕である。152はガラス製のミニチュア坏で、外面には蓮弁のような装飾、底面には格子の装飾がある。

**金属製品・瓦** 153は銭貨で、新寛永である。154は

鉄製のボルトである。長さが21.5cmと大型だが、ねじ部は3cmと短い。頭部は六角形である。155は鉄棒の端部を丸く曲げている、先端部を欠損するが、丸カンとみられる。鉄杭などであろうか。156は鉄製の棒で、片側の端部がやや薄くなっている。両端とも破損しているため、本来の大きさは分からないが、建築部材のはご板の可能性もある。157は灰色の棧瓦である。

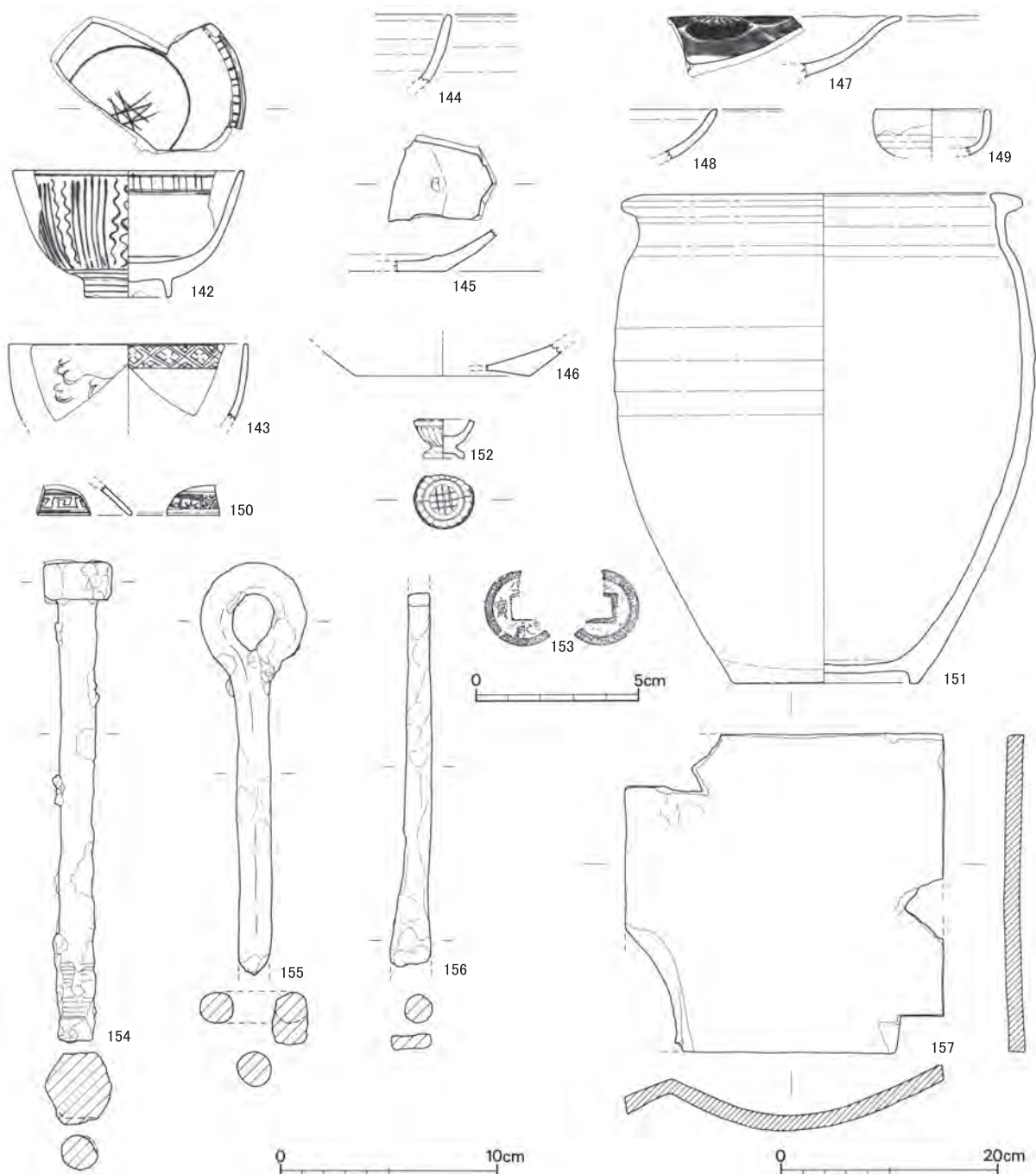


Fig.34 昆布山谷地区第2地点出土遺物V (S=1:2, 1:3, 1:6)

Tab. 4 昆布山谷地区2地点出土遺物観察表 I

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
29	表土	不明磁器	碗		(2.6)	(4.1)	透明釉		
30	表土	肥前磁器	仏飯器	(6.0)	(2.5)		透明釉	色絵	
31	選鉱場 表採	萩	灯火具?		(2.9)	(4.2)	(内) 褐釉 (外) 藁灰釉		
32	表土	肥前陶器	瓶	(3.6)	(1.5)		灰釉		
33	I区褐色土(表土下)	石見	碗		(2.4)		透明釉		
34	I区6層	肥前磁器	碗	(13.0)	6.4	(5.2)	透明釉		
35	I区褐色土(表土下)	肥前陶器?	皿		(1.8)		透明釉	なぶり口	
36	I区褐色土(表土下)	青花	碗		(2.5)		透明釉		
37	I区褐色土(表土下)	石見?	土瓶?		(2.6)		緑釉 鉄釉 透明釉		
38	I区 遺構面直上	肥前磁器	碗	(10.4)	(1.9)		透明釉		
39	I区 遺構面直上	肥前磁器	碗		(2.1)		(内) 透明釉 (外) 青磁釉		外青磁
40	I区 遺構面直上	肥前磁器	碗	(11.6)	(3.7)		透明釉	雷文	
41	I区 遺構面直上	肥前磁器	碗		(1.6)		透明釉		
42	I区 遺構面直上	肥前磁器	碗	(9.0)	(2.7)		透明釉		
43	I区サブトレ	肥前磁器	湯呑	(6.6)	5.8	3.6	透明釉		
44	I区 遺構面直上	肥前磁器	蓋		(2.0)		透明釉		
45	I区 遺構面直上	肥前磁器	蓋		1.7		(内) 青磁釉 (外) 透明釉		
46	I区 S B 02 遺構面直上	肥前磁器	蓋		(1.8)		透明釉		
47	I区 遺構面直上	萩	碗		(3.5)		藁灰釉		
48	I区 遺構面直上	石見	碗	(9.2)	(4.0)		透明釉	鉄絵	
49	I区褐色土(表土下) I区 S B 02 遺構面直上	石見	碗		(4.1)		長石釉	鉄絵	
50	I区 遺構面直上	肥前磁器	皿		(1.4)		透明釉		
51	I区 遺構面直上	肥前磁器	猪口		(1.4)		透明釉		
52	I区 S B 02 遺構面直上	肥前磁器	皿		(1.3)	(4.8)	透明釉		
53	I区 遺構面直上	肥前磁器	皿	(9.9)	1.9	(6.8)	透明釉		
54	I区 遺構面直上	肥前磁器	皿		(1.2)		透明釉		
55	I区 遺構面直上	石見	瓶		(2.7)		長石釉		
56	I区 遺構面直上	在地系陶器	甕?		(1.9)		鉄釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
57	I区 遺構面整地層	土製品	レンガ	5.8	4.2	5.1	橙褐色	124.5	
58	I区 S B 02 遺構面直上	銭貨	不明	2.2	2.2			1.9	
59	I区 表土	金属製品	のべ煙管	11.5	1.1	0.8	真鍮製	9.5	

Tab. 5 昆布山谷地区2地点出土遺物観察表II

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
60	II区6層(流土)	肥前陶器	皿		(2.1)	(4.9)	灰釉		
61	II区黄褐色粘土層	肥前磁器	蓋	(9.1)	(2.1)		透明釉		
62	II区黄褐色粘土層	在地系?	蓋	9.8	1.7	3.9	緑釉 透明釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
63	II区黄褐色粘土層	土製品	レンガ	23.9	11.9	6.5	赤褐色	2650	
64	II区黄褐色粘土層	土製品	レンガ	22.8	11.0	5.3	明褐色	2100	
65	II区黄褐色粘土	土製品	レンガ	22.0	11.1	5.2	橙色	1895	
66	II区黄褐色粘土	土製品	レンガ	25.3	12.3	11.4	橙色 浅黄橙色	5280	
67	II区遺構物炭混層	鉄製品	建築部材?	41.0	1.6	11		106.0	
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整文様	備考
				口径	器高	底径			
68	II区下層確認T4層	肥前磁器	碗		(4.2)		透明釉		
69	II区下層確認T4層	肥前磁器	碗	(10.9)	6.0	(4.6)	透明釉		
70	II区下層確認T砂層 II区下層確認T砂レキ層	瀬戸	碗	(9.9)	(3.1)		透明釉		
71	II区下層確認T4層	肥前磁器	碗		(1.9)	(4.8)	透明釉		
72	II区南側サブトレ砂層	肥前磁器	小碗	(7.5)	(2.1)		透明釉		
73	II区下層確認T4層	肥前磁器	小碗か 仏飯器		(2.0)		透明釉		
74	II区下層確認T8層上	肥前磁器	猪口	5.2	4.1	(2.7)	透明釉		
75	II区下層確認T4層	肥前磁器	蓋		(1.7)		透明釉		
76	II区下層確認T4層	在地系陶器	灯火具	6.9	3.0	4.8	透明釉		
77	II区下層確認T4層	石見	碗		(4.1)		長石釉		
78	II区下層確認T4層	石見	皿		(3.4)		長石釉		
79	II区下層確認T4層	石見			(2.9)		長石釉		
80	II区下層確認T攪乱土	石見	蓋		(2.4)		長石釉		
81	II区下層確認T4層	石見	瓶		(2.7)		長石釉		
82	II区下層確認T4層	不明陶器	蓋	(15.0)	(2.9)		(外)サビ釉	飛鉋	双付着
83	II区下層確認T4層	不明陶器			(2.2)		にぶい赤褐色 灰白色		
84	II区下層確認T7層	肥前磁器	碗		(1.9)	(4.6)	透明釉		
85	II区下層確認T7層	肥前磁器	碗		(4.6)		(内)透明釉 (外)青磁釉		外青磁
86	II区下層確認T7層	窯道具	ザンギリ		(3.5)	(8.0)	灰白色		
87	II区下層確認T8層	肥前陶器	碗		(1.9)		長石釉 透明釉		
88	II区下層確認T砂レキ層	在地系陶器	皿	(9.6)	1.7	(4.9)	透明釉		
89	II区下層確認T4層	瓦	平瓦	現存長 12.6	現存幅 9.4	現存厚 1.9	来待釉	225g	

Tab. 6 昆布山谷地区2地点出土遺物観察表Ⅲ

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
90	Ⅲ区3層 (流土)	青花	皿		(1.0)	(6.0)	透明釉		
91	Ⅲ区3層 (流土)	青花	皿		(0.9)	(3.4)	透明釉		
92	Ⅲ区3層 (流土)	肥前磁器	碗	(9.5)	5.4	(5.0)	透明釉	朱色 焼継	
93	Ⅲ区3層 (流土)	肥前磁器	碗		(3.4)		透明釉		
94	Ⅲ区3層 (流土)	肥前磁器	皿	(14.5)	4.2	(9.1)	透明釉		
95	Ⅲ区3層 (流土)	備前	すり鉢		(6.8)		赤褐色		
96	Ⅲ区3層 (流土)	備前	壺		(6.4)		灰褐色		
97	Ⅲ区14層	肥前磁器	蓋	(9.3)	2.8	つまみ径 (4.0)	透明釉		
98	Ⅲ区第1遺構面直上	萩	碗		(1.7)	(40)	藁灰釉		
99	Ⅲ区遺構面直上	瓦質土器	火鉢?		(5.4)		(内) 浅黄橙色 (外) 灰色		
100	Ⅲ区第1遺構面直上	石製品	砥石?	現存長 3.4	現存幅 5.0	現存厚 1.1	灰白色	27.7g	
101	Ⅲ区第1遺構面直上	瓦	のし瓦	現存長 10.3	現存幅 5.9	現存厚 1.2	黒色	147.6g	
102	Ⅳ区3層	肥前磁器	碗		(4.7)	(4.0)	透明釉		
103	Ⅳ区3層	肥前磁器	皿		(2.3)		透明釉		
104	Ⅳ区3層	肥前陶器	皿		(1.8)	(4.3)	灰釉		
105	4 T 6層褐灰色砂質土	肥前磁器	碗	(11.7)	(3.7)		透明釉	(内) 亀甲文 (外) 四方禪文	
106	4 T 表土	肥前磁器	碗		(2.8)	(4.4)	透明釉		
107	6 T 灰白色粘質土 60層	不明陶器	鍋		(2.1)		(内) 褐釉	胎土目か	
108	V区表土	肥前磁器	蓋		(0.9)		透明釉		
109	V区褐灰色砂質土 6層	肥前磁器	皿		(2.3)		透明釉	輪花	
110	V区褐灰色砂質土 7層	白磁	皿		(2.4)		白磁釉		中国
111	V区褐灰色砂質土 6層	石見	碗		(2.1)		長石釉		
112	V区上層砂質土	不明磁器	湯呑	(6.6)	(3.7)		透明釉		
113	V区遺構面直上	肥前磁器	碗	(10.6)	(3.2)		透明釉		
114	V区遺構面直上	肥前磁器	碗		(4.1)		透明釉		
115	V区遺構面直上	肥前磁器	碗	(9.7)	(3.5)		透明釉		
116	V区遺構面直上	肥前磁器	碗	(9.9)	(2.6)		透明釉		
117	V区遺構面直上	肥前磁器	碗		(3.0)		透明釉		
118	V区遺構面上層 (灰白色土)	肥前磁器	皿		(2.8)		褐釉 藁灰釉	かけ流し	
119	V区遺構面直上	肥前磁器	碗		(2.5)		透明釉		

Tab. 7 昆布山谷地区2地点出土遺物観察表IV

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
120	V区 S B 03 遺構面直上	瀬戸?	小碗	(6.0)	(2.3)		透明釉	朱色「固」	
121	V区 遺構面直上	肥前磁器	皿	8.1	2.1	4.8	透明釉	輪花	
122	V区 遺構面直上	肥前磁器	段重		(1.5)	(5.5)	透明釉	色絵	
123	V区 遺構面直上	石見か須佐	瓶		(2.0)		鉄釉		
124	V区 S B 03 遺構面直上	土製品	サナ	現存長 3.4	現存幅 3.7	現存厚 0.8	橙色	8.8 g	
125	V区 遺構面直上	土製品	火鉢	(15.9)	11.0	(15.4)	淡黄色	450g	双付着
126	V区 遺構面下層	施釉陶器	皿	(8.0)	1.6	3.8	透明釉		
127	V区 40 層浅黄橙色粘質土	肥前磁器	碗		(3.8)		透明釉	雷文	
128	V区 38 層黒褐色砂質土	肥前磁器	碗か猪口	(8.4)	(2.1)		透明釉		
129	V区 40 層浅黄橙色粘質土	肥前系磁器	坏	(5.0)	(1.8)		透明釉		
130	V区 40 層浅黄色粘質土	肥前磁器	小皿	(7.6)	1.4	(5.1)	透明釉	色絵	
131	V区 34 層黒褐色砂質土	肥前陶器	皿		(1.5)	(5.2)	灰釉		
132	V区 38 層黒褐色砂質土	白磁	皿		(1.2)	(7.6)	白磁釉	砂目	中国
133	V区 40 層浅黄橙色粘質土	石見	皿		(2.8)		長石釉	胎土目	
134	V区 40 層浅黄橙色粘質土	不明	土鍋?		(1.7)	(8.0)	(内) 褐釉		双付着
135	V区下層確認サブトレ 炭層下 44 層明褐灰色粘質土	不明陶器	鍋		(1.1)	(8.0)	(内) 灰釉		双付着
136	V区 40 層浅黄橙色粘質土	肥前系磁器	蓋	(7.5)	1.7	(4.4)	透明釉		
137	V区サブトレ下層	不明磁器	蓋	(9.4)	(1.5)		透明釉		
138	V区 S B 01 砂層	土師質土器	焜炉?		(6.4)		浅黄橙色		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
139	V区 表土	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4			3.1	
140	V区 遺構面直上	鉄製品	不明	2.4	1.4	1.3		5.6	
141	V区 40 層浅黄橙色粘質土	石製品		27.2	36.1	8.8	灰白色		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
142	VI区表土	肥前磁器	碗	(10.5)	5.8	3.8	透明釉		
143	VI区表土	肥前磁器	碗	(10.9)	(3.6)		透明釉		
144	VI区表土	石見?	碗		(3.2)		灰釉		
145	VI区表土	在地系陶器	鍋		(1.9)		褐釉	胎土目	双付着
146	VI区表土	在地系陶器	鍋		(1.5)	(8.0)	褐釉		双付着
147	VI区第2 遺構面直上	肥前磁器	皿		(2.8)		透明釉	稜花	
148	VI区第2 遺構面直上	肥前陶器	皿		(2.3)		灰釉		
149	VI区第2 遺構面直上	肥前陶器	坏	(5.2)	(2.2)		灰釉		
150	VI区第2 遺構面直上	肥前磁器	蓋		(1.4)		透明釉		
151	VI区第2 遺構面直上	在地系陶器	甕	(15.2)	22.6	8.4	鉄釉		
152	VI区表土	ガラス製品	ミチア7坏	(2.4)	1.8	1.9			
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
153	VI区 6 層	銭貨	寛永通寶	2.4	1.8			1.3	
154	VI区表土	鉄製品	ボルト	22.2	3.2	3.3		360.0	
155	VI区表土	鉄製品		19.1	5.0	2.4		320.0	
156	VI区表土	鉄製品	不明	17.2	1.9	1.3		120.9	
157	VI区第2 遺構面直上	瓦	棧瓦	24.4	29.3	1.5	灰色	1970	

### 第3節 第3地点

#### 第1項 調査の概要 (Fig.35)

第3地点は、谷の入口から約400m離れており、三久須道と流路の分岐点からやや上った場所で、字名は「切懸谷」である。明治期の地図によると、谷の奥は山林と表記されており、生活利用がなされていなかったことが確認できていた。そのため、近世以前の遺構が残存している可能性が考慮された。本地点の東側には岩盤が露出しており、その付近には坑口が3カ所ある。3つの坑口はそれぞれ形態が異なっており、一つは三角形で坑内へ斜めに下るもの、もう一つは一边が50cm程度の正方形に近いもの、そして幅80cm程度で長方形に近く、入口が広めに作られている。

本地点は昆布山谷のなかでも奥に当たり、古くより利用されていた可能性が指摘されていたため、調査地点として選定した。

#### 第2項 層序 (Fig.36)

発掘調査により確認できた範囲ではあるが、第3地点の形成過程は大きく3段階に分けることができる。

##### 【第1段階】

トレンチの最深部である。トレンチの東側では地表下40cm程度で岩盤にあたる。岩盤には溝や円形の穴などが加工されており、本調査地点の初期段階には地表に広がる岩盤を利用していたと想定される。岩盤直上からは青花が1点出土しており、古くより開発されていた可能性が指摘できる。

##### 【第2段階】

16・24・30・32層以下で、本地点が鉱山開発による廃棄物(ズリ)の集積場となっていた段階である。廃棄されたズリは色調や石屑の大きさが堆積層ごとに異なっていることから、複数の間歩から排出されて集積したと推察される。前述したが本地点の周囲には複数の間歩が所在していることから、近隣の間歩からそれぞれ排出されたズリである可能性が高い。

##### 【第3段階】

SB01の構築面が形成される段階である。第2段階において廃棄されたズリ山の一部を整地して平坦面をつくり、利用していたようである。第2段階と第3段階の間には旧表土もしくは流土とみられる黒褐色土層

(15・29層)も確認できることから、一時は特に利用されず空き地となっていた可能性も想定される。また、SB01の構築面より上層にも礫交じりの黄色土が堆積していたほか、地表面上にも坑道から排出されたと思われる礫や土砂が堆積していたため、建物が解体された後も鉱山からの廃棄物の集積場となっていたようである。

#### 第3項 検出遺構

##### 【SB01】 (Fig.37)

SB01は割石を並べた基礎を持つ小型の礎石建物遺構である。トレンチ内の一部に巨石があったため全体の検出はできなかったが、規模は東西約2.5m、南北約3mである。南側の石列から約1.6mの範囲には粘土が貼られている。SB01の構築面は28層で、建物の東側は一部が浅い溝状に窪んでおり、雨落ち溝であった可能性もある。SB01東側の岩盤付近には多くの瓦が集積しており、建物を解体した際に廃棄された可能性がある。内部の遺構はSX01のみと少なく、簡素な建物であったとみられる。建物の整地層から端反碗を含む陶磁器が数点出土している。いずれも小片であるが、SB01が幕末～近代頃に利用されていた可能性が考慮される。

##### 【SX01】 (Fig.38)

SX01はSB01の中央部で検出された一边が80cm程度の石組の遺構である。検出箇所の都合もあり、全体の確認はできなかった。検出された範囲では割石を5つ方形に並べている。この石組の内面は一部が被熱していることや、底面には炭を敷き詰めていたこと、埋土には炭交じりの堆積層が含まれることなどから、火を扱う場所として利用されていた遺構と判断できる。ただし、SX01やSB01の周辺からは金属片やカラミ、羽口などは出土していない。また、埋土の蛍光X線分析も実施したが、土壌に由来する鉄分以外の金属成分は検出されなかった。そのため、本遺構は鍛冶炉や製錬炉など生産に関連する遺構ではなく、囲炉裏などの暖房施設の可能性がある。

#### 第4項 出土遺物 (Fig.39, Tab.11)

第3地点では、時期を特定できるような遺物がほとんど出土していない。時期比定が可能な遺物についても、SB01の構築面よりも下位から出土している。

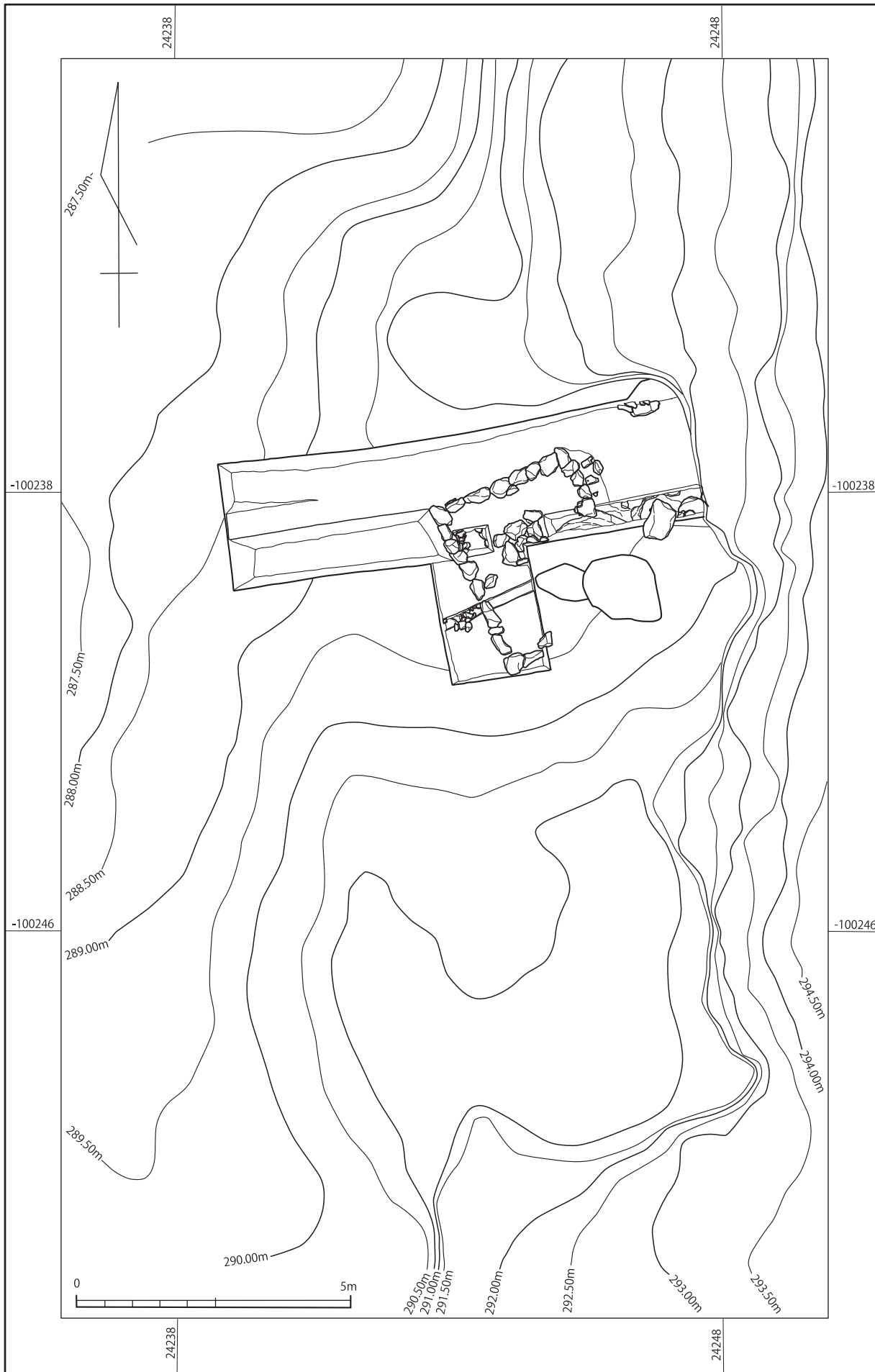
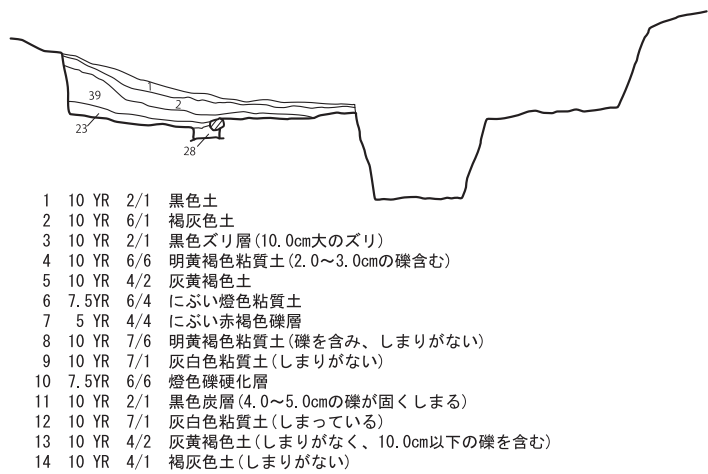
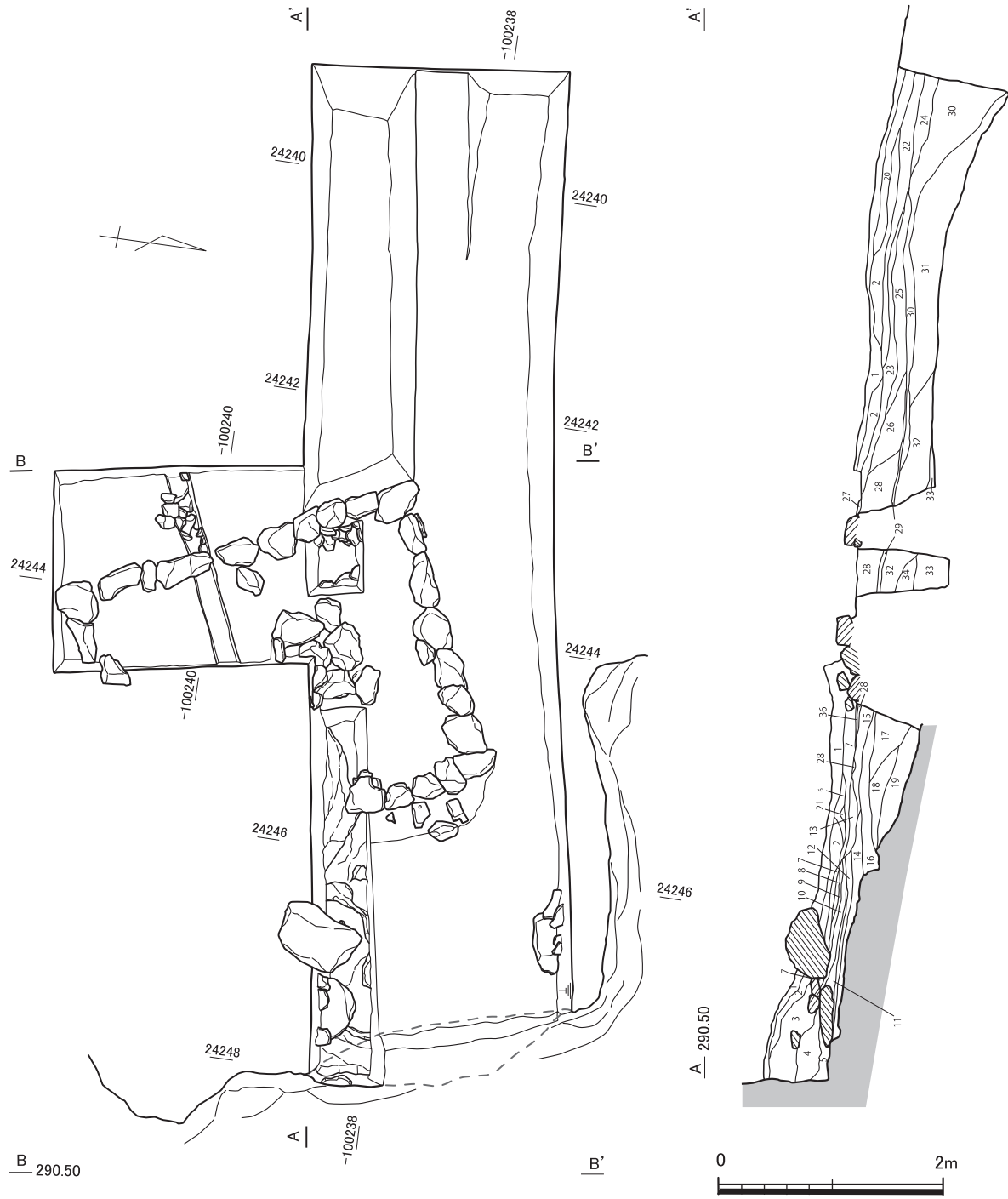


Fig.35 昆布山谷地区第3地点地形図 (S = 1 / 100)





- 1 10 YR 2/1 黒色土
- 2 10 YR 6/1 褐灰色土
- 3 10 YR 2/1 黒色ズリ層(10.0cm大のズリ)
- 4 10 YR 6/6 明黄褐色粘質土(2.0~3.0cmの礫含む)
- 5 10 YR 4/2 灰黄褐色土
- 6 7.5YR 6/4 にぶい橙色粘質土
- 7 5 YR 4/4 にぶい赤褐色土
- 8 10 YR 7/6 明黄褐色粘質土(礫を含み、しまりが無い)
- 9 10 YR 7/1 灰白色粘質土(しまりが無い)
- 10 7.5YR 6/6 橙色礫硬化層
- 11 10 YR 2/1 黒色炭層(4.0~5.0cmの礫が固くしまる)
- 12 10 YR 7/1 灰白色粘質土(しまっている)
- 13 10 YR 4/2 灰黄褐色土(しまりがなく、10.0cm以下の礫を含む)
- 14 10 YR 4/1 褐灰色土(しまりが無い)
- 15 10 YR 3/2 黒褐色土(しまりが無い)
- 16 10 YR 4/1 褐灰色礫層
- 17 10 YR 6/4 にぶい黄橙色礫層
- 18 10 YR 3/2 黒褐色礫層(しまりが無い)
- 19 10 YR 3/1 黒褐色礫層(10.0cm弱の礫で固くしまる)
- 20 10 YR 6/4 にぶい黄橙色粘質土(しまりが無い)
- 21 10 YR 6/1 褐灰色土
- 22 10 YR 7/6 明黄褐色粘質土(2.0~3.0cmの礫含む)
- 23 5 YR 4/4 にぶい赤褐色土
- 24 10 YR 2/1 黒色ズリ層(10.0~20.0cmのズリ)
- 25 10 YR 3/2 黒褐色ズリ層(10.0cm未満のズリ)
- 26 7.5YR 4/3 褐色礫層(20.0~30.0cmの礫)
- 27 10 YR 8/2 灰白色粘質土(しまっている)
- 28 10 YR 7/4 にぶい黄橙色礫層(20.0~30.0cmの礫でSB01にともなう整地層)
- 29 10 YR 2/1 黒色炭層
- 30 7.5YR 6/6 橙色ズリ層(4.0~5.0cmのズリで固くしまる)
- 31 10 YR 3/1 黒褐色ズリ層(10.0cm大のズリ)
- 32 10 YR 3/3 暗褐色ズリ層(4.0~5.0cmのズリ)
- 33 10 YR 3/3 暗褐色土(しまりが無い)
- 34 10 YR 3/3 暗褐色ズリ層(2.0~3.0cmのズリ)
- 35 2.5YR 4/2 灰赤色ズリ層(10.0cm未満のズリ)
- 36 10 YR 2/1 黒色炭層

Fig.36 昆布山谷地区第3地点SB01 (S=1/60)

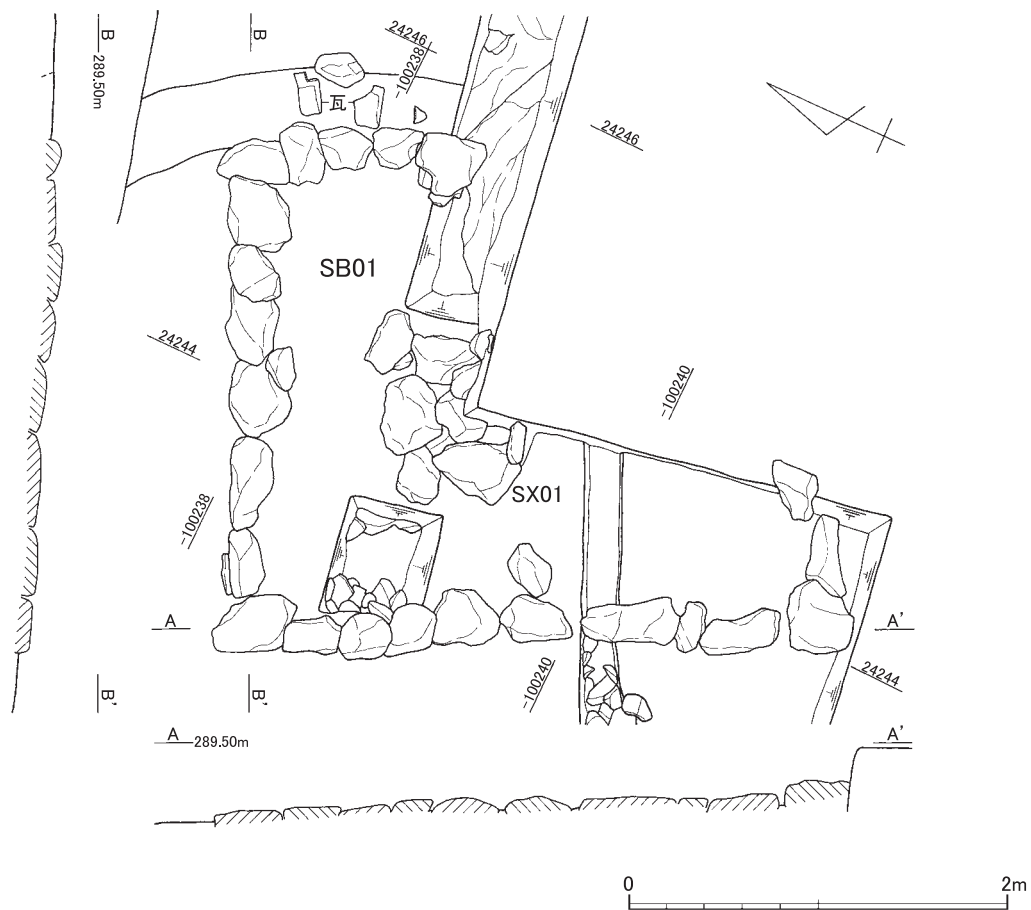
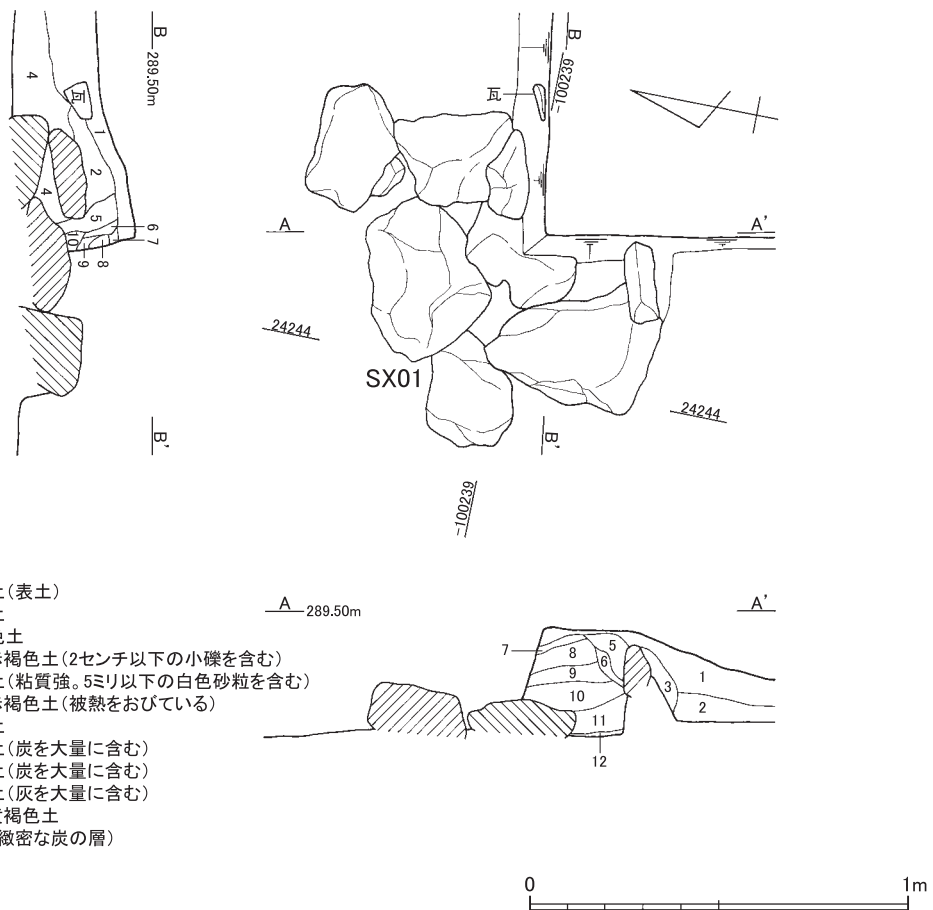


Fig.37 昆布山谷地区第3地点SB01 (S=1/40)



- 1 10 YR 3/1 黒褐色土(表土)
- 2 10 YR 4/1 褐灰色土
- 3 10 YR 5/2 灰黄褐色土
- 4 2.5 YR 6/1 にぶい赤褐色土(2センチ以下の小礫を含む)
- 5 2.5 Y 4/3 黄灰色土(粘質強。5ミリ以下の白色砂粒を含む)
- 6 5 YR 5/4 にぶい赤褐色土(被熱をおびている)
- 7 7.5 YR 3/2 黒褐色土
- 8 7.5 YR 3/2 黒褐色土(炭を大量に含む)
- 9 7.5 YR 4/1 褐灰色土(炭を大量に含む)
- 10 10 YR 5/1 褐灰色土(灰を大量に含む)
- 11 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土
- 12 10 YR 2/1 黒色土(緻密な炭の層)

Fig.38 昆布山谷地区第3地点SX01 (S=1/20)

ただし、他地点と同じく、下層からは青花が出土していることから、本地点が古くから利用されていたことが窺われる。調査では確認できなかったが、本地点においても下位には遺構が残っている可能性がある。

【陶磁器類】

158は端反碗の蓋で、外面には風景が描かれ、内面には格子文と、見込みに強く簡略化された文様がある。159・161は景德鎮の青花で、159は碗もしくは皿、161は皿である。160は陶器の鉢で、口縁部が玉縁になっている。

【瓦・石製品】

162は雁振瓦で、くすんだ来待釉がかかる。163は灰色の川原石を円形に磨いており、碁石とみられる。

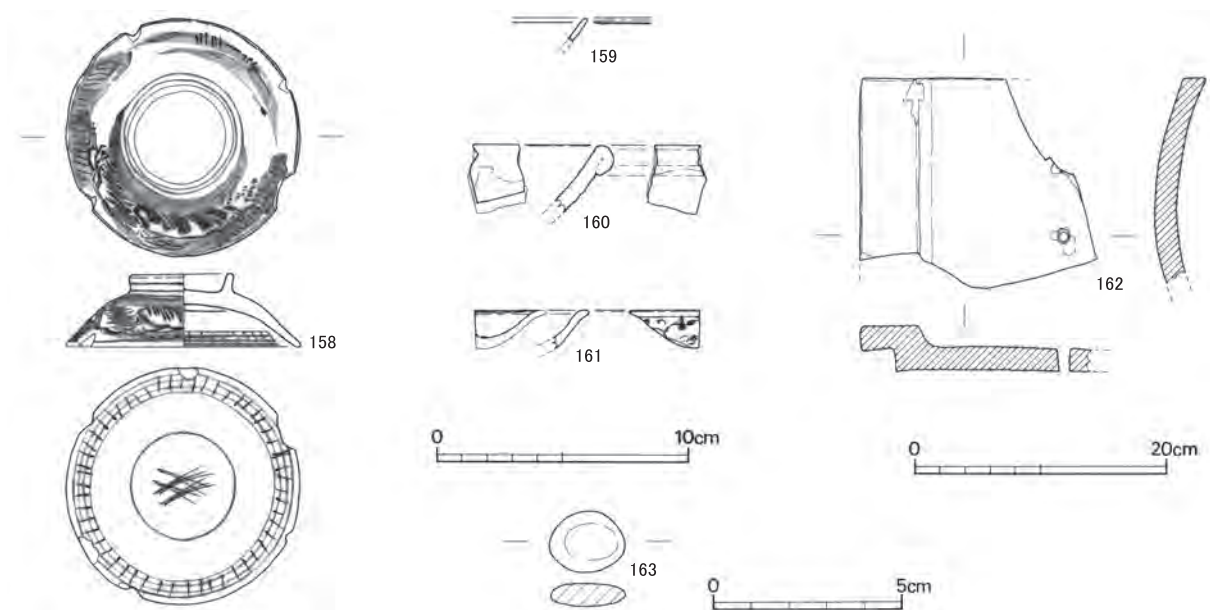


Fig.39 昆布山谷地区第3地点出土遺物 (S = 1 / 2, 1 / 3, 1 / 6)

Tab. 8 昆布山谷地区3地点出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
158	13層	肥前磁器	蓋	9.2	2.9	つまみ径 4.0	透明釉		
159	SB01 13層	青花	皿か碗		(1.0)		透明釉		
160	2層	施釉陶器	鉢		(2.7)		鉄釉		
161	19層	青花	皿		(1.5)		透明釉		
162	SB01 28層	瓦	雁振瓦	16.6	19.0	3.7	来待釉	1020	
挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
163	2層 褐灰色土	石製品	碁石	1.6	2.0	0.6	灰色	2.9	

## 第4節 第4地点

### 第1項 調査の概要 (Fig.40・41)

第4地点は、昆布山谷の中でも中央付近に位置する。本調査地点の西側には岩盤が露出しており、その岩盤の一部を掘り込んだ場所には地蔵が置かれている。本地点は斜面を造成して平坦面を築いており、その平坦面は石垣と溝によって区画されていた。本地点の道を挟んで東側にも石垣があり、奥には村上坑が所在する。その平坦面には村上坑坑夫上り小屋、鍛冶舎、村上坑見張所などがあったことが、藤田組の『要書録』には記録されている。分布調査によっても、この周囲では近代の遺物が採集できており、明治以降にも利用されていたとみられる。

### 第2項 層序 (Fig.41・52)

本地点は人為的に造成がなされた平坦面の上に坑道から排出されたズリなどが捨てられ、マウンド状になっていた。発掘調査ではまずはこのマウンドを除去し、遺構面の確認を行なった。本地区の土層堆積状況は Fig. 41・52 のとおりだが、図中の4層以上の堆積層は、坑道から廃棄されたズリや土砂、自然堆積による表土や流土である。第4層の下面には赤褐色の硬化面(11層)が広がっていたが、これらは4層から析出した金属成分が12層上面に沈下して形成されたと判断される。12層は検出時には遺構面の可能性も考慮されたが、上面では遺構が検出されなかった。本調査地点では遺構面は3面確認でき、一つは建物遺構SB01の構築面とそれに伴う平坦面である12層下面(第1遺構面)、そして地表下150cmほどで検出された52層の上面(第2遺構面)、そして最下部では岩盤を加工して利用していた。遺構の構築状況より、第1遺構面は造成によって形成された面で、第2遺構面はそれ以前に利用されていた面とみられる。34・35層と、44～48層は平坦面の造成土である。

### 第3項 検出遺構

#### 【SB01】 (Fig.42)

調査区中央部のやや東寄りで見出された建物跡である。本遺構の構成要素としては、礎石や土間、カマド跡(SX01・02)、土坑(SK01・02)、割石を丸く並べた遺構(SX03)がある。建物は東西が3間、南北が2間以上である。

SB01は一間あたりの長さは8尺2寸(約246cm)程度で、大森でよくみられる一間を6尺5寸(約197cm)とする建物に比べて柱間が広い建物である。内部の南側にはかまどのある通り土間があり、北側を部屋としていたようである。建物の一部では、長さ160cm程度の本材を縦横に配した構造物が見出されており、床下構造とみられる(Fig.43)。SB01の遺構面上では19世紀代の遺物が複数出土しており、建物の利用時期を示すと考えられる。また、SB01の北西部では、表面に5つの窪みを持つかなめ石が出土した。このかなめ石は、表面の摩耗が激しいことや、他の扁平な石とともに列をなして遺構面に配されていることから、本来の役目を終えたのちに礎石として転用されたようである。SB01からは、製錬炉や選鉱用の水溜等、生産活動に関連する遺構は見出されていない。火に関連する遺構としてSX01・02が見出されているが、埋土からはカラムなども出土しておらず、建物に伴うカマドと考えられる。そのため、SB01は製精錬や選鉱など鉱山活動に関わる建物ではなく、住居として利用されていたと判断できる。

本遺構の南西部には、東西方向と、南北方向に並ぶ石列があり、建物の境を示していると判断される。いずれも30～40cm程度の割石を並べている。後述するが、SK02は選鉱目的ではないものの、水溜として機能していたことが想定される遺構であり、その周囲を水場として利用していた可能性もある。石列の間には60cm程度の隙間があり、出入り口であった可能性がある。

#### 【SK01】 (Fig.44)

SK01は、SB01内部で見出された方形の土坑である。本遺構の西部分は未検出だが、東西の長さは1.9m、深さが20cmで、本来の平面形は正方形に近かったと考えられる。埋土には、ズリ等が多く入り込み、上面は第11層由来の赤褐色硬化土で覆われていた。南側の側壁には薄い板状の木材が残存しており、本来は全体に板を貼り付けていたとみられる。内部からの出土遺物はなく、用途の推定が難しいが、床下収納などとして利用されていた可能性が指摘できる。底面には橙色土が貼られており、この橙色土に密着して、棒状の木材が等間隔で平行に出土した。側壁に板を張り付け

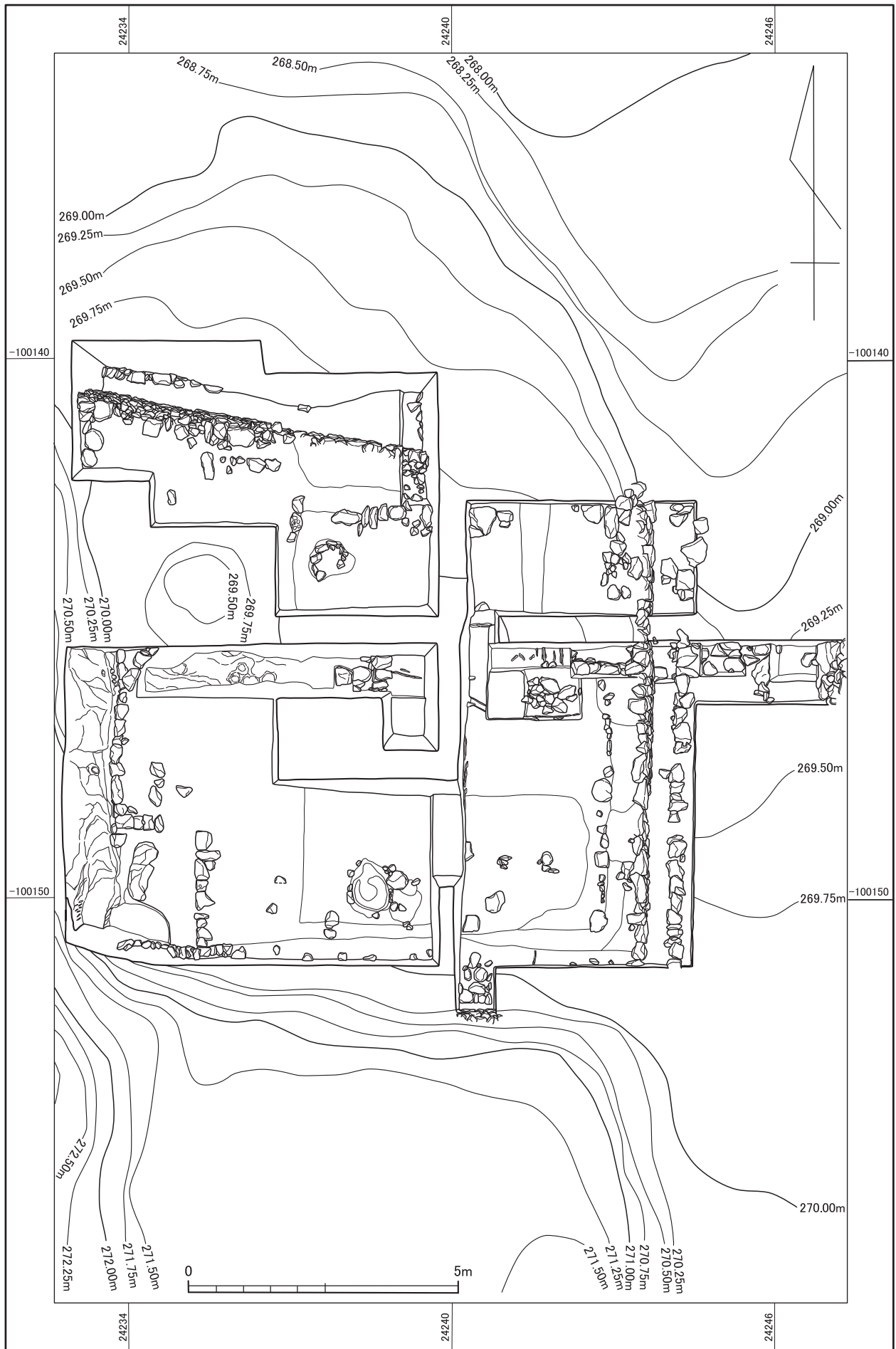


Fig.40 昆布山谷地区第4地点周辺地形図、遺構配置図 (S = 1 / 100)

ていたことから、床面も本来は板張りであった可能性が高く、この木材は板を設置するために配されていた可能性がある。

#### 【SK02】 (Fig.45)

SK02は調査区の南西隅、SW04の真下から検出された土坑で、縁辺には白色の粘土が貼られていた。調査範囲の都合もあり、全体の検出はできなかったが、検出された範囲内では東西径約1.2mで、本来は円形を呈していたと考えられる。本遺構の西壁の一部は、岩盤を弧状に加工している。埋土からは18世紀前半頃の陶磁器片が出土しているが、SB01と同時期に機能していたとするのであれば、やや古い資料が入り込んだと考えることが妥当と判断される。検出された範囲では、溝等の掘り込みは確認されなかったが、全体の半分程度しか確認していないため、南側に導水施設などがあった可能性もある。機能としては水溜等が想定される。本遺構には壁面への水漏れ対策は確認されていないが、石銀藤田地区では直径約1mの土坑の内部に桶を置いて水溜としていた例が確認されており、本遺構もそれと同じように使用されていた可能性が考慮される。

#### 【SX01】 (Fig.46)

SX01は、SB01内部の南側で検出された楕円形の遺構で、長径は約1m、短径は約65cmである。中央部は被熱によって赤く変色し、硬化していた。また、断割りによって断面を確認したところ、掘り込みは10cm程度と比較的浅いことが確認できた。埋土にはブロック状の粘質土が含まれており、カマド壁の一部と判断される。遺構の検出状況や、埋土・周囲から製錬にともなうカラミなどが出土しなかったことから、SX01は鉱山活動に伴う製錬炉などではなく、居住用の建物で使用されていたカマド跡と判断できる。

#### 【SX02】 (Fig.46)

SX02は、SX01のすぐ東隣で検出された遺構である。楕円形に被熱し、周囲には炭化物が広がっていたことから、やはりカマド跡と判断でき、SX01と併せて2連カマドとなっていたとみられる。2連カマドは銀山地内、大森地内でも複数個所で検出されており、本事例もその1つといえる。

#### 【SX03】 (Fig.41)

SX03は、SB01の北西部で検出された遺構で、割石を南東に開口するC字形に配している。直径は約85cmで、地面を掘り込んだのちに石を埋め込んでいる。埋土はやや赤変し、炭も含まれていることから、火に関連する遺構と判断できる。ただし、周囲に焼土が広がっていないことや、石に被熱痕が確認できなかったことから、直接火を焚いていた遺構ではなく、炬燵などの暖房施設とみられる。

#### 【SD01】 (Fig.41・47)

SD01はSW01の東側に設けられた溝で、道の側溝とみられる。東側には割石を並べ、SW01との間が溝になっており、幅は内法で約40cmである。粘性の強い面を基盤としており、底面に貼石などはない二面水路である。

#### 【SD02】 (Fig.41・49)

SD02は調査地点の南端部の、SW03の北側で検出された幅約20cmの溝跡である。調査地点の南部から、雨水などが入らないようにするための溝とみられる。

#### 【SD03】 (Fig.41)

SD03は調査区の西端部で、岩盤のすぐ東で検出された。割石を並べ、岩盤との間に水を流す構造になっている。敷地内に西側からの水が入り込まないようにする目的が想定される。水は南側にも流れるようになっており、南端部がSK02付近まで延びることから、SK02への導水としても機能していたとみられる。

#### 【SW01】 (Fig.47)

本地点の東部と北部では敷地を区画するための石垣が検出された。谷の傾斜に合わせて積石の高さを調節しており、検出された範囲での高さは30～70cmであった。SW01には積石の切り替えが2箇所を確認できる。いずれも割石を用いた野面積で、積石の表面は鑿で整えられている。SW01の南部で、調査区南端部から約5.0mまでと、調査区北端部から約1.8mまで、そしてそれらに挟まれる約1.8mの範囲からなる。構築順としては、南部と北部の間を埋めるように中央部の石垣を積んでいることから、中央部の石垣が最も後出すると判断されるが、どの程度の時期幅を持って構築されていたのかは明確にできなかった。なお、南部・北部・中央部のいずれの面においてもSW05とはつながらないため、SW05よりは後出する石垣であ

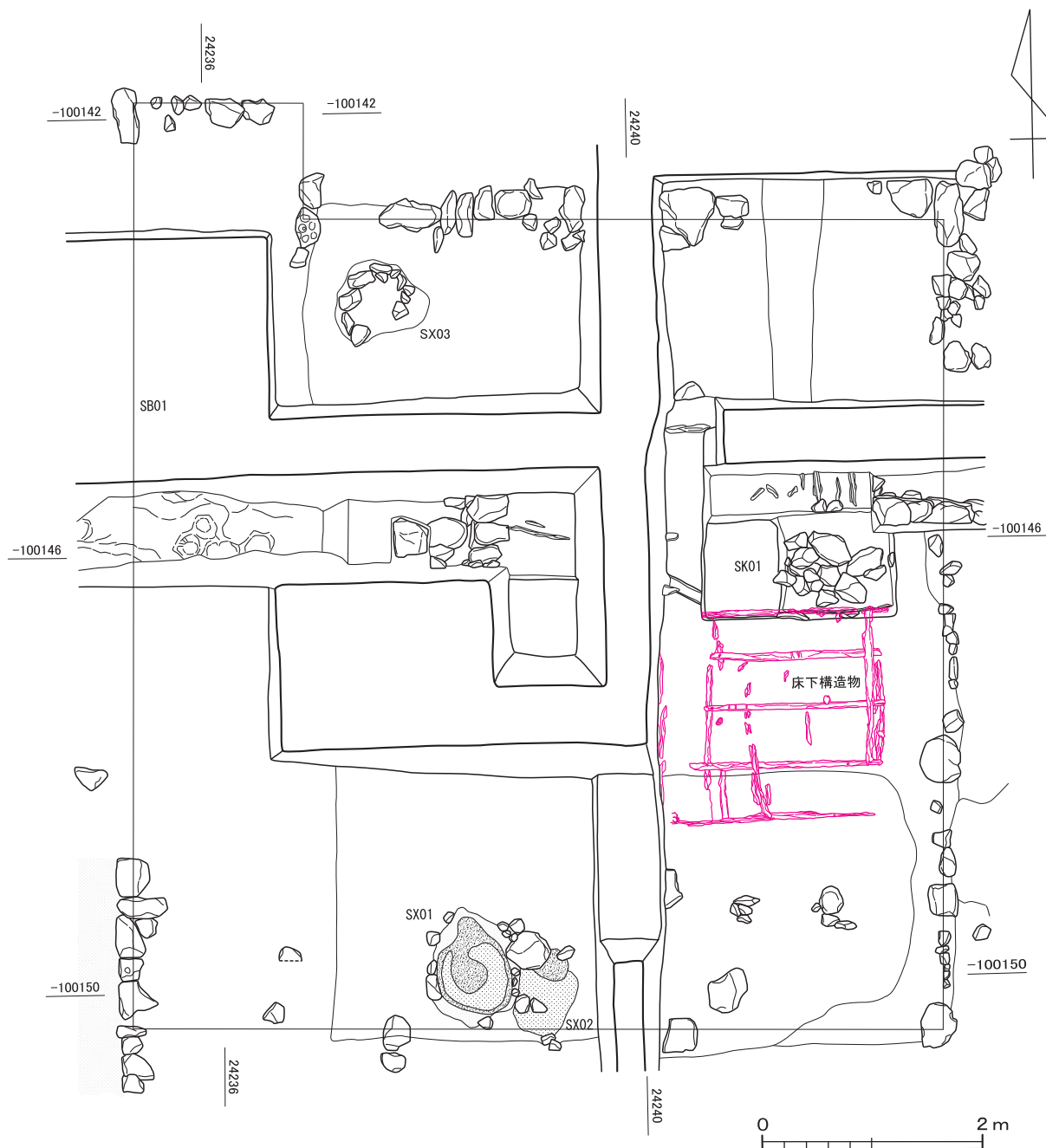


Fig.42 昆布山谷地区第4地点SB01平面図・断面図 (S=1/60)

る。南部の石垣の北端部は、検出された面で確認する限りにおいては算木積みのように見えるが、北面を確認していないため確定的ではない。

【SW02】(Fig.48)

SW02は調査区の北側を東西に延びる石垣である。西端部では高さ1.5mと高いが東半部が崩落している。確認はしていないが、SW01とつながっていた可能性もある。SW01と同じく割石を用いた野面積みの石垣で、最下部には長径が30～50cmの基底石を配している。西部は岩盤を一部掘り込んで石垣を築いている。崩落部の断面観察では裏込に栗石などは用いられ

ていなかった。なお、SW02は明治期以降に排出されたズリによって完全に埋められていた。

【SW03】(Fig.49)

調査区の南部で検出された石垣で、敷地の南端を画すと考えられる。検出された範囲では、高さ約70cmである。積石は30～50cm程度の割石で、基底部には幅約85cmとやや大きい石も使用されている。積み方はランダムで、目地はとっていない。石垣の北側にはSD02がある。

【SW04】(Fig.50)

調査区の南西端部で検出された石垣で、他の石垣

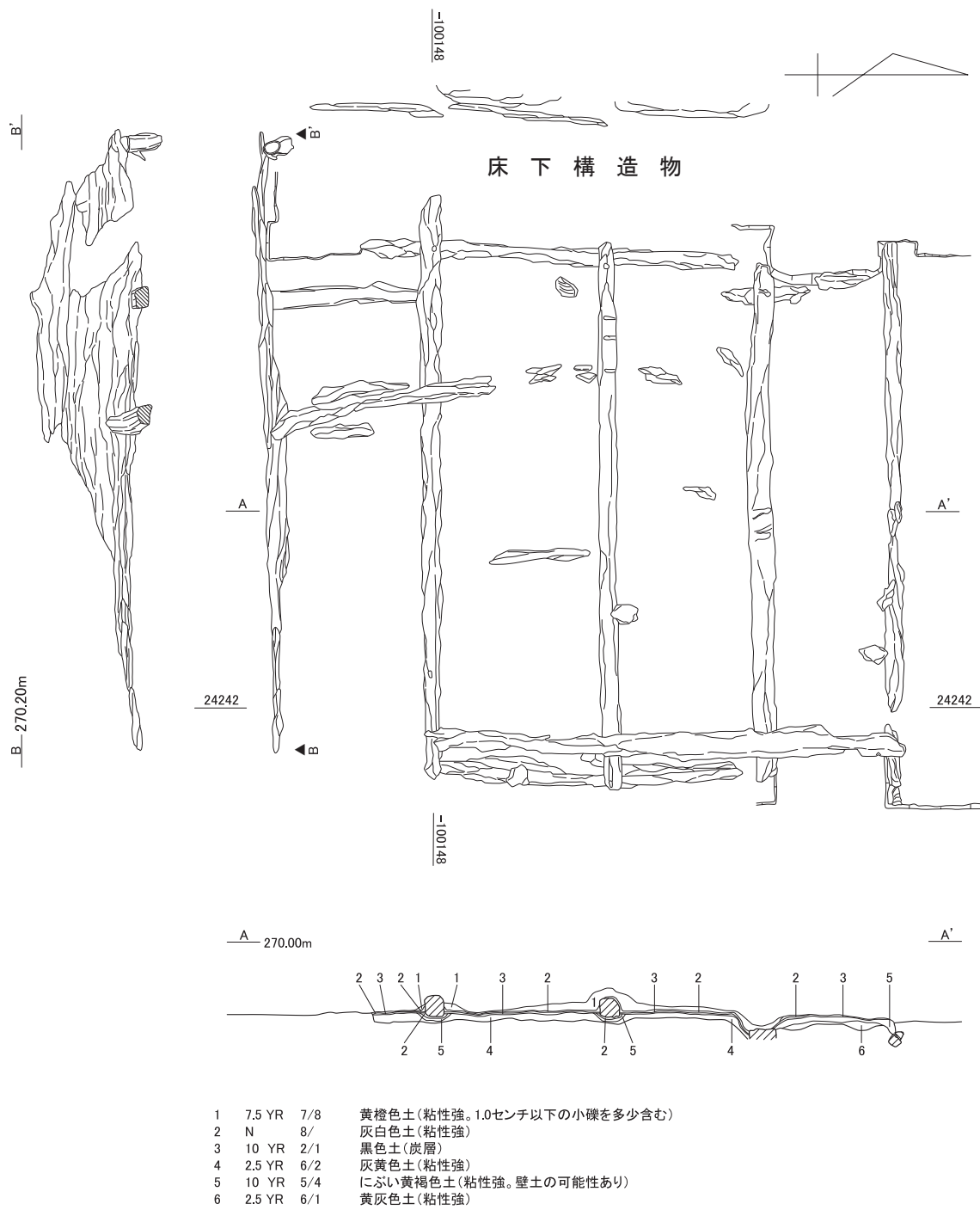


Fig.43 昆布山谷地区第4地点SB01床下遺構 (S=1/40)

と同じく割石を積み上げている。本地点で検出された石垣の中でも積み方が粗く、隙間が多くみられる。最高部の高さは約90cmだが、東に向かって低くなり、SB01建物境の石列あたりでは一段のみとなる

【SW05】(Fig.41)

SW05は下層トレンチの東部で検出された。北側に

面を持ち、東西方向に延びる石垣で、東端部はSW01と接している。ただし、前述したように、SW01とは一連になっておらず、SW01を構築する際には埋められたとみられる。第1遺構面が形成される以前に機能していたとみられ、古い土地境を示す可能性がある。



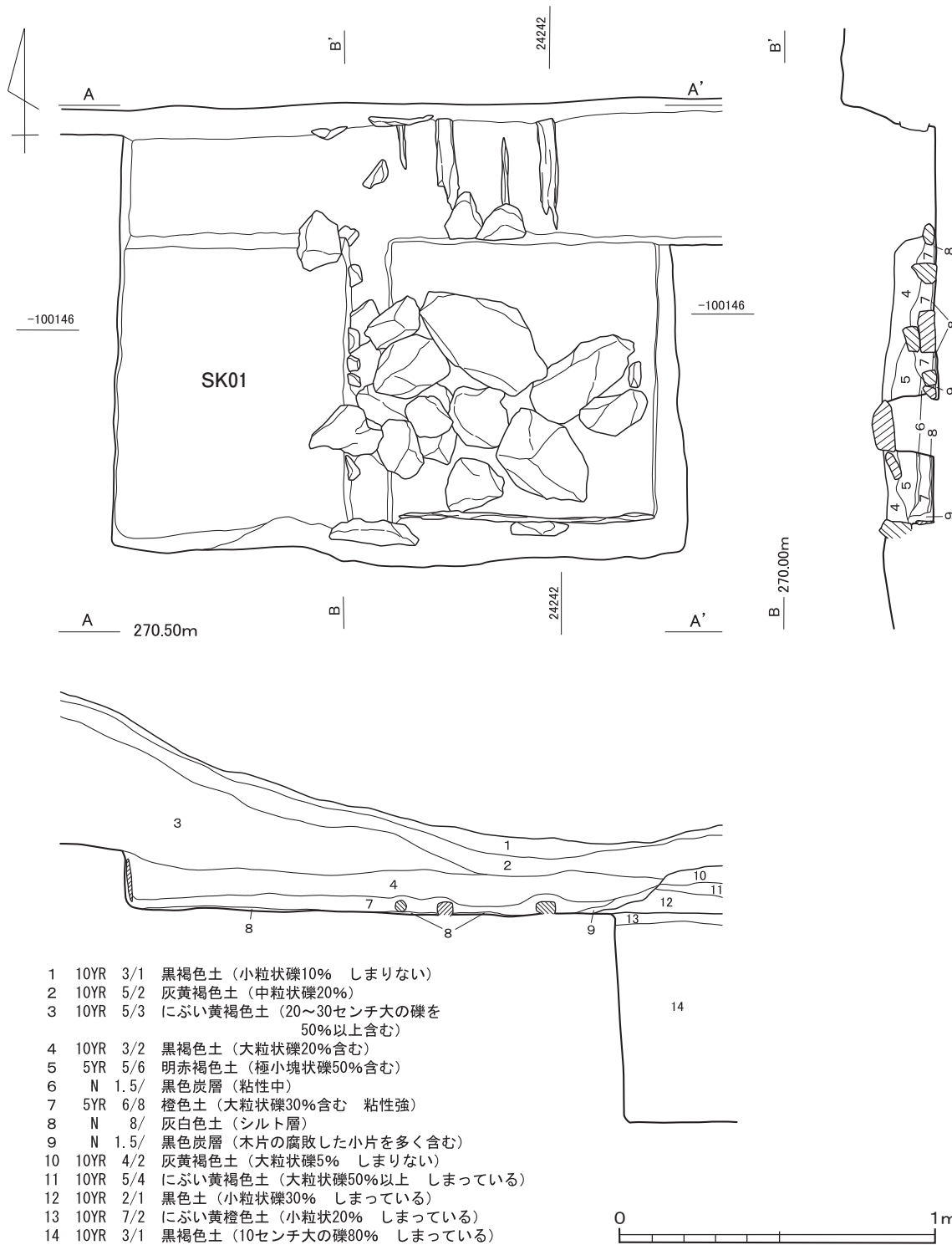


Fig.44 昆布山谷地区第4地点SK01平面図・土層断面図（S = 1 / 20）

【SW06】(Fig.41・52)

下層確認トレンチの西側で検出された西側に面を持ち、南北に延びる石積み遺構で、調査範囲では2段積み上げている状況が確認できた。第1遺構面に先行する遺構で、本地点において複数回の整備が行われていたことを示す資料である。

【SW07】(Fig.51)

SW07は第4地点の東側で、平坦面と道との関連を明らかとするために設定したトレンチの東側で検出された。検出された範囲では、高さ約80cmで、割石を積み上げている。最下部には幅1mほど大きな自然石があり、元々あった石を基底石として利用しているとみられる。

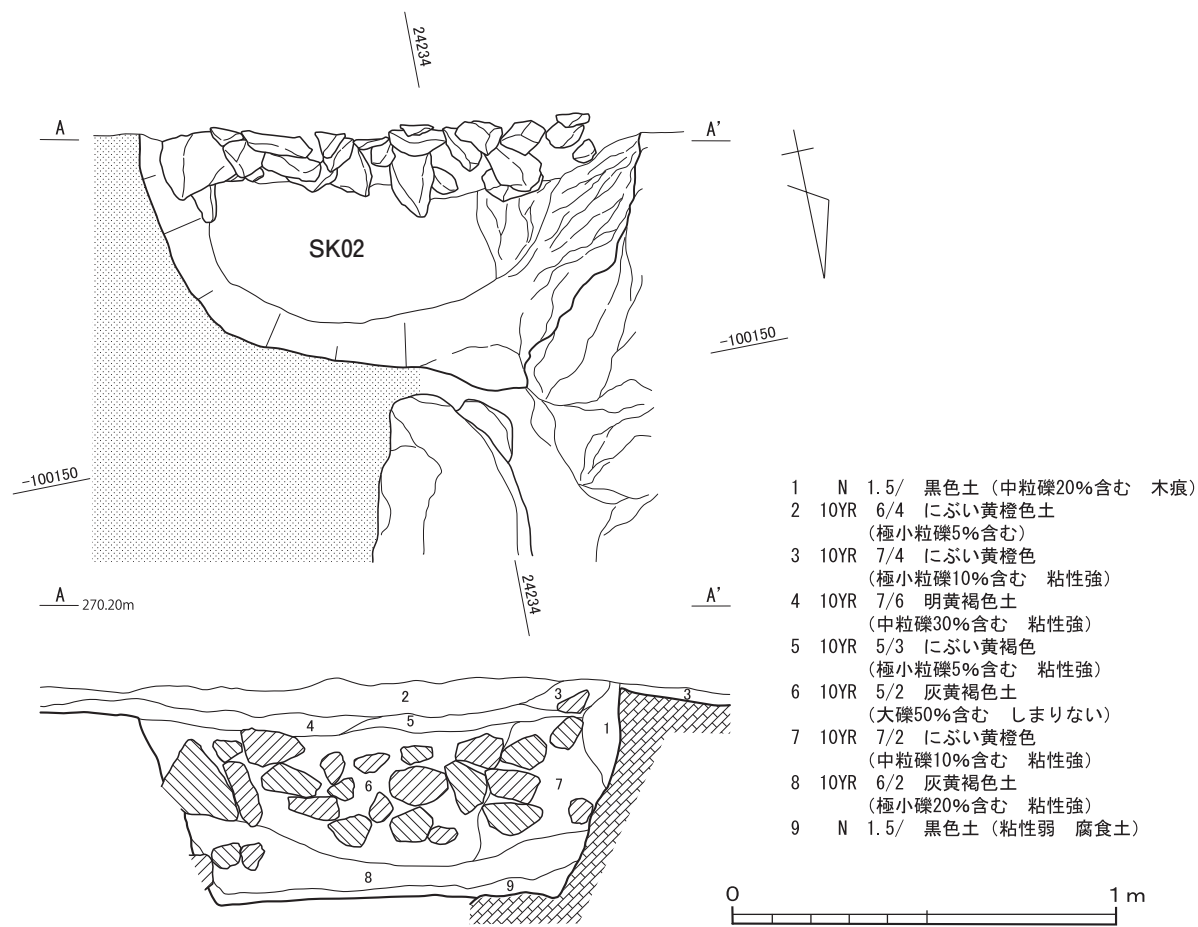


Fig.45 昆布山谷地区第4地点SK02平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

【道跡】 (Fig.51)

SW01の東側には側溝 (SD01) があり、そのさらに西からかつての道跡が検出された。道は、小礫を含む灰黒色土で構築されて、固くしまっている。道幅は石列から測ると約2.4mである。道の東側には、道から90cm程度の幅をあけて石垣が構築されている (SW07)。明治9 (1876) 年の「諸願伺届書」には、銀山地区内の主要な道や川の長さや幅が記されている。これによると、荻峠までの道は幅一間半とあり、調査成果と一致している。

第4項 下層確認トレンチ (Fig.41・52)

第4地点下層の土層堆積状況及び遺構残存状況の確認のため、調査区の中央部で検出された各遺構に影響のない箇所に下層確認トレンチを設定した。

下層確認トレンチでは、西の岩盤側と東の道側では堆積状態が異なっていた。西側では、遺構面の下には小礫交じりでしまりの弱い土や砂などの流土が厚く堆積していた。地表面から1.5mほど掘り下げた標高

269m付近で、底面の一部に岩盤が露出した。この岩盤の高さで、小礫を含んだ硬化面 (52層) が検出された。この硬化面の下は礫を中心とする堆積層 (53・54層) であり、これらは硬化面を構築するために埋められた可能性がある。出土遺物は少なかったが、46層で青花 (266)、47層で初期伊万里 (268) など、古い時期の遺物がいくつか出土した。しかし、第52層より下位からは17世紀後半の有田焼 (270) が出土していることから、いずれも造成の際に入り込んだとみられる。

一方東側では、表土直下で確認されていた黒色土と、しまりの弱い褐色土が堆積していた。さらに下層では、地表から約1m下位の標高約269mで硬化面が検出された。この硬化面は、西側で検出されたものと同程度の高さにあたり、一連のものとして判断できる。

第5項 出土遺物 (Fig.53～56, Tab.12～15)

出土遺物としては、陶磁器類、木製品、鉄製品、レンガなどが出土している。陶磁器には石見銀山編年の

2～7期の資料が含まれているなど、時期幅が広い。しかし、下層確認トレンチの下層からは17世紀後半の陶磁器が出土しているため、18・19世紀代の新しい時期の資料を除きそれよりも上位で出土している資料の多くは遺構や堆積層の年代を反映していないと判断できる。

以下では、本地点から出土した遺物について、個別に記述する。

164～177は表面採集による。164は広東碗で、外面には植物を中心とする風景の文様、内面の見込みには植物が描かれている。165は丸碗で、器壁全体に貫入が入っている。見込みに簡略化された手描きの五弁花文がある。166は碗で、外面に丸文がある。167は瀬戸の新製焼で、小碗である。168は稜花皿で、二次被熱を受けている。169は端反碗の蓋で、外面には松などの植物の文様、内面には簡略化された宝物文がある。170～172は広東碗の蓋で、170には内外ともに蓮の葉の文様がある。171は外面に一部ではあるが植物の文様、内面に四方襷、172には外面に丸文と蓮弁、内面に四方襷がある。173は肥前陶器の呉器手碗であ

る。174・175・177は石見で、それぞれ甕の蓋と土瓶、鉢である。175には外面に文字があり、一部のみであるため判読が難しいが、「鉾山」とみられる。176は肥前陶器の皿で、胎土目がある。

178は端反碗である。179は肥前陶器の呉器手碗である。180・181は在地系陶器だが、産地までは言及できない。180は土瓶、181は鍋で外面にススが付着している。182・183は肥前陶器で、182は胎土目のある皿、183は呉器手碗である。184は陶器の鉢で、須佐の可能性があるが確実ではない。185は湯呑で、型紙摺りでコバルトの発色が強い。186は在地系陶器の鍋で、底部にススが付着する。187は石見焼の湯呑である。188は碗で、高台を欠損するが広東碗の可能性もある。189は漳州窯系の青花皿である。191は花入れや瓶の脚とみられる。192は碗で、外面には植物の文様がある。193は広東碗の蓋である。194は仏飯器である。197は備前焼の壺で、へら書きの沈線が縦2条、横1条の計3条認められる。釜記号などの可能性がある。198は肥前陶器の灯火具で、高台の上に丸い皿と、その中に切り込みを側面に入れた芯立てを持つ

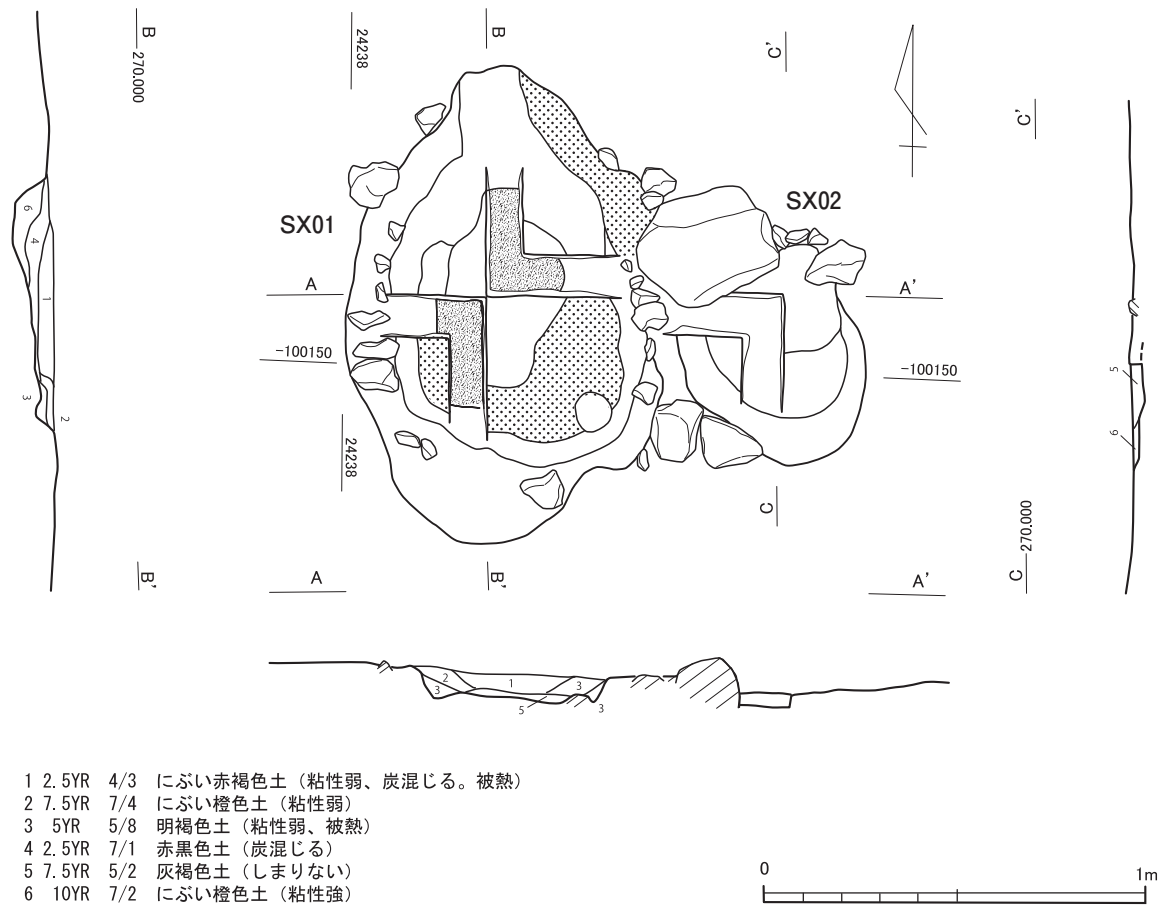


Fig.46 昆布山谷地区第4地点SX01・SX02平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

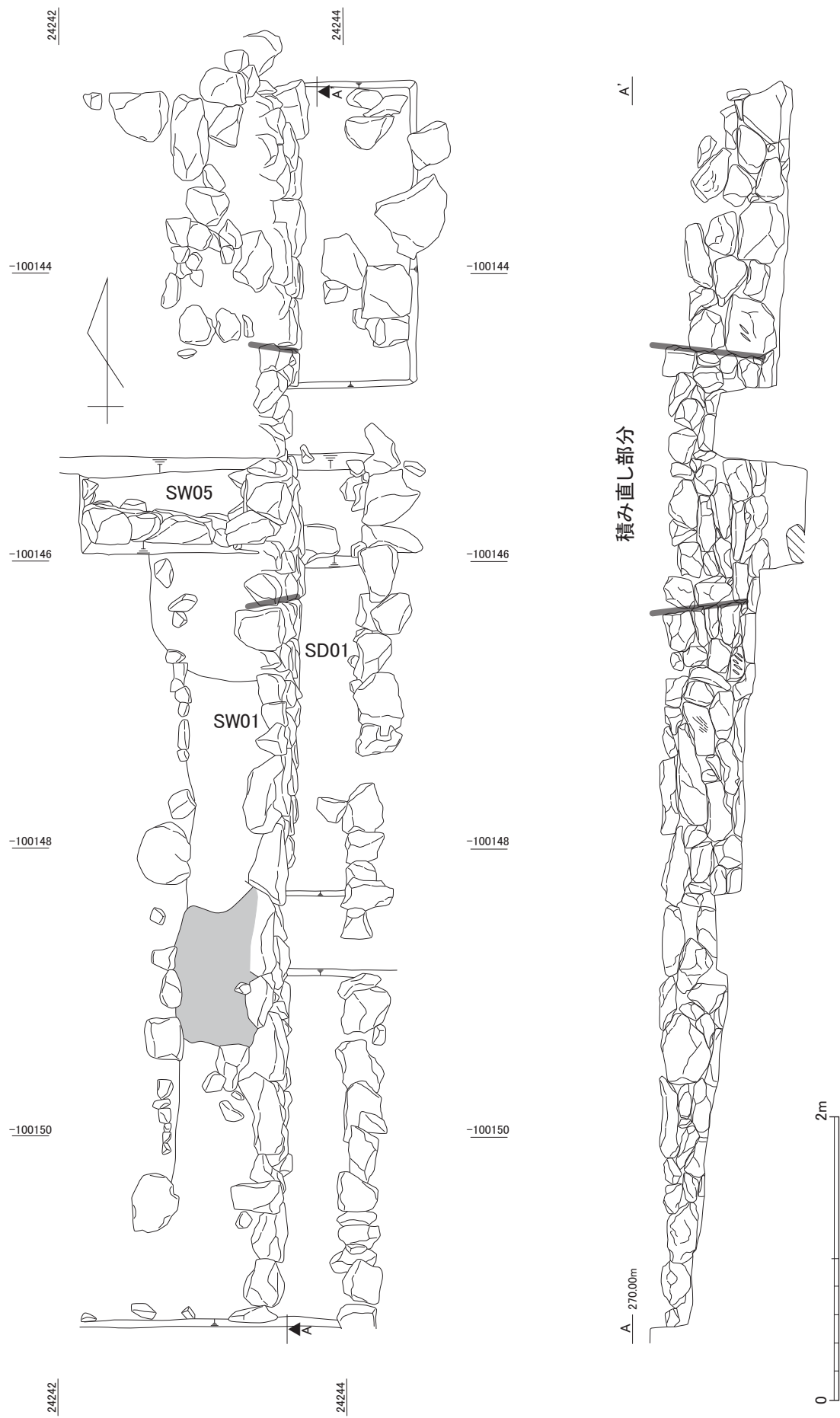


Fig.47 昆布山谷地区第4地点SW01・SD01平面図・立面図 (S=1/40)

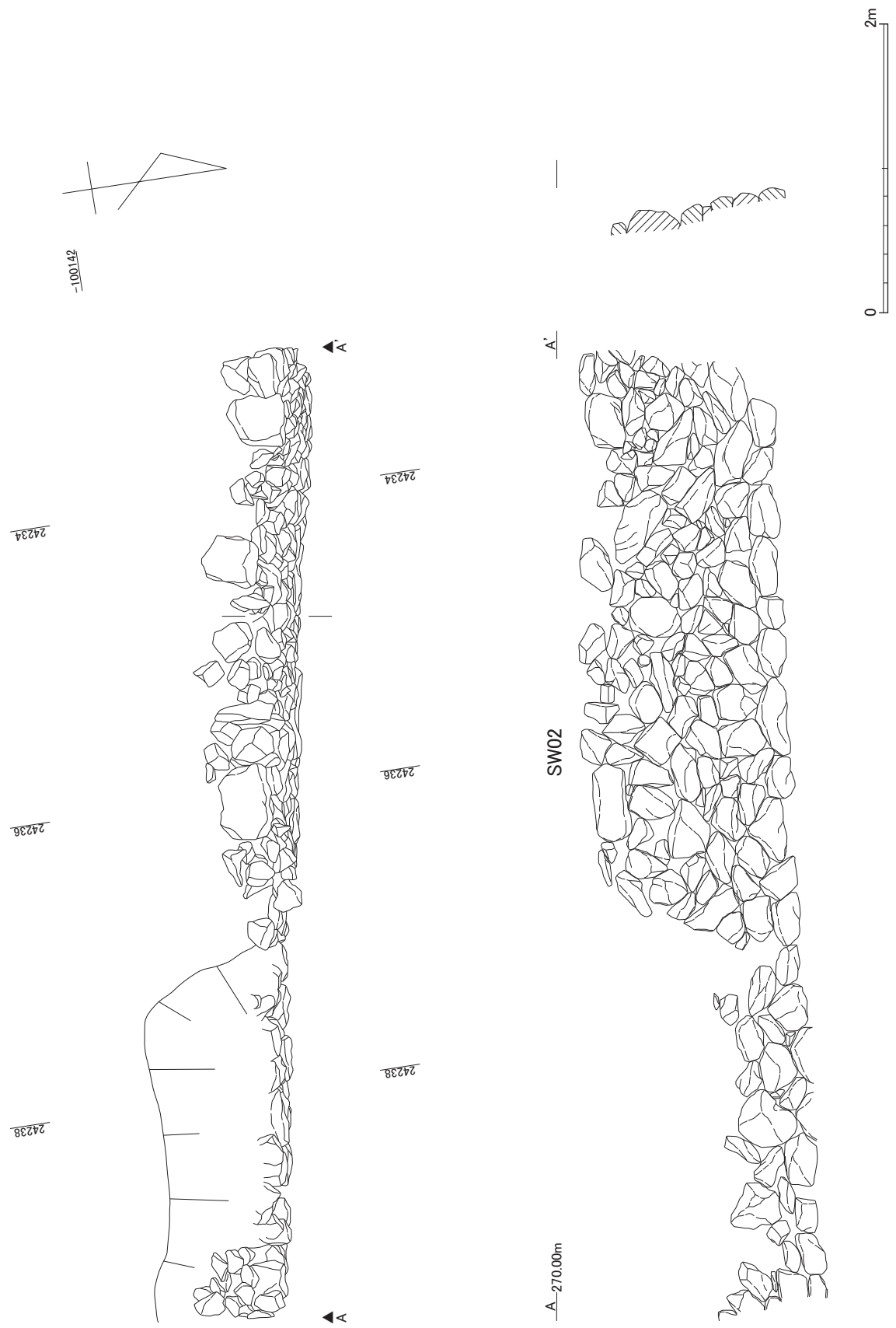


Fig.48 昆布山谷地区第4地点SW02平面図・立面図 (S = 1 / 40)

つ。高台の中央部には釘穴がある。199 は石見焼の鉢である。200 は肥前陶器の鉢である。201 は口縁部付近にかけ流しをした陶器の碗である。202 は香炉である。203 は肥前陶器の鉢で、胎土目がある。204 は有田産の猪口で、外面全体に唐草文様がある。205 は古手の広東碗で、有田産の可能性が高い。外面には梅と、波線の文様が交互に描かれる。焼継痕が認められる。206 は端反碗の蓋で、外面には風景が描かれる。207 は肥前陶器で、呉器手碗である。208 は石見焼の鉢である。209 は肥前陶器の皿である。210 は陶器の皿で、底部には糸切の痕跡がある。211 は石見焼の土瓶で、外面にはススが付着している。213 は萩焼の箱鉢とみられる。214・215 は鉢で、214 は須佐、215 は石見焼の可能性が高い。216 は土師質土器の皿で、内外ともにススが付着していることから、灯明皿として使用されていたとみられる。217 は石見焼の瓶とみられる。218 は須佐の挿鉢である。219 は基石である。

220 は碗で、外面に昆虫文がある。224 は雪平鍋で、底部にススが付着している。225 は須佐焼の挿鉢である。226 は石見焼で、壺の蓋である。229 は端反碗である。230 は網目文の碗である。232 は陶胎染付の碗である。233 は外青磁の碗で、内面は圈線のみである。234 は小丸型の小碗である。235 は陶器の碗で、高台の削り方から萩の可能性が高い。236 は肥前の波佐見系の中皿で、内面には扇の文様があるほか、見込みにコンヤク印判による五弁花文がある。237 は肥前陶器の皿で、胎土目がある。断面にススが付着している。238 は瀬戸・美濃の灰釉皿である。239 は土師質土器の皿で、底部に糸切痕がある。240 は外青磁の碗で、

内面に四方襷がある。245 は肥前陶器の挿鉢で、口縁部付近にのみ釉がかかっている。246・248 は在地系の鉢である、石見焼もしくは中国地方内とみられるが断定はできない。249 は銚子形の瓶で、丹波産の可能性が高い。

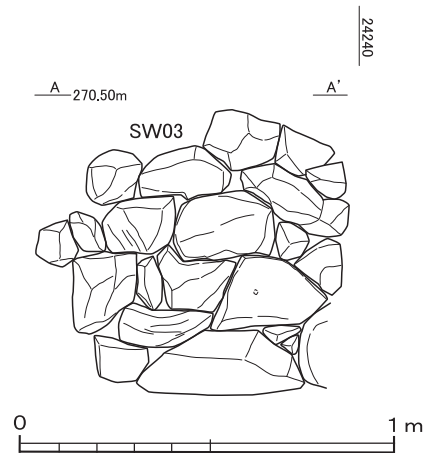
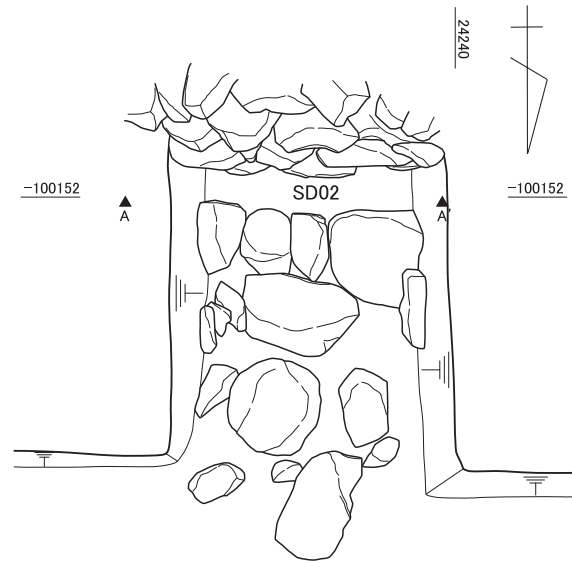


Fig.49 昆布山谷地区第4地点SW03  
平面図・立面図 (S = 1 / 20)

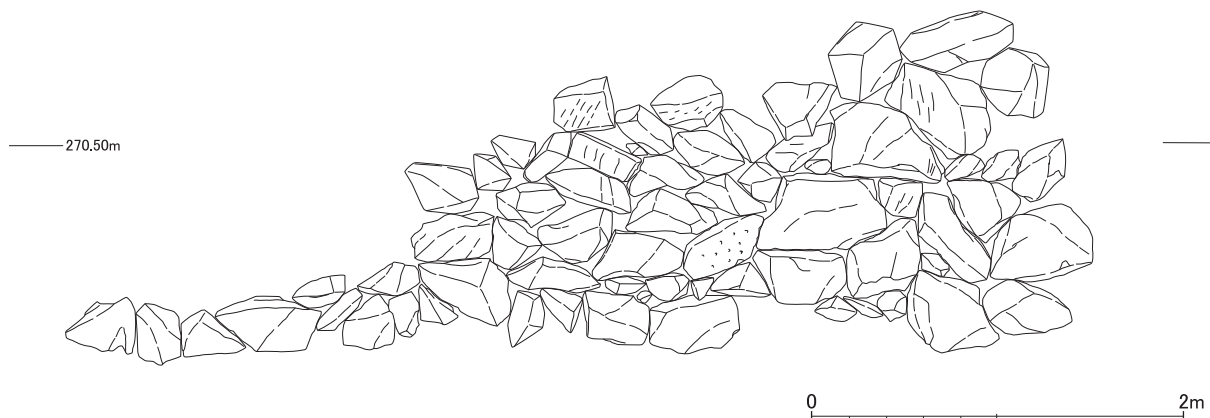


Fig.50 昆布山谷地区第4地点SW04平面図・立面図 (S = 1 / 20)

---

251 は丸碗で、外面のみ文様がある。252 は陶胎染付の碗である。258 は茶飲み用の小碗で、見込みには昆虫状の文様がある。259 は広東碗で、見込みに「壽」が書かれている。261 は広東碗の蓋である。266 は漳州窯系の青花で、碁笥底の皿である。268 は初期伊万里の碗である。270 は有田産で、皿とみられる。

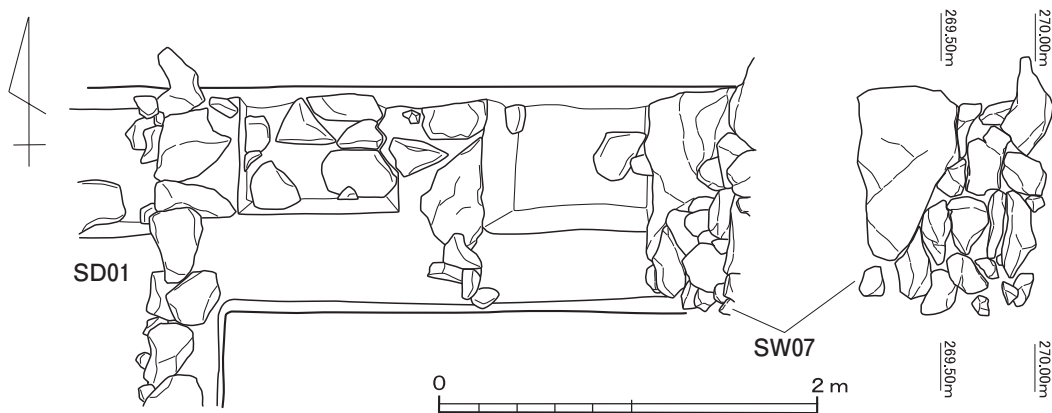
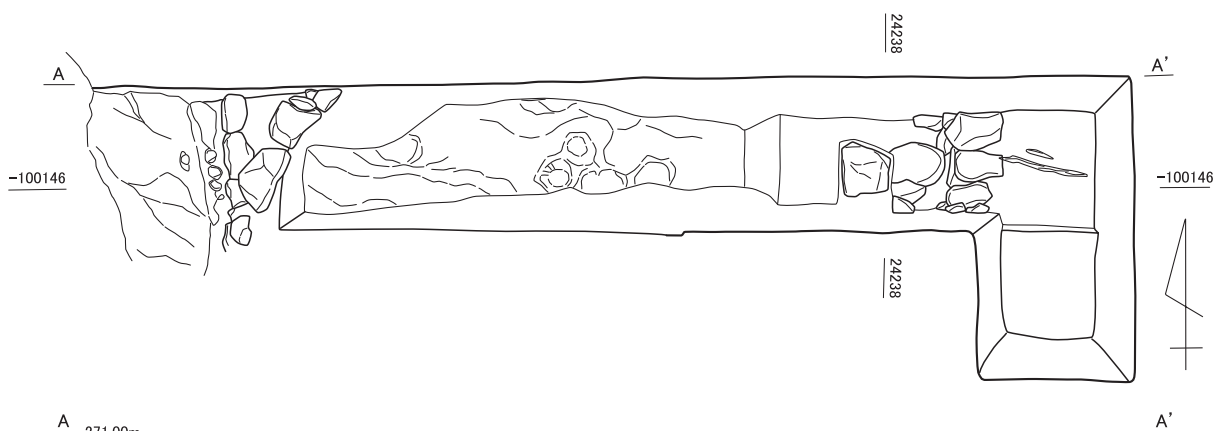


Fig.51 昆布山谷地区第4地点道トレンチ平面図・立面図 (S = 1 / 40)



- |  |  |
|--|--|
| 1 10YR 3/1 黒褐色土 (小粒状礫10% しまりない)          | 16 7.5YR 2/2 黒褐色土 (小粒状80% しまりない)       |
| 2 2.5YR 4/4 にぶい赤褐色土 (極小粒5%)              | 17 10YR 6/2 灰黄褐色土 (極小粒状10% しまっている)     |
| 3 10YR 5/2 灰黄褐色土 (中粒状礫20%)               | 20 7.5YR 4/2 灰褐色土 (中粒状礫3% しまりない)       |
| 4 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 (20~30センチ大の礫を50%以上含む) | 32 10YR 6/2 灰黄褐色土 (中粒状礫30% しまりない)      |
| 5 7.5YR 5/6 明褐色土 (10センチ程度の礫80%)          | 34 2.5YR 6/2 灰黄色土 (中粒状礫25% しまっている)     |
| 6 2.5YR 4/4 にぶい赤褐色土 (極小粒5%)              | 35 10YR 4/1 褐灰色土 (大粒状礫50% しまりない)       |
| 7 5YR 5/6 明赤褐色土 (小粒状5% しまっている)           | 44 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 (大粒状20% 粘性弱)       |
| 8 10YR 7/2 にぶい黄橙色土 (中粒状礫10% 粘性強)         | 45 10YR 5/2 灰黄褐色土 (大粒状礫30% しまりない)      |
| 9 5YR 5/6 明赤褐色土 (中粒状礫5% しまっている)          | 46 10YR 4/2 灰黄褐色土 (5センチ大の礫50% しまりない)   |
| 10 10YR 7/2 にぶい黄褐色土 (中粒状礫10% 粘性中)        | 47 10YR 3/1 黒褐色土 (10センチ大の礫80% しまっている)  |
| 11 2.5YR 5/8 明赤褐色土 (中粒状礫30% 固くしまる)       | 48 10YR 3/3 暗褐色土 (5センチ大の礫30% しまりない)    |
| 12 10YR 7/1 灰白色土 (極小塊状礫20% 粘性強)          | 52 10YR 6/2 灰黄褐色土 (大粒状礫20% 粘性強)        |
| 13 7.5YR 7/2 明褐灰色土 (極小粒5% 粘性強)           | 53 2.5YR 3/1 黒褐色土 (10センチ大の礫50% しまっている) |
| 14 10YR 6/2 灰黄褐色土 (中粒状礫20% しまりない)        | 54 2.5YR 3/1 黒褐色土 (2~3センチの礫30% しまりない)  |

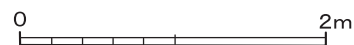


Fig.52 昆布山谷地区第4地点下層確認トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 50)



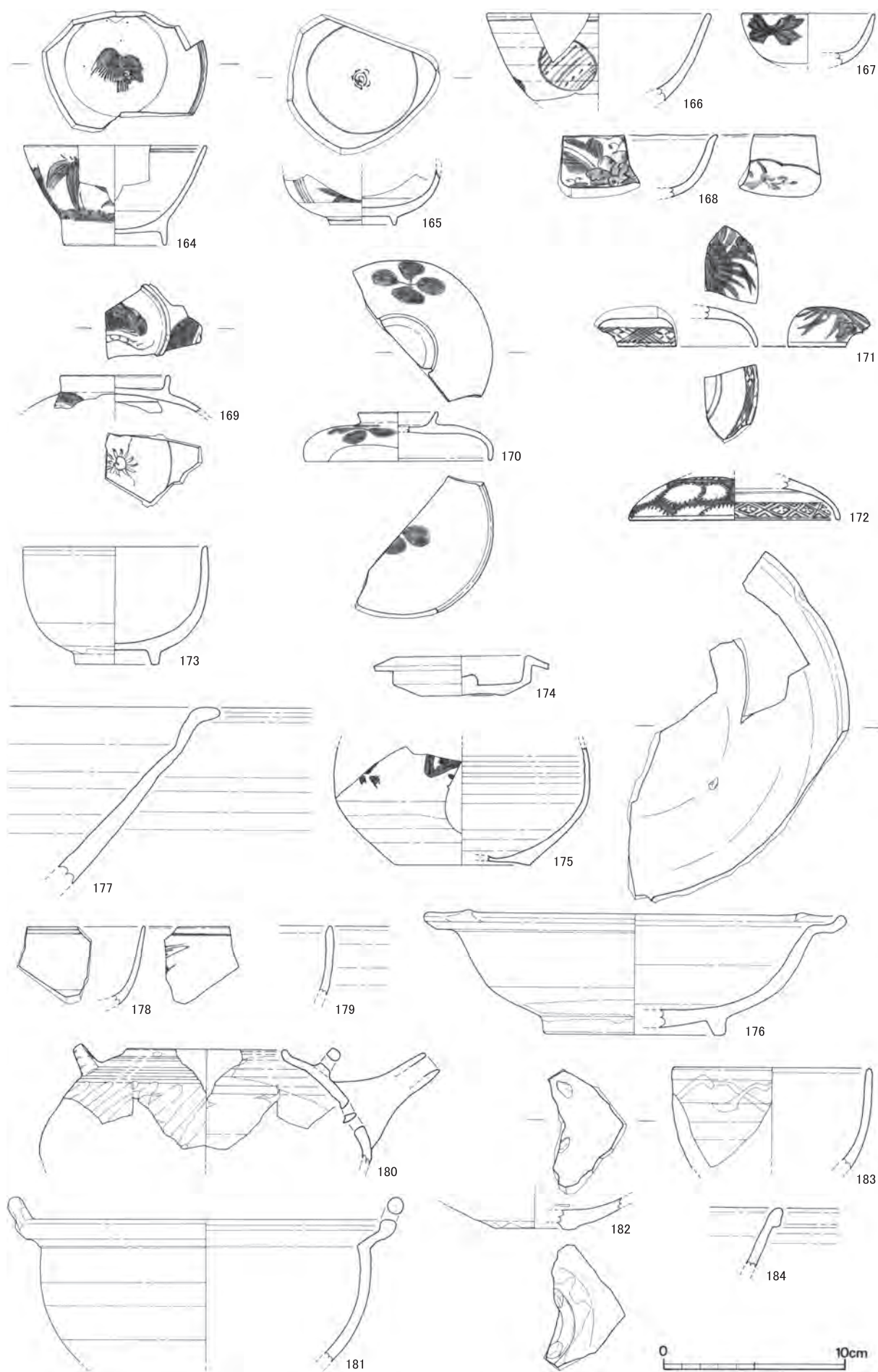


Fig.53 昆布山谷地区第4地点出土遺物実測図Ⅰ (S=1/3)

Tab. 9 昆布山谷地区4地点出土遺物観察表 I

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
164	上段表採	肥前磁器	碗	(10.0)	5.5	5.5	透明釉		
165	上段表採	肥前磁器	碗		(3.1)	3.5	透明釉		
166	西-27 X 3 H 2-54 上段表採	肥前磁器	碗	(12.1)	(4.8)		透明釉		
167	上段表採	瀬戸?	小碗	(7.2)	(2.8)		透明釉		
168	上段表採	肥前磁器	皿		(3.5)		透明釉	稜花	
169	上段表採	肥前磁器	蓋		(2.1)	つまみ径 (5.9)	透明釉		
170	上段表採	肥前磁器	蓋	(10.1)	2.7	つまみ径 (4.2)	透明釉		
171	上段表採	肥前磁器	蓋		(2.2)		透明釉	四方禪文	
172	上段表採	肥前磁器	蓋	(11.5)	(2.6)		透明釉	四方禪文	
173	上段表採	肥前陶器	碗	10.1	6.6	4.5	透明釉		
174	上段表採	石見	蓋	6.9	2.2	4.5	長石釉		
175	上段表採	石見	土瓶		(6.5)	(9.4)	長石釉		
176	上段表採	肥前陶器	皿	(22.8)	6.7	(10.0)	灰釉	胎土目	
177	上段表採	石見	鉢		(9.7)		長石釉		
178	1層	肥前磁器	碗		(4.3)		透明釉		
179	1層	萩か肥前	碗		(3.8)		灰釉		
180	1・11・29層	在地系陶器	土瓶	(8.5)	(6.0)		褐釉		
181	1層	在地系陶器	鍋	(20.8)	(9.1)		褐釉		双付着
182	排土	肥前陶器	皿		(1.8)	(4.4)	灰釉	胎土目	
183	排土	肥前陶器	碗	(10.8)	(5.5)		透明釉		
184	排土	須佐?	鉢		(3.3)		褐釉		

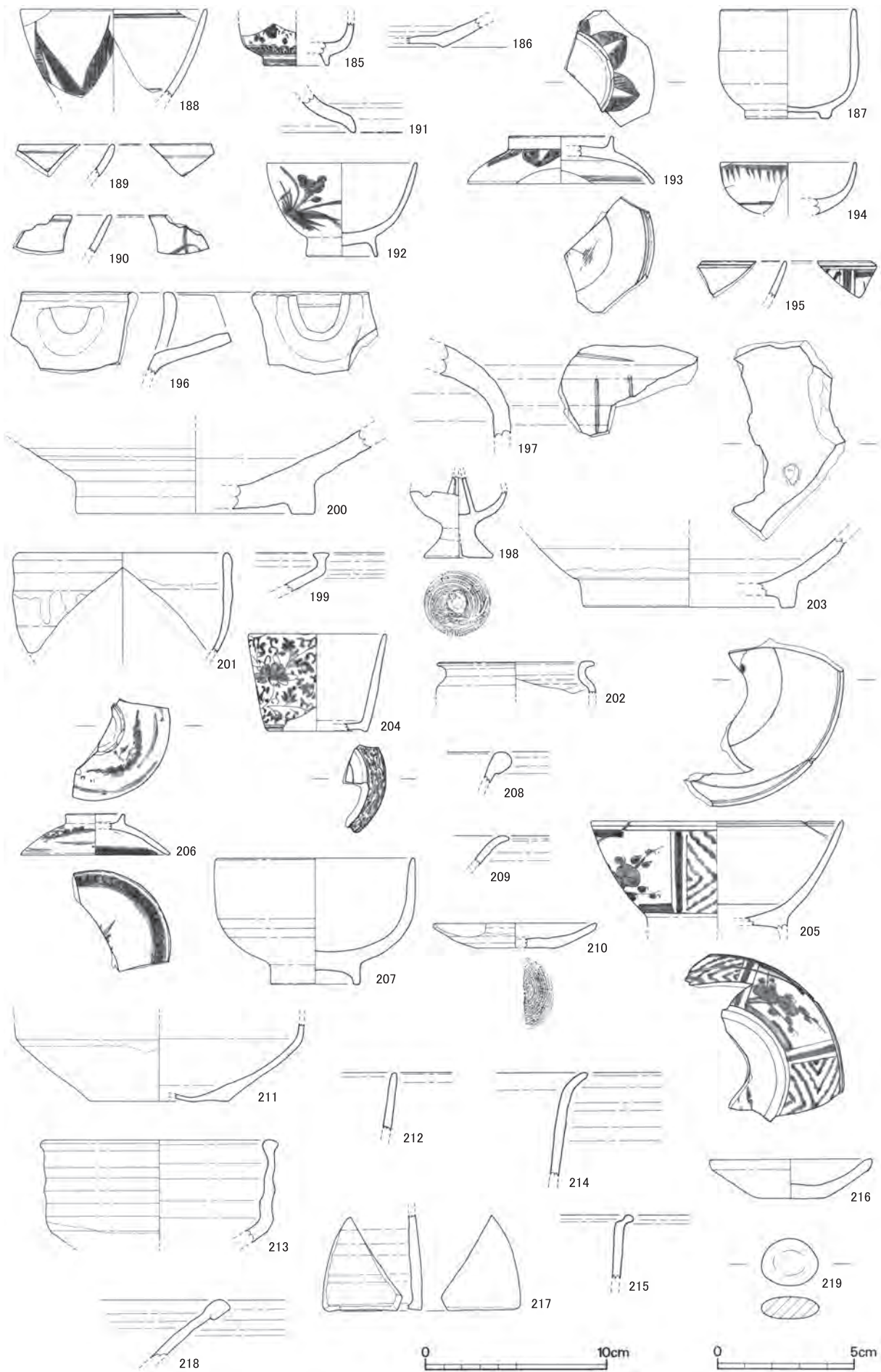


Fig.54 昆布山谷地区第4地点出土遺物実測図Ⅱ (S=1/2, 1/3)

Tab.10 昆布山谷地区4地点出土遺物観察表II

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整文様	備考
				口径	器高	底径			
185	1層	肥前磁器	湯呑		(2.4)	(3.2)	透明釉		
186	1層	在地系陶器	鍋		(1.6)		褐釉		双付着
187	5層	石見	湯呑	(7.4)	6.0	4.5	透明釉		
188	27層	肥前磁器	碗	(10.1)	(4.9)		透明釉		
189	27層	青花	皿		(1.8)		透明釉		
190	29層	肥前磁器	碗		(2.1)		透明釉		
191	3層	肥前磁器	脚		(2.1)		透明釉		
192	28層 29層	肥前磁器	碗	(8.1)	5.7	3.8	透明釉		
193	3層	肥前磁器	蓋	(10.0)	(2.6)	つまみ径 (5.6)	透明釉		
194	11層	肥前磁器	仏飯器	(7.3)	(2.9)		透明釉		
195	30層	肥前磁器	碗		(2.0)		透明釉		
196	29層	石見系陶器?	片口鉢		(4.5)		灰釉		
197	27層	備前	壺		(5.1)		赤褐色		窯記号?
198	28層	肥前陶器	灯火具		(4.5)	3.8	鉄釉		
199	11層	石見	鉢		(2.2)		灰釉		
200	20層	肥前陶器	鉢		(4.6)	(13.0)	藁灰釉		
201	32層	不明陶器	碗	(11.4)	(5.5)		灰釉 藁灰釉	かけ流し	
202	1層 12層	肥前磁器	香炉	(8.4)	(1.8)		青磁釉		
203	表採 17層	肥前陶器	鉢		(2.9)	(11.5)	?	胎土目	
204	12層	肥前磁器	猪口	(6.5)	5.3	(5.3)	透明釉		
205	20層 27層	肥前磁器	碗	(13.8)	(5.9)		透明釉	焼継 上絵付	
206	12層	肥前磁器	蓋	(8.0)	2.3	つまみ径 (3.2)	透明釉		
207	12層	肥前陶器	碗	(10.8)	7.0	4.8	透明釉		
208	12層	石見	鉢		(1.7)		長石釉		
209	13層	肥前陶器	皿		(1.6)		灰釉		
210	12層	在地系陶器	皿	(8.9)	1.4	(4.4)	褐釉		
211	11層 12層	石見	土瓶		(5.3)	(7.6)	(外)長石釉		双付着
212	12層	萩?	碗		(3.2)		褐釉 長石釉		
213	12層	萩	鉢	(13.2)	(5.8)		藁灰釉		
214	12層	須佐?	鉢		(5.7)		藁灰釉		
215	12層	石見?	鉢		(3.5)		長石釉		
216	17層	土師質土器	皿	8.8	2.2	3.8	褐灰色		
217	2・12・29層	石見?	瓶		(5.2)		?		
218	13層	須佐	すり鉢		(3.2)		サビ釉		
219	13層	石製品	基石	現存長 1.7	現存幅 2.1	現存厚 0.8	灰白色	3.7 g	

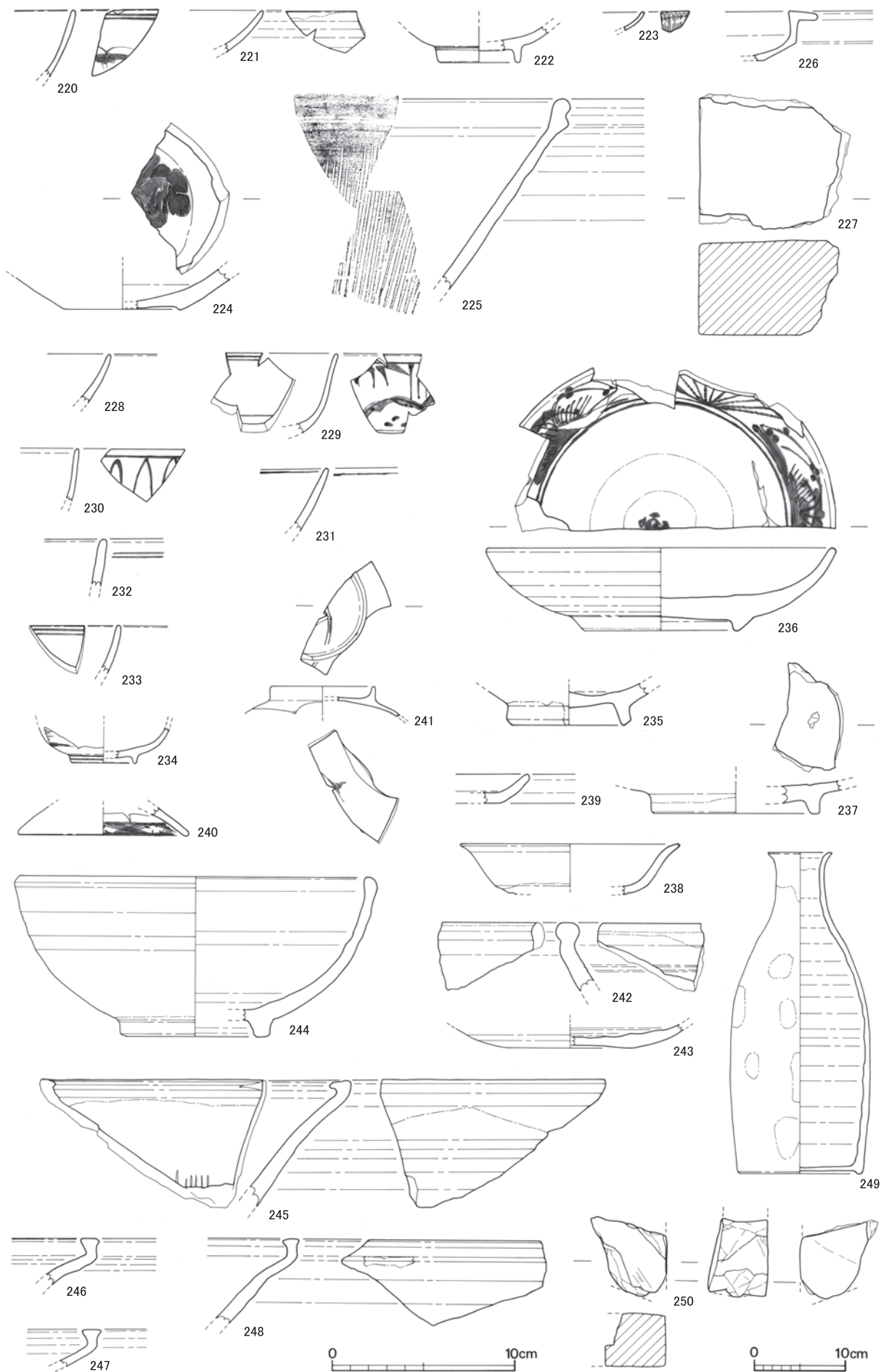


Fig.55 昆布山谷地区第4地点出土遺物実測図Ⅲ (S=1/3, 1/6)

Tab.11 昆布山谷地区4地点出土遺物観察表Ⅲ

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
220	29層	肥前磁器	碗		(3.6)		透明釉		
221	8層	在地系陶器	皿		(2.3)		(内)銅緑釉 (外)長石釉		
222	34層	肥前磁器	碗		(2.0)	(4.4)	透明釉		
223	17層	肥前磁器	紅皿		(1.1)		透明釉		
224	18層	在地系陶器	雪平鍋		(2.3)	(6.4)	褐釉 長石釉	双付着	
225	8層	須佐	すり鉢		(10.5)		サビ釉		
226	11層	石見	蓋		(2.7)		透明釉		
227	S D 01 11層	土製品	レンガ	現存長 7.5	現存幅 8.2	現存厚 5.2	明褐色	355 g	
228	20層	青花	碗		(2.7)		透明釉		
229	20層 29層	肥前磁器	碗		(4.4)		透明釉		
230	34層	肥前磁器	碗		(2.9)		透明釉		
231	34層	肥前磁器	碗		(3.4)		透明釉		
232	20層	肥前磁器	碗		(2.6)		透明釉		
233	20層	肥前磁器	碗		(2.7)		(内)透明釉 (外)青磁釉	外青磁	
234	20層	肥前磁器	小碗		(2.0)	(3.4)	透明釉		
235	20層	萩?	碗		(2.3)	(6.2)	藁灰釉		
236	20・27・28・29層	肥前磁器	皿	(18.7)	4.6	(8.2)	透明釉	蛇の目釉 剥ぎ	
237	20層	肥前陶器	皿		(1.9)	(9.0)	灰釉	胎土目	
238	20層	瀬戸・美濃	皿	(12.0)	(2.8)		透明釉		
239	20層	土師質土器	皿		(1.6)		浅黄橙色		
240	20層	肥前磁器	蓋	(9.0)	(1.6)		透明釉 青磁釉	四方禪文	
241	表採 20層	肥前磁器	蓋		(1.5)	つまみ径 (5.5)	透明釉		
242	20層	不明陶器	壺		(3.8)		褐釉		
243	20層	石見?	鍋		(1.3)	(6.8)	褐釉	双付着	
244	12・17・20層	石見	鉢	(19.2)	(8.8)	(8.2)	灰釉		
245	20層 21層	肥前陶器	すり鉢		(7.0)		鉄釉		
246	20層	石見?	鉢		(2.6)		長石釉		
247	12層	石見	鉢		(2.0)		長石釉		
248	20層	石見?	碗か鉢		(4.7)		灰釉		
249	下層確認 T32層 12・20・32層	丹波?	瓶	(3.4)	17.6	(6.8)	褐釉 灰釉		
250	20層	石製品	砥石	現存長 8.7	現存幅 8.4	現存厚 6.5	灰白色	495 g	

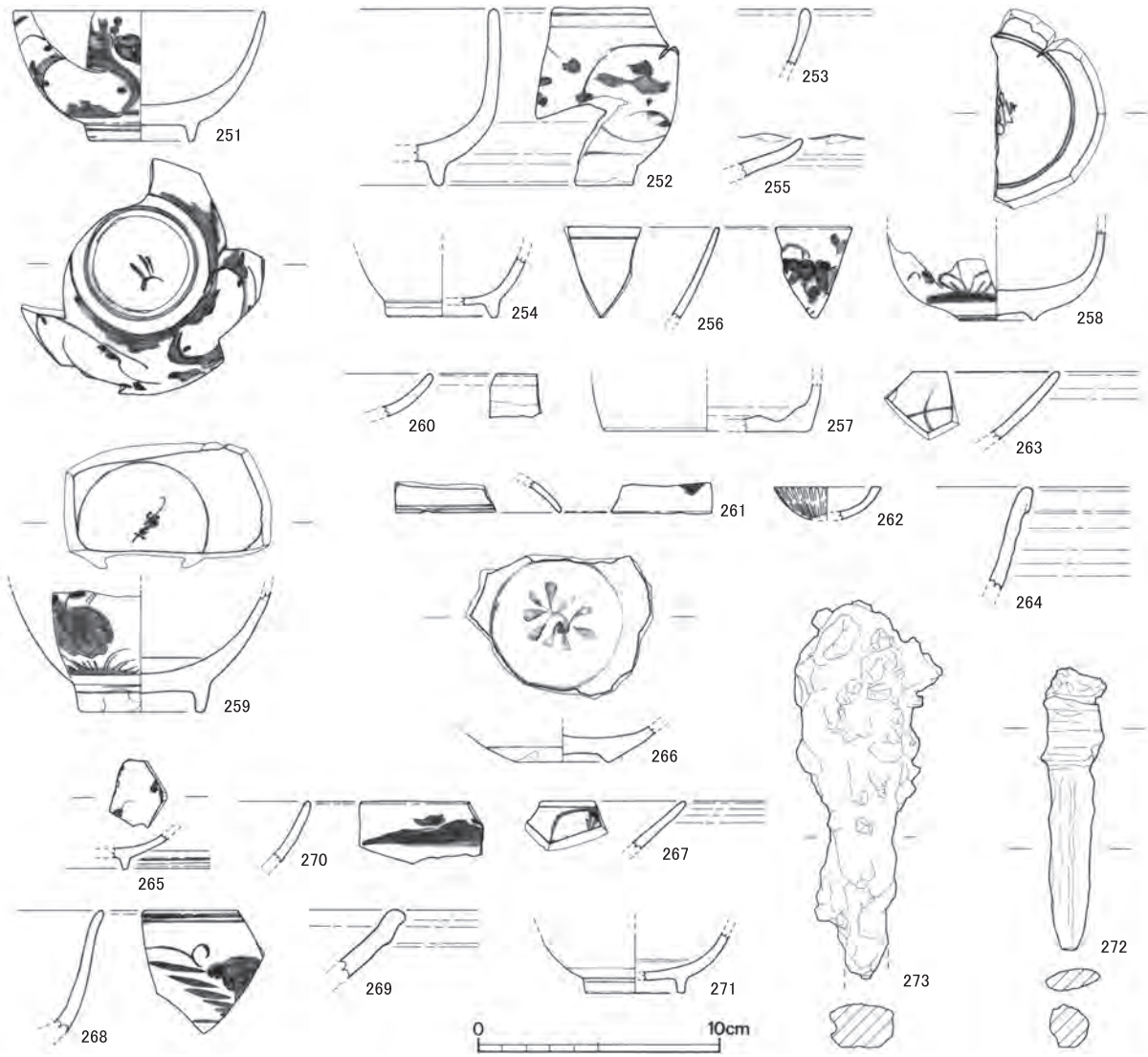


Fig.56 昆布山谷地区第4地点出土遺物実測図Ⅳ (S = 1 / 3)

Tab.12 昆布山谷地区4地点出土遺物観察表IV

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
251	S K 02 3層	肥前磁器	碗	(10.3)	5.4	4.1	透明釉		
252	S K 02 6層 12層	肥前磁器	碗		(7.4)		透明釉	陶胎染付	
253	S K 01 31層	不明磁器	碗		(2.4)		透明釉		
254	S D 01 51層	肥前磁器	瓶		(2.6)	(4.4)	(外)透明釉		
255	S D 01 51層	肥前陶器	皿		(1.3)		透明釉	なぶり口	
256	21層	肥前磁器	碗		(3.8)		透明釉		
257	21層	不明陶器	瓶		(2.0)	(8.4)	褐釉		
258	11層 29層	肥前磁器	小碗		(3.7)	(4.0)	透明釉		
259	33層	肥前磁器	碗		(5.0)	4.8	透明釉		
260	33層	肥前陶器	皿		(1.8)		灰釉		
261	33層	肥前磁器	蓋		(1.3)		透明釉		
262	33層	肥前磁器	紅皿	(4.4)	(1.4)		透明釉		
263	下層確認 T34層	肥前磁器	皿		(2.8)		透明釉		
264	34層	須佐?	鉢		(4.3)		灰釉		
265	下層確認 T37層	肥前磁器	皿		(1.4)		透明釉		
266	下層確認 T46層	青花	皿		(1.5)	3.8	透明釉		
267	下層確認 T47層	肥前磁器	皿		(2.0)		透明釉		
268	下層確認 T47層	肥前磁器	碗		(5.1)		透明釉		
269	60層	須佐	すり鉢		(2.9)		サビ釉		
270	下層確認 T34層 53層	肥前磁器	碗		(2.1)		透明釉		
271	53層	肥前磁器	碗		(2.5)	(4.0)	透明釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
272	木製遺構枠内	木製品	不明	11.8	2.7	2.2			
273	14層	鉄製品	不明	15.7	6.1	4.0		300.0	



## 第5節 第5地点

### 第1項 地点の概要 (Fig.57)

第5地点は、昆布山谷の中ほどに位置しており、本地点の南側には新横相上坑が、山道を挟んで東側には新横相間歩と呼ばれる坑口が所在する。分布調査の際に、近代の遺物がほとんど確認できなかった地点である。加えて、現地表面上に岩盤加工遺構や石垣・礎石等の遺構が確認できるなど、他地点に比べて上層の遺構が深く埋没していなかった。そのため、堆積状態によっては開発初期の様相までを明らかとできる可能性が考慮されたため、発掘調査を実施した。

調査にあたっては調査対象範囲内にⅠ～Ⅲの調査区を設定し、各調査区をa～dの小区に分けて出土遺物の取上げなどを行なった。第5地点よりも前に発掘調査を実施した第1～4地点においては、遺構保護の観点より範囲を限定したトレンチ調査を実施していたが、いずれの地点においても上層から新しい時期の遺構が検出され、下層まで掘り下げることが困難であった。そのため、第5地点においては、地点の広い範囲における遺構の広がりをはじめに確認し、その上で下層の追及が可能な箇所を選別することとした。また、平成28年度の調査により、第8地点で平坦面と道とを区画する石垣が検出された。そのことを踏まえ、谷筋の道の状況及び平坦面と道との関連を明確とするために、平成29年度には第5地点の東部にトレンチを設定した。

経過は第1章で述べたとおりで、本地点の調査は平成26年度から平成29年度まで4ヶ年と長期にわたって実施した。これは、調査方針の切り替えによって他地点に比べて調査面積が広がったことや、調査区の下層において遺構が重複して検出されたことなどの要因による。

### 第2項 Ⅰ区 (Fig.58)

#### (1) 調査区の概要

Ⅰ区は第5区中央に所在する石垣(SW02)によって構築された平坦面で、広さは東西5.5m、南北15.5mである。調査区西側には階段状遺構や溝状遺構・水溜め・柱穴などが掘り込まれた岩盤加工遺構(SX02)がある。調査区内の一部には流土が厚く堆積しており、その中からは瓦や17世紀初頭の遺物などが出

土した。これらは、調査区西側の斜面から流されてきた遺物とみられる。

Ⅰ区では、第1遺構面における遺構の分布状況を確認した上で、調査区の一部に下層確認トレンチを設定した。平成26年度にはⅠc区に相当する範囲と、Ⅰd区の北壁沿いの東西約4m、南北約1.8～2mの範囲とし、調査の進捗に従って順次拡張していった。平成27年度にはⅠa区内で、SX02の東側に幅約2mで設定し、平成28年度にはⅠ区の南半の東西約4.0m、南北8.2mの範囲とした。さらに、平成29年度には、東西の範囲はそのままでさらに南へ2.2m拡張し、南北10.4mとした。

#### (2) 層序 (Fig.59・61・62・66)

第5地点においては第5遺構面まで確認した。以下では各遺構面の様相を記述する。なお、各遺構面の様相はいずれも調査完了段階での所見である。

#### 【第1遺構面】 (Fig.59)

第4層上面である。明黄褐色粘質土で、上面には建物遺構(SB01)がある。標高は243.5mである。第3遺構面上に廃棄されたズリの上を造成して構築されている。

上面から在地系陶器の蓋や銅製品などが出土しているが、時期を明確に示すものは出土しなかった。ただし、明治期の遺物はほとんど含まれていないため、利用時期は幕末までとみられる。また、平成29年度に拡張した範囲の内、南東部では第1遺構面以下の整地層以下で巨大な落ち込みが確認できた。

なお、調査途上においては第3遺構面の上には第2面があり、炭化物が水平堆積していたことから、下面において遺構が存在する可能性を考慮してズリなどを利用して造成を行ないながらⅠ区の高まりが漸次形成されてきたと捉えていた。しかし、平成28年の調査で、Ⅰ区の東西方向の堆積状況を確認したところ、Ⅰ区は第3遺構面が機能しなくなった後に、鉱山活動によって排出されるユリカスやズリの廃棄場となっており、その上を造成して第1遺構面を形成していることが明らかとなった。

#### 【造成による堆積層】 (Fig.66)

図中の白色の部分で、Ⅰ区がズリの廃棄場となっていた後に形成された堆積層である。堆積層の多くは水

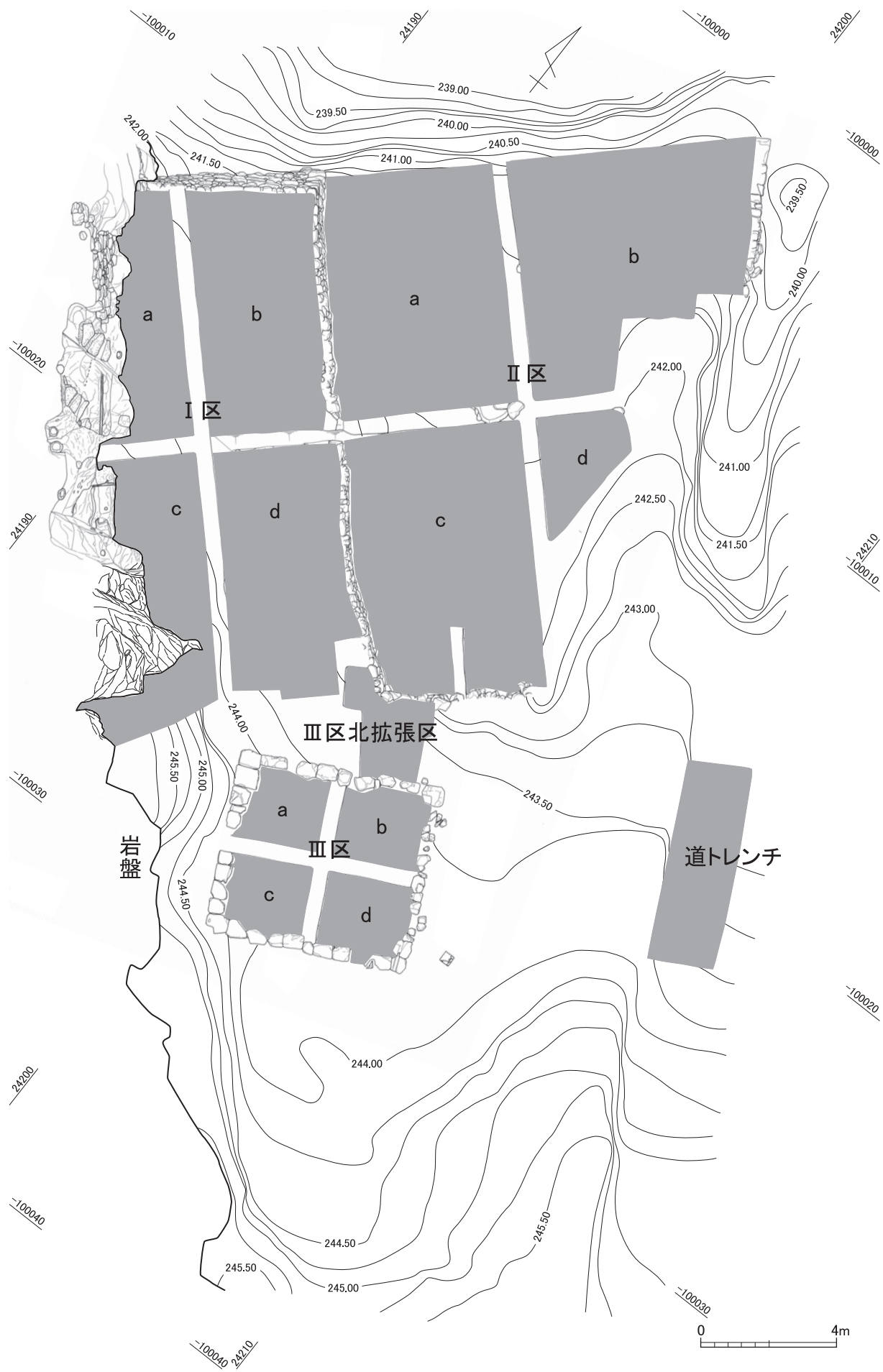


Fig.57 昆布山谷地区第5地点周辺地形図 (S = 1 / 160)

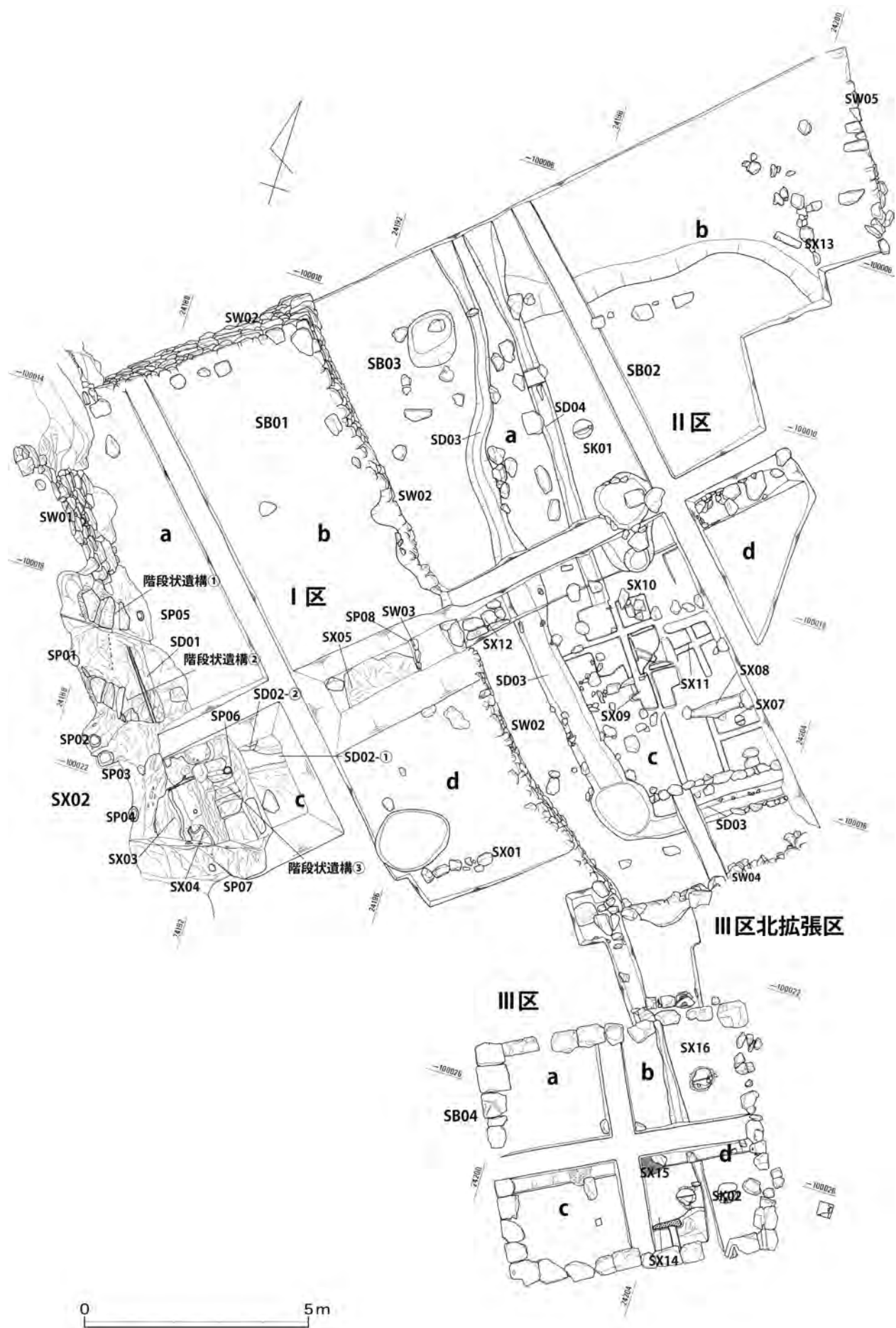


Fig.58 昆布山谷地区第5地点上層遺構配置図 (S = 1 / 120)

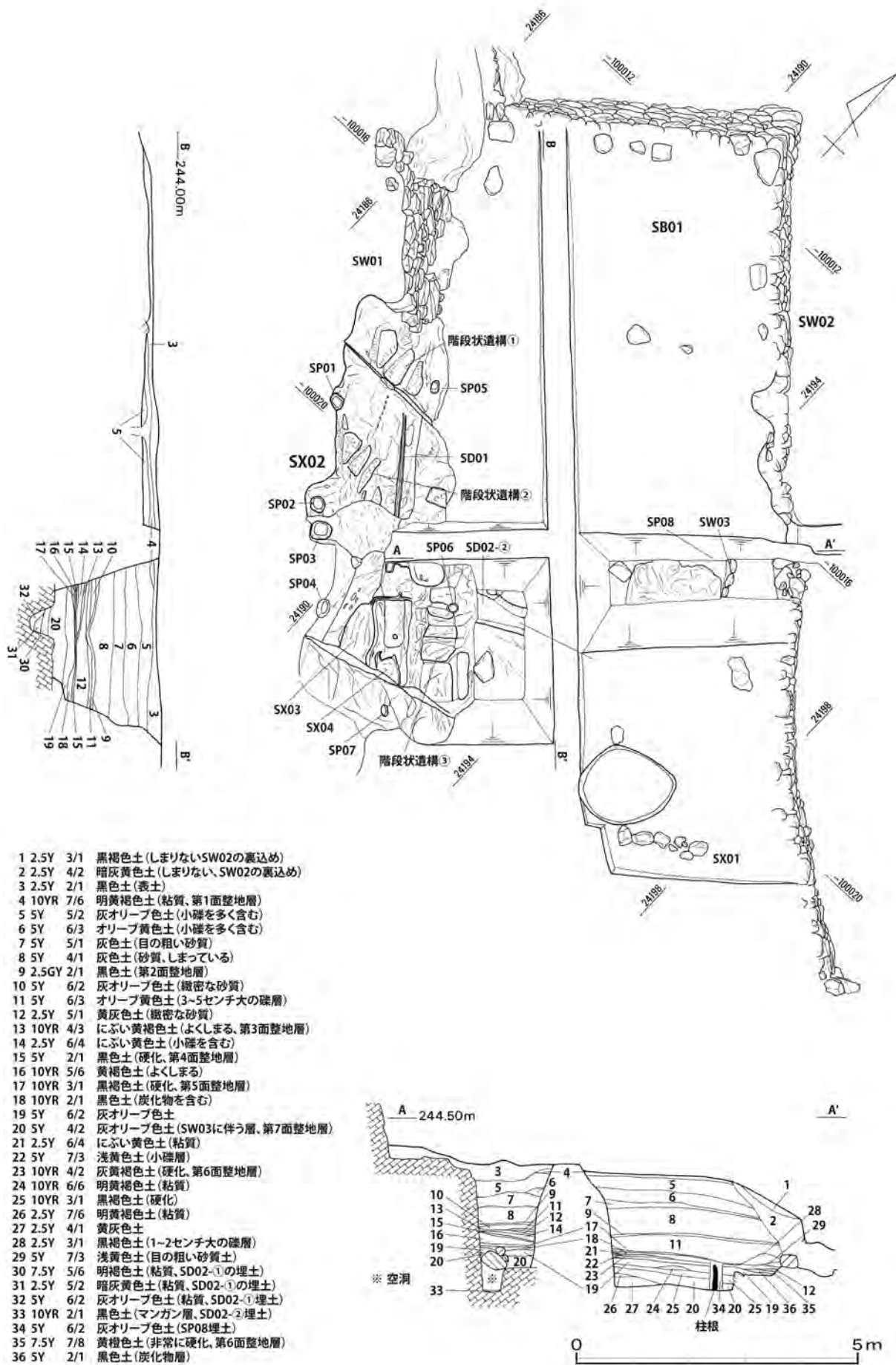


Fig.59 昆布山谷地区第5地点I区上層遺構配置図 (S = 1 / 100)



Fig.60 昆布山谷地区第5地点I区下層遺構配置図 (S = 1 / 60)

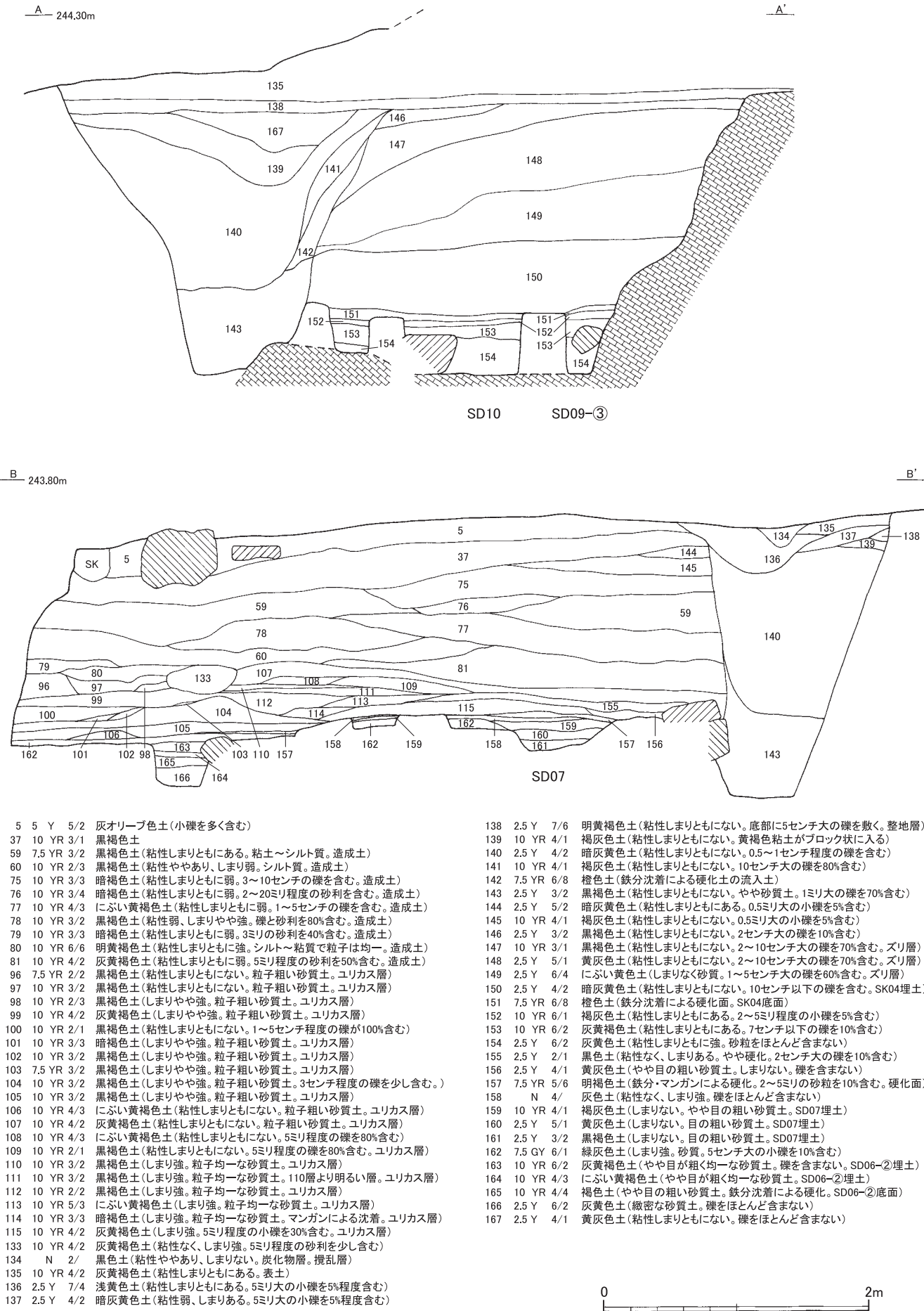
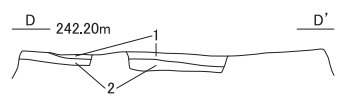
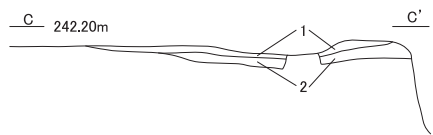
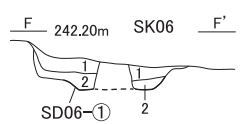
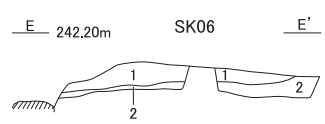


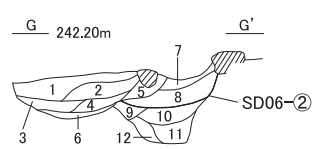
Fig.61 昆布山谷地区第5地点I区土層断面図I (S = 1 / 40)



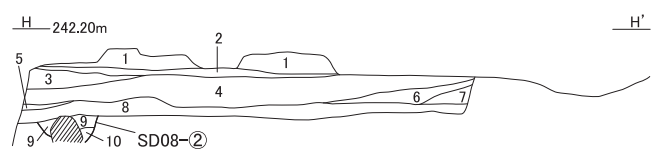
- 1 7.5 Y 7/4 浅黄色土(しまりあり。2~10センチ大の礫を40%含む。SX28上面整地層)
- 2 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性なく、しまり弱。やや砂質。炭化物を多く含む)



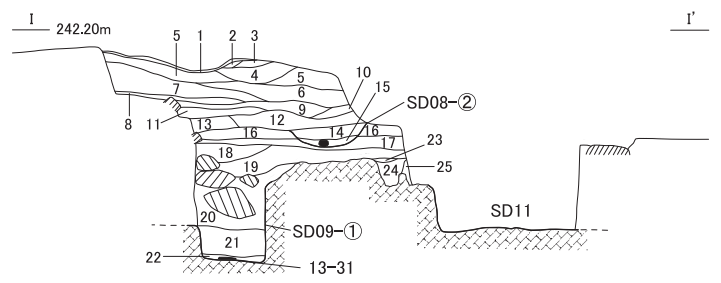
- 1 N 1.5/ 黒色土(やや砂質。緻密な炭化物層)
- 2 10 YR 3/3 暗褐色土(しまり弱。目の粗い砂質土。SD06-①埋土)



- 1 2.5 Y 7/3 浅黄色土(粘性しまりともにない。やや砂質。上面硬化)
- 2 2.5 Y 6/3 にぶい黄色土(しまりない。目の粗い均一な砂質土)
- 3 10 YR 4/6 オリーブ褐色土(かなり目の粗い砂質土。灰色粘土がブロック状に入る)
- 4 2.5 Y 6/4 にぶい黄褐色土(しまりない。2ミリ大の小礫を5%含む)
- 5 10 YR 5/1 褐色土(やや粘質で、しまりあり。砂粒を含む)
- 6 5 Y 5/1 灰色土(粘性弱、しまりない。緻密な砂質土)
- 7 5 Y 6/1 灰色土(粘性弱、しまり強。2ミリ大の小礫を5%含む。SD06-②埋土)
- 8 5 Y 5/2 灰オリーブ色土(粘性しまりともに弱。SD06-②埋土)
- 9 2.5 Y 4/1 黄灰色土(粘性しまりともにない。2~5ミリ大の小礫を30%含む)
- 10 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土(粘性ない砂質土。上面硬化。SD06-②底面)
- 11 N 5/ 灰色土(粘性強。しまりあり。5ミリ大の小礫を5%含む)
- 12 10 YR 3/4 暗褐色土(粘性弱、しまりあり。やや砂質土)



- 1 7.5 Y 7/4 浅黄色土(しまりあり。2~10センチ大の礫を40%含む。SX28上面整地層)
- 2 10 YR 4/1 褐色土(やや目の粗い砂質土。炭化物を含む)
- 3 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質)
- 4 2.5 Y 6/2 灰黄色土(しまり弱。やや砂質。2センチ大の礫を微量含む)
- 5 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘性強、しまりない)
- 6 2.5 Y 7/4 浅黄色土(やや砂質。明黄褐色粘土がブロック状に入る)
- 7 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまりない。目の粗い砂質土)
- 8 2.5 Y 4/2 暗灰黄色土(やや砂質。3~5ミリ大の粒子を10%含む)
- 9 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。2ミリの白色砂粒を含む。SD08-②埋土)
- 10 10 YR 4/1 褐色土(粘性強、しまりない。2ミリの白色砂粒を含む。SD-②埋土)



- 1 N 1.5/ 黒色土(3ミリ大の炭を含む炭化物層)
- 2 7.5 YR 6/6 明褐色土(しまりない。やや砂質。5ミリ大の小礫を5%含む)
- 3 5 Y 7/4 浅黄色土(しまりない。0.5~4センチ大の礫層)
- 4 7.5 YR 5/4 にぶい褐色土(やや砂質。上面は黒色の炭化物を含む焼土層)
- 5 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質で礫は含まない)
- 6 2.5 Y 6/2 灰黄色土(しまり弱。やや砂質。2センチ大の礫を少量含む)
- 7 2.5 Y 5/3 黄褐色土(しまり弱。3センチ以下の小礫を10%含む)
- 8 2.5 Y 3/3 暗オリーブ褐色土(しまり弱。やや砂質)
- 9 2.5 Y 5/2 暗灰黄色土(しまり弱。やや砂質。黄褐色粘土をブロック状に含む)
- 10 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘性強、しまりない)
- 11 10 YR 3/1 黒褐色土(粘性強、しまり弱。炭化物を含む)
- 12 2.5 Y 4/2 暗灰黄色土(やや砂質。3~5ミリの粒子を10%含む)
- 13 2.5 Y 7/3 浅黄色土(粘性強、しまり弱。SD08-②検出遺構面)
- 14 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。2ミリ大の白色砂粒を少量含む。SD08-②埋土)
- 15 10 YR 4/1 褐色土(粘性強、しまりない。2ミリ大の白色砂粒を少量含む。SD08-②埋土)
- 16 2.5 Y 4/1 黄灰色土(粘性しまりともに弱。2ミリ大の砂粒を少量含む)
- 17 2.5 Y 5/2 暗灰黄色土(粘性強。2ミリ以下の砂粒を5%含む)
- 18 2.5 Y 8/3 浅黄色土(やや砂質。3~5センチ大の礫を30%含む)
- 19 2.5 Y 4/2 明灰黄色土(しまりあり。やや砂質。3センチ大の礫を20%含む)
- 20 2.5 Y 7/2 灰黄色土(しまりあり。やや目の粗い砂質土。SD09-①埋土)
- 21 5 Y 5/1 灰色土(粘性強。目の細かい粒子。SD09-①埋土)
- 22 2.5 Y 3/1 黒褐色土(粘性強、しまりない。有機質木片を含む。SD09-①埋土)
- 23 10 YR 6/2 灰黄褐色土(粘性しまりともに弱。砂粒をほとんど含まない)
- 24 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質。2ミリ大の白色砂粒を10%含む)
- 25 2.5 Y 5/3 黄褐色土(粘性しまりともに弱。2ミリ大の砂粒を5%含む)



Fig.62 昆布山谷地区第5地点 I 区土層断面図 II (S = 1 / 40)

平に堆積しており、積み上げられたズリの上を整備して平坦面（第1遺構面）として利用する目的で造成されたとみられる。出土遺物より、19世紀以降に造成された可能性がある。

#### 【ズリの廃棄層】(Fig.66)

図中の赤色の部分で、ズリとみられる岩石の破砕物によって構成される堆積層である。I区の広い範囲に堆積しており、一部はドーム上になっている。第3遺構面上の標高242.4～242.5m辺りから堆積が始まっており、最高点は243.9mと現地表面付近まで積み上げられていた。間歩から排出された礫をばた山状に積んでおり、I区は第3遺構面上で製錬や選鉱などの生産活動が行われなくなった後に、ユリカスやズリの廃棄場になっていたことが窺われる。

#### 【ユリカスの堆積層】(Fig.66)

図中の青色の部分で、ユリカスが廃棄されて形成された堆積層である。第3遺構面上の標高242.38mから243.00mまでの約60cmにわたって堆積している。第3遺構面上には広い範囲にユリカスが堆積しており、これは第3遺構面上で検出されたSK03などで選鉱が行われた後に周囲に廃棄されたほか、周辺の選鉱施設などからも集積したと考えられる。

#### 【第3遺構面】(Fig.61)

東壁では157層・162層上面にあたる。標高は約241.70～242.00mに相当するが、堆積層は薄く、厚い箇所でも20cm未満である。遺構としてはSK03・04、SD05・07、SX28が検出された。ただし、層序では確認できないものの、切合い関係によってSK03・04やSD07がSD05・SX28に先行することが確認できており、同一遺構面上においても短期間のうちに活動内容の変更や、それに伴う設備の新設・廃絶があったことが想定される。SK03・04の埋土から出土した遺物から、17世紀後半頃には利用されていたと判断できる。

#### 【第4遺構面】

東壁では確認できていないが、東西方向での断割りによって確認された。Fig.6、I-I'の13・16層上面に相当し、標高は約241.6mである。遺構としてはSD08、SX29・30がある。また、炉跡SK17～19は、今回整理した第3遺構面よりも一段下で検

出されており、検出レベルが標高約241.6mと、ほぼそろっていることから、第4遺構面に含まれると整理できる。

調査区南東部に設定したサブトレンチでは、第4遺構面とみられる整地層を確認している。その堆積層には焼土や炭などが含まれていたことから、火を使う作業が行なわれていたことが窺われ、第3遺構面とは使用状況が異なっていたようである。

#### 【第5遺構面】

地表面に広がる岩盤を加工して利用していた面で、本地点において最も古い遺構面である。遺構としてはSD09～11や、SD02がある。SD02の埋土からは17世紀前半の遺物が出土していたほか、岩盤の直上から青花などの古い遺物が出土しているなど、近世初期には開発されていたとみられる。また、第I区と第II区の境から検出されていた石敷遺構SX02は、検出面の標高が241.3mと、SD11が穿り込まれた岩盤面の標高よりもやや低い。岩盤が北東に向かって緩やかに傾斜していることを踏まえると、SX12も第5遺構面に伴うと判断できる。

### (3) 検出遺構

#### 【SB01】(Fig.59・63)

SB01はI区の第1面上で検出された礎石建物跡で、石垣(SW02)でかさ上げされた平坦面に建てられている。軸は南東方向で、背後の岩盤加工遺構SX02と平行になっている。調査区の南半部は竹根の影響で遺構面が攪乱されており、遺構が明確に確認できなかった。確認できた範囲での規模は東西4.8m×南北3.2mで、東西が三間、南北が二間である。東西の柱間については、中央が約105cm(約3尺5寸)で、中央以外は約184cm(約6尺)である。これまでに石見銀山遺跡で検出された建物遺構は6尺5寸を基準とするものが多かったが、SB01はその基準では建てられていない。礎石は隅丸方形または不定形の扁平な割石で、大きさは北東隅のものが約65×45cmとやや大きいが、それ以外は約35×30cm程度である。礎石上面の標高は243.4～243.5mで、高さはそろっている。内部に遺構を伴わないため、建物の性格は不明である。第1面上面における出土遺物から、幕末まで利用されていたと考えられる。



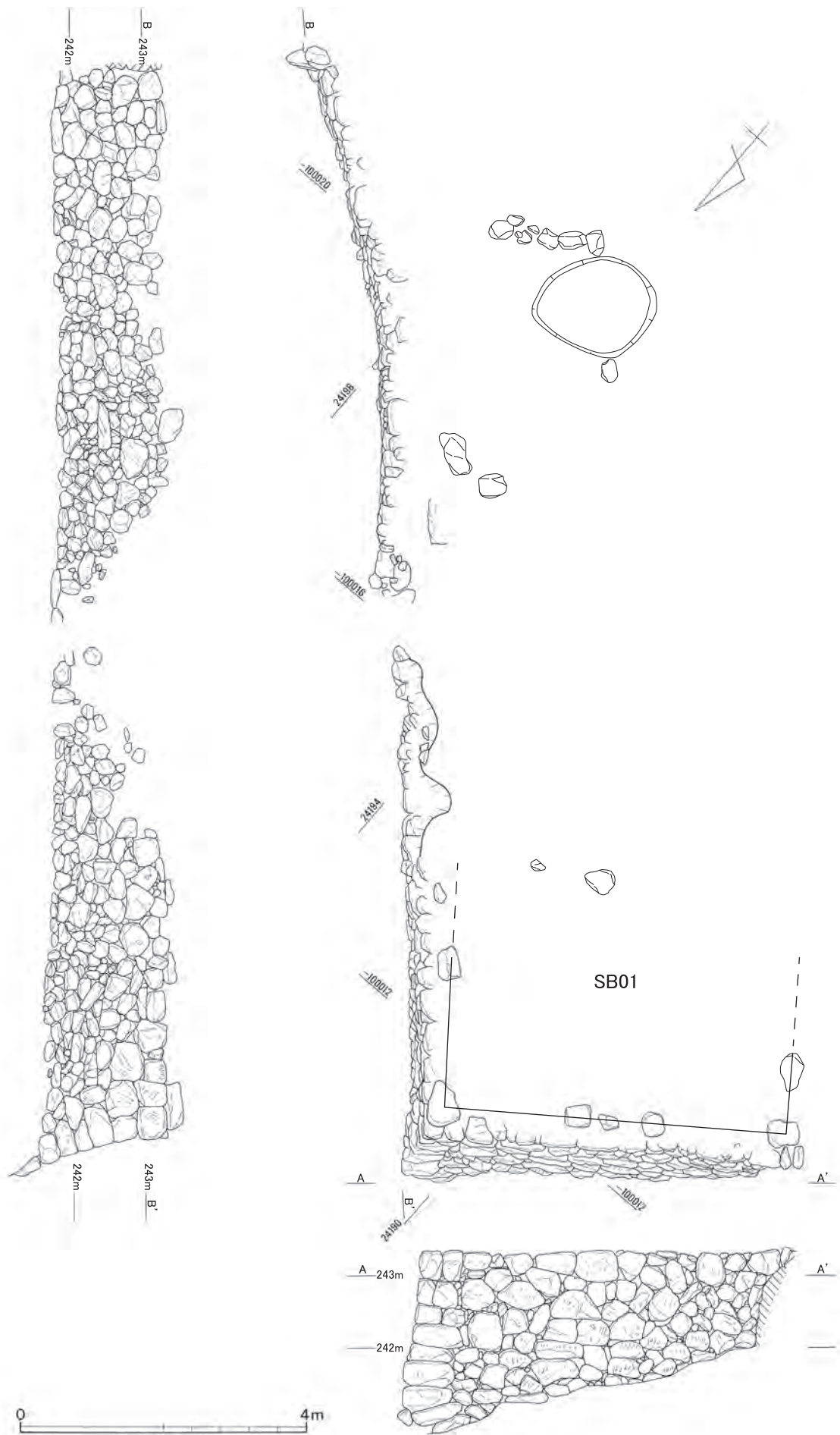


Fig.63 昆布山谷地区第5地点I区SB01平面図、SW02平面図・立面図 (S=1/80)

【SW 01】(Fig.58・64)

SW 01は岩盤遺構(SX 02)の北部に構築された石垣で、南北方向に幅約3.6mにわたって構築されている。高さは約2.9mで、最高点は標高246.5mであった。岩盤にそって構築されており、岩盤を一部削って石材をはめ込みながら積み重ねている。表面での観察から、割石を積み上げただけで裏込めはない。基底部分は岩盤から積み上げており、I区の第1面よりも下がらないことから、I区の造成に伴って構築された石垣と判断でき、18世紀末以降につくられたものと考えられる。底部標高は約243.6mである。

築石は周囲の岩盤と同質で、凝灰岩質の割石を使用している。最大のもので幅約80cmだが、多くは約20～50cmである。築石の表面には鑿痕が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が伺える。上部が、後述する階段状遺構①と接していることから、斜面の土留及び、上の平坦面に登るための通路を確保する目的で構築された可能性がある。

【SW 02】(Fig.58・59・63)

SW 02はI区の北面(北側)とI・II区の境(東側)に構築された石垣で、北側は長さ約5.5m、東側は長さ約15.5mである。東側は劣化が激しく、中央部の約4.5mの範囲と、北から2.5mよりも南側の天端が崩れていた。高さは約2.5mで、天端の標高は243.4mである。基底部分はI区のユリカス堆積面及びII区の第1面で、標高は241.1m～241.8mである。ただし、北東隅では240.8mまで下がっており、場所によって基底部の標高がやや異なっている。

築石はSW 01と同様に凝灰岩質の割石である。いずれの面でも幅40～70cmの大きな石と、幅20～30cmの小さな礫を使用しているが、東側では幅約20cmの小ぶりな礫が多く使用される。東側では下部の約30cmは幅20cm程度の小さい石を使用している。また、築石の表面には鑿痕が残るものが含まれる。

石積みは基本的に乱積みだが、北東隅は算木積みである。角度は北側が約75°、東側が約80°で、いずれの面もやや内湾している。石垣の裏込めには、最下段の築石から西に最大で約90cmの範囲に粘質土を詰めており、グリ石や砂利などはない。

【SX 01】(Fig.58・59)

SX 01はId区南部の第1遺構面上で検出された石列で、幅30～40cmの角礫を東西に並べている。礫5点で幅約1.6mだが、西側は流土が厚く堆積しており、調査が困難であったため、遺構の全体は確認していない。SW 02北壁と平行しており、SW 02北壁からSX 01の間を敷地としていた可能性がある。

【SX 02】(Fig.58～60・64)

SX 02はI区西側の岩盤に掘り込まれた岩盤加工遺構で、南北方向の幅約12.5mの範囲が加工されている。掘り込まれた施設には柱穴(SP 01～07)や階段状遺構・水溜め(SX 03・05)・溝(SD 01・02)などがある。加工痕より、加工にはつるはしや鑿が使用されていたものとみられる。高さはI区の地表面からは約2.7m、最下部からは約4.8mで、最高点の標高は246.2mである。表面には多くの凹みが掘り込まれており、梁を架けるための機能などが想定される。岩盤には凹みのほかに柱穴も複数掘り込まれていることから、岩盤に沿うようにして建物か庇があった可能性がある。北半部の下位では、梁を架けるなどの機能が想定される凹み(以下、梁穴とする)がいくつか確認できたが、上位ほど積極的に加工されていない。ただし、標高242.5m付近と標高243.0m付近ではそれぞれ4つと3つ以上の梁穴がほぼ等間隔で並んでおり、岩盤に沿って建物が建っていたか屋根が架けられていたことが想定される。標高242.1m付近では梁穴が等間隔で北へ続いており、SX 02の北端部まで延びるとみられる。この梁穴は、SD 02-②の蓋によって塞がれていることから、SD 02-②が暗渠となる前に機能していたものと想定される。また、階段状遺構①は、243.7m付近以下には続いていなかったことから、第1遺構面まで造成された後に加工されたとみられる。

①階段状遺構

階段状遺構は岩盤の中央部に2個、南端部に1個の計3個が掘り込まれており、北から順に階段状遺構①・②・③とする。階段状遺構①・②・③のいずれにも鑿等による加工痕が見られる。

階段状遺構①はSX 02の北側に位置しており、岩盤に対して西側に約50°斜めになっている。段数は3



Fig.64 昆布山谷地区第5地点I区岩盤加工遺構S X O 2 平面図・立面図 (S = 1 / 60)

段あり、1段目が標高243.9 m、3段目が標高244.5 mで、1段当たりの高さは約30cmである。また、幅は約40cmで、奥行は約20cmである。1段目は第1面から55cm離れており、一足で登るのはやや困難である。1段目の下には柱穴が設けてあることから、岩盤沿いに何らかの施設があり、そこから階段に上るようになっていたかもしれない。先にも指摘したように、S W 01と関連する可能性があり、第1面が形成されたのちにできた遺構とみられる。

階段状遺構②はS X 02の中央部に位置しており、岩盤に対して西側に約40°斜めになっている。段数は5段あり、1段目が標高244.4 m、5段目が標高245.6 mで、1段当たりの高さは20～30cmである。1段目は第1面から約1 m離れており、階段状遺構①と同様に一足で登るのは困難である。1段ごとの幅は40～60cmで、奥行は20～30cmであるが、1段目は非常に小さく、幅30cm、奥行き20cmで、平面形は三角形である。

階段状遺構③はS X 02の南側に位置しており、S X 02と平行に掘り込まれている。段数は7段あり、1段目が標高242.6 m、7段目が標高243.8 mで、1段あたりの高さは10～30cmである。1段目はS X 02に直行しているが、2段目が踊り場状になっており、3段目からはS X 02に平行している。段の広さは1段目が幅約80cm、奥行き約20cmで、2段目が幅約55cm、奥行き約70cm、3段目が幅約60cm、奥行き約30cmで、4段目以降が幅約80cm、奥行き約20cmである。1段目の下方約20cmの第5面上から平面が55×35cm、厚さ15cmの割石1点が出土した。第3面から階段に上るための踏石として利用していた可能性がある。

#### ② S D 01

S D 01は階段状遺構②の下に掘り込まれた幅約8cmの細い溝である。軸は西に35°の方向で、おおむねS X 02に平行である。S X 02中央部分の約1.8 mの範囲に掘り込まれている。標高は北側が244.145 m、南側が244.037 mで、南側が若干低い。溝としては非常に浅く、掘り込みの深さは1cm程度である。

岩盤加工遺構で導水の機能を持つ溝は安原谷地区や本谷地区で検出されており、S D 01も似たような機

能をもつ可能性もある。

#### ③ S D 02

S D 02はI区の現地表面から1.65 m下の標高241.8 m地点で検出された遺構である。岩盤に対して直行する東西に掘り込まれた溝(S D 02-①)と、岩盤に沿って南北に掘り込まれた溝(S D 02-②)がL字形につながる部分が検出された。S D 02-①は上部の幅55cm、底部幅25cm、深さ30cmで、断面は逆台形である。検出範囲での様相から、東方向に伸びているが、どこまで続いているのかは確認できなかった。

S D 02-②はI c区北壁の断面で確認された遺構で、暗渠状になっていたため、方向が分かる状態であった。幅36cm、深さ40cmで、断面は長方形である。S D 02-②の全体に蓋石が置かれ、暗渠状になっていた。そのため、溝内に埋土はほとんどなかった。検出された範囲での様相から、S D 02-②は岩盤沿いにS W 02北壁付近まで伸びている可能性もあるが、現状のS W 02北壁では確認できない。S W 02を構築する際に埋めてしまったものとみられる。後述するが、暗渠状としている本遺構の上からは炉跡S X 17～19が検出されている。

#### ④ S X 03

S X 03はS X 02南端部に位置する水溜状の遺構で、標高は243.9 mである。平面形は三角形で、最も長い辺が1.1 m、奥行きが60cm、深さ15cmである。北端部に切り込みと東側に伸びる溝がある。S X 03西側の岩盤から流れてくる水を利用しているほか、S D 01から水を引き込んでいた可能性がある。

#### ⑤ S X 04

S X 04はS X 03の南東、標高243.8 mに位置する。平面形は三角形で、幅60cm、奥行き40cm、深さ2cmである。掘り込みが浅く、周囲に関連する施設もないため、用途は不明である。

#### ⑥ S X 17～19

S X 17～19はS D 02が整地などによって埋設されたのちに形成された土坑状の遺構である。S X 17は下層確認トレンチの北端部で検出された。東半が調査範囲外のため全体は検出していないが、直径約25cm、深さ約10cmの円形の遺構である。厚さ約10cm

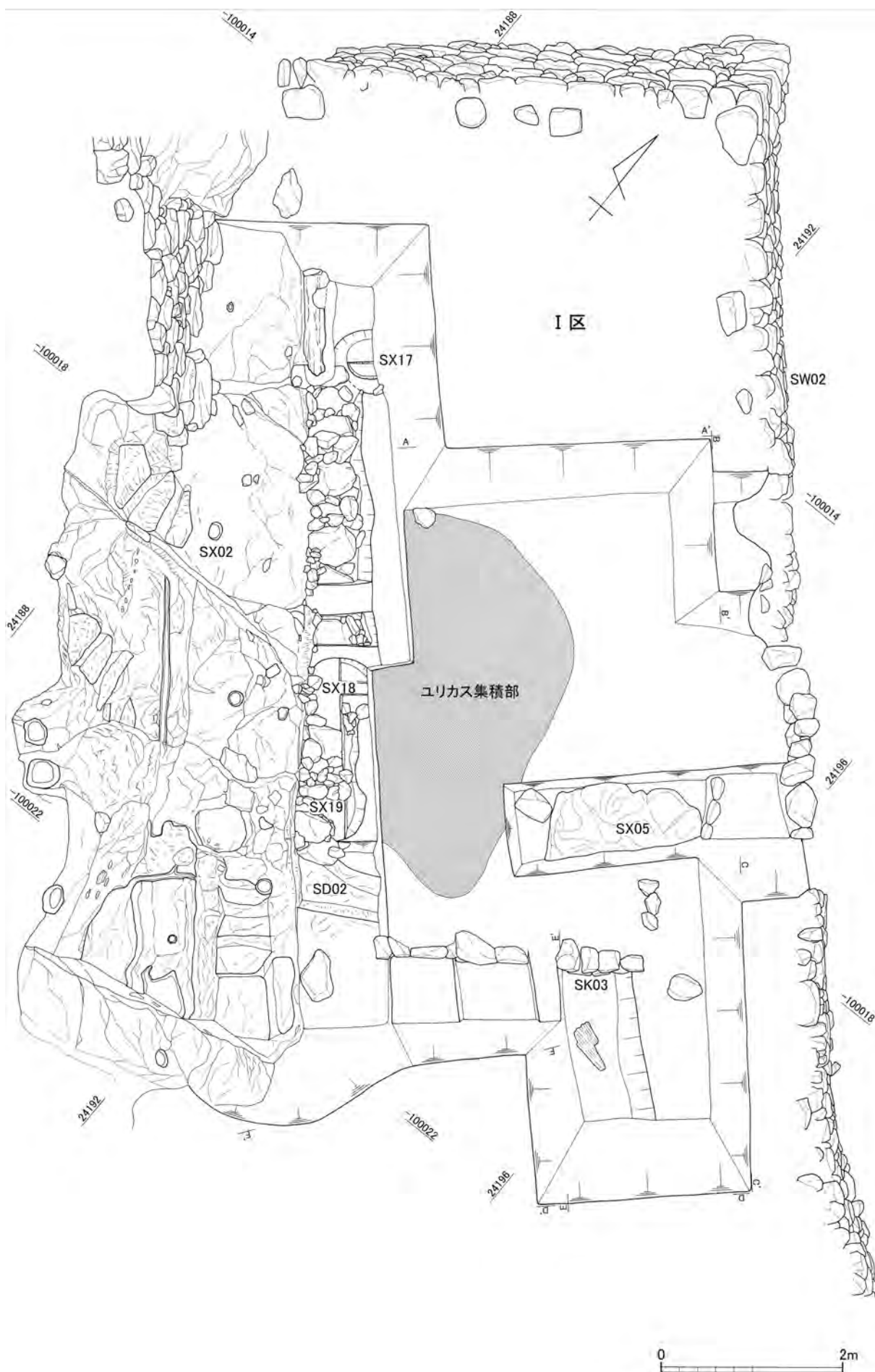


Fig.65 昆布山谷地区第5地点I区ユリカス堆積層検出状況 (S = 1 / 60)

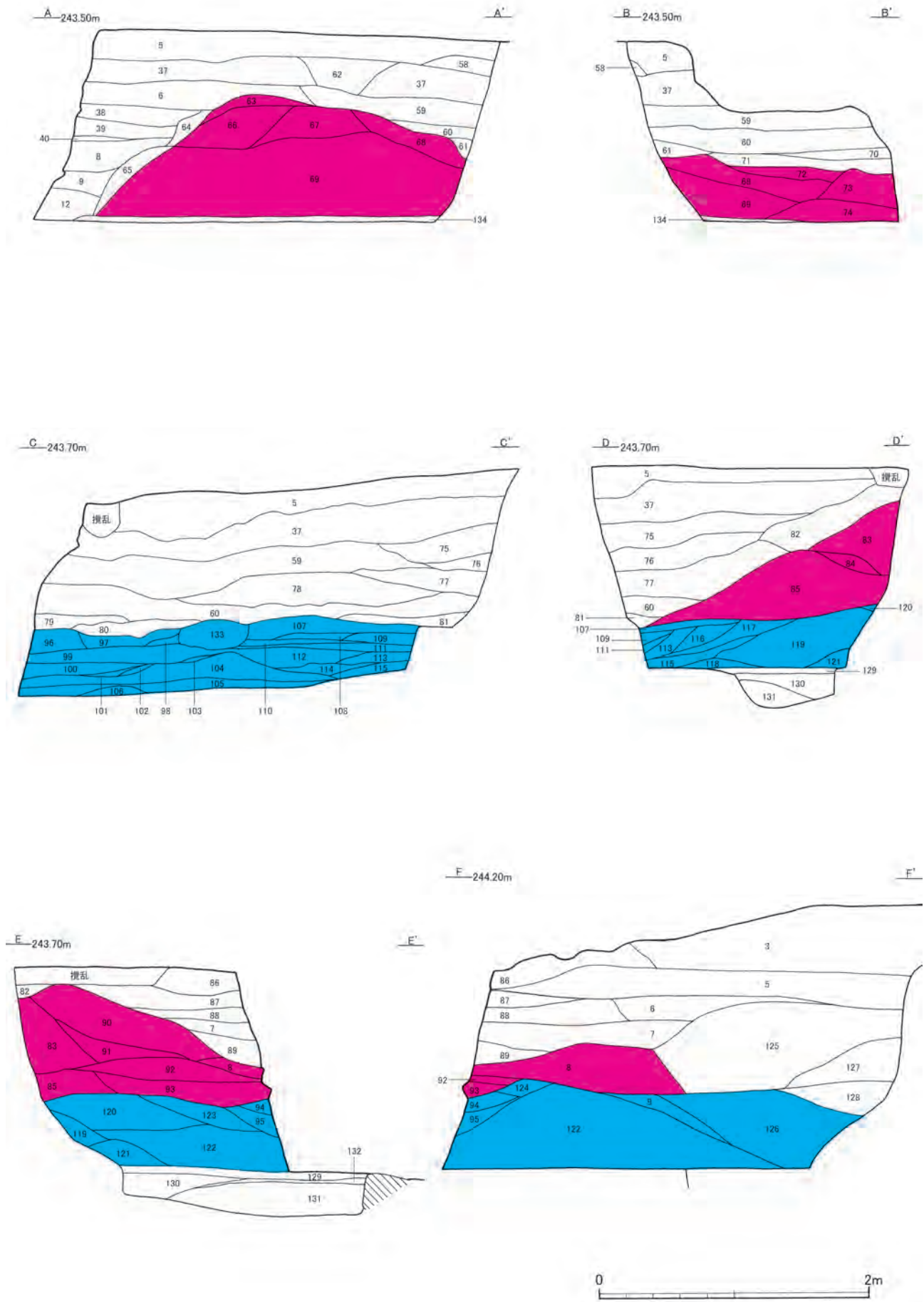
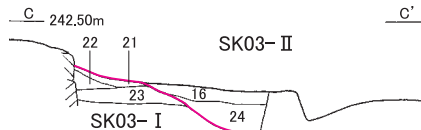
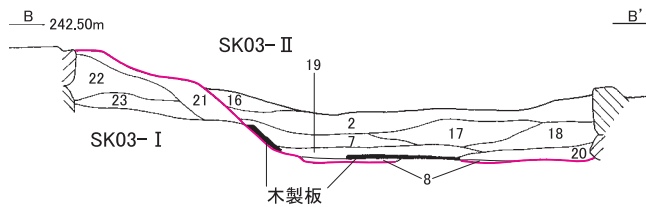
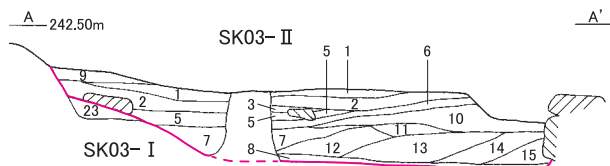
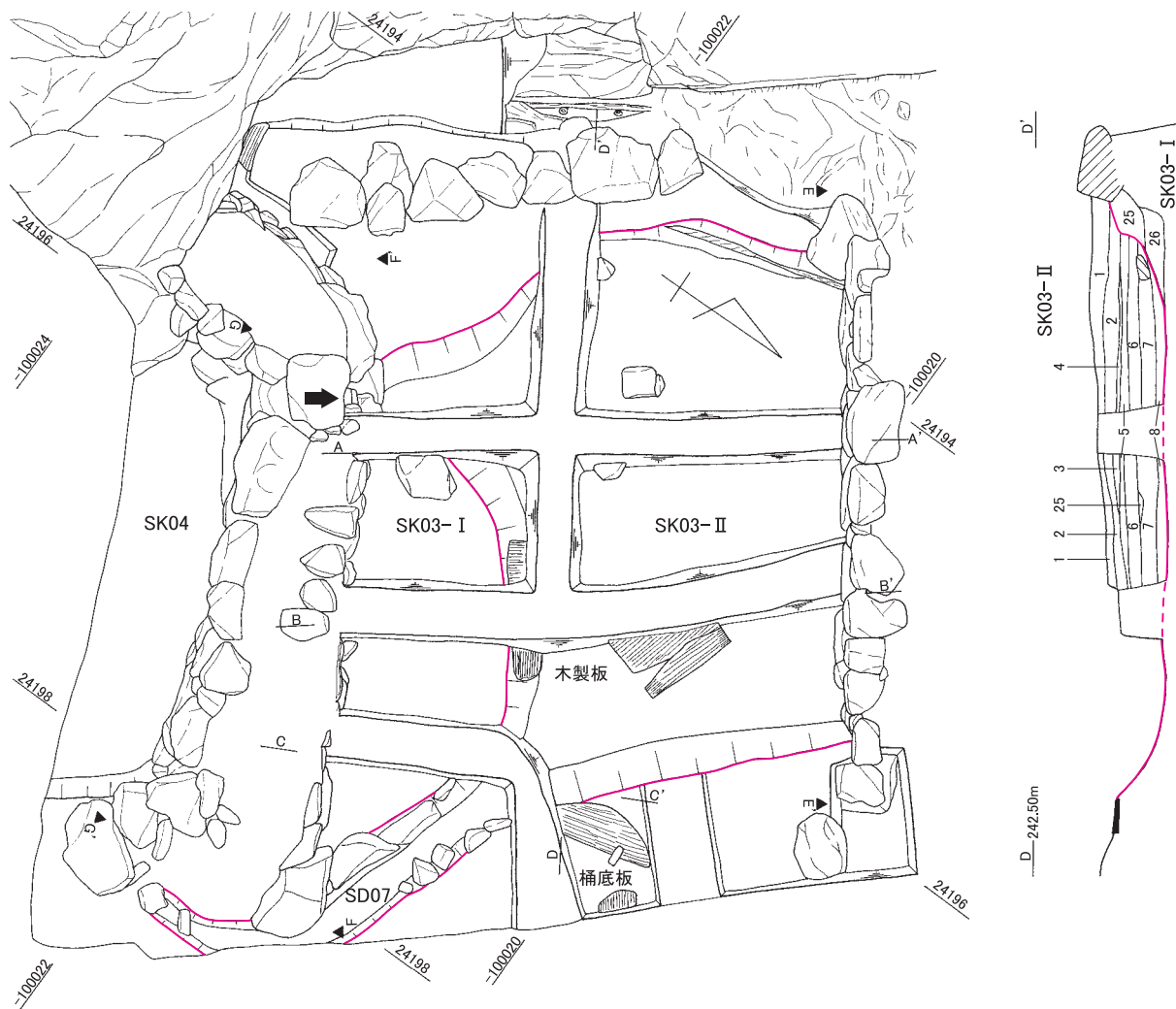


Fig.66 昆布山谷地区第5地点I区土層断面図III (S = 1 / 40)

3	2.5 Y	2/1	黒色土	95	7.5 YR	2/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。2~5センチ大のズリがほぼ100%含む。選鉱過程のズリの堆積か?)
5	5 Y	5/2	灰オリーブ色土 (小礫を多く含む)	96	7.5 YR	2/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
6	5 Y	6/3	オリーブ黄色土 (小礫を多く含む)	97	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
7	5 Y	5/1	灰色土 (目の粗い砂質土)	98	10 YR	2/3	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
8	5 Y	4/1	灰色土 (しまりのよい砂質土)	99	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
9	2.5 GY	2/1	黒色土	100	10 YR	2/1	黒褐色土 (粘性しまりともない。1~5センチ程度の礫がほぼ100%含む。選鉱過程のズリの堆積か?)
12	2.5 Y	5/1	黄灰色土 (緻密な砂質土)	101	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
37	10 YR	3/1	黒褐色土	102	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
38	2.5 Y	7/2	灰黄褐色土 (2.5Y 7/6 明黄褐色土の粘質ブロックを含む)	103	7.5 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
39	2.5 Y	5/2	明灰黄褐色土 (小~中型のズリを多く含む)	104	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。3センチ程度の礫を少し含む。ユリカス層)
40	2.5 Y	8/1	灰白色土 (粘質)	105	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
58	7.5 YR	3/3	暗褐色土 (粘性ややあり、しまり弱い。基質は粘土~シルト質。2~10ミリ程度の小礫を含む。造成土)	106	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
59	7.5 YR	3/2	黒褐色土 (粘性あり、しまりややある。粘土~シルト質。1センチ未満の砂利と3センチ程度の小礫を僅かに含む。造成土)	107	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
60	10 YR	2/3	黒褐色土 (粘性ややあり、しまり弱い。シルト質。堆積層内に炭化物のブロックがみられる。造成土)	108	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。5ミリ程度の礫を80%以上含む。ユリカス層)
61	10 YR	2/3	黒褐色土 (粘性なく、しまりやや弱い。粘質~シルト質。60層よりやや明るい黒褐色土で砂利が少なく粒子が均一。造成土)	109	10 YR	2/1	黒色土 (粘性しまりともない。5ミリ程度の礫を80%以上含む。ユリカス層)
62	7.5 YR	3/3	暗褐色土 (粘性ややあり、しまり弱い。シルト質。周辺層と比較して砂利等が非常に少ない。土坑埋土か?)	110	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層)
63	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。基質は2~10ミリ程度の砂利。ズリ廃棄層)	111	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。110層よりやや明るい黒褐色土。ユリカス層)
64	7.5 YR	6/6	橙色土 (10YR 7/4 にぶい黄褐色土の粘土ブロックが層状にはいる)	112	10 YR	2/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層)
65	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。3ミリ程度の砂利がほとんどを占める。廃棄物層)	113	10 YR	5/3	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。ユリカス層)
66	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性しまりともない。5~15センチのズリ層。ズリ廃棄層)	114	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性なく、しまり強い。粒子均一な砂質土。上面にマンガンによる沈着が見られる。ユリカス層)
67	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性しまりともない。66層より明るい暗褐色土。1~15センチのズリ層。ズリ廃棄層)	115	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性なく、しまり強い。5ミリ程度の小礫を30%含む。ユリカス層)
68	10 YR	6/2	灰黄褐色土 (粘性しまりとも弱い。10センチ程度のズリを含む。ズリ廃棄層)	116	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり弱い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
69	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性しまりともない。1~15センチのズリが100%含む。ズリ廃棄層)	117	10 YR	5/3	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり弱い。1~5センチの礫が100%含む。選鉱のズリの堆積か?)
70	10 YR	2/3	黒褐色土 (粘性なく、しまり弱い。10センチ程度の礫を多く含む)	118	10 YR	5/4	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり弱い。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
71	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性なく、しまりやや弱い。2センチ未満の小礫を80%以上含む)	119	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。1センチ未満の小礫と3~5センチの礫が100%含む。選鉱のズリの堆積か?)
72	10 YR	4/4	褐色土 (粘性しまりともない。3センチ程度の小礫を80%以上含む。ズリ廃棄層)	120	10 YR	5/8	黄褐色土 (粘性しまりともない。1~15センチの礫がほぼ100%含む。選鉱過程のズリの堆積か?)
73	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。1~5センチ程度の礫が100%。ズリ廃棄層)	121	10 YR	7/4	にぶい黄褐色土 (粘性しまりとも強い。シルト質~粘質土)
74	10 YR	3/4	暗褐色土 (粘性しまりともない。1センチ程度の小礫を30%以上含む。ズリ廃棄層)	122	10 YR	6/6	明黄褐色土 (5~30センチのズリがほぼ100%含む。ズリ層)
75	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性しまりとも弱い。3センチ程度の小礫と10センチの礫を80%以上含む。造成土)	123	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層)
76	10 YR	3/4	暗褐色土 (粘性しまりとも弱い。2~20ミリ程度の砂利を80%以上含む。造成土)	124	10 YR	4/6	赤色土 (粘性しまりともない。5ミリ程度の礫が100%占める。被熱による変色か?)
77	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりとも弱い。1~5センチ程度の小礫を80%以上含む。造成土)	125	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。15センチを超える大礫を多く含む。ズリ層か?)
78	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性弱く、しまりやや強い。5~10センチ程度の礫と、1~10ミリ程度の砂利を80%以上含む。造成土)	126	10 YR	5/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。5センチ大の礫を多く含む。ズリ層か?)
79	10 YR	3/3	暗褐色土 (粘性しまりとも弱い。3ミリ程度の砂利を40%含む。造成土)	127	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり弱い。2センチ程度の礫を多く含む)
80	10 YR	6/6	明黄褐色土 (粘性強く、しまりやや強い。シルト質~粘土質で粒子は均一である。造成土)	128	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土 (粘性なく、しまり弱い。1センチ未満の砂利を多く含む。127層よりやや明るい黄褐色土)
81	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性しまりとも弱い。5ミリ程度の砂利を50%含む。造成土)	129	10 YR	2/1	黒色土 (粘性しまりとも強い。黄褐~黒色の互層状の粘質。SK03 埋土)
82	10 YR	2/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。2~10センチ程度のズリの廃棄層)	130	7.5 YR	3/1	黒褐色土 (粘性しまりともない。粒子粗い砂質土。ユリカス層。SK03 埋土)
83	10 YR	5/6	黄褐色土 (粘性しまりともない。7.5 YR 2/1 黒色のズリを含む)	131	7.5 YR	4/3	褐色土 (粘性しまりともない。10センチ程度の礫を多く含む。SK03 埋土)
84	10 YR	5/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。2ミリ程度の砂利を90%程度含む。ユリカスか?)	132	7.5 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり非常に強い。マンガンの沈着有り。SK03 埋土)
85	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。2~10センチ程度のズリ層だが、中には50センチを超えるズリも有る)	133	10 YR	4/2	灰黄褐色土 (粘性なく、しまりやや強い。5ミリ程度の砂利を少し含む。SK03 埋土)
86	7.5 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり強い。5ミリ程度の砂利を10%含む)	134	10 YR	3/2	黒褐色土 (粘性しまりともない。1センチ程度の礫を30%含む)
87	7.5 YR	3/2	黒褐色土 (粘性なく、しまり強い。10センチ大の礫を少しと、1センチ程度の砂利を60%含む)				
88	7.5 YR	4/3	褐色土 (粘性なく、しまり強い。5~10センチ程度のズリを多く含む)				
89	7.5 YR	3/3	暗褐色土 (粘性なく、しまり強い。10センチ以上の礫を多少含む)				
90	7.5 YR	2/3	極暗褐色土 (粘性しまりともない。5~20センチ程度のズリの廃棄層)				
91	10 YR	3/4	暗褐色土 (粘性弱く、しまりややある。5~10ミリ程度の砂利を80%以上含む)				
92	10 YR	5/3	にぶい黄褐色土 (粘性しまりともない。1~5センチ程度のズリを100%含む。選鉱過程のズリの堆積か?)				
93	7.5 YR	2/1	黒色土 (粘性しまりともない。1~3センチのズリがほぼ100%含む。選鉱過程のズリの堆積か?)				
94	7.5 YR	5/6	明褐色土 (粘性しまりともない。基質は5ミリ程度のズリを20%含む砂質土で、10センチ大のズリも多少含む)				

Fig.67 昆布山谷地区第5地点I区土層断面図III土色



- |    |            |                           |
|----|------------|---------------------------|
| 1  | N          | 黒色土(炭化物層)                 |
| 2  | 10 YR 3/2  | 黒褐色土(砂質、ユリカス)             |
| 3  | 10 YR 8/6  | 黄橙色土(緻密な粘質)               |
| 4  | 10 YR 7/3  | にぶい黄橙色土(粘質)               |
| 5  | 10 YR 6/4  | にぶい黄橙色土(やや砂質、粗い粒度)        |
| 6  | 10 YR 4/2  | 灰黄褐色土(やや砂質、木片含む)          |
| 7  | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(やや硬化、マンガン鉄分を含む)       |
| 8  | 5 G 3/1    | 暗緑灰色土(粘質、ややシルト質)          |
| 9  | 2.5 Y 8/2  | 灰白色土(粘質、砂質土が混じる)          |
| 10 | 2.5 Y 6/1  | 黄灰色土(やや砂質、0.5センチ以下の小礫を含む) |
| 11 | 10 G 4/1   | 暗緑灰色土(砂質、ユリカス)            |
| 12 | 2.5 Y 7/3  | 浅黄灰色土(砂質、1センチ以下の小礫を含む)    |
| 13 | 2.5 Y 5/1  | 黄灰色土(ユリカスと0.5センチ以下の小礫を含む) |
| 14 | 7.5 YR 7/4 | にぶい橙色土(0.5センチ以下の小礫を多く含む)  |
| 15 | 2.5 Y 5/2  | 暗灰黄色土(砂質、ユリカス層)           |
| 16 | 10 YR 3/1  | 黒褐色土(砂質、ユリカス層)            |
| 17 | 10 YR 6/2  | 灰黄褐色土(2~5センチ大のズリ層)        |
| 18 | 5 Y 6/3    | オリーブ黄色土(2~5ミリ大の礫層)        |
| 19 | 2.5 Y 4/1  | 黄灰色土(砂質、ユリカス層)            |
| 20 | 5 Y 7/2    | 灰白色土(5ミリ大の小礫層)            |
| 21 | 10 YR 7/6  | 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)          |
| 22 | 10 YR 3/1  | 黒褐色土(5ミリ大の礫を多く含む)         |
| 23 | 10 YR 7/6  | 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)          |
| 24 | 5 Y 5/2    | 灰オリーブ色土(砂質、ユリカス層)         |
| 25 | 10 YR 7/6  | 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)          |
| 26 | 5 Y 8/1    | 灰白色土(粘質)                  |

0 2m

Fig.68 昆布山谷地区第5地点I区SK03・04平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)



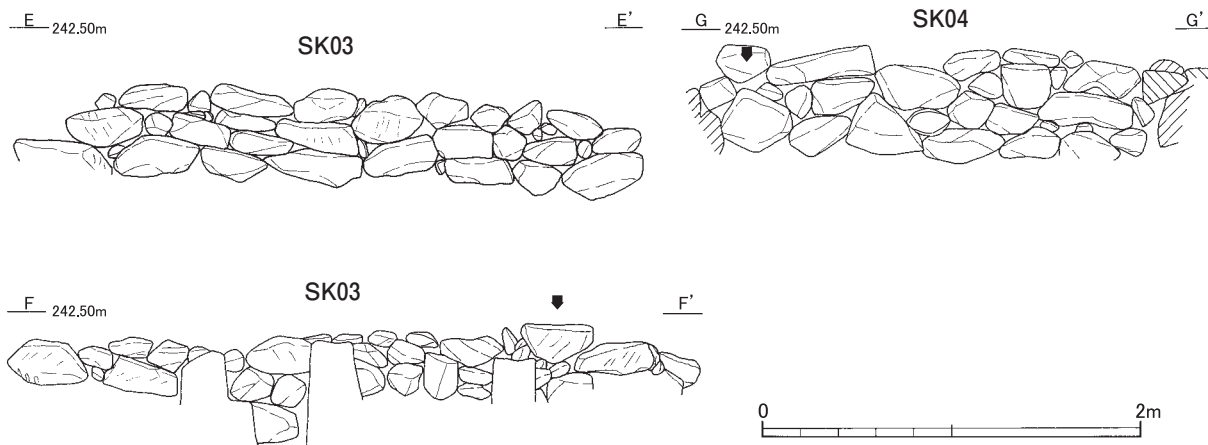


Fig.69 昆布山谷地区第5地点I区SK03・04石積み立面図 (S=1/40)

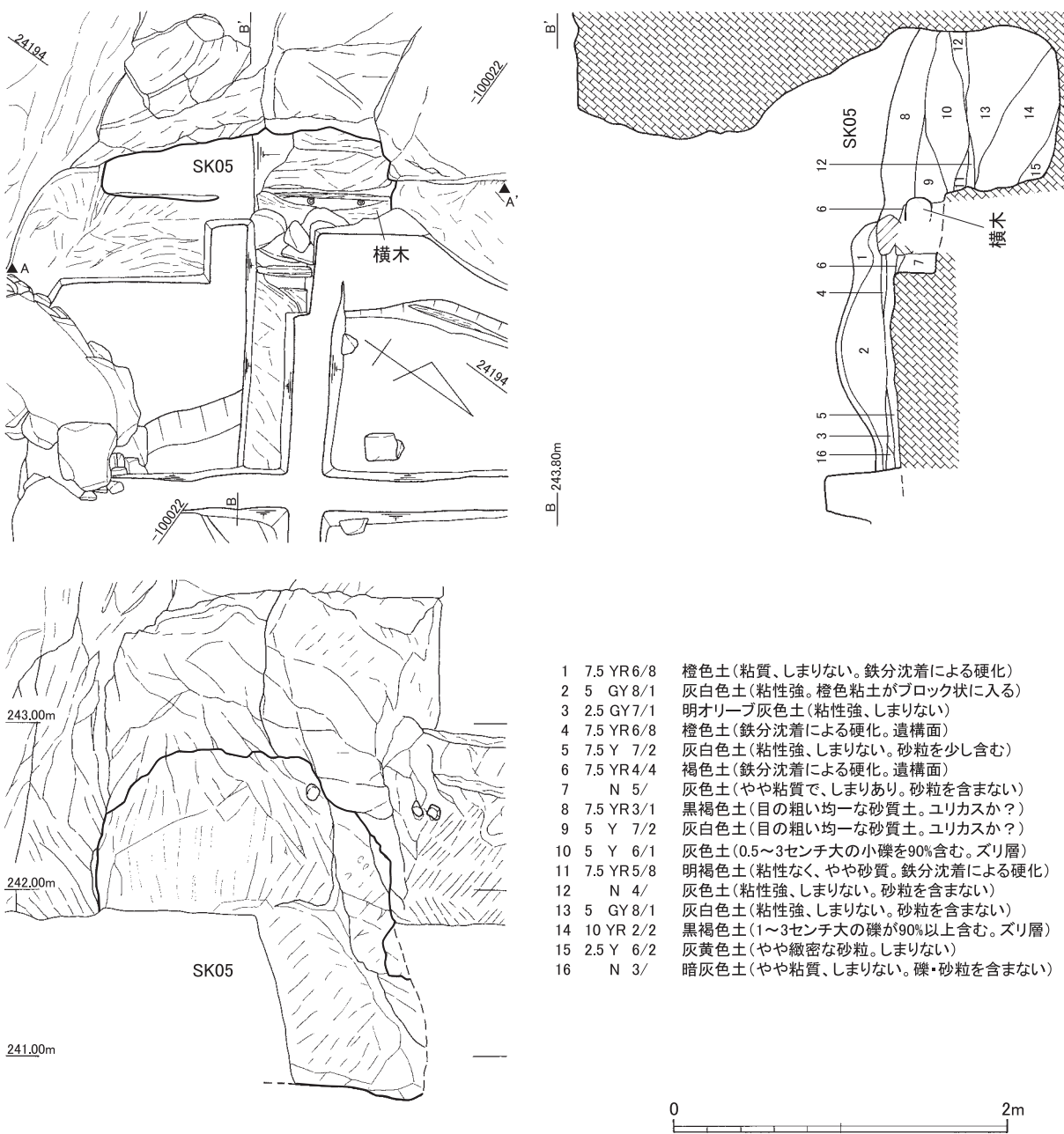


Fig.70 昆布山谷地区第5地点I区SK05平面図・立面図・土層断面 (S=1/40)

で碗状の明黄褐色粘質土の中に炭化物を多く含む黒色土が詰まっている。また、遺構の周囲は被熱し、変色していた。

S X 18 は I 区西部で検出された。S X 19 との境が分かりにくい、円形とするならば直径約 60cm、深さは約 10cm である。皿状の灰白色粘土の中に黒色の炭化物層と炭化物の混じる粘質土層が詰まっていた。S X 18 の下には被熱痕があり、火を使用した活動に伴う遺構とみられる。炭化物層内からはカラミや炉壁が出土していることは、炉跡の可能性を示している。出土したカラミには銅が酸化した緑錆を吹いているものも含まれていた。

S X 19 は S D 02-②の南端部で検出された。やはり S X 18 との境が判然としないが、平面形及び断面形より、直径 80cm 程度とみられる。被熱による変色が見られる灰白色粘土を皿状に敷き、その中に粘質土と砂質土の混じった淡黄褐色土と炭化物が詰まっていた。また、周囲の炭化物層からはカラミや炉壁が出土した。検出状況や周囲で出土した遺物から、炉跡の可能性はある。

S X 17～19 は先述したように、S D 02-②が整地によって埋設された後に形成された遺構で、S D 02-②の蓋石の直上に位置する。S X 17～19 の機能については、粘土を敷いてその中に炭化物を詰めるといった検出状況や、埋土やその周囲からカラミや炉壁が出土したことから製錬炉の可能性が高い。S X 17～19 はいずれも S D 02-②蓋石の上に構築されていることから、火を扱う際に溝による防湿効果を狙って構築された可能性も考えられる。

#### ⑥ S P 01～07

S X 02 内の岩盤上端部の標高 245.6～245.8 m の範囲 (S P 01～04) と、第 1 遺構面付近の標高 243.5～243.6 m の範囲 (S P 05～07) に掘り込まれていた。平面形はいずれも円形または隅丸方形で、S P 01～04 は径約 30cm、S P 05・06 は径約 20cm である。S P 01・02・04 は約 185cm 間隔、で直線に並んでいるため、一連の遺構である可能性が高い。S P 05～07 も、間隔や標高がそろっていることから、同じく一連の遺構とみられる。

#### 【S K 03】 (Fig.68・69)

第 3 遺構面に伴う水溜遺構で、壁面が石積みや叩き締めなどによって固められている。埋土にはユリカスが多く含まれていることから、選鉱作業において使用された遺構である可能性が高い。S K 03 の東部では桶の底の一部とみられる木製の板が出土しており、S K 03 に溜った水を桶に汲み出して利用していたことが想定される。

構築当初の規模は東西約 3.4 m、南北約 3 m で、深さは約 40cm であるが (S K 03- I 期)、南側の一部が意図的に埋められ (Fig.68-21～23 層)、南北 1.8 m 程度と狭くなっている (S K 03- II 期)。Fig.68 では確認できないが、I 期の底面とみられる 8 層は南壁まで延びており、その上に II 期の埋土が堆積している。なお、Fig.70 の 9 層も、Fig.68 の 8 層と同じく、I 期の底面と判断される。I 期の底面の上に、灰白色の粘土 (Fig. 68- 2 層) で盛り上げ、さらに黄褐色土 (Fig.68-21～23 層) を積み上げて埋土とし、II 期の範囲を構築している。II 期の側面の一部には木製の板が残っていることから、II 期の段階では側面が板張りになっていた可能性が高い。底部にも板があったが、側壁に貼ってあったものが落ちた可能性もある。埋土の上面 (Fig.68-21・23・24 層、Fig.70- 1 層) にはマンガンの沈着して硬化しており、埋設して遺構を狭くしてから引き続き選鉱作業が行われていたことが窺われる。

北壁と南壁は 30～40cm の割石を 3 段程度積み上げて石積みとしているが、東壁と西壁は素掘りである。南壁は S K 04 北壁と一体で、70cm 程度の畔状になっている。畔の上面には白色の粘質土が広がり、その下にはマンガンの沈着がみられた。この白色粘質土は II 期において内部を埋設していた土 (Fig.68- 2 層) と同じ性格の堆積層である可能性も考慮され、灰白色粘質土の上面が II 期に、その下のマンガンの沈着した面が I 期にそれぞれ対応している可能性がある。積方は、横長の石を積み上げるいわゆる横積みになっている。後述するが、第 5 地点道トレンチで検出された S W 08 と積み方としては共通しており、構築時期が近い可能性も考慮される。

本遺構の南端部には S K 04 とつながる溝があり、

S K 04 からあふれた水が流れ込むようになっている。この溝は上面に石を置いて暗渠状としているが、その石の下にも白色粘質土が入り込んでおり、I 期から機能していたかもしれないが、II 期の構築に際して補修されている可能性がある。南東端部には南東方向へと延びる溝 S D 07 が検出されており、S K 03 への導水とみられる。

埋土の最上層 (Fig.68- 1 層) はカラミを含む炭化物層で、堆積層内にはユリカスを含む層もいくつか確認できている (Fig. 68- 2・16 層など)。そのため、本遺構が使用されなくなった後には、製錬や選鉱に伴う廃棄物の捨て場となっていた可能性がある。

#### 【S K 04】 (Fig.68・69)

S K 03 の南側で検出された水溜遺構で、S K 03 と同じく第 3 遺構面に伴う遺構である。北壁が S K 03 の南壁と一体の構造となっており、S K 03- I 期とほぼ同じ時期に構築されたとみられる。検出された範囲は北側のみのため、全体の構造は判明していない。検出された東壁の一部と北壁は、30～50cm の横長の割石を 3 段積み上げて構築し、西壁は岩盤を利用している。積み方は S K 03 と同じく横積みである。大きさは、南北は不明であるが、東西約 3.4 m で、S K 03 と同程度の規模である。北西隅には S K 03 へとつながる溝 (Fig.68 の→部分) があり、溝の上には石を置いて暗渠状にしていた。この溝により、S K 04 から溢れた水が S K 03 に流れ込む構造となっている。

S K 03・04 の底面埋土からは肥前陶器の呉器手碗が出土しており、いずれも 17 世紀後半頃に利用されていたことが想定される。

S K 04 の埋土はほぼズリ層であり、炭化物やユリカスが含まれていた S K 03 とは埋土の様子が大きく異なっている。第 5 地点においては、生産活動が行われなくなった後にユリカス捨て場となり、その後ズリの廃棄場となったことが昨年度までの調査で判明しており、S K 04 については本地点がズリの廃棄場となった後に堆積したことが窺われる。このことから、S K 03・04 は同時に廃絶したのではなく、やや時期差があると考えられ、S K 03 が埋没したのちも S K 04 は機能していた可能性がある。

#### 【S K 05】 (Fig.68・70)

岩盤加工遺構 S X 02 の南側に掘り込まれた遺構である。構築当初は岩盤を直接加工しており、第 5 遺構面にもなって構築されたとみられる。幅約 1.7 m、奥行き約 1.1 m と、S K 03・04 に比べて小さいが、深さは約 1.15 m あり、非常に深い遺構である。標高 242.6 m 付近から 240.8 m 付近にかけて構築され、岩盤を奥に大きく穿り込んでいる。S X 03 の西部から本遺構に向けて設定したトレンチでは、S K 05 の東側に深さ 24cm、東西幅 48cm の段を設けていたことが確認できている。本来は 2 段であったことが判明している。この段差には、S K 03- I 期が構築される際に横木を置き、その上に石を並べて、S K 03 の底部と同程度の高さになるよう調節されている。埋土には灰白色の粘土層 (Fig.70-13 層) があり、S K 03- II 期において水溜を埋めている灰白色粘質土 (Fig.70- 2 層) と同一の堆積層である可能性がある。両者に層位的なつながりが確認できなかったため確証はないが、同一であるならば、S K 03- II 期が構築された際に S K 05 も埋められている可能性がある。13 層の直上には鉄分の沈着によって硬化した 11 層があり、埋設後には底面となっていたとみられる。

埋土にはユリカス (Fig.70- 8 層) やズリ (Fig.70-10 層) が含まれており、S K 03 の埋土と共通していることから、S K 03 とほぼ同時期に廃棄されたようである。凶化していないが、8 層よりも上には廃棄されたズリが堆積していた。

#### 【S D 06】 (Fig.60・62)

S D 06 は、調査範囲の東部で、S K 03 の北東付近を南北方向に延びる溝である。大きさは、最大幅約 60cm、内法約 40cm である。付近には 20～30cm 程度の石を並べている。また、北半部は S K 06 によって破壊されていた。第 3 遺構面に近いが、S K 03 よりも先行する可能性がある。

#### 【S D 07】 (Fig.60・68)

S K 03 の内部から S K 03- II 期へと接続する溝跡で、S K 03- II 期の構築と同時に造られた遺構とみられる。幅 30cm、底面幅約 20cm で、両側面には石を並べている。底面のレベルが南東ほど高くなることから、S K 03 へと水を入れるための給水設備の一部と考え

られる。本遺構の存在により、S K 03- II期の時期には、南東方向に水溜めや導排水設備などの遺構が存在していたことが想定されるが、設定した調査範囲内では検出できなかった。埋土にはユリカスが含まれていた (Fig.68-16・24層) ことから、S K 03 と同時期に廃絶された可能性が高い。

【S D 08】 (Fig. 60)

調査区中央部で検出された、南北に延びる素掘りの溝で、第4遺構面に伴う。規模は幅約30cm、深さ約15cmで、内部には木の棒が埋め込まれていた。木が空洞であれば導水管として機能していたかもしれない

が、そうはなっておらず、木を埋め込んだ意図は明らかとできなかった。S D 08 は地面を掘り窪めたものの簡素な溝で、石敷きや叩き締めなどの水がしみこまないような工夫が見られなかった。

【S D 09 ~ 11】 (Fig.73)

調査範囲の最下面である第5遺構面において検出された。岩盤を穿り込んだ溝で、いずれも幅30~50cm、深さ50cm程度である。S D 09 は南北方向、S D 10・11 は東西方向に延びている。また、S D 09 の一部には西側へ続く溝が確認できている。平成26年の調査で確認されていたS D 02 と同時期に穿り込

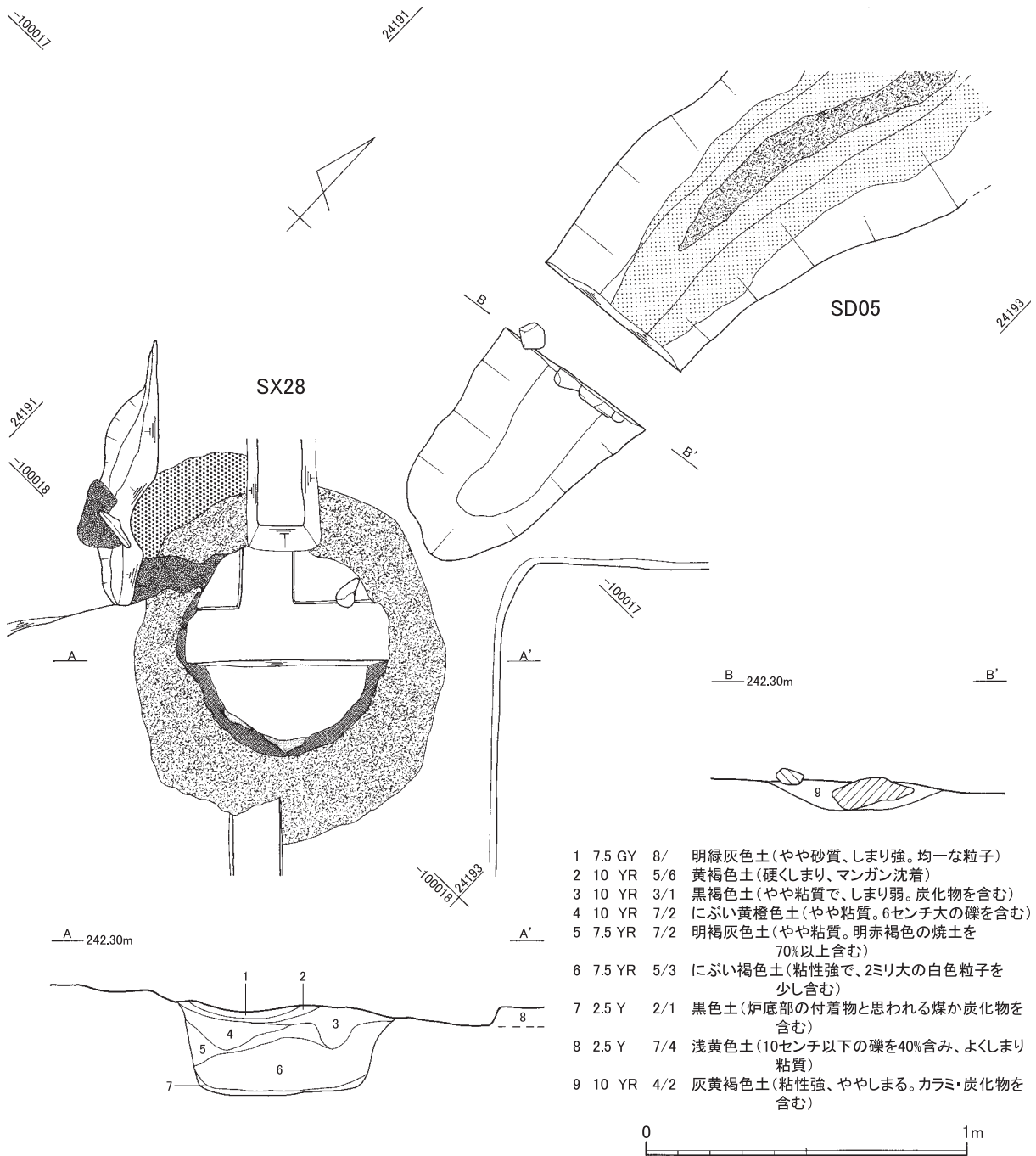


Fig.71 昆布山谷地区第5地点I区SX28・SD05平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

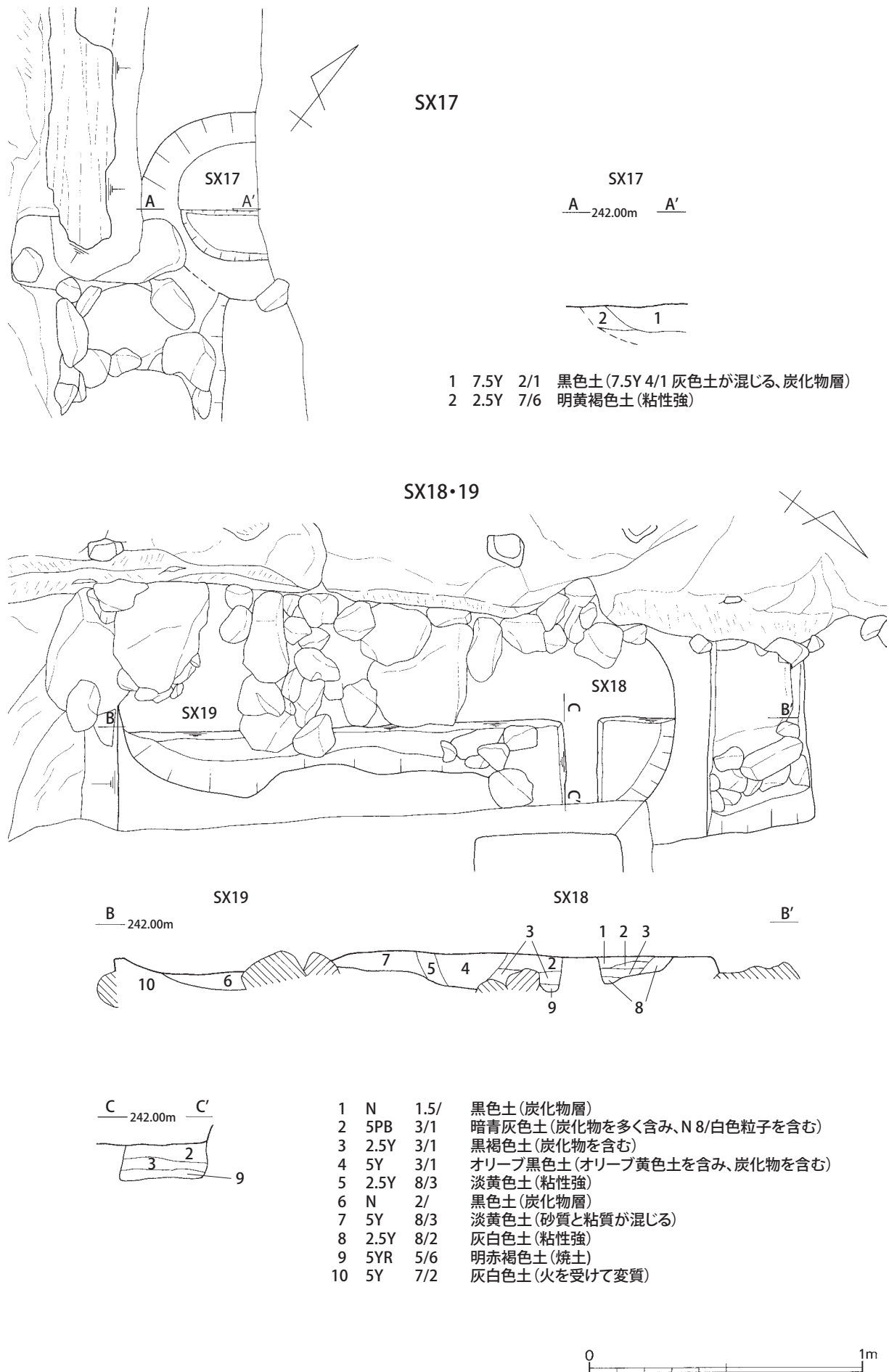
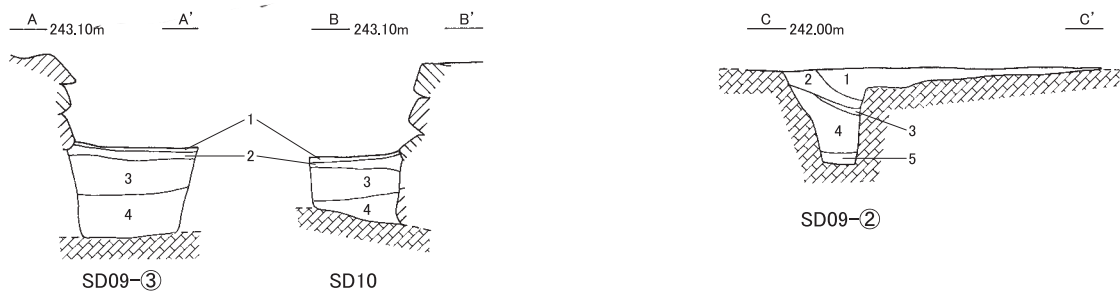
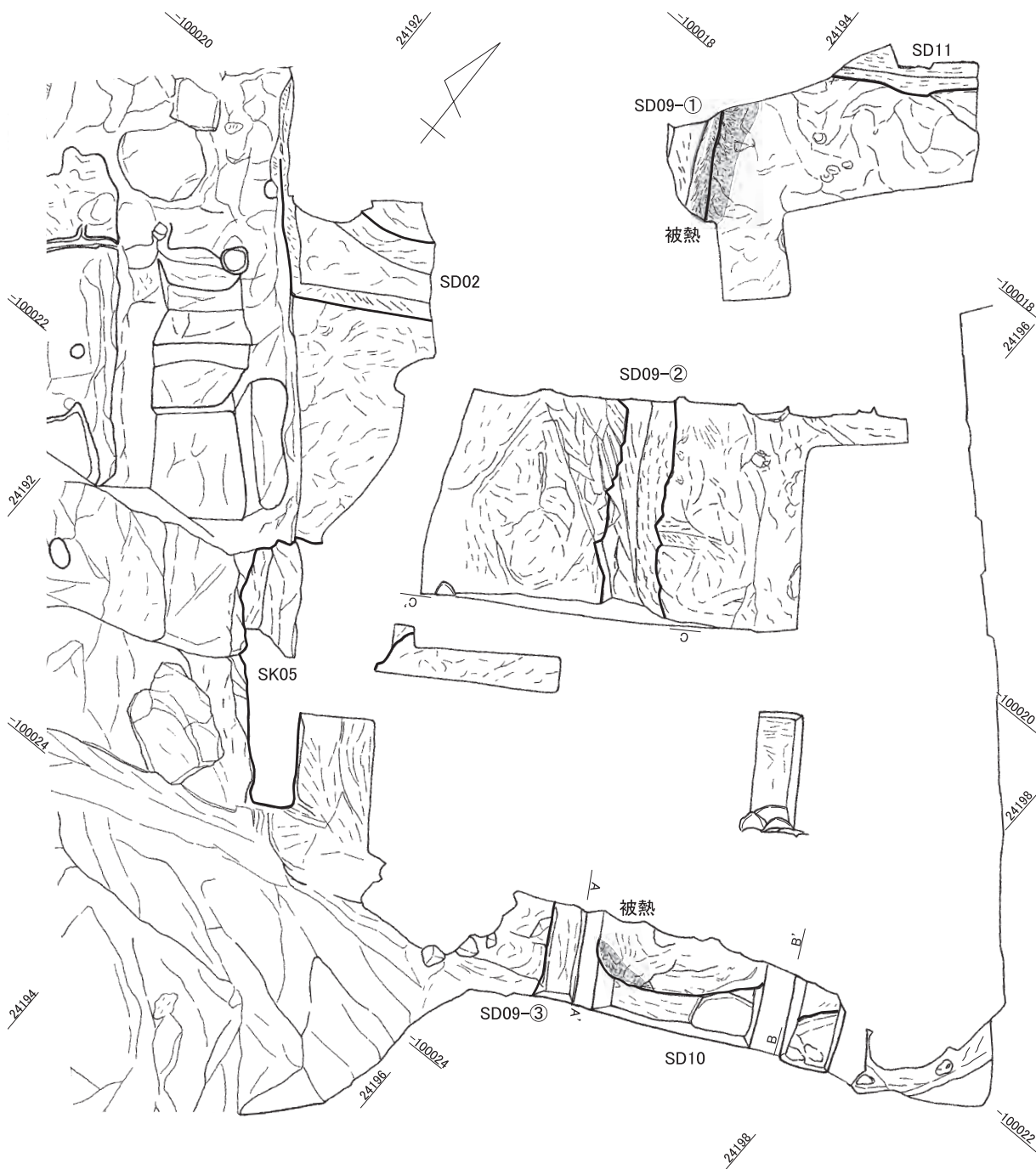


Fig.72 昆布山谷地区第5地点I区SX17・18・19平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)



- |   |            |                                    |   |           |                                  |
|---|------------|------------------------------------|---|-----------|----------------------------------|
| 1 | 7.5 YR 6/8 | 橙色土(鉄分沈着による硬化層)                    | 1 | 2.5 Y 5/2 | 暗灰黄色土(粘質強。SD09埋土)                |
| 2 | 10 YR 6/1  | 褐灰色土(粘質強、しまりあり。2~5ミリ大の小礫を5%程度含む)   | 2 | 2.5 Y 6/4 | にぶい黄色土(粘質強。SD09埋土)               |
| 3 | 10 YR 6/2  | 灰黄褐色土(粘性強、しまりあり。1~2センチ大の礫を10%程度含む) | 3 | N 4/      | 灰色土(緻密な粘質土。SD09埋土)               |
| 4 | 2.5 Y 6/2  | 灰黄色土(粘性強、しまりあり。砂粒をほとんど含まない)        | 4 | 7.5 Y 3/4 | 暗褐色土(しまりあり。目の粗い砂質土。上面マンガ沈着による硬化) |
|   |            |                                    | 5 | N 3/      | 灰色土(粘質強。カラミを含む。整地層)              |

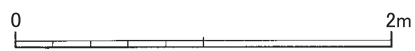


Fig.73 昆布山谷地区第5地点I区SD09~SD11平面図・土層断面図 (S=1/40)

まれ、利用されていた遺構と判断できる。S D 09 と S D 02、S D 10 と S D 11 など、平行になっている溝同士でも若干軸がずれており、岩盤上を整然と区画してはいない。

遺構面である岩盤は平らだが、S D 09 底面は北へ向けて、S D 10・11 は東へ向けて下がっていることから、排水溝として機能していた可能性もある。ただし、排水目的であるならば南北方向の S D 02 もしくは S D 09 のどちらかで十分と想定されることから、普通の排水以外の機能が想定される。検出範囲が限られていたこともあり、調査では明確にできなかった。S D 09 には 2 箇所被熱痕が認められ、上部に炉跡などがあった可能性もある。S D 02 の埋土からは磁器が 1 点出土していたほか、本年度の調査では岩盤面から九州陶磁編年における I 期に相当する肥前陶器が出土している。本地点におけるもっとも古い段階の活動痕跡として重要な遺構である。

#### 【S D 05】(Fig.71)

S D 05 は調査区の北部で検出された幅約 60cm の素掘りの溝である。底面の一部に灰白色の粘土が残っており、本来は底面が粘土貼りになっていた可能性がある。底部に帯状の被熱痕が確認できるほか、埋土にはカラミや炭化物が多く含まれていた。S D 05 の南には炉跡 S X 28 が所在することから、本遺構は S X 28 から排出されたカラミや炭などを掻き出すための排滓溝であった可能性が高い。

#### 【S P 08】(Fig.59)

S P 08 は I d 区北壁で確認された遺構で、幅 20cm、深さ 60cm の柱穴である。埋土内には柱材とみられる木質が残っていた。第 3 遺構面から掘り込まれている。

#### 【S X 28】(Fig.78)

S X 28 は、調査区北半部で検出された炉跡である。直径 60～70cm 程度の円形で、深さは 25cm である。炉の周辺の 20～40cm の範囲は被熱し、赤褐色を呈している。被熱痕の周辺には粘土が残存していた。炉壁は底部に向かうにつれて、わずかに内側に張り出すが、ほとんどまっすぐ立ち上がっている。炉壁は固くしまっているが、もろく崩れやすい。また、炉壁の表面には広い範囲にススが付着しているが、ススのはが

れた箇所では白～赤色の本来の壁面が観察できる箇所もある。底部には厚さ 2cm 程度の炭化物層 (Fig.78-7 層) があった。先述したが、S X 28 とその北側にある S D 05 とは一体の遺構とみられ、S X 28 から排出されたカラミや炭を S D 05 へと掻き出していたと想定される。排滓溝を伴う炉跡の検出は、石見銀山遺跡地内全体においても初であり、炉の構造を解明する上で非常に重要な遺構といえる。

埋土には一部に炭化物や焼土を含んでいるが、多くは均質な粘質土であることから、意図的に埋められた可能性が高い。周辺からは炉壁の残骸が出土しており、使用されなくなった後には壊されたとみられる。埋土や周囲の土などはサンプルとして採取しており、今後の科学的な分析調査によって目的金属など、より詳しい状況が明らかとなることが期待される。

本遺構の構築面からは呉器手碗の破片が出土しており、S K 03・04 と同じく 17 世紀の後半には利用されていた遺構と判断される。しかし、一般的に炉を構築する際には、事前に地面の焼き締めをするなど、水分を可能な限り避ける工夫がなされる。検出状況より、S X 28 は S K 03・04 の後で構築されたことが確認できているが、S X 28 と S K 03・04 が共存していたとは考えにくいことから、少なくとも S K 03 に水溜めとしての機能がなくなった後に構築されたと想定される。なお、S X 28 周辺では炉跡の可能性のある焼土面が複数確認できており、炉を作り替えての操業が行われていたことが窺われるが、調査期間内には十分な調査ができないと判断されたため、存在を確認する程度に止め、現状で保存しておくこととした。

#### 【S X 30】(Fig.59・71)

S X 28 の西側で確認された炉跡で、S X 28 の前に操業されていたとみられる。埋土には灰が充てんされていた。本遺構は、S X 28 のほぼ真下に所在しており、S X 28 を完全に掘り上げないと調査ができない状態であった。そのため、本格的な調査は実施せず、所在を確認した程度に止めた。

### 第 3 項 II 区

#### (1) 調査区の概要 (Fig.57・74)

II 区は I 区の東側に位置し、東側は水路と道に面している。調査前から地表面上に一部の礎石が露出して

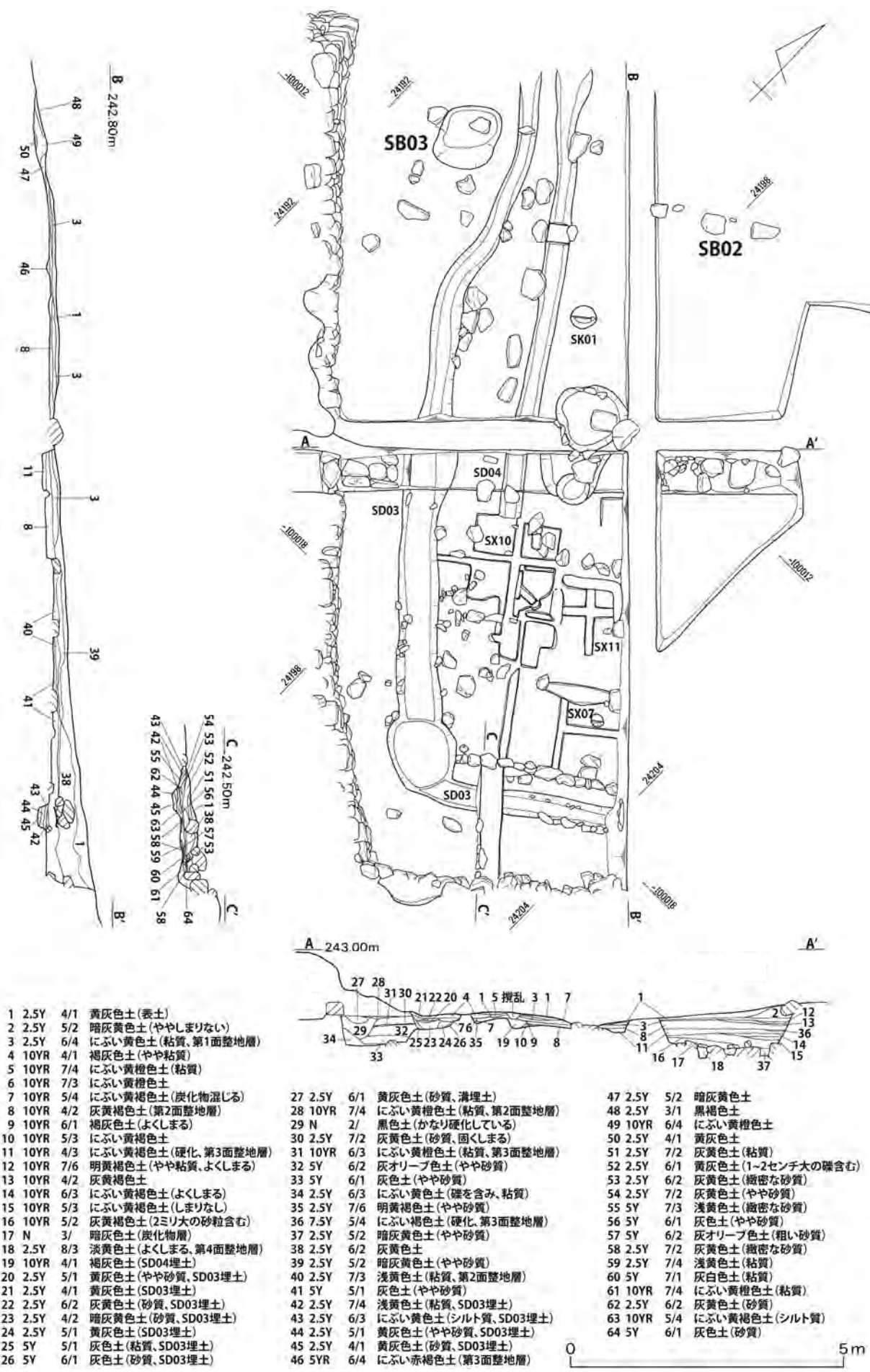


Fig.74 昆布山谷地区第5地点II区平面図・土層断面図 (S = 1 / 100)



おり、建物遺構 ( S B 02 ) が存在することが明らかであった。調査によって 4 枚の整地面とそれらに伴う遺構が確認された。

## ( 2 ) 層序 ( Fig. 74 )

第 II 区で確認された各整地面の様相は以下のとおりである。

### 【第 1 面】

第 3 層上面で、表土直下で検出された。標高は 241. 70 ~ 241.82 m である。第 1 面は II c 区東壁の北部と II d 区北壁では確認できるが、調査区の西半部で表土付近が一部攪乱されており、不明瞭になっている。また、調査区北半部と南半部においても不明瞭である。

### 【第 2 面】

第 8 層上面で、第 1 面から約 5 cm 下で検出された。標高は 241. 70 ~ 241.80 m である。S B 02 などの II 区で検出された遺構の多くは第 2 面に伴う。また、I・II 区の境に位置する S W 02 も第 2 面から立ち上がっている。上面及び第 1 面からの堆積層内からは広東碗や端反碗などの磁器や、在地系の陶器類が多く出土している。広東碗は出土数が少なく、端反碗が主体となっていることから、19 世紀前半 ~ 19 世紀中頃まで利用されていたと考えられる。

### 【第 3 面】

第 11 層上面で、第 2 面から約 10cm 下、標高は 241.54 m である。II c 区北壁の一部と II d 区北壁で確認した。第 2 面からの堆積層を深く掘り込んだ部分で確認された整地面のため、面的な広がりには明らかではない。出土遺物より、18 世紀後半から利用されているとみられる。第 1 ~ 3 面はそれぞれ下位の整地面の直上を整地しており、各整地面の間に堆積層を挟まない。第 1 面までは時期幅が少ないことや、大規模な土地の改変が確認できないことなどから、第 3 面から第 1 面までは連続して利用されていた可能性がある。

### 【第 4 面】

第 18 層上面で、II d 区北壁及び II c 区北端の下層確認トレンチで確認された。第 3 面から約 25cm 下で、標高は 241.2 ~ 241.3 m である。直上の第 17 層は炭層であった。面的な広がりには確認できていないが、第 3 面との間に堆積層をいくつか挟んでおり、ある程度

期間が空いていた可能性がある。堆積層から遺物はほとんど出土しなかった。

## ( 3 ) 検出遺構

### 【 S B 02 】 ( Fig. 74・75 )

S B 02 は II 区の中央部、II a ~ c 区にまたがって検出された礎石建物跡である。長辺は約 10.5 m、短辺は確認できた範囲では 4 m だが、遺構面が東に向かって広がっており、6 m 程度まで大きくなる可能性が高い。柱間は長辺が八間、短辺が四間以上で、礎石同士の間隔は約 0.8 m である。建物内には S D 04 や S X 07・09 ~ 11 が、建物外には S D 03 など、多くの遺構を伴っている。床面を部分的に補修している様相が、堆積状態から確認できた。S B 02 に伴って、端反碗を中心とする石見銀山編年 6 期に該当する遺物がまとまって出土しており、19 世紀前半から 19 世紀中頃まで利用されていたとみられる。かなり大規模な建物であり、出土遺物にも古伊万里が含まれているなど、一般的な作業施設や住居とは様相が大きく異なっている。文献史料には昆布山谷の位置に番所が描かれている絵図もあり、この建物跡が番所に比定できる可能性もある。

### 【 S B 03 】 ( Fig. 74・75 )

S B 03 は II a 区の北西端部に位置する小規模な礎石建物跡である。長辺約 3 m、短辺約 2 m で、柱間は長辺が三間、短辺が二間である。遺構西側の一部が S B 02 と重複しているが、礎石の一部が S B 02 の床面よりも下にあることから、S B 02 よりも古い建物と判断できる。建物内に窪みがあることと、建物規模から外便所の可能性がある。

### 【 S D 03 】 ( Fig. 75 )

II a・c 区で検出された溝状遺構である。S B 02 の周りを囲むように配されており、北端部は 5 地点と 2 地点の境である法面まで延びる。機能としては、S B 02 に雨水などが入らないようにするための排水溝などが想定される。幅は 40 ~ 75cm で、深さは約 20 cm である。地面を掘りくぼめ、底面には粘土貼りがされている。縁の一部で 10 ~ 15cm の円礫が検出され、少なくとも一部の縁には石が並べてあったとみられる。S B 02 の周りを巡るほか、S B 02 内の S X 10 にも取りつく溝が伸びているが、両者は無関係とみ

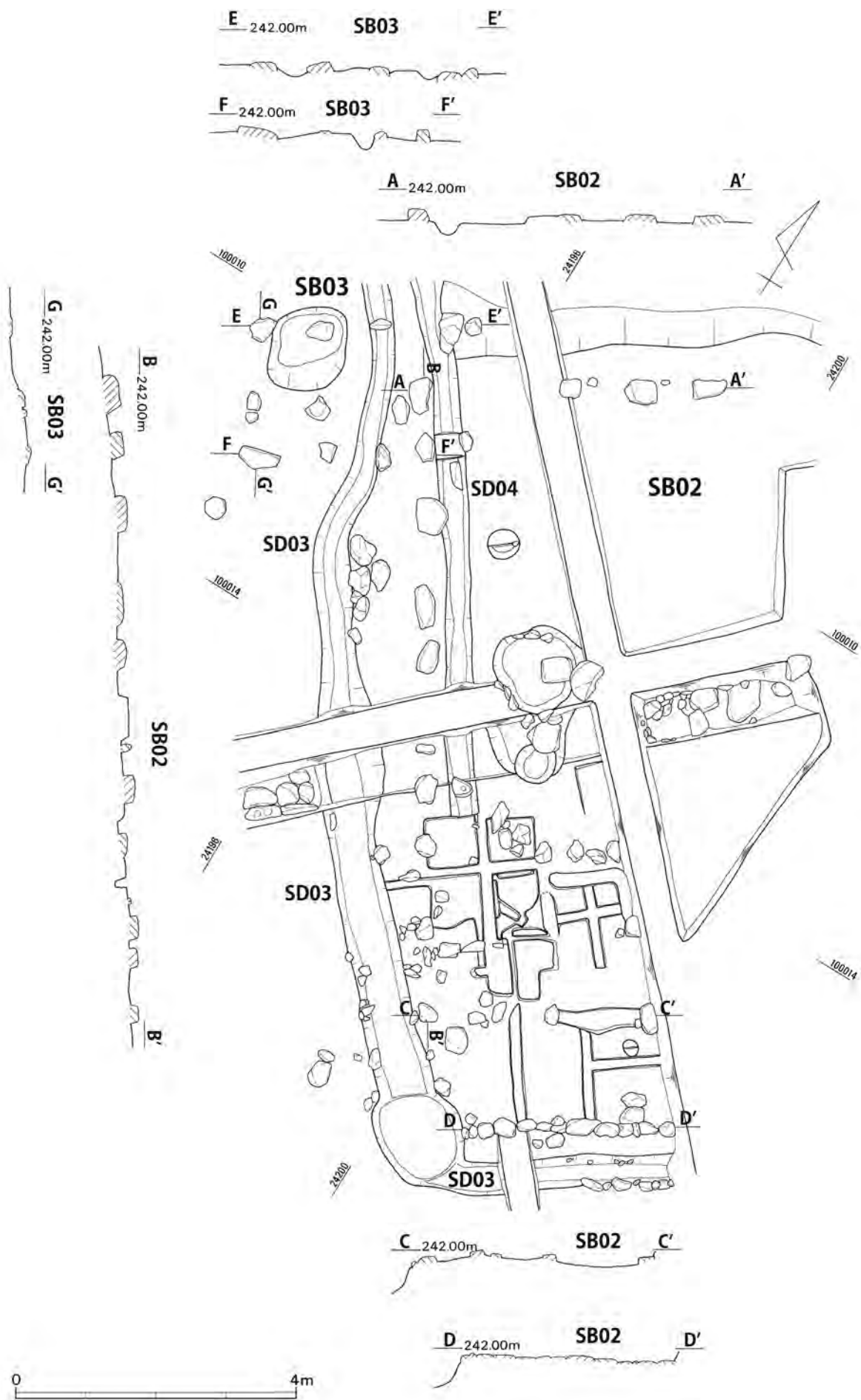


Fig.75 昆布山谷地区第5地点II区SB02・SB03平面図・断面図 (S=1/80)

られる。Ⅱc区の南部では一部が後世のかく乱によって壊されている。また、Ⅱc区北壁付近では溝の縁に杭の跡が50～80cm間隔で残っており、板橋がかけられていた可能性がある。埋土内からはSB02と同じく石見銀山編年6期に相当する遺物が出土しており、19世紀初頭～19世紀中頃の遺構と判断できる。

【SD 04】(Fig. 75)

SD 04はⅡa・c区のSB 02内で検出された溝状遺構で、SB 02西壁と平行している。幅は35～40cmで、調査区北部の法面付近では約65cmまで広がっている。深さは約15cmでSD 03に比べてやや浅い。北端部は法面に、南端部は後述するSX 10につながっている。

【SK 01】(Fig. 74・76)

Ⅱa区の東壁沿いで検出された直径47cmの円形の土坑である。深さは12cmで、断面形は皿形である。埋土には炭化物が多く含まれており、黒色を呈しているが、土坑内及び周囲に被熱痕はなかったことに加え、カラミなども出土しなかった。炉跡ではないが、埋土内から遺物が出土しなかったこともあり、性格を明らかとすることはできなかった。

【SX 07】(Fig. 74・76)

Ⅱc区の南東部で検出された円形の遺構である。直径23cm、深さ9cmで、断面形は皿形である。底面に厚さ1cm程度の炭化物層があり、その上に黄褐色粘質土を充填していることから、製錬炉とみられる。遺構の周囲に粘土を敷いて埋める典型的な炉の構造で、粘質土は廃棄された際に意図的に埋められたと判断される。炉としては小さい部類であるため、本格的な製錬炉ではなく、銀の品位を確かめるための試し吹に使われた炉跡の可能性もある。

【SX 08】(Fig. 58・75)

Ⅱc区の東部、SB 02の礎石の間で検出された溝状の遺構である。幅は約35cmで、深さは約20cmである。礎石の間をつなぐようになっており、壁の下部構造とも考えられる。

【SX 09】(Fig. 58・75)

Ⅱc区の中央部で検出された。赤褐色の固い面を層状に叩き締めた遺構で、遺構面から10cm程度高くなっている。平面形は約1.4m×0.9mの長方形で、長辺

の中央部に幅約10cm、深さ約10cmの溝があり、東西に分かれている。溝の側壁は垂直に立ち上がっており、板状のものが挟まっていた可能性がある。北側の長辺には礫が並んで埋め込まれていた。

【SX 10】(Fig. 74・76)

Ⅱc区のSB 02内で検出された遺構で、平面形は一辺約155cmの方形で深さは約10cmである。地面を掘りくぼめて作られた遺構で、床面は硬化している。北部に法面まで延びるSD 04が取りついている。また、南東部分にはSX 09・10の方向に延びる溝が掘られており、それぞれが関連する遺構であった可能性があるが、性格は不明である。類例の検出が待たれる。

【SX 11】(Fig. 74・76)

Ⅱc区の東部で検出された。東部の一部が東壁内にかかっているため全体の検出はできなかったが、検出された範囲では外側が東西130cm、南北90cm、内側が東西92cm、南北55cm、深さ約10cmである。遺構の南側はなだらかに立ち上がっており、遺構面と明瞭に区別できなかった。掘り込みの周囲は灰色の硬質土を南に開くコの字形に成形しており、遺構内には小礫を多く含む固い明黄褐色土がつまっていた。周辺に炭化物や焼土の散布はなかったが、遺構の周囲10cm程度のコの字形の範囲が硬化しており、使用に伴って変化した可能性がある。遺構の用途は不明である。

【SX 12】(Fig. 58)

Ⅱc区の北東端で、東西ベルトの南に設定したサブトレンチ内で検出された遺構である。標高は約241.3mで、層序でも述べたが、Ⅰ区の第5遺構面に伴う遺構と考えられる。一辺40～50cm程度の上面が平らな石を敷き詰めており、石敷き遺構と考えられる。トレンチ内では4個が検出されており、かなめ石を転用したものも見られる。

【SX 13】(Fig. 58・77)

Ⅱb区の北東隅で検出された遺構である。30～60cmの礫を東西方向と南北方向に並べており、検出された範囲では東西方向は礫2個で幅約1.4m、南北方向は礫5個で幅約1.7mである。建物の敷地を区画するための石列とみられ、SW 05とSX 13の間は幅約1.8mの通路状になっている。東西方向の石列には中央部に隙間があるが、本来は石を置いていた可能

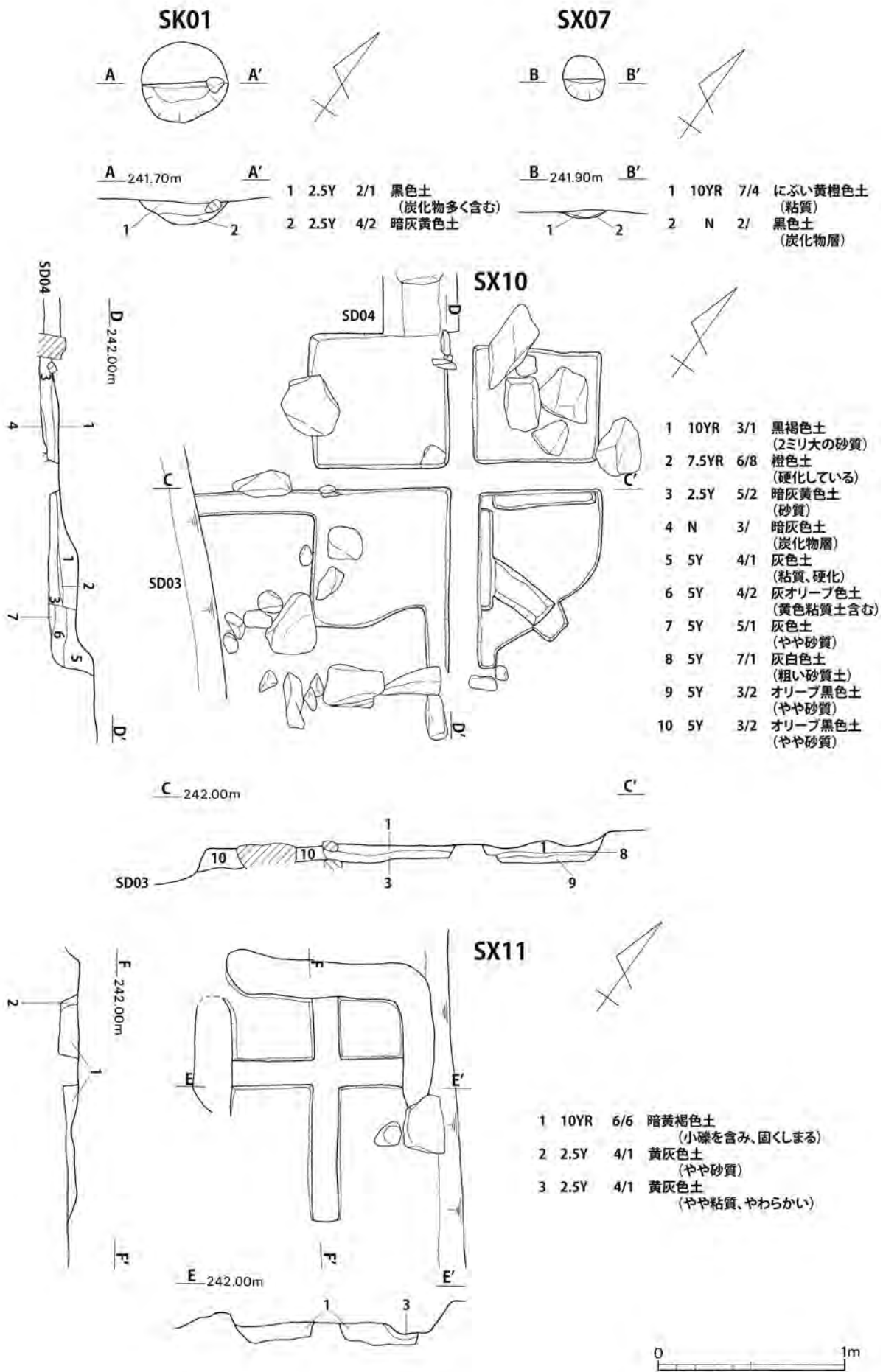


Fig.76 昆布山谷地区第5地点II区SK01・SX07・10・11平面図・断面図 (S=1/30)

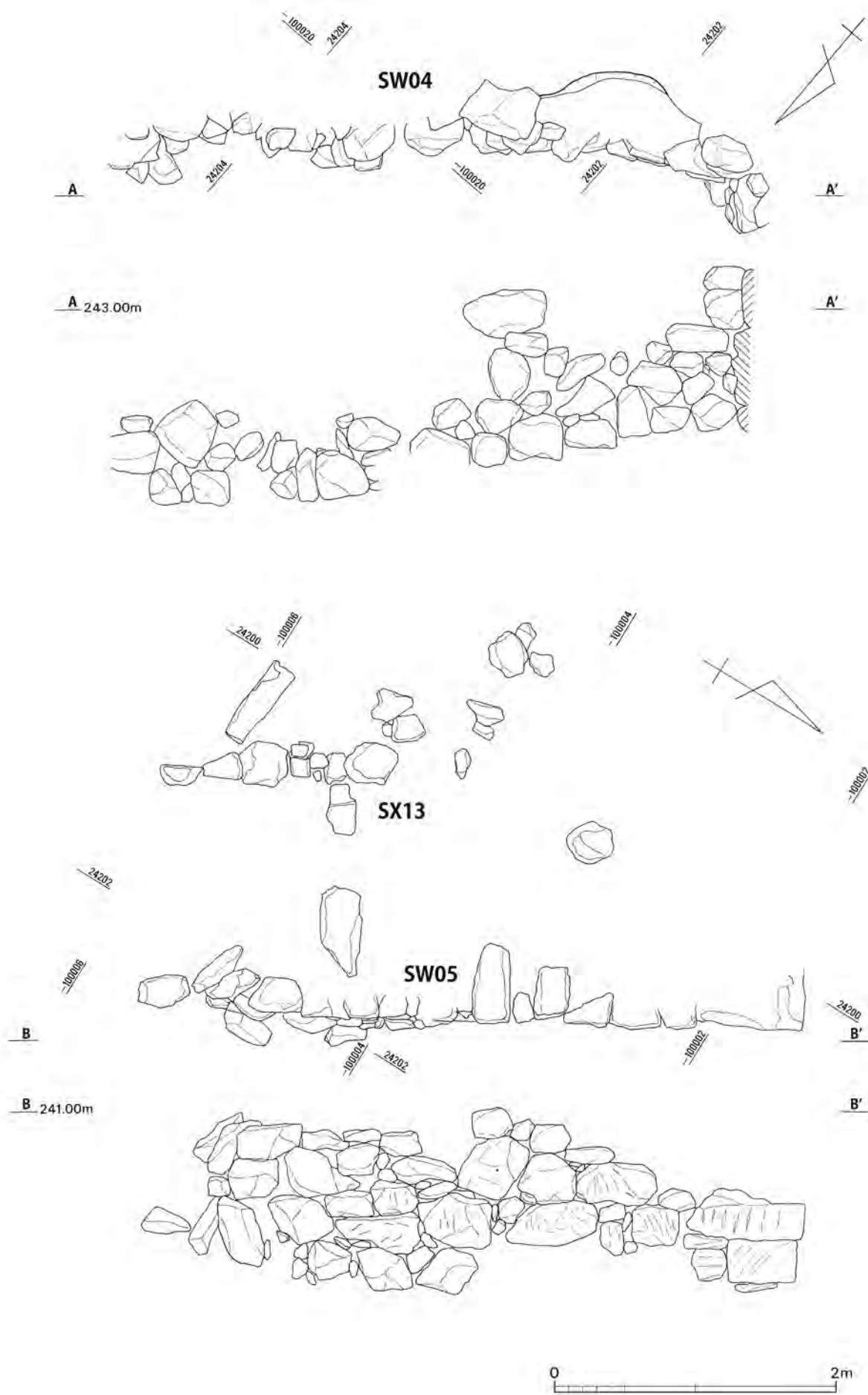


Fig.77 昆布山谷地区第5地点II区SW04・05平面図・立面図 (S=1/40)

性がある。

【S W 04】(Fig. 58・77)

S W 04 はⅡ区南端部に構築された幅約 4.4 m の石垣で、上半は崩れている部分が多い。S W 02 の東側と直角に接しており、Ⅲ区北側の区画を広げる際に構築したものと思われる。高さは約 1.2 m で、最高点の標高は約 242.3 m、基底部の標高は約 241.6 m である。築石には凝灰岩質の割石を使用している。大きさは幅 20～40cm で、積み方は乱積みである。S W 02 の基底部よりも高い面から積み上げられており、S W 02 に後出する遺構である。

【S W 05】(Fig. 58・77)

S W 05 はⅡ b 区北東端部の幅約 5.2 m にわたって構築された石垣である。高さは約 1.3 m で、最高点の標高は約 243.0 m、基底部の標高は約 241.7 m である。調査区東側の道とⅡ区の平坦面を区画するための石垣とみられる。

築石には S W 01・02 と同様に凝灰岩質の割石を使用している。築石の多くは不定形だが、表面に鑿の痕が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が窺える。築石の多くは幅 30～80cm で、隙間に幅 10～15cm の小礫を詰めている。石積みの前面は割合整えられており、高さを調節しながら積んだ過程が窺える。北端部は四角形に成形した石を重ねて端部を整えており、算木積みとしていた可能性が高い。裏込めにはズリとみられる小礫と粘質土が詰まっていた。

#### 第4項 Ⅲ区

##### (1) 調査区の概要

第Ⅲ区は調査区全体の南部に位置し、礎石建物跡(S B 04)を主とする調査区である。発掘調査によって、S B 04 は内部から鍛冶炉とみられる遺構等が検出されたことから、調査時点より鍛冶跡の可能性が考慮されていたが、調査後に実施した土壌の科学分析によって裏付けられることとなった。S B 04 は、調査前には一部が見える程度であったが、調査によって全体が検出され、特に流土に覆われていた西半部は非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

##### (2) 検出遺構 (Fig.78)

【S B 04】

S B 04 は割石の基礎の礎石建物である。軸は南西

方向で、規模は東西約 5.7 m、南北約 5.0 m である。礎石は岩盤や S B 01・02 と同質の凝灰岩質の石材で、表面には鑿による加工痕がみられる。S B 01・02 とは異なり、礎石を隙間なく並べている。基礎の割石は西部では平坦なものを、東部では最大で厚さ約 80cm の分厚いものを使用している。基礎上面の大部分は平らに加工しており、土台建物の基礎であったとみられる。東面の一部には土台をのせるための段状の加工が設けられている。基礎の南東部には建物の外につながる溝が掘られている。南面は礎石が一部抜かれている可能性もあるが、北面の2つは礎石を切り込んでいた。床の西側は岩盤及び基盤層の上に粘土を貼り、東側は整地土の上に粘土を貼っている。整地土内 (Fig.78、第7層) から明治期のものとみられる石見焼の破片が出土したことから、明治時代以降に建てられた建物と判断されていた。その後、藤田組の『要書録』にも番地がずれているものの、S B 04 と同規模の建物を建て、鍛冶場としていたとする記述が確認され、考古学的にも、文献史的にも藤田組の鍛冶場であることが裏付けられた。個別の遺構については後述するが、内部には土坑 S K 02・03、粘土貼りをした S X 14、鍛冶炉 S X 15・16 など、鍛冶に関連する遺構が検出されている。また、埋土のサンプリングを実施した上で、土壌分析を委託により実施した。科学分析の詳細については後述するが、分析によって鍛造剥片が検出されており、鍛冶場であったことがさらに裏付けられている。

S B 04 の北側に設定したⅣ区北拡張区では、重ねた瓦が礎石に沿って並べられていた。出土した瓦はほとんどが平瓦だが、隅瓦なども含まれている。また、燻瓦や釉薬瓦など時期の異なるものが混在している。

【S K 02】(Fig.78・79)

S K 02 は S B 04 の東半部に位置する。平面形は一部がやや凹む円形で、直径は 40～45cm である。遺構の南側に小穴があり、金床を固定していた杭の穴の可能性もある。深さは約 20cm で、埋土の上半は炭化物を多く含む黒色土、下半はスラグや粉炭が二次的に固まった再結合滓状の堆積物である。

【S X 14】(Fig.78・79)

S X 14 は、S B 04 の南端で検出された遺構である。

平面形は、不整な長方形をしているが、東部はかく乱により不明瞭である。また、西端部は土層観察用畦の下となるため、全体規模は不明で、現状で検出した規模は長辺約 120cm、短辺約 70cm、深さ約 15cm である。畦の西側では遺構が確認されなかったことから遺構西端は畦内で収束していると考えられる。遺構は建物南側の礎石に接して平行に掘られており、底面は皿形をしている。遺構内の北端では遺構端部に沿って幅約 10cm の黄色粘土が直線的に検出された。この粘土の南面は、高さ約 10cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。土層図 (Fig.78) では確認できないが、底面直上で検出された灰黄色粘質土 (Fig. 78、第 3 層) 上では一部硬化した面がほぼ水平に確認された。この面で黄色粘質土が途切れており、黄色粘質土はここから構築さ

れたと考えられる。こうした検出状況から、本遺構は一度掘り下げた後、灰黄色粘質土で整地し、何らかの構築物を設置した痕跡と解釈することが可能である。また、土層確認用畦で黄色粘土及び硬化面が確認できなかった理由については、遺構の西端部にあたることから、構築物がこの位置にまで及んでいなかったと推定することができる。

S X 14 は建物南側に接していることから、想定される構築物は建物南壁にほぼ接して平行に設置されていたと考えられる。黄色粘土の南端から礎石までの距離は約 45cm であるため、長さは不明ながら幅 45cm 程度の構築物が推定される。

本遺構は、上記の検出状況に加え、遺構の北東側に存在する鍛冶炉 (S X 15)、鉄床跡 (S K 02) との位

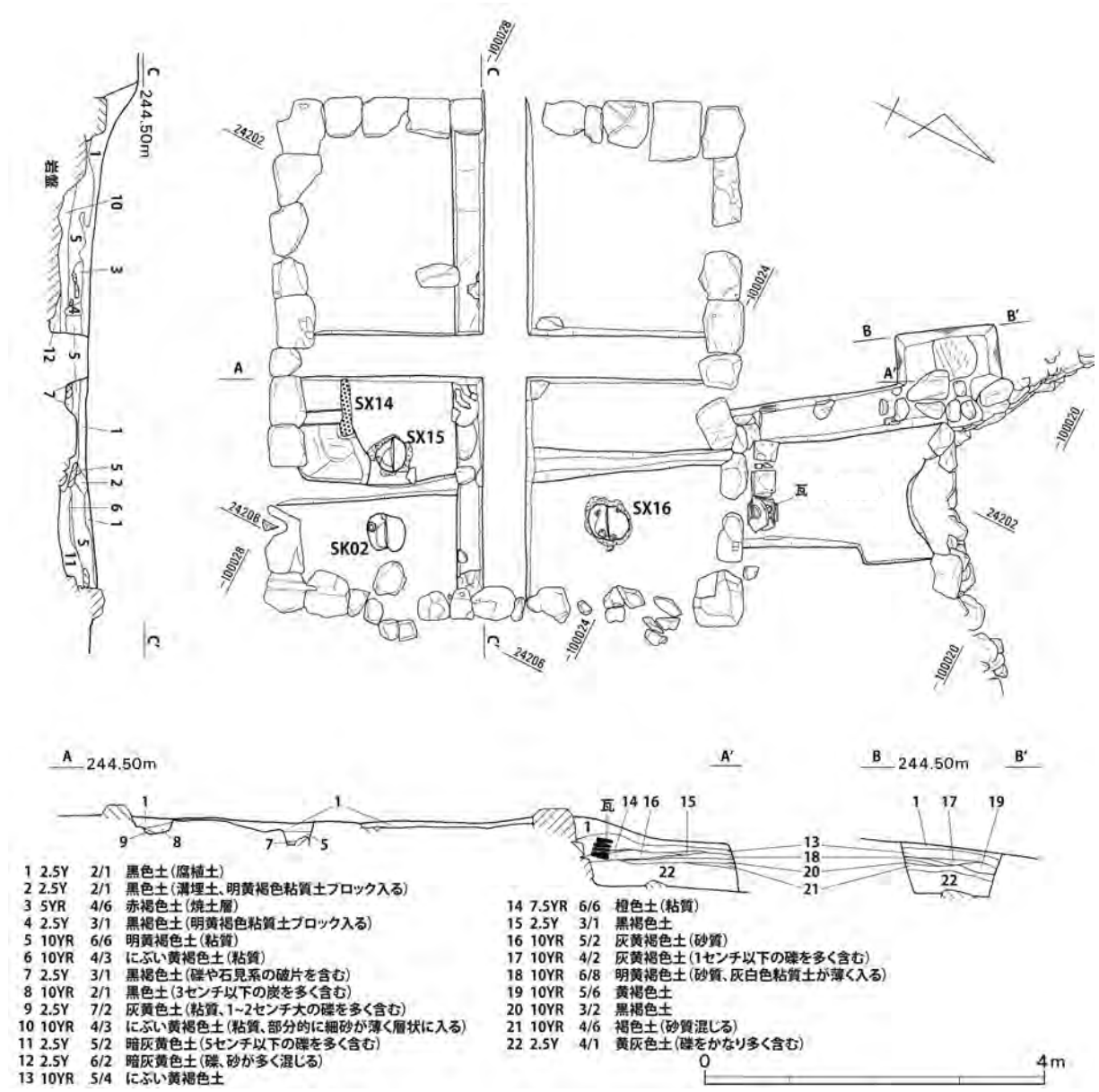


Fig.78 昆布山谷地区第5地点III区SB04平面図・断面図 (S = 1 / 80)

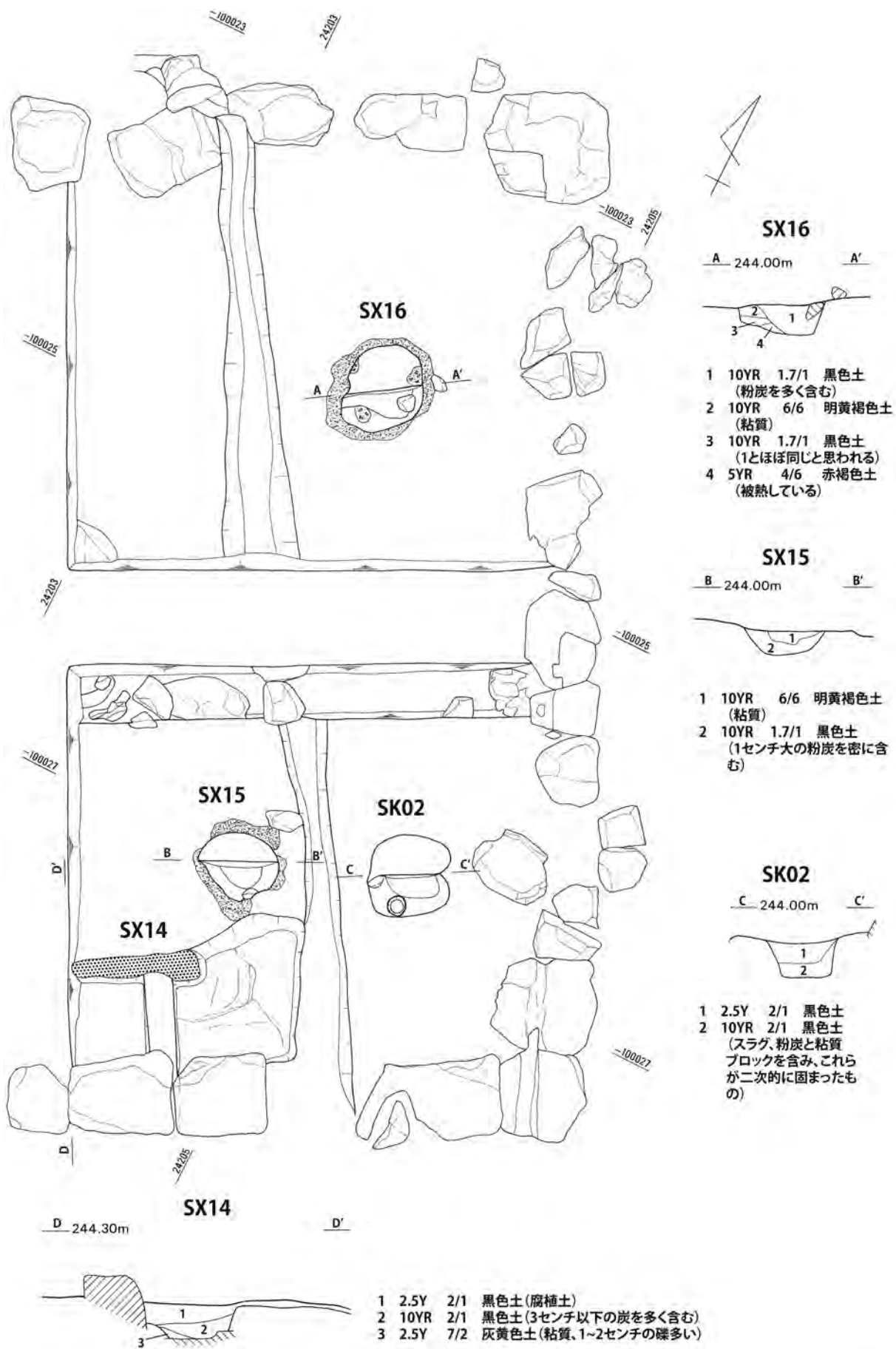


Fig.79 昆布山谷地区第5地点III区SK02、SX14・15・16平面図・断面図 (1/30)



置関係などから、鞆座の可能性が高いと考えられる。

#### 【S X 15】(Fig.78・79)

S X 15はS B 04の南東部に位置する。平面形は直径約45cmの歪んだ円形で、深さは13cmである。埋土内には1cm大の粉炭を密に含む黒色土層があり、遺構の周囲5～10cmの範囲は被熱している。検出状況より、鍛冶炉とみられる。

#### 【S X 16】(Fig.78・79)

S X 16はS B 04の北東部に位置する。平面形は直径約38cmの不整形円で、深さは15cmである。遺構の周囲5～10cmが被熱しており、遺構埋土に粉炭を多く含む黒色土が含まれていることから、鍛冶炉の可能性もある。遺構の西部に10cm弱の粘土塊があり、その下には炭化物がみられることから、本来は直径約45cmの大きさであったが、一部を改修して小さくしている可能性がある。

### 第5項 道トレンチ (Fig.80・81)

#### (1) トレンチの概要

平坦面と道との関係を把握し、空間の利用状況を明らかにすることを目的として、第5地点の東部に設定したトレンチである。本トレンチでは、第8地点と同様に道と石垣(S W 07・08)が検出された。第8地点で検出されたS W 06に比べ、S W 07は深く埋まっていなかったため、下層確認を実施したところ、さらに古い石垣(S W 08)が検出された。S W 08の検出によって、江戸時代においては道や宅地の整備が継続的に行われていたことが明らかとなった。

#### (2) 層序 (Fig.80)

道トレンチでは遺構面が4面確認された。各整地面の様相はFig.80の通りである。埋土はほとんどが水害などで流入した土砂とみられる。

第1面は4層上面である。4層は上面が硬化しており、道路面として機能していた時期があると想定される。ただし、4層は南側でしか確認されず、北側は後世の水害によって流されている。

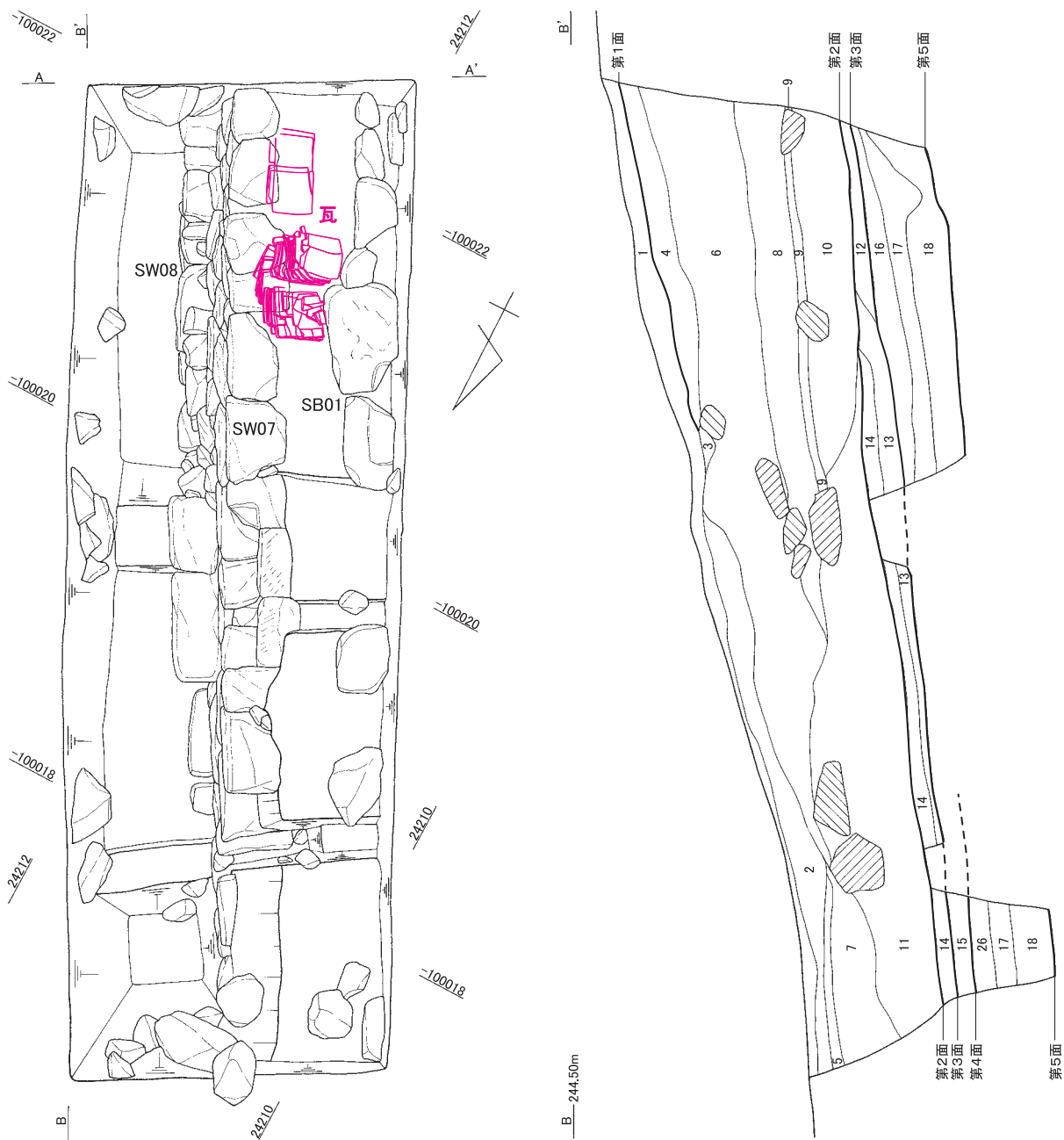
第2面以下は江戸期の堆積と考えられ、非常に硬く硬化した面が複数検出され、いずれも道路面と推定される。第2面は12・14層の上面である。12層は一定期間以上使用されていたと考えられ、マンガンが沈着して非常に硬く硬化している。14層も硬化して

いるが、上面のマンガンの沈着はほとんど見られない。このことから、12層の北側部分は水害で破壊され、その堆積土の13層上に14層の灰白色土で補修・整地したものと考えられる。また、この面上に、S W 07の階段基底石が据えられており、この面を整地した時に階段が構築されていることが判明した。第3面は15・16層の上面である。15層にはマンガンの沈着が見られ硬化も顕著であり、12層同様一定期間使用されているものと思われるが、16層にはマンガンの沈着がほとんど見られないことから、第2面同様、15層が洪水により破壊された後に16層の暗灰色土によって補修されたものと考えられる。さらに、トレンチ北側ではこの面上にS W 07の基底石が据えられており、この面がS W 07の構築面と考えられる。第4面は26層の上面である。26層も上面にマンガンの沈着が見られ、一定期間の使用が考えられるが、調査区南側では確認できなかった。これは、第3面を破壊した水害時に下層の26層も破壊されたと推測される。

第5面は18層の下面である。この面も上面にマンガンの沈着が見られ、硬く硬化していた。以下の層の堆積状況については、調査範囲が深く、狭くなったことにより掘下げが危険となったため確認できなかった。また、第5面から第4面までは17・18層が約40cm程度堆積しており、時期的にやや隔たりがある可能性がある。14層、15層、26層には間層が見られず、それぞれ10cm程度の厚さで整地されていることから、継続した使用が考えられ、補修を繰り返しながら使用されていた様子が窺える。

第2面より上層は、それ以下とは堆積状況が全く異なり、水害による流土が厚く堆積しており、第2面以下のように積極的に補修を繰り返しながら使用された形跡に乏しい。

S W 07上面の堆積状況は、東壁で見られる流土の堆積とは異なっており、比較的残存状態が良い。特に南側は、S W 07がほぼ無傷で残存しており、近代以降の盛土状況も確認できる。南壁の20層、21層、22層は近代の盛土と考えられる。東側部分は、水害により削られており、その後19層、6層、25層が堆積している。また、S W 07上には瓦を基壇状に積み上げて基礎を構築しており、平成26年度調査のS B 04



- 1 10 YR 4/3 にごい黄褐色土(粘性しまりともない、0.1~0.2ミリ粒子のシルト質。表土)
- 2 10 YR 3/2 黒褐色土(粘性あり、しまり弱い。0.1ミリ以下粒子の均一な粘質土。流土)
- 3 10 YR 3/4 暗褐色土(粘性しまりともない。0.2~0.3ミリ粒子のシルト質。堆積土)
- 4 10 YR 2/3 黒褐色土(粘性弱く、しまりあり。1センチ程度の礫を含むシルト質。硬化面)
- 5 2.5 Y 5/3 黄褐色土(粘性しまりともない。0.5ミリ程度の砂粒を含む砂質土。流土)
- 6 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色土(粘性しまりともない。0.1ミリ以下粒子のシルト質。流土)
- 7 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性しまりともない。2センチ以下の礫を含む砂質土。流土)
- 8 2.5 YR 4/3 オリーブ褐色土(粘性しまりともない。小礫を多く含む砂質土。流土)
- 9 10 YR 3/3 暗褐色土(粘性あり、しまりない。0.2ミリ以下粒子のシルト質。堆積土)
- 10 10 YR 4/4 褐色土(粘性しまりともない。小礫を多く含む砂質土。流土)
- 11 10 YR 4/4 褐色土(粘性しまりともあり。均一な粘質土。流土)
- 12 5 YR 4/8 赤褐色土(粘性なく、しまりあり。0.3ミリ以下粒子でマンガン沈着。硬化面)
- 13 10 YR 4/3 にごい黄褐色土(粘性しまりともあり。0.1ミリ以下粒子で粘質土。流土)
- 14 10 YR 8/1 灰白色土(粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒を含む硬化層。硬化面)
- 15 10 YR 6/8 明黄褐色土(粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下砂粒でマンガン沈着。硬化面)
- 16 10 YR 8/1 暗灰白色土(粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の白色砂粒を含む。硬化面)
- 17 7.5 YR 2/3 極暗褐色土(粘性弱く、しまりあり。0.8ミリ以下の黒色粒子を含む。整地土)
- 18 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性あり、しまり弱。0.5ミリ程度の白色粒子を含む。流土)
- 19 10 YR 6/4 にごい黄褐色土(粘性弱く、しまりあり。5~10センチ大の礫を含む。)
- 20 10 YR 4/1 褐灰色土(粘性なく、しまり弱い。にごい黄褐色粘土をブロック状に含む。)
- 21 2.5 Y 5/2 暗黄褐色土(粘性なく、しまり弱い。やや砂質土)
- 22 10 YR 8/1 灰白色土(粘性しまりとも強い。1ミリ大の粒子を30%含む粘質土)
- 23 10 YR 6/4 にごい黄褐色土(粘性弱く、しまりあり。1~2センチ大の小礫を10%含む。)
- 24 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性しまりともない。やや目の粗い砂質土。)
- 25 10 YR 5/1 褐灰色土(粘性しまりともない。3~5センチ大の礫を20%含む砂質土。)
- 26 10 YR 5/8 黄褐色土(粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒でマンガン沈着。硬化面)



Fig.80 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・土層断面図(1/40)

外壁に積まれた瓦と共通する。このことから、SB 04 建設時に、周辺整備として瓦を積み、盛土を行って道路の造成も行ったものと推定される。

第2面より上層の堆積状況を見ると、一時期に堆積したものではなく、何段階かにわたって堆積している状況が窺える。まず、11層が堆積し、その後の洪水により南側が扶られ、9・10層が堆積している。その後の洪水により8層が堆積している。この時点で、SW 07 の上面に盛土が行われ、道路が構築されたと考えられる。その後、6層・25層が堆積する洪水によって、上面の道路、盛土が壊されている。その後、再び4層による道路面が構築されるが、さらに4層を壊して5・7層が堆積し、最後に2層が堆積している。

### (3) 検出遺構 (Fig.80・81)

道トレンチでは、道跡と、敷地を区画するための石

垣 (SW 07・08) が検出された。SW 07 は、近代以降に発生した水害によって完全に埋まっていた。後述するが、第8地点では旧道路面が地下約1.7 mと非常に深い位置で検出されたが、本トレンチでは比較的浅い位置で確認できた。そのため、さらに下層を確認するために部分的な掘り下げを行なったところ、SW 07 の下にはさらに古い石垣 SW 08 が存在することが確認された。平坦面上からは、建物の礎石とみられる遺構 (SB 01) が検出された。

前述したように、本トレンチでは近代以降に、水害によって埋没した上面を利用して新たな道路としていたことが確認できている。石を並べてステップとするなど、限定的ではあるものの道の整備を行っていた痕跡が確認できている。

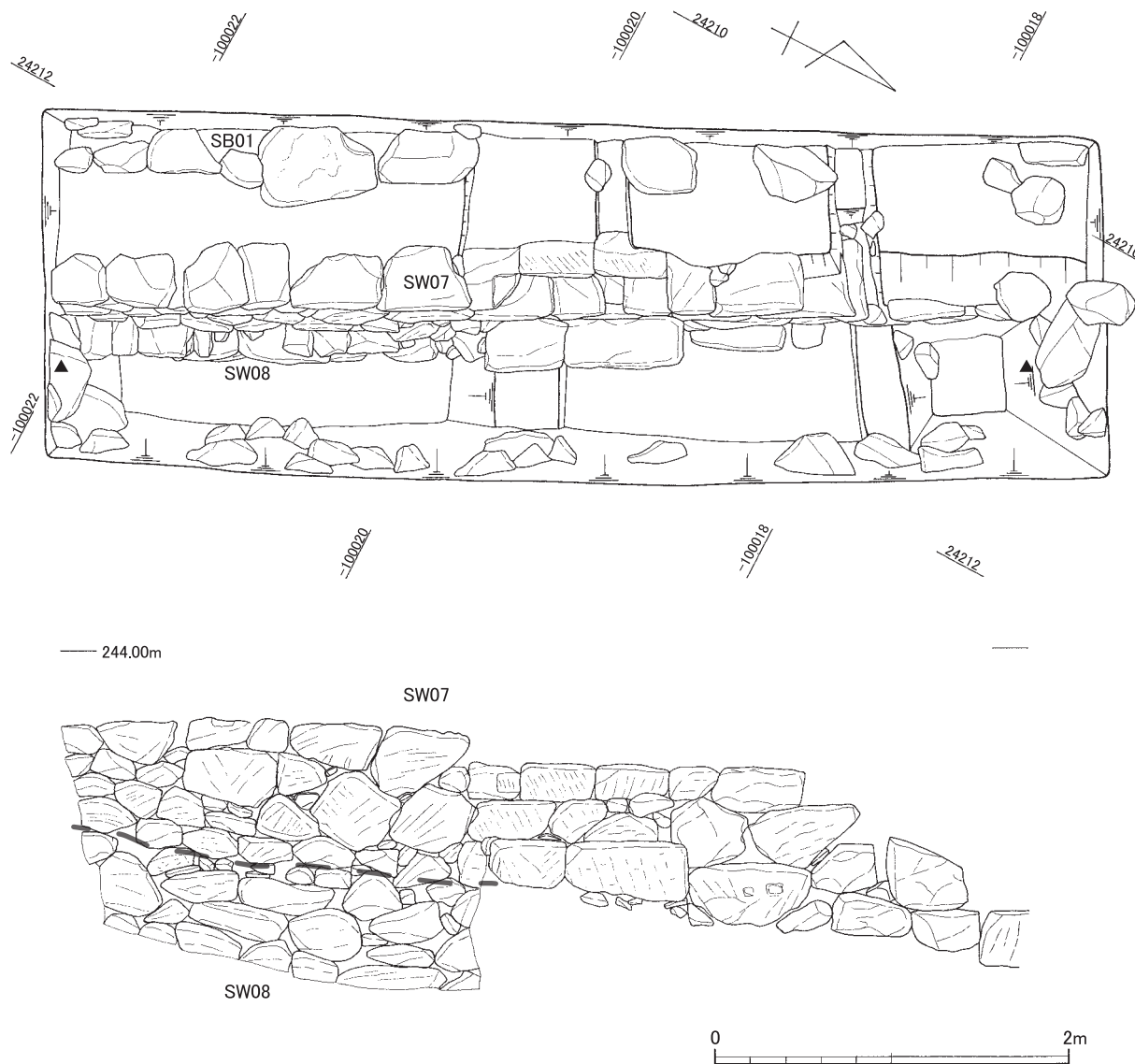


Fig.81 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・立面図 (1 / 40)

#### 【S B 01】

S B 01 は、S W 07 の上面で検出された。S W 07 に平行に礎石を並べている。南側の礎石は小さいが、構築の間に黄色粘土を詰めて固定している。S B 01 の北端部は S W 07 に設けられた階段の位置とそろっており、階段を上った南側が建物となっていたようである。また、S W 07 の端部から S B 01 までは幅約 70cm の犬走り状になっている。北側の 2 点の礎石の上面には土台を置くための加工痕があり、幅 9 ～ 12cm 程度の土台が置かれていたと推測される。また、北東部の礎石では土台の加工痕 L 字形になっており、礎石は北には続かないことから、この礎石が建物北東端の礎石であったと推測される。

#### 【S W 07】

第 1 トレンチの上半で検出された石垣で、出土遺物及び埋没の状況より江戸時代後半～近代にかけて機能していたとみられる。高さは約 90cm である。トレンチの中央部には道から平坦面に登るための 3 段の階段が付けられている。後述する S W 06 にも階段が付けられているが、S W 06 の階段は、石垣と平行に上るタイプであったのに対し、S W 07 では石垣に直行して上るタイプである。階段の規模は、幅約 1.1 m、高さ約 70cm で、ステップの奥行は約 25cm である。第 2 面でこの階段をつくった際に、石垣の一部を削って石段としている。また、最下段のステップは石垣の外に置かれている。石の積み方は、切込み接ぎ風の乱積みで、S W 06-①と類似している。積み上げられた石には、一辺が 40 ～ 60cm のやや大きなものと一辺が 35cm 未満の小ぶりなものが混在している。石の表面には工具の痕跡があり、表面を平滑に整える意図が認められる。階段には四角く整えた石を使用している。また、石垣の角度は約 65° である。

#### 【S W 08】

第 1 トレンチの下層確認部分から検出された石垣で、S W 07 よりも 25cm 程度東に張り出している。積石には 20 ～ 60cm と不揃いな割石が使用されており、表面も加工されていない。横長な石を積み上げる横積みになっており、古手の方法である。また、S W 08 に伴う道路面も地表下約 1.4 m の深さで確認できている。現況では高さ 50cm 程度ののだが、天端が揃ってお

らず、上の部分を崩して S W 07 を構築している。ただし、石垣の面が垂直であることから、構造的に高い石垣ではなかったと想定される。

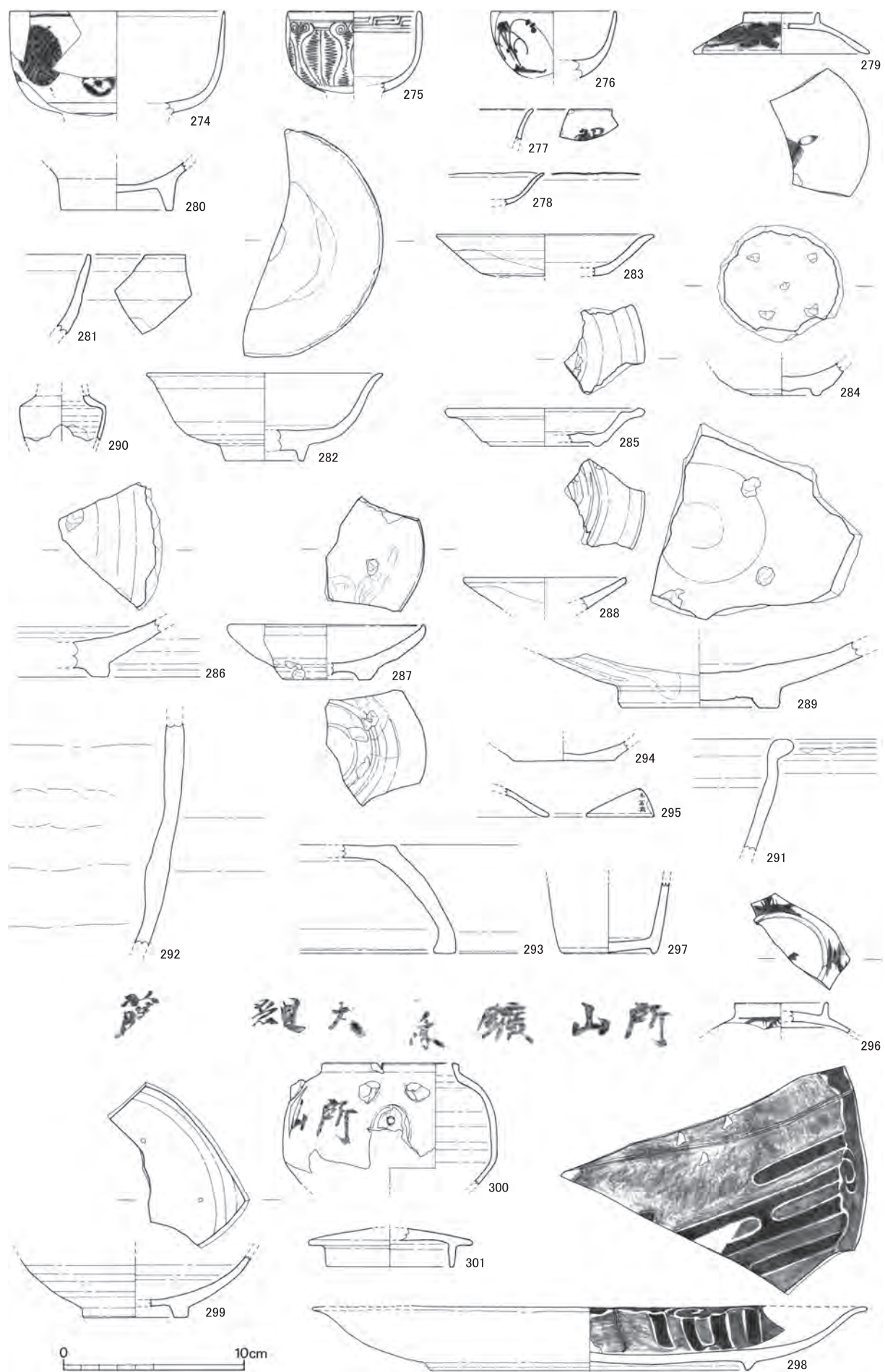


Fig.82 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ (S=1/3)



Fig.83 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅱ (S = 1 / 3)

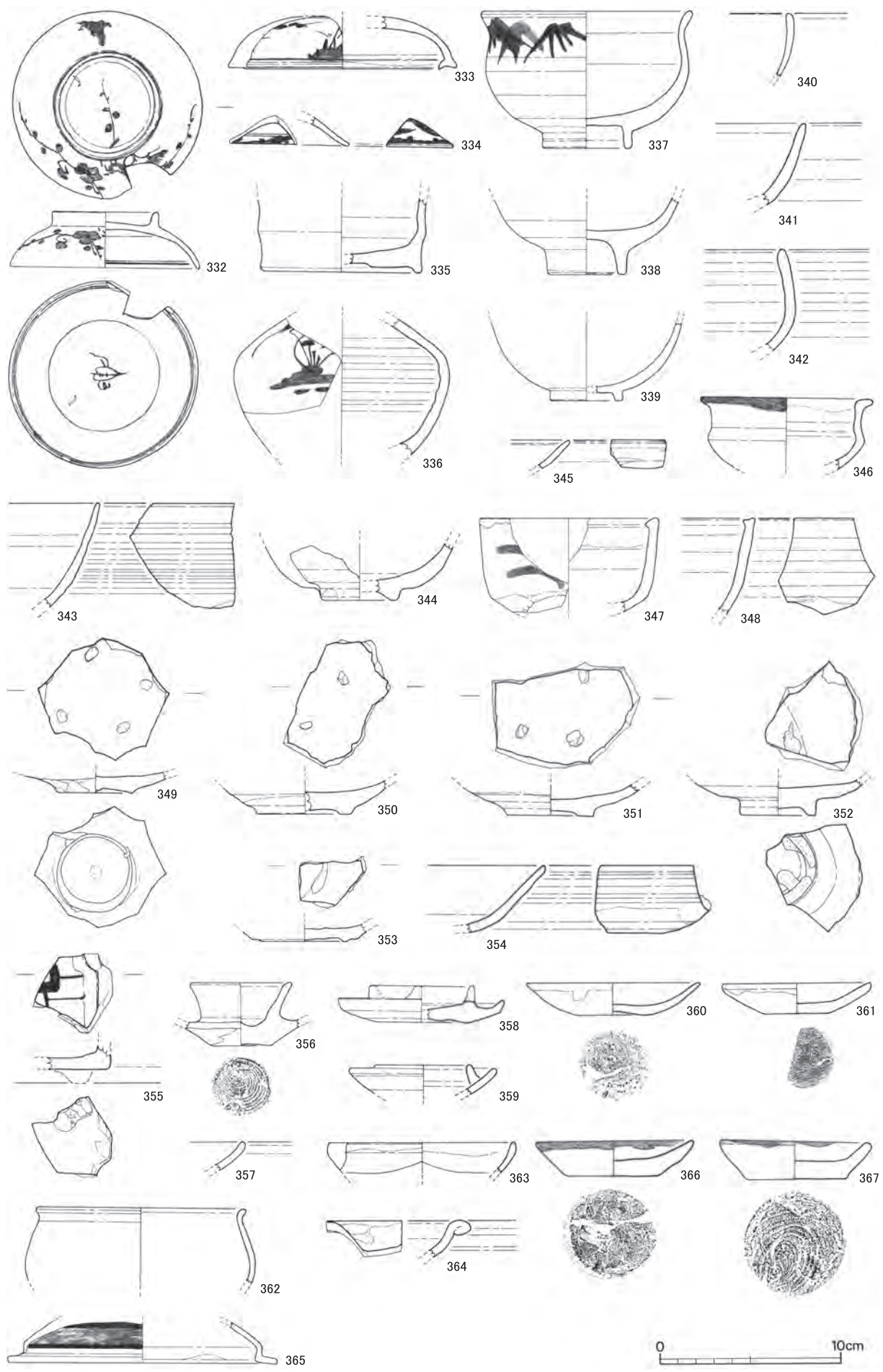


Fig.84 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅲ (S = 1 / 3)

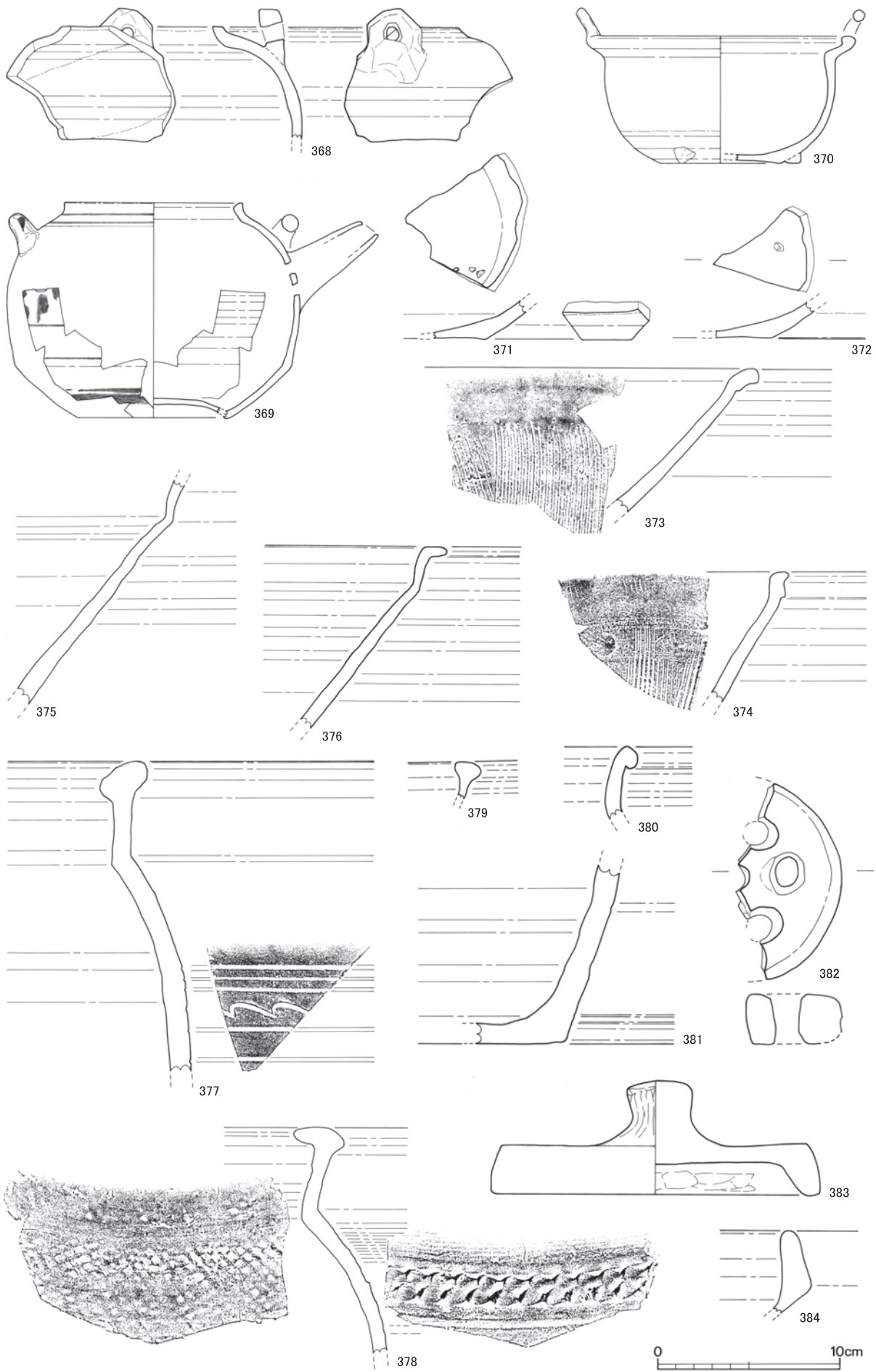


Fig.85 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅳ (S = 1 / 3)



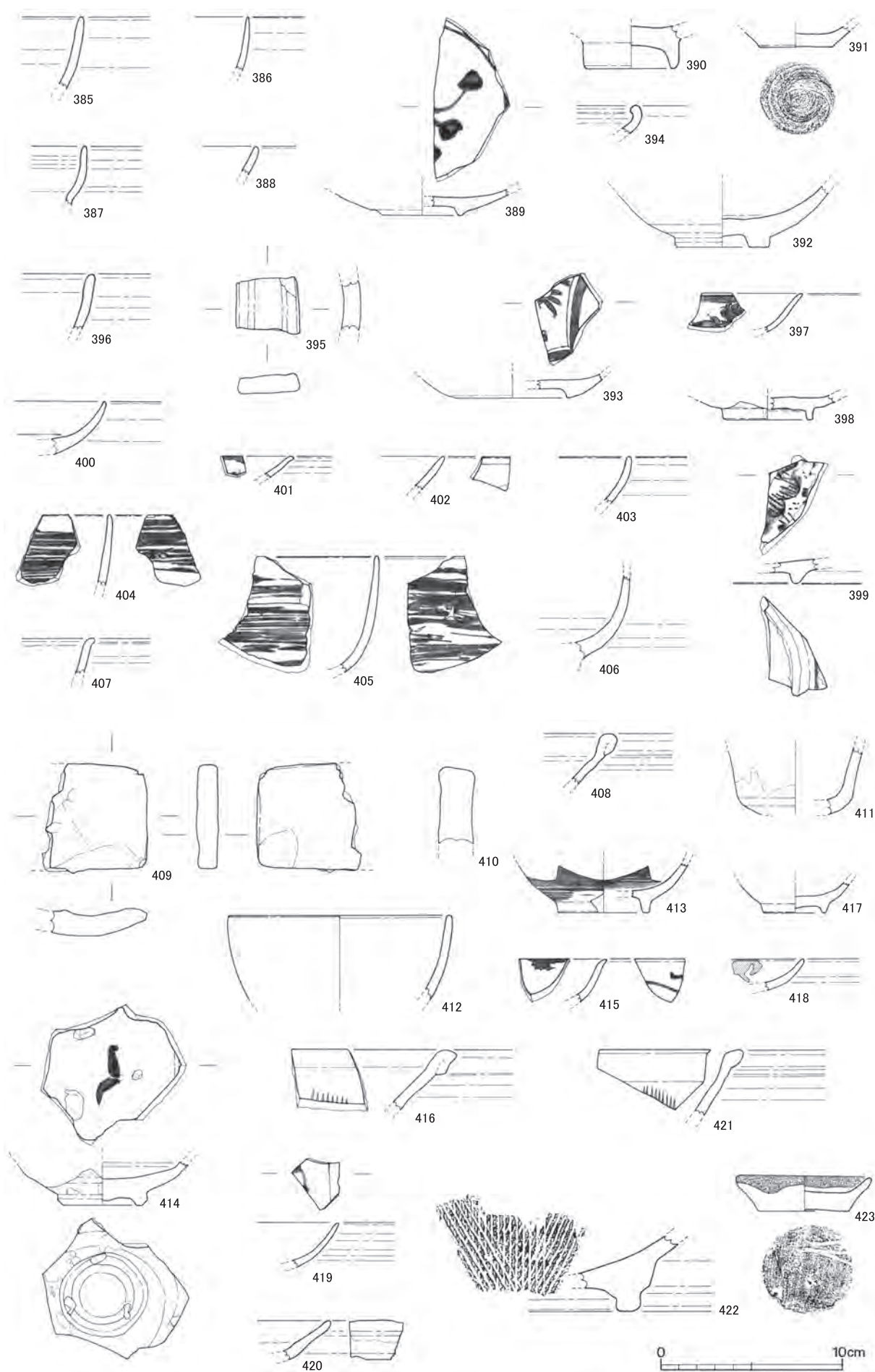


Fig.86 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図V (S = 1 / 3)

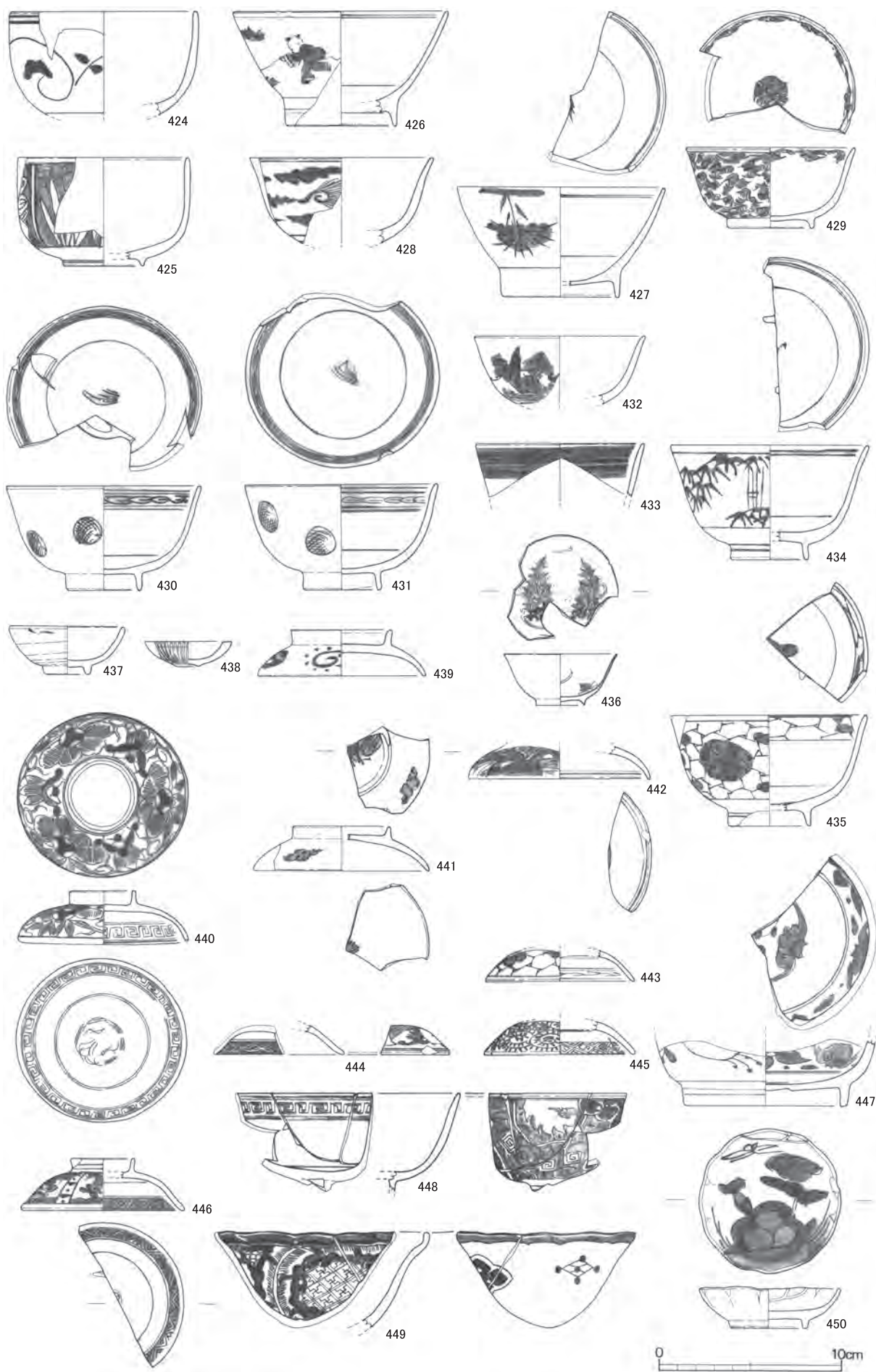


Fig.87 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図VI (S = 1 / 3)

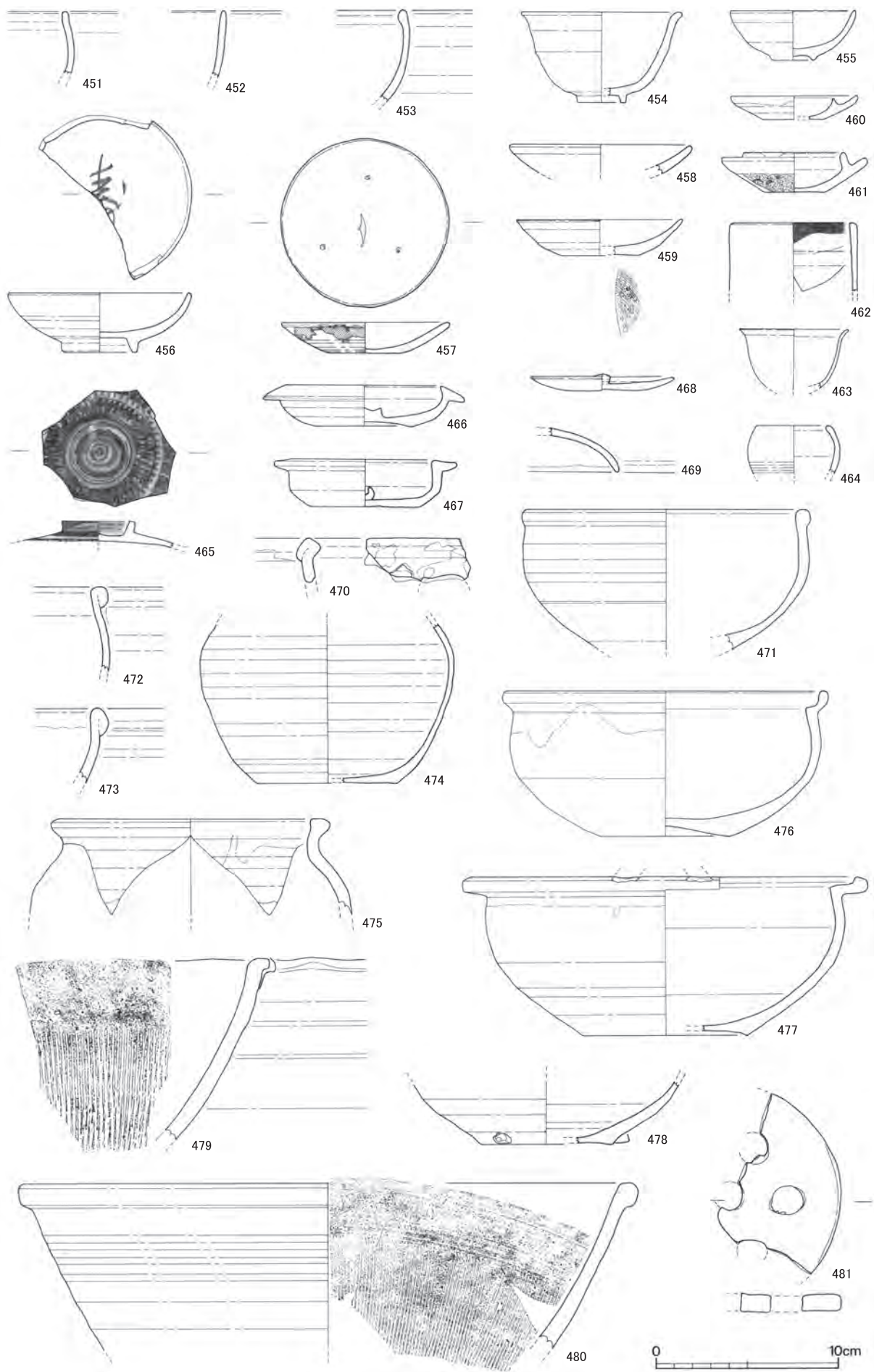


Fig.88 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図VII (S = 1 / 3)

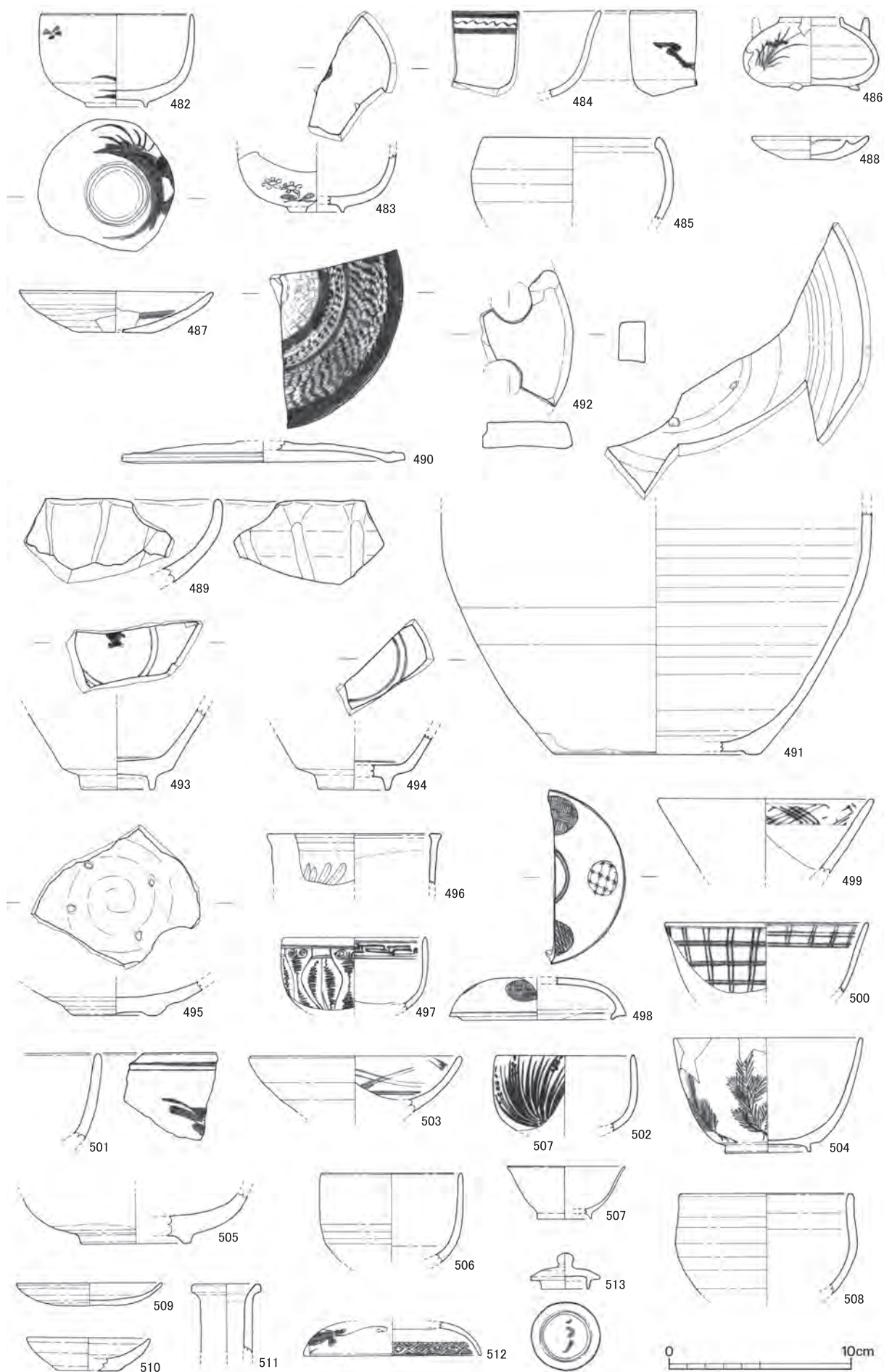


Fig.89 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅷ (S = 1 / 3)

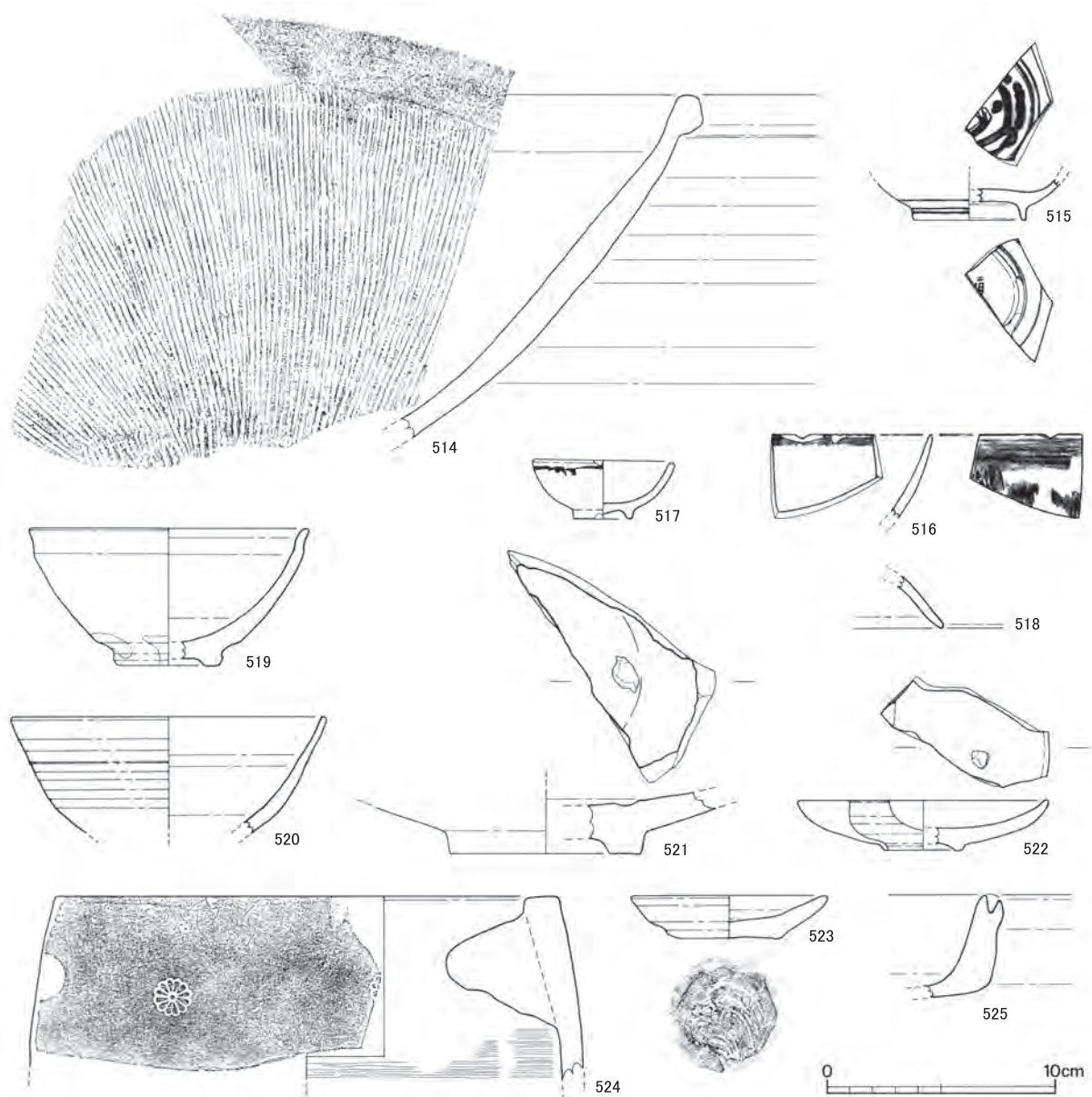


Fig.90 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図IX (S = 1 / 3)

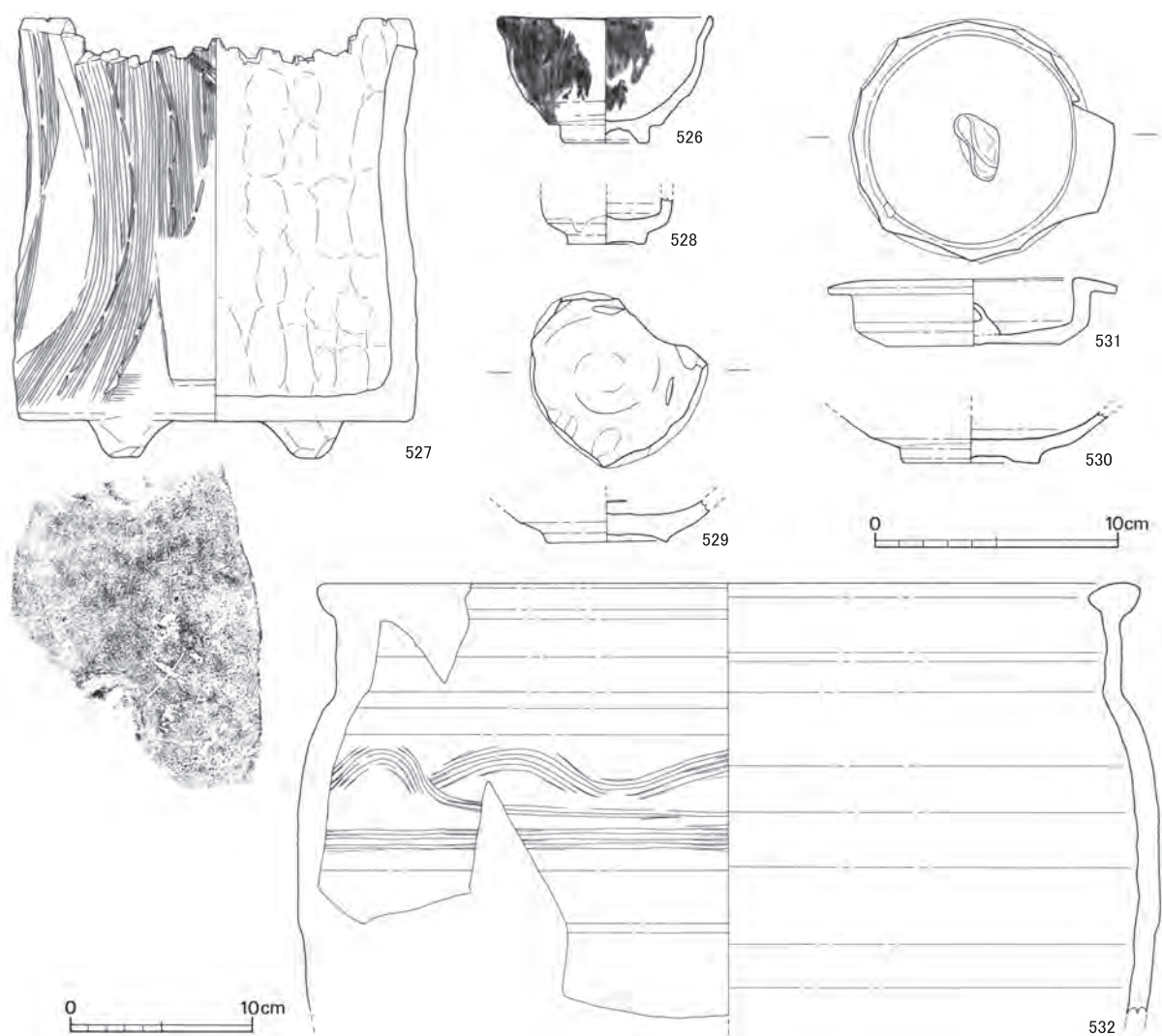


Fig.91 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図X (S = 1 / 3, 1 / 4)

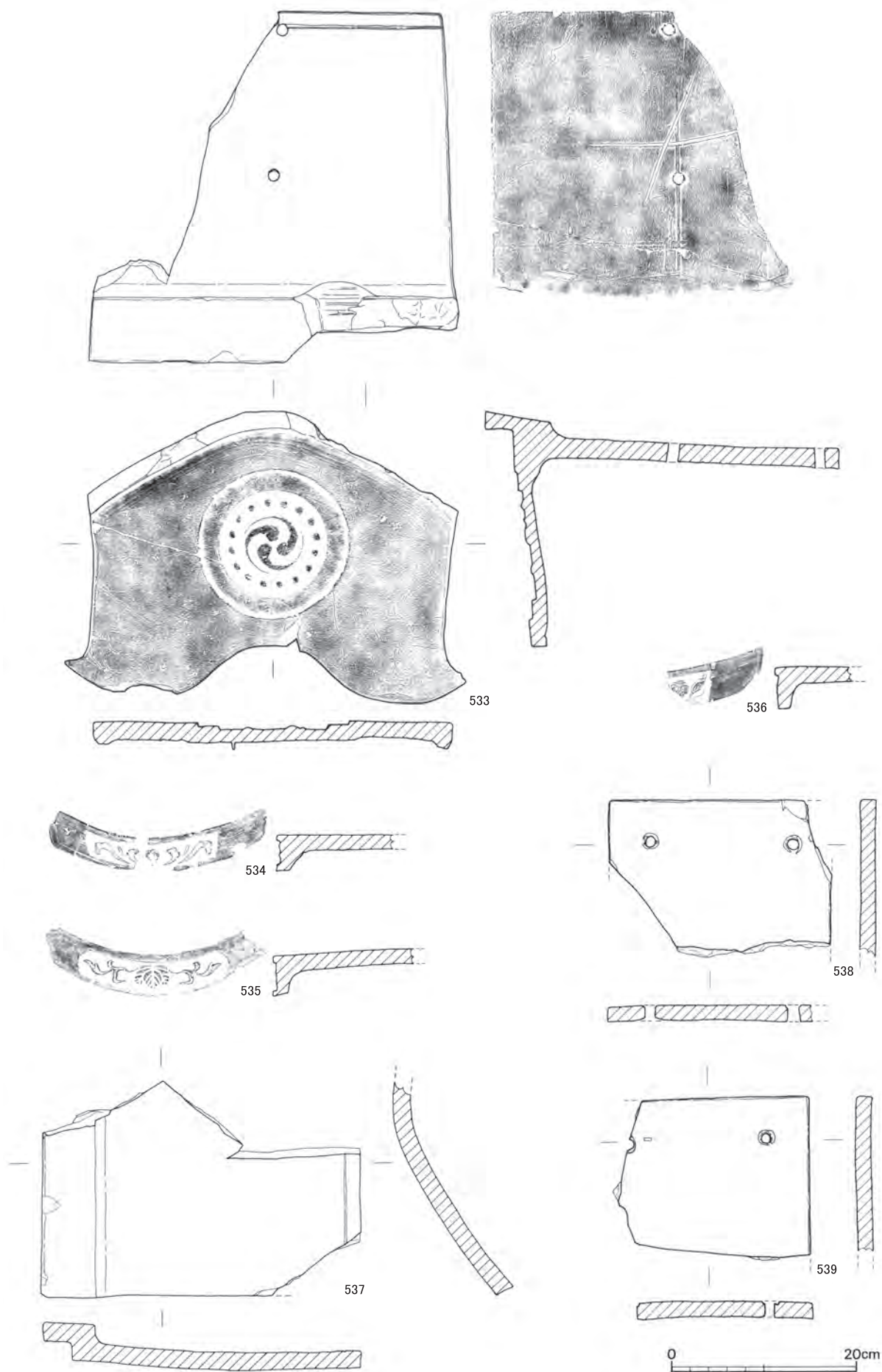


Fig.92 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XI (S = 1 / 6)

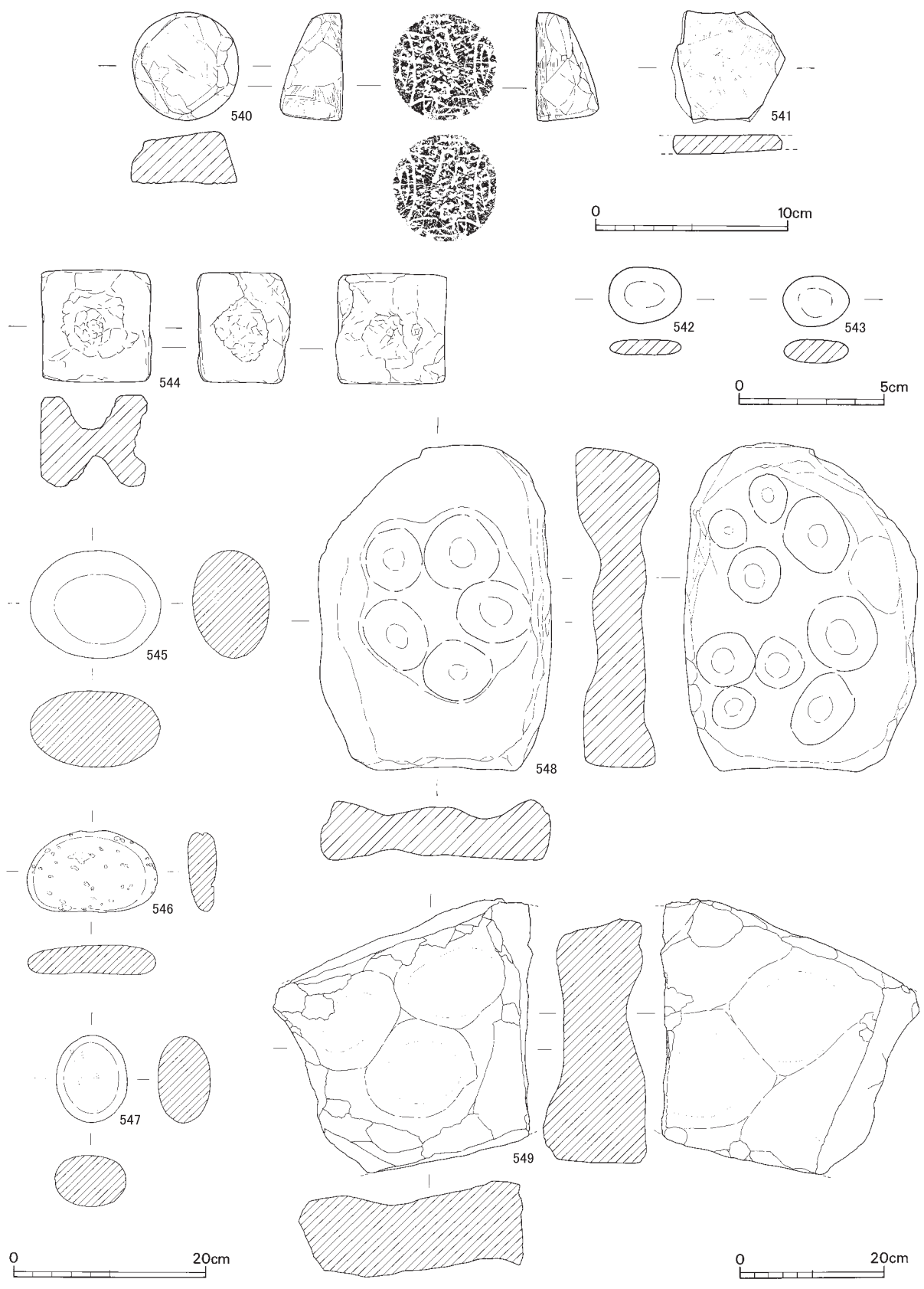


Fig.93 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XII (S=1/2, 1/3, 1/6, 1/8)



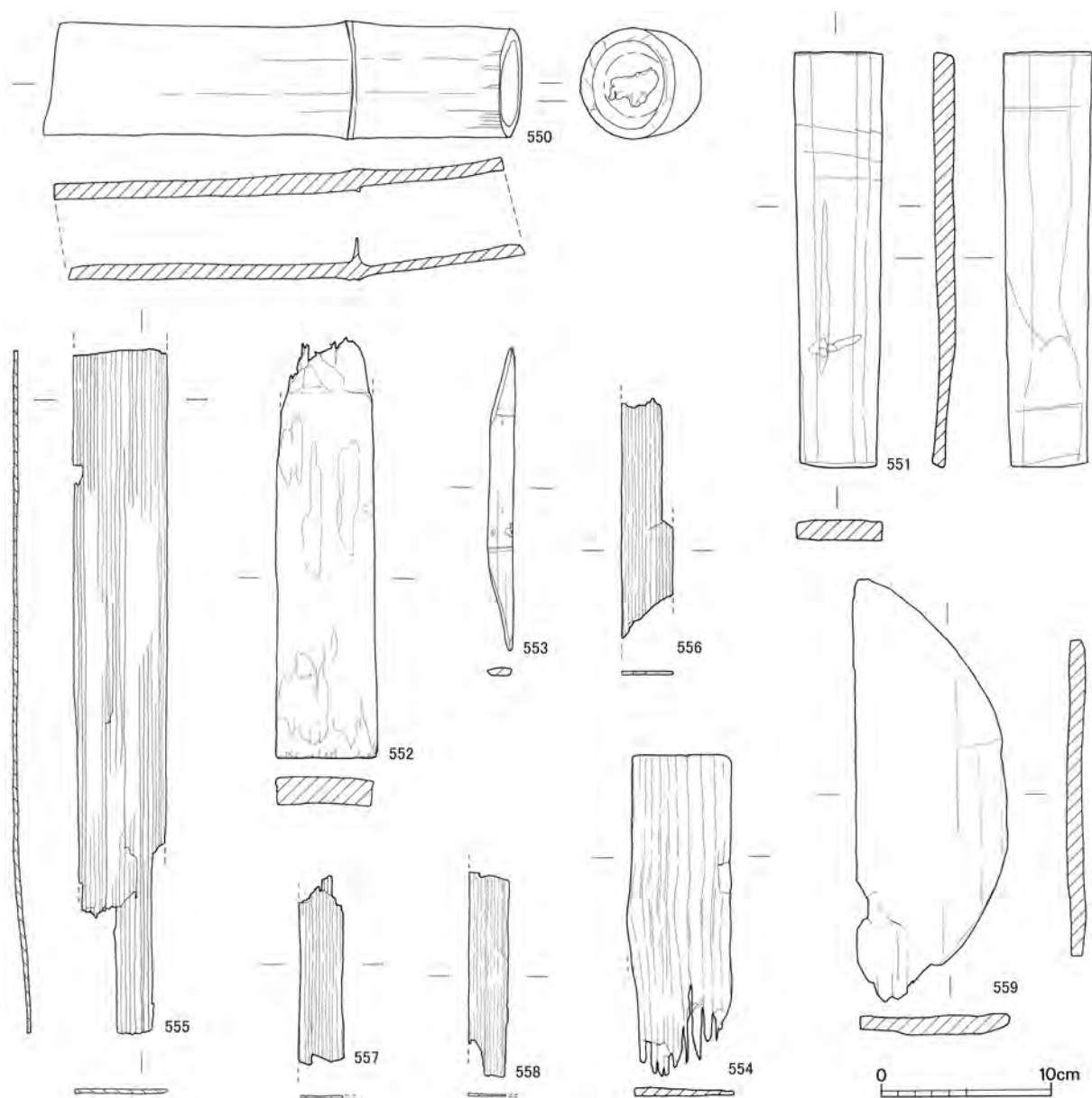


Fig.94 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XIII (S = 1 / 4)



Fig.95 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XIV (S = 1 / 2)

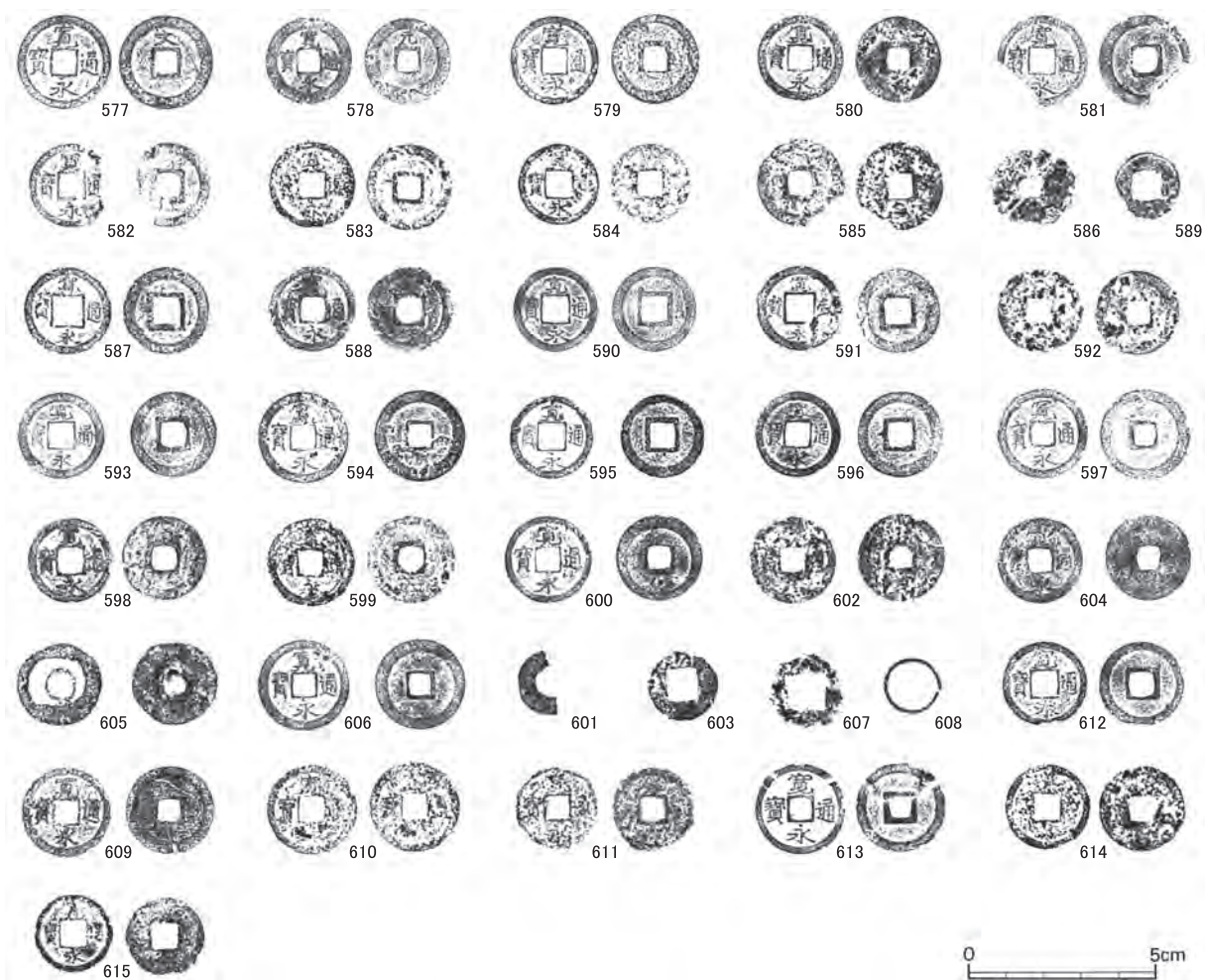


Fig.96 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XV (S = 1 / 2)

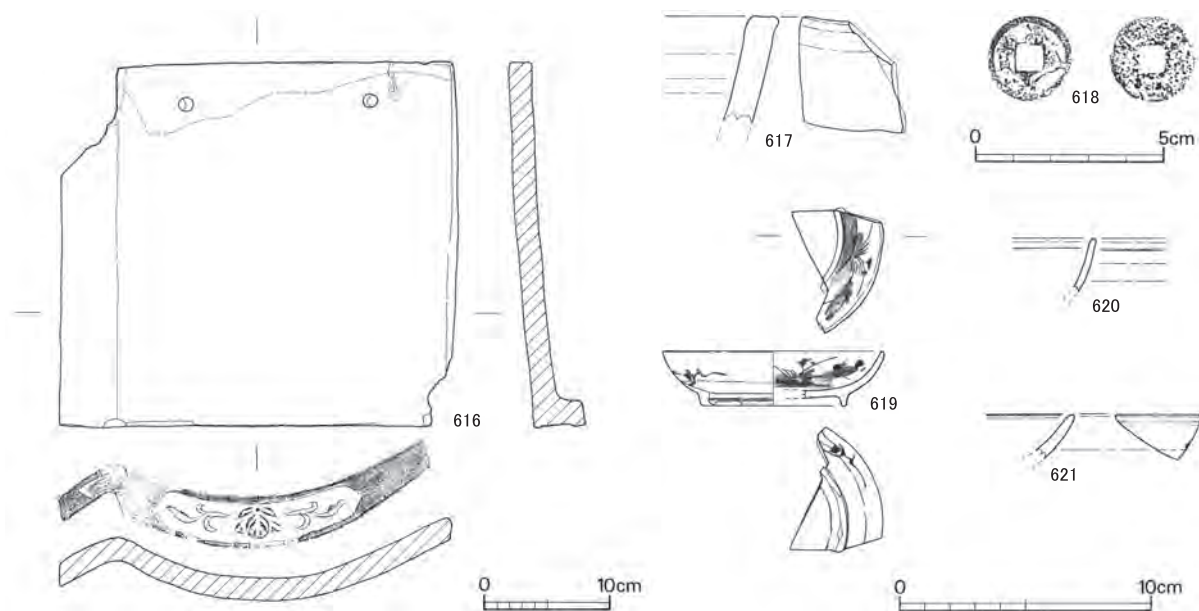


Fig.97 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図XVI (S = 1 / 2, 1 / 3, 1 / 6)

Tab.13 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表I

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
274	I a 区表土	肥前磁器	鉢	(11.8)	(5.8)		透明釉		
275	I a 区表採	肥前磁器	碗	(7.2)	(4.5)		透明釉		
276	表土	肥前磁器	仏飯器	(6.7)	(3.7)		透明釉		
277	I 区表採	石見	湯呑		(1.7)		長石釉	鉄絵	
278	表土	白磁	皿		(1.8)		白磁釉	稜花	
279	I b 区表土	瀬戸?	蓋	(9.5)	2.4	つまみ径 (4.0)	透明釉		
280	I a 区表土	肥前陶器	碗		(2.7)	6.1	透明釉		
281	I 区表採	肥前陶器	碗		(4.4)		褐釉		
282	I a 区表土	肥前陶器	碗	(13.0)	4.9	(4.3)	長石釉		
283	I a 区表土	肥前陶器	皿	(12.0)	(2.3)		灰釉		
284	I a 区表採	肥前陶器	皿		(1.8)	3.7	長石釉	胎土目	
285	I c 区表土	瀬戸・美濃	皿	(10.8)	2.1	(6.0)	灰釉	トチン	
286	表土	肥前陶器	皿		(3.2)		灰釉	胎土目	
287	表土	肥前陶器	皿	(10.8)	3.1	(4.8)	灰釉	胎土目	
288	表土	肥前陶器	皿	(8.8)	(1.8)		褐釉		
289	表土	肥前陶器	皿		(3.7)	(8.6)	灰釉	胎土目	
290	I b 区表土	肥前陶器	茶入れ		(2.6)		褐釉		
291	I c 区表土	肥前陶器	鉢		(6.2)		灰釉		
292	I c 区表土	信楽?	壺		(10.3)		灰釉		
293	I c 区表土	肥前陶器	蓋		(6.0)		灰釉		
294	I a 区表土	土師質土器	皿		(1.1)	(5.6)	浅黄橙色		
295	II a 区表土	肥前磁器	蓋		(1.6)		透明釉		
296	II a 区表土	肥前磁器	蓋		(1.5)	つまみ径 (5.0)	透明釉		
297	II c 区1層	肥前磁器	そば猪口		(4.0)	(4.9)	透明釉		
298	II c 区1層	肥前磁器	大皿	(30.1)	3.6	(17.4)	透明釉		
299	II c 区1層	石見	鉢		(3.4)	(5.8)	長石釉		
300	II c 区1層	石見	土瓶	7.0	(6.7)		長石釉		
301	II c 区1層	石見	蓋	(7.0)	(2.1)		長石釉		

Tab.14 昆布山谷地区 5 地点出土遺物観察表 II

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
302	I d 区 8 層	肥前磁器	碗		(2.1)	(4.6)	透明釉		
303	I c 区深堀区 8 ~ 38.39 層	肥前磁器	碗	10.6	6.3	4.3	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	四方禪文	外青磁
304	上層 6 ~ 30 層	肥前磁器	碗	(10.8)	6.6	4.4	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	外青磁	
305	I a 区 I c 区間畦 9 層	肥前磁器	碗	(8.5)	6.0	4.6	透明釉	コシヤク印判	
306	3 ~ 4 層	肥前磁器	碗		(2.2)	(3.3)	透明釉		
307	I d 区 5 層 ~ 8 層	肥前磁器	碗	(11.5)	(3.9)		透明釉		
308	7.8 ~ 38.39 層上層 排土	肥前磁器	碗	(10.0)	4.7	3.5	透明釉		
309	7.8 ~ 38.39 層	青花	碗		(4.1)		透明釉	四方禪文	
310	I a 区 6 層 ~ 37 層	肥前磁器	碗		(3.7)		透明釉		
311	6 ~ 38 層	肥前磁器	碗	(9.6)	(4.2)		透明釉		
312	表土 上層	肥前系磁器	湯呑	6.6	5.8	3.6	(内) 透明釉 (外) カルト釉 透明釉		
313	I c 区 4 層上面	肥前磁器	湯呑	(6.0)	(4.3)		透明釉		
314	上層	肥前磁器	小碗		(1.9)	(0.7)	透明釉		
315	上層	不明磁器	小碗	7.3	3.4	2.6	透明釉		
316	7.8 ~ 38.39 層	白磁	坏	(6.6)	3.4	3.0	白磁釉		中国か
317	I c 区 4 層上面	瀬戸	小坏		(2.2)	2.6	透明釉		
318	I a 区 6 層	白磁	碗		(3.8)		白磁釉		中国
319	排土 3 ~ 4 層 6 ~ 7 層	肥前磁器	皿		5.7		透明釉	稜花	
320	上層	肥前磁器	皿	(24.0)	3.4	(13.3)	透明釉	ハリ支え 輪花	
321	6 ~ 38 層	肥前磁器	皿		(1.5)		白磁釉		白磁
322	上層	不明磁器	角皿		2.2		透明釉		
323	I d 区 4 層	肥前磁器	皿		(2.0)		透明釉	金焼継	
324	I c 区 7 層	青花	皿		(1.2)	(6.8)	透明釉		
325	I d 区 5 ~ 8 層 7.8 ~ 38.39 層	青花	皿	(14.4)	3.0	(8.8)	透明釉		
326	6 ~ 38 層	青花	皿		(1.9)	(6.3)	透明釉		
327	上層	青花	皿		2.2		透明釉		
328	6 ~ 7 層	青花	皿		(1.3)		透明釉		
329	3 ~ 4 層	肥前磁器	皿		(1.0)	(5.0)	青磁釉	蛇の目釉剥ぎ	
330	7.8 ~ 38.39 層	肥前磁器	皿		(2.7)		透明釉		
331	上段東端包含層 排土	肥前磁器	ミニチャ瓶		(2.9)	2.8	透明釉		

Tab.15 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表Ⅲ

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
332	3～4層 排土	肥前磁器	蓋	10.3	3.1	つまみ径 5.7	透明釉		
333	上層	肥前磁器	蓋	(10.7)	(2.9)		透明釉		
334	I d区5層～8層	肥前磁器	蓋		(1.6)		透明釉		
335	I a区5層	肥前磁器	火入れ?		(4.2)	(8.5)	青磁釉	蛇の目凹形 高台	
336	7.8～38.39層	肥前磁器	瓶		(7.5)		透明釉		
337	3～4層	肥前陶器	碗	11.5	7.6	4.7	透明釉	鉄絵	
338	ズリ層	肥前陶器	碗		(4.2)	4.2	灰釉		
339	3～4層	肥前陶器	碗		(4.3)	(4.0)	透明釉		
340	I a区 37層～7層.8層	関西系陶器	碗		(3.5)		透明釉		
341	I b区深堀トレンチ	瀬戸・美濃	碗		(4.5)		灰釉		
342	上層	備前系	鉢		(5.6)		にぶい赤褐色		
343	I a区 37層～7層.8層	関西系陶器	碗		(5.8)		灰釉		
344	6～7層	肥前陶器	碗		(3.2)	(4.0)	褐釉		
345	I a区 37層～7層.8層	在地系陶器	皿		(1.6)		長石釉		
346	I a区 6層～37層	肥前陶器?	香炉	(9.3)	(3.9)		銅緑釉 透明釉		
347	6～7層	肥前陶器	火入れ	(9.4)	(5.2)		灰釉		
348	上層	肥前系陶器	蓋物か鉢		(5.3)		灰釉		
349	I a区6層	肥前か福岡	皿		(1.2)	4.2	灰釉	胎土目	
350	上層	肥前陶器	皿		(1.9)	(5.1)	灰釉	胎土目	
351	3～4層	肥前陶器	皿		(1.8)	4.7	灰釉	胎土目	
352	I a区6層～37層	肥前陶器	皿		(2.0)	(4.2)	灰釉	砂目	
353	上層	瀬戸・美濃	皿		(1.0)	(4.7)	灰釉	輪トチン	
354	I a区37層～7層.8層	瀬戸・美濃	皿		(3.8)		褐釉		
355	ズリ層	織部	向付		(2.2)		透明釉	鉄絵	
356	7.8～38.39層	肥前陶器	灯明皿	5.4	3.5	3.2	サビ釉		
357	I c区7層	肥前陶器	皿		(1.6)		灰釉		

Tab.16 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表IV

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
358	I b 区 4 層	肥前陶器	灯明皿	(9.2)	2.0	(5.0)	長石釉		
359	I a 区 4 層 上面	石見	灯明皿	(8.2)	(1.6)		長石釉		
360	3～4 層	在地系陶器	皿	(9.5)	1.8	4.0	透明釉		
361	3～4 層 排土	肥前陶器	皿	(8.2)	1.7	(3.5)	灰釉		
362	II a 区サブトレ 7 層 II a 区サブトレ 8 層	萩	鉢	(11.4)	(4.2)		長石釉		
363	I c 区 4 層 上面	肥前陶器	鉢	(10.2)	(1.7)		透明釉 藁灰釉		
364	I d 区 4 層	肥前陶器	鉢		(2.0)		褐釉 (内) 灰釉		
365	I c 区 4 層 上面	在地系陶器	蓋	(14.8)	(2.3)		褐釉 サビ釉	飛鉋	
366	6～38 層	土師質土器	皿	8.7	2.0	5.0	橙色		双付着
367	3～4 層	土師質土器	皿	8.1	2.3	5.4	淡黄色		
368	上層	不明陶器	土瓶		(7.2)		鉄釉		
369	上層	石見	土瓶	(9.1)	(11.8)	(8.0)	銅緑釉 灰釉 透明釉		双付着
370	上層 7.8～38.39 層	石見	鍋	(14.2)	7.0	(6.6)	来待釉		
371	2 面下層	石見	鍋		(2.1)		来待釉	胎土目	
372	2 面下層	石見	鍋		(2.0)		褐釉	胎土目	
373	I d 区 17 層	肥前陶器	すり鉢		(7.9)		鉄釉		
374	7.8～38.39 層	須佐	すり鉢		(7.2)		サビ釉		
375	3～4 層	石見	鉢		(12.3)		長石釉		
376	上層	須佐か石見	鉢		(10.0)		長石釉		
377	上層	肥前陶器	甕		(17.0)		褐釉		
378	6～7 層	肥前陶器	甕		(12.4)		褐釉	タタキ	
379	7.8～38.39 層	在地系陶器	甕		(2.0)		褐釉		
380	上層	信楽	壺		(4.0)		淡黄色		
381	I a 区 37 層	備前	壺・甕		(9.8)		赤褐色		
382	上層	土製品	サナ	現存長 10.8	現存幅 5.8	現存厚 2.8	橙色	132.4 g	
383	南壁面包含層 (77 層)	瓦質土器	蓋	18.0	6.6	つまみ径 3.6	暗灰色		
384	I c 区 石垣内	土師質土器	焙烙		(4.5)		にぶい橙色		

Tab.17 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表V

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
385	S K 03	肥前陶器	碗		(4.0)		透明釉		
386	S K 03 下層粘質土	肥前磁器	碗		(3.0)		透明釉	口紅	
387	S K 03	肥前陶器	鉢		(3.1)		長石釉		
388	S K 04	肥前陶器	碗		(1.6)		透明釉		
389	I c 区 S D 02 30・31層	肥前磁器	小坏		(1.5)	(4.4)	透明釉		
390	S D 02	肥前陶器	碗		(2.4)	5.0	長石釉		
391	S D 06 ②	土師質土器	皿		(1.1)	4.0	浅黄橙色		内面付着物
392	S D 07	肥前陶器	皿		(3.4)		灰釉		
393	S D 08 ②	青花	皿		(1.3)	(6.1)	透明釉	碁笥底	
394	S D 08 ②	肥前陶器	鉢?		(1.6)		灰釉		
395	S D 08 ②	肥前陶器	把手・耳	現存長 3.2	現存幅 3.6	現存厚 1.2	藁灰釉		
396	S D 09 ②	肥前陶器	碗		(3.0)		灰釉		
397	S X 12 石敷にともなう整地面直上	青花	皿		(4.2)		透明釉		
398	S X 28 周辺	白磁	皿		(1.4)	(4.5)	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ	
399	S D 08 ①周辺	青花	皿		(1.3)		透明釉	砂高台	
400	S X 28 周辺	肥前磁器	皿		(2.9)		透明釉		
401	黄色粘質土直上	肥前磁器	皿		(1.2)		透明釉		
402	黄色粘質土直上	肥前磁器	皿		(1.9)		透明釉		
403	黄色粘質土直上	肥前陶器	碗		(2.6)		透明釉		
404	黄色粘質土直上	肥前陶器	碗		(3.9)		白濁釉 透明釉	白土化粧	
405	S X 28 周辺	肥前陶器	碗		(6.4)		白濁釉 透明釉	白土化粧	
406	I a 区第3面直上 I a 区第5面直上	肥前陶器	碗		(4.6)		灰釉		
407	黄色粘質土直上	肥前陶器	坏		(2.0)		灰釉		
408	遺構面直上	須佐?	鉢		(2.8)		サビ釉		
409	灰層 (S X 28 周辺)	土製品	ネコ?	現存長 6.0	現存幅 5.7	現存厚 1.3	灰白色	47.3 g	
410	3面整地層 (黄色粘質土)	土製品	ネコ?	現存長 4.2	現存幅 3.6	現存厚 2.0	灰白色	34.8 g	
411	2面下層 サンプル⑩層	肥前陶器	坏		(3.7)		灰釉		
412	I a 区 19層	肥前陶器	碗	(12.2)	(4.7)		灰釉		
413	I a 区 18層 I c 区 20層 7.8~38.39層	肥前陶器	碗		(2.7)	(5.0)	白濁釉 透明釉		
414	3面下包含層	肥前陶器	皿		(2.4)	4.3	灰釉	胎土目 鉄絵	
415	I a 区 18層	肥前磁器	皿		(2.4)		透明釉		
416	I a 区 18層	須佐	すり鉢		(3.4)		サビ釉		
417	S D 06 ②下層 包含層	白磁	皿		(1.7)	(3.4)	白磁釉		
418	S K 03 下層直上	土師質土器	皿		(1.7)		にぶい橙 色		
419	トレンチ最下層岩盤直上	肥前磁器か	皿		(2.5)		透明釉		
420	石垣面トレンチ	肥前陶器	皿		(2.1)		灰釉		
421	I・II区 SW 02	須佐	すり鉢		(3.6)		サビ釉		
422	石垣面トレンチ	肥前陶器	すり鉢		(4.2)		褐釉		
423	I~II区 石垣裏込	土師質土器	皿	7.3	2.0	5.0	にぶい橙 色		双付着



Tab.18 昆布山谷地区 5 地点出土遺物観察表 VI

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
424	II a 区 7 層	肥前磁器	碗	(10.2)	(5.7)		透明釉		
425	II a 区 7 層	肥前磁器	碗	(9.2)	6.0	(4.2)	透明釉		
426	II c 区 7 層	肥前磁器	碗	(11.8)	6.4	(5.9)	透明釉		
427	II d 区 8 層	肥前磁器	碗	(11.3)	6.1	(6.3)	透明釉		
428	II a 区第 1 面	肥前磁器	碗	(9.9)	(4.7)		透明釉		
429	II a 区第 1 面	肥前磁器	碗	(9.2)	4.5	(4.6)	透明釉		
430	II c 区第 1 面	肥前磁器	碗	10.5	5.8	3.9	透明釉		
431	II c 区 7 層	肥前磁器	碗	10.5	5.9	4.1	透明釉		
432	II b 区 3 層	肥前磁器	碗	(9.2)	(3.7)		透明釉		
433	II b 区 3 層	肥前磁器	碗	(9.2)	(2.9)		透明釉		
434	II c 区 S B 02 上層	肥前磁器	碗	(10.8)	6.4	(4.1)	透明釉		
435	II c 区第 1 面	肥前磁器	碗	(10.6)	6.1	(4.3)	透明釉		
436	II a 区表土	瀬戸?	小坏	(6.2)	2.9	2.7	透明釉	上絵付	
437	II a 区 7 層	肥前磁器	小坏	6.2	2.9	2.3	透明釉		
438	II a 区 7 層	肥前磁器	紅皿	(4.8)	1.4	1.2	透明釉		
439	II a 区 7 層	肥前磁器	蓋	(9.1)	2.6	つまみ径 (5.5)	透明釉		
440	II b 区 3 層	肥前磁器	蓋	9.1	3.0	3.5	透明釉		
441	II c 区 7 層	肥前磁器	蓋	(9.5)	2.5	つまみ径 (5.3)	透明釉		
442	II b 区 3 層	肥前系磁器	蓋	(10.0)	(1.9)		透明釉		
443	II c 区 7 層 II c 区 7 層遺物だまり②	肥前磁器	蓋	(8.0)	(1.7)		透明釉		
444	II a 区 7 層	肥前磁器	蓋		(1.6)		透明釉		
445	II c 区 7 層	肥前磁器	蓋	(7.1)	(1.8)		透明釉	四方禪文 焼継	
446	II c 区 S B 02 上層	肥前系磁器	蓋	(8.7)	2.9	つまみ径 (3.3)	透明釉		
447	II c 区 S B 02 上層	肥前磁器	鉢		(3.7)	(8.6)	透明釉	蛇の目凹形高 台	
448	II c 区 7 層遺物だまり② II c 区 1 層	肥前磁器	碗		(5.4)		透明釉	雷文	
449	II b 区 3 層	肥前磁器	鉢		5.3		透明釉		焼継
450	II a 区第 1 面	肥前磁器	皿	7.6	2.3	4.0	透明釉		

Tab.19 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表VII

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
451	II b 区 3 層	布志名	湯呑?		(3.4)		銅緑釉		
452	II b 区 3 層	石見	碗		(3.7)		長石釉		
453	II b 区 3 層	石見	碗		(5.0)		長石釉		
454	II c 区 7 層	萩	碗	(8.8)	5.0	(2.6)	長石釉		
455	II c 区 S B 02 上層	肥前磁器	小坏	(6.7)	2.7	2.1	透明釉		白磁
456	II c 区 7 層	石見	皿	(9.8)	3.3	4.0	長石釉		双付着
457	II c 区 7 層	在地系陶器	皿	9.2	1.7	4.0	長石釉	胎土目	双付着
458	II a 区 7 層 II a 区サブトレ 8 層	土師質土器	皿	(9.8)	(1.6)		灰白色		
459	II a 区 7 層	不明陶器	皿	(9.0)	2.0	(4.3)	褐釉		
460	II d 区 3 層	在地系陶器	灯明皿	(7.0)	1.3	(3.2)	長石釉		
461	II b 区 3 層	石見	灯明皿	8.0	2.2	3.3	長石釉		双付着
462	II a 区 7 層	山口	火入れ	(6.6)	(3.8)		長石釉 灰釉		
463	II a 区 7 層	ガラス製品	小碗? ワイングラス?	(6.0)	(3.3)				
464	II c 区 7 層	石見	小壺	(3.9)	(2.7)		長石釉		
465	II c 区第 1 面	不明陶器	蓋		(1.4)	つまみ径 4.0	サビ釉	飛鉋	
466	II c 区 7 層	石見	蓋	(11.0)	2.3		銅緑釉		
467	I d 区表土 II b 区 3 層	石見	蓋	(7.6)	(2.6)	(6.0)	長石釉		
468	II c 区第 1 面	不明陶器	蓋	7.8	1.0		サビ釉		
469	II c 区 1 層 II c 区 3 層直上	不明陶器	蓋		(2.4)		灰釉		
470	II a 区 7 層	肥前陶器	鉢		(2.5)		灰釉		
471	II b 区 3 層	石見	鉢	(15.4)	(7.7)		長石釉		
472	II c 区 7 層	石見	片口鉢		(4.6)		長石釉		
473	II b 区 3 層	石見	鉢		(4.1)		長石釉 褐釉		
474	II b 区 3 層 II c 区 7 層	不明陶器	瓶		(8.7)		鉄釉		
475	II c 区 3 層直上	石見	甕	(14.6)	(5.3)		来待釉 黒釉		
476	II b 区 S B 02 上層	石見	鍋	(17.8)	8.0	7.0	来待釉		
477	II c 区第 1 面	石見	土鍋	(22.2)	8.8	9.0	来待釉		
478	II c 区 7 層遺物だまり①	石見	鍋		(3.5)	(7.3)	長石釉		双付着
479	II a 区 3 層	不明陶器	すり鉢		(10.0)		褐釉		
480	II c 区 S B 02 上層	不明陶器	すり鉢	(33.4)	(9.1)		褐釉		
481	II b 区 3 層	土製品	サナ	9.9	6.8	1.0	淡黄色	50.3 g	

Tab.20 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表Ⅷ

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
482	Ⅱ c 区 S D 03	肥前系磁器	碗	(8.3)	5.1	3.4	透明釉		
483	I d 区 S B 03 20層	肥前磁器	碗		(3.3)	(2.8)	透明釉		
484	Ⅱ b 区 S D 03	肥前系磁器	碗		(4.7)		透明釉		
485	Ⅱ b 区 S D 03	石見	鉢	(9.7)	(4.5)		長石釉		
486	Ⅱ b 区 S D 03	在地系陶器	水注	(3.4)	4.0	4.2	白濁釉 透明釉	絵付	
487	Ⅱ b 区 S D 03	石見	皿	(10.6)	2.3	(4.0)	長石釉		墨書
488	Ⅱ b 区 S D 03	石見	灯明皿	(6.4)	1.3	(2.6)	長石釉		
489	Ⅱ c 区 S D 03 埋土 23層	瀬戸・美濃	鉢		(4.6)		灰釉		
490	Ⅱ a 区 S D 03	不明陶器	蓋	(15.5)	(1.2)		サビ釉		
491	Ⅱ b 区 S D 03	石見	甕		(13.4)	(11.2)	来待釉		
492	Ⅱ b 区 S D 03	土製品	サナ	現存長 7.5	現存幅 5.0	現存厚 1.5	にぶい橙色	43.2 g	
493	Ⅱ c 区 S X 09	肥前磁器	碗		(4.5)	3.8	(内)透明釉 (外)青磁釉	外青磁	
494	Ⅱ c 区 S X 09	肥前磁器	碗		(3.1)	(4.0)	(内)透明釉 (外)青磁釉	外青磁	
495	Ⅱ c 区 S X 09	肥前陶器	皿		(1.9)	4.7	灰釉	胎土目	
496	Ⅱ c 区 S X 09	不明陶器	香炉か 火入れ	(9.4)	(2.8)		灰釉		
497	I a 区 S D 04	肥前系磁器	小碗	(7.7)	(4.0)		透明釉		
498	Ⅱ b 区 S X 10	肥前磁器	蓋	(8.2)	2.3		透明釉		
499	Ⅱ b 区 S B 02 下層	肥前磁器	碗	(11.5)	(4.1)		(内)透明釉 (外)青磁釉	四方襷文	
500	Ⅱ b 区 S B 02 下層	肥前系磁器	碗	(11.0)	(3.9)		透明釉		
501	Ⅱ d 区 8層	肥前磁器	碗		(4.8)		透明釉	陶胎染付	
502	Ⅱ d 区 8層	肥前磁器	碗	(7.4)	(4.2)		透明釉		
503	Ⅱ b 区 8層 Ⅱ b 区 7.8 ~ 38.39層	肥前磁器	皿	(11.5)	(3.1)		透明釉		
504	I c 区 9層	肥前磁器	碗	10.4	6.4	4.6	透明釉		
505	Ⅱ a 区 8層	肥前陶器	鉢		(2.8)	(6.0)	長石釉		
506	Ⅱ b 区 8層	肥前磁器	碗	(7.6)	(4.9)		白磁釉	白磁	
507	Ⅱ b 区 8層	瀬戸	小碗	6.4	2.9	(2.9)	透明釉		
508	Ⅱ b 区 8層	布志名	碗	(9.2)	(5.6)		銅緑釉		
509	Ⅱ a 区 8層	不明陶器	皿	(8.0)	1.3	3.0	サビ釉		
510	Ⅱ b 区 8層	土師質土器	皿	(6.6)	1.8	(3.4)	にぶい橙色		
511	Ⅱ b 区 深堀トレンチ	肥前磁器	瓶	(3.6)	(3.8)		透明釉		
512	Ⅱ b 区 8層	肥前磁器	蓋	(9.6)	(1.9)		透明釉	四方襷文	
513	Ⅱ b 区 8層	不明陶器	蓋	2.6	2.0		長石釉		墨書
514	Ⅱ a 区 8層	不明陶器	すり鉢		(15.0)		鉄釉		

Tab.21 昆布山谷地区 5 地点出土遺物観察表IX

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
515	排土	青花	碗		(1.8)	(4.7)	透明釉		
516	排土	肥前磁器	碗		(2.7)		透明釉		
517	排土	肥前磁器	坏	6.0	2.6	2.4	透明釉		
518	5地点	肥前磁器	蓋		(2.3)		青磁釉		
519	排土	肥前陶器	碗	(12.2)	6.0	(4.4)	灰釉		
520	排土	萩	碗	(13.6)	(5.1)		褐釉		
521	排土	肥前陶器	皿		(2.7)	(8.4)	灰釉	胎土目	
522	排土	肥前陶器	皿	(11.0)	2.2	(3.4)	灰釉	胎土目	
523	排土	土師質土器	皿	8.6	1.9	4.2	にぶい橙色		
524	排土	土師質土器	焜炉	(21.8)	(8.0)		浅黄橙色		双付着
525	排土	土師質土器	焙烙		(4.5)		にぶい橙色		双付着
526	Ⅲ区北拡張区 14 層	萩	碗	8.7	5.2	3.4	藁灰釉		
527	Ⅲ区北拡張区 14 層	土師質土器	焜炉	(15.9)	18.0	16.0	褐灰色		
528	Ⅲ区表採	肥前陶器	小碗		(1.9)	3.2	長石釉		
529	Ⅲ区表採	肥前陶器	皿		(1.7)	5.0	灰釉	胎土目	
530	Ⅲ区表採	肥前陶器	皿		(2.1)	(5.6)	灰釉		
531	Ⅲ区表採 排土	石見	蓋	8.6	2.7	7.0	長石釉		
532	Ⅲ d 区 S B 04	石見	甕	(44.0)	(23.4)		来待釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
533	Ⅲ区北拡張区内	瓦	隅瓦	高さ 31.6	幅 43.4	奥行 38.1	暗灰色	6860	
534	I 区表土	瓦	軒棧瓦	13.5	24.2	3.9	暗灰色	760	
535	I 区表土	瓦	軒棧瓦	18.0	24.0	4.4	来待釉	990	
536	I 区表土	瓦	軒平瓦	10.5	13.5	4.4	暗灰色	360	
537	表土	瓦	雁振瓦	25.4	34.7	7.2		2420	
538	表土	瓦	建瓦	17.0	24.0	2.0	灰色	910	なまこ壁
539	表土	瓦	建瓦	17.6	21.2	2.0	灰色	940	なまこ壁
540	S K 05 上面	石製品	印章	5.6	5.5	3.2	明褐色	96.3	
541	S D 09 ②	石製品	砥石	5.9	6.0	1.0	灰白色	42.0	
542	Ⅱ c 区 S X 09	石製品	碁石	2.0	2.5	0.6	灰色	4.3	
543	7. 8 ~ 38.39 層	石製品	碁石	1.8	2.3	0.8	暗灰色	4.7	
544	I a 区表土	石製品	石造物	11.6	11.5	9.7		2040	
545	表採	石製品	摺石	11.2	13.5	7.9		1660	
546	表採	石製品	摺石	8.5	13.5	3.1		490	
547	表採	石製品	摺石	9.0	7.4	5.3		473	擦痕
548	I a 区表土	石製品	かなめ石	45.3	32.9	11.7	灰色	25.6kg	
549	I a 区表土	石製品	かなめ石	38.2	35.9	14.3	灰色		

Tab.22 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表 X

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
550	S K 03	竹製品	管状	28.0	7.0	7.1			
551	S K 03	木製品	桶側板	24.3	5.2	1.5			
552	8層 S K 03- II	木製品	桶側板?	24.6	5.9	1.6			
553	8層 S K 03- II	竹製品	不明	17.8	1.5	0.5			
554	S K 04 153層	木製品	板状	18.8	6.1	0.5			
555	S D 09 ①	木製品	板状	40.4	5.5	1.0			
556	岩盤溝	木製品	板状	14.1	3.0	0.2			
557	岩盤溝	木製品	板状	11.1	2.7	0.2			
558	岩盤溝	木製品	板状	12.0	2.4	0.2			
559	M-1	木製品	円形板	25.0	8.9	1.2			
560	6~7層	鉄製品	タガネ	13.7	4.1	3.6		290	
561	I a 区 6層~37層	銅製品	キセル (雁首)	5.6	1.4	1.7		9.8	
562	I a 区 11層	銅製品	キセル (雁首)	4.2	1.6	1.9		9.9	
563	上層	銅製品	キセル (吸口)	5.0	1.5	1.4		5.6	
564	北端表採	銅製品	キセル (吸口)	8.9	1.4	1.2		11.0	
565	8~38.39層	銅製品	刀装具 (ハバキ)	3.3	2.0	1.9		14.6	
566	S K 01	銅製品	不明	2.2	2.5	0.2		2.8	
567	S K 01	銅製品	不明	2.8	3.4	0.3		3.6	
568	黄色粘質土直上	銅製品	キセル (火皿)	1.6	1.8	0.5		1.0	
569	I c 区 4層上面	銅製品	セツパ	3.6	2.1	0.1		1.8	
570	I c 区 4層上面	銅製品	注口	10.0	2.6	0.1		22.2	
571	Ⅲ区北拡張区 14層	銅製品	針金	16.1	20.2	0.3		23.9	
572	I a 区 9層上面	金属製品	釘	3.3	0.4	0.4		2.2	
573	I b 区 4層上面	鉄製品	釘	6.1	0.5	0.5		4.9	
574	I b 区表土	鉄製品	釘	8.5	0.6	0.6		12.3	
575	I c 区表土	鉄製品	鉄斧	12.8	6.2	3.3		560	
576	Ⅱ c 区 S X 09	ガラス製品	簪?	4.0	0.5	0.5	青色	1.9	

Tab.23 昆布山谷地区5地点出土遺物観察表XI

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
577	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.5	2.5			2.8	
578	II d区3層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.2	
579	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.3	
580	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			1.7	
581	II d区3層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			1.5	
582	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.2	1.8			1.5	
583	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.0	
584	II b区3層	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			1.5	
585	II b区3層	錢貨	不明	2.3	2.3			2.4	
586	II b区3層	錢貨	無文錢	2.0	2.2			1.2	
587	II c区S D 03	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.3	
588	II c区 7層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			1.6	
589	II c区7層	錢貨	無文錢	1.8	1.8			0.6	
590	II a区8層	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			1.8	
591	II a区サブトレ8層	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.5	
592	II b区8層	錢貨	不明	2.2	2.2			2.2	
593	I a区I c区間畦第2面直上	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.2	
594	上層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			3.1	
595	上層	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.2	
596	3~4層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			1.9	
597	I d区4層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.3	
598	I c区4層	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.0	
599	I b区4層上面	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.4	
600	I a区6層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.4	
601	I a区6層	錢貨	無文錢	1.7	1.0			0.4	
602	I a区37層~7層. 8層	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.7	
603	上層	錢貨	無文錢	1.9	1.9			0.7	
604	I a区I c区間畦第2面直上	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.0	
605	S K 04	錢貨	無文錢	2.2	2.2			3.5	
606	I a区第5面直上	錢貨	寛永通寶	2.5	2.5			3.2	
607	岩盤直上	錢貨	無文錢	2.0	2.0			1.0	
608	I c区4層上面	錢貨	無文錢	1.5	1.5			0.6	
609	II a区表土	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.8	
610	I b区表土	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.0	
611	I c区表土	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			1.7	
612	排土	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			1.4	
613	排土	錢貨	寛永通寶	2.4	2.4			2.2	
614	排土	錢貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.4	
615	排土	錢貨	寛永通寶	2.1	2.1			1.6	
616	1 T表採	瓦	軒瓦	29.0	31.5	6.7	来待釉	3720	
617	1 T瓦埋土	土師質土器	火鉢?		器高 (4.6)		灰白色		
618	1 T瓦埋土	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.4	
619	1 T	肥前磁器	皿	(8.6)	2.2	(5.6)	透明釉		
620	1 T	青花	皿		(2.1)		透明釉		
621	1 T南半道2面下層3面間整地層	肥前磁器	皿		(1.8)		透明釉		

## 第6節 第6・7地点

### 第1項 調査の概要 (Fig.98・99)

第6・7地点は平成27(2015)年度から平成28(2016)年度に調査を実施した。事前に実施した分布調査によって、現地表面上で岩盤加工遺構の所在が確認されており、谷の狭隘地における居住・利用の状況を明らかとすることを目的として調査を実施した。

平成27年度には、遺構の残存状況を確認するために調査地点周辺の測量調査を行ない、流土を一部だけ岩盤加工遺構の範囲や内容を確認した。平成28年度には、第6地点の北端部にある、尾根上へと登る階段状遺構SX25の調査を実施した。調査ではSX25を覆っていた流土を掘り下げて遺構全体を検出するとともに、下層確認のためにトレンチを設定して埋没部の検出を行なった。

### 第2項 検出遺構

第6・7地点のそれぞれで岩盤加工遺構(SX20・21・22)と平坦面が検出された。また、第6・7地点の中間あたりで岩窟状遺構(SX23)が検出された。本項ではSX20～24について記述し、SX25は別項にて報告する。

#### 【SX20】(Fig.98・101)

SX20は第6地点で検出された岩盤加工遺構である。山道に沿った岩盤の、南北約10m、高さ3mの範囲が加工されている。現状では岩盤は道から西方へ三角形に窪んでおり、岩盤と道の間にはテラス状の広い空間がある。SX20に掘り込まれた遺構としては、階段状遺構と方形の掘り込みであるSX24のほかに、梁穴とみられる孔がいくつか加工されている程度で、同地点のSX25や第5地点のSX02、第7地点のSX21に比べると少ない。

#### ①階段状遺構

SX20の南端部で検出された遺構で、山道から岩盤上の平坦面へ上るための階段とみられる。第6地点の東側には山道から一段上に狭い平坦面が形成されており、この階段が連絡通路として機能していたようである。階段の中央部には幅約30cm、深さ約30cmの溝が掘られており、上段の平坦面から雨水などの水抜きとして機能していた可能性が想定される。段数は溝の南側で6段、北側で8段が確認できた。ただし、東側

の地表下と西側の上方斜面に未調査部があるため、もう何段か延びる可能性がある。現状では1段目が標高253.2m、最高点が標高254.8mである。1段当たりの高さは10cm程度と低いが、南北とも1段目は約20cmと高くなっている。1段ごとの幅は北側が40～50cm、南側が25～30cmで、奥行は北側が30程度cmで南側が15～20cmである。北側の1段目は非常に小さく、幅28cm、奥行き18cmで、平面形は三角形である。最上部には石垣が積んである。本遺構の隣接地からかなめ石が出土した。

#### ②SX24

SX20の南半部で、標高253.0m～254.0mの範囲に加工された遺構である。縦100cm、横48cmの長方形で、奥行きは約10cmである。中央やや下に一辺が約6cmで四角形の凹みがある。SX20の壁面を浅く岩窟状に掘り窪めたのみで装飾はなく、機能は不明である。

#### 【SX21】(SX107・108)

SX21は第7地点南半で検出された岩盤加工遺構である。加工の範囲は道沿いの南北約7.5m、高さ約3mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は256.7m、最高点の標高は259.9mである。溝状遺構(SD03)、梁穴、階段状遺構が掘り込まれている。梁穴は標高257.2m付近に1辺5cm程度のものが約50cm間隔で4つと、標高257.6m付近に1辺約5cm程度のものが約40～60cm間隔で3つ並んでいる。標高259mより上にも梁穴がいくつかあるが、上記の2か所のように列をなしておらず、不規則に設けられている。

#### ①SD03

SD03は標高257.3mから258.3mに掘り込まれた溝状遺構である。全長は南北6mで、溝の幅は約20cmだが、北端部はSX22を加工した際に壊されており、本来はもう少し長かったと想定される。南端部から3～4.6mの範囲がやや低くなっており、ここに水を引き込むようになっていたようである。SD03の下には引き込んだ水を溜めるための施設の存在が想定されるが、流土や埋土によって地下に埋もれており、確認できなかった。



Fig.98 昆布山谷地区第6地点・7地点地形図 (S = 1 / 140)



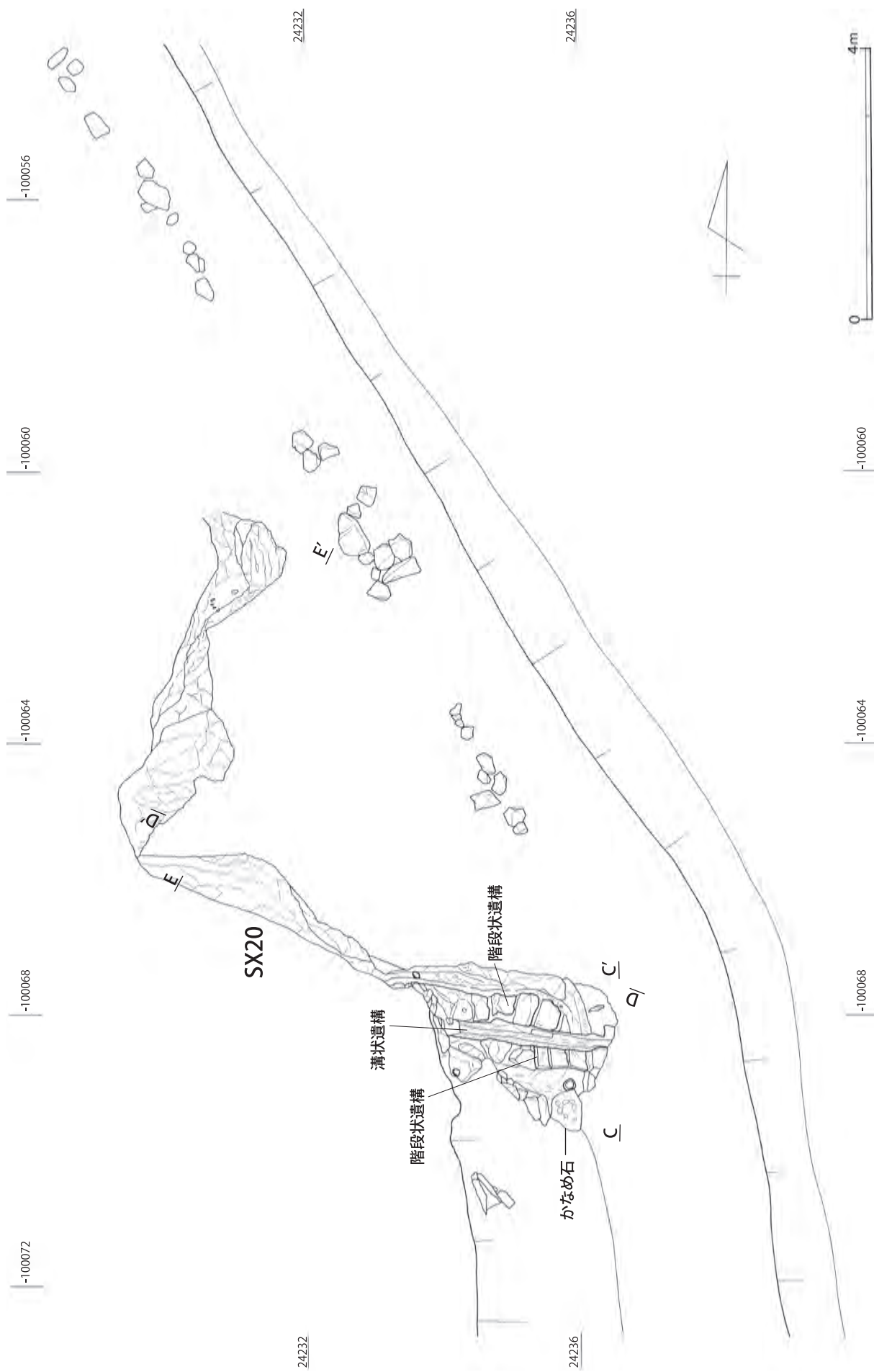


Fig.99 昆布山谷地区第6地点平面図 (S = 1 / 80)

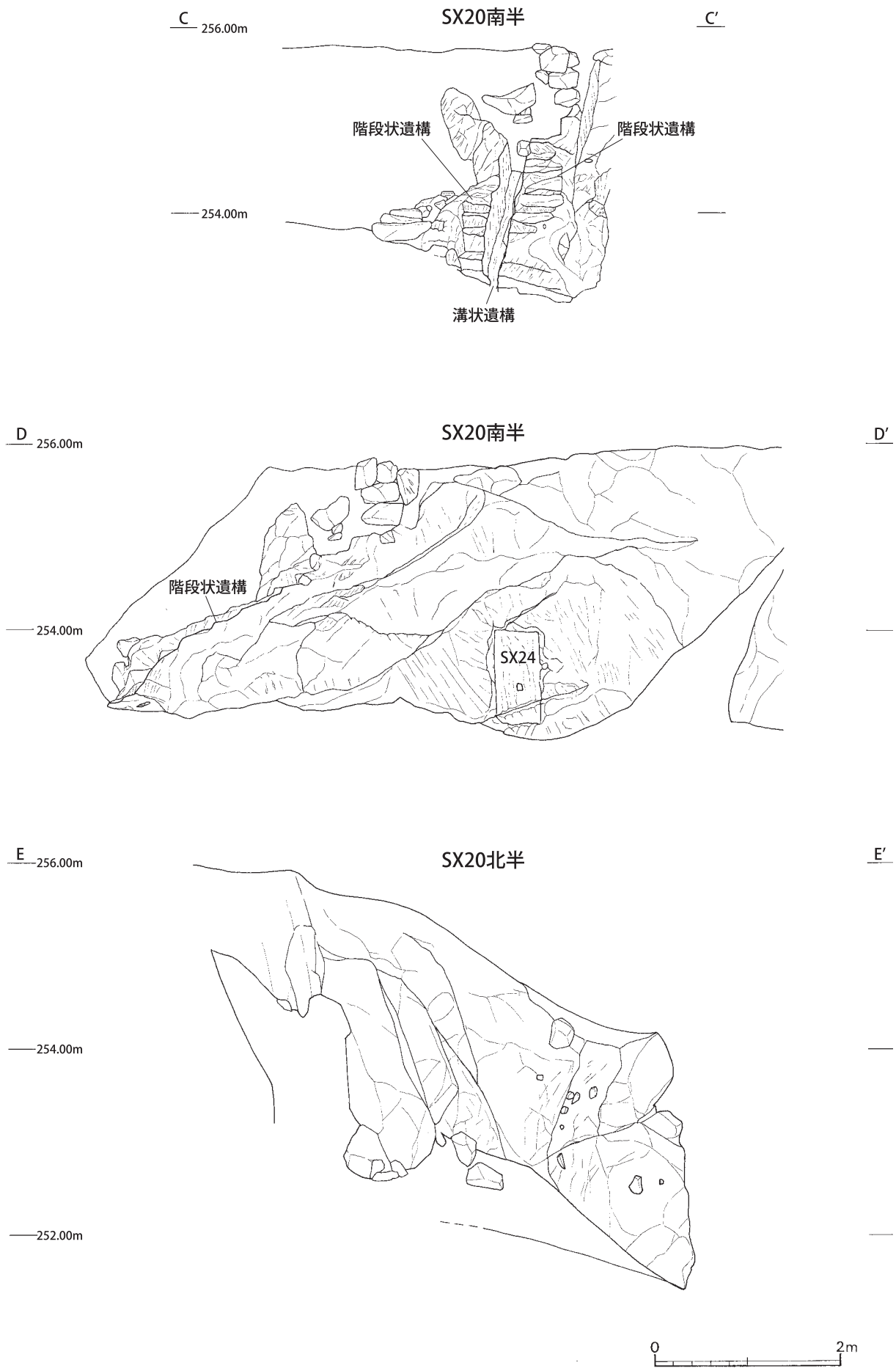


Fig.100 昆布山谷地区第6地点立面図 (S = 1 / 60)

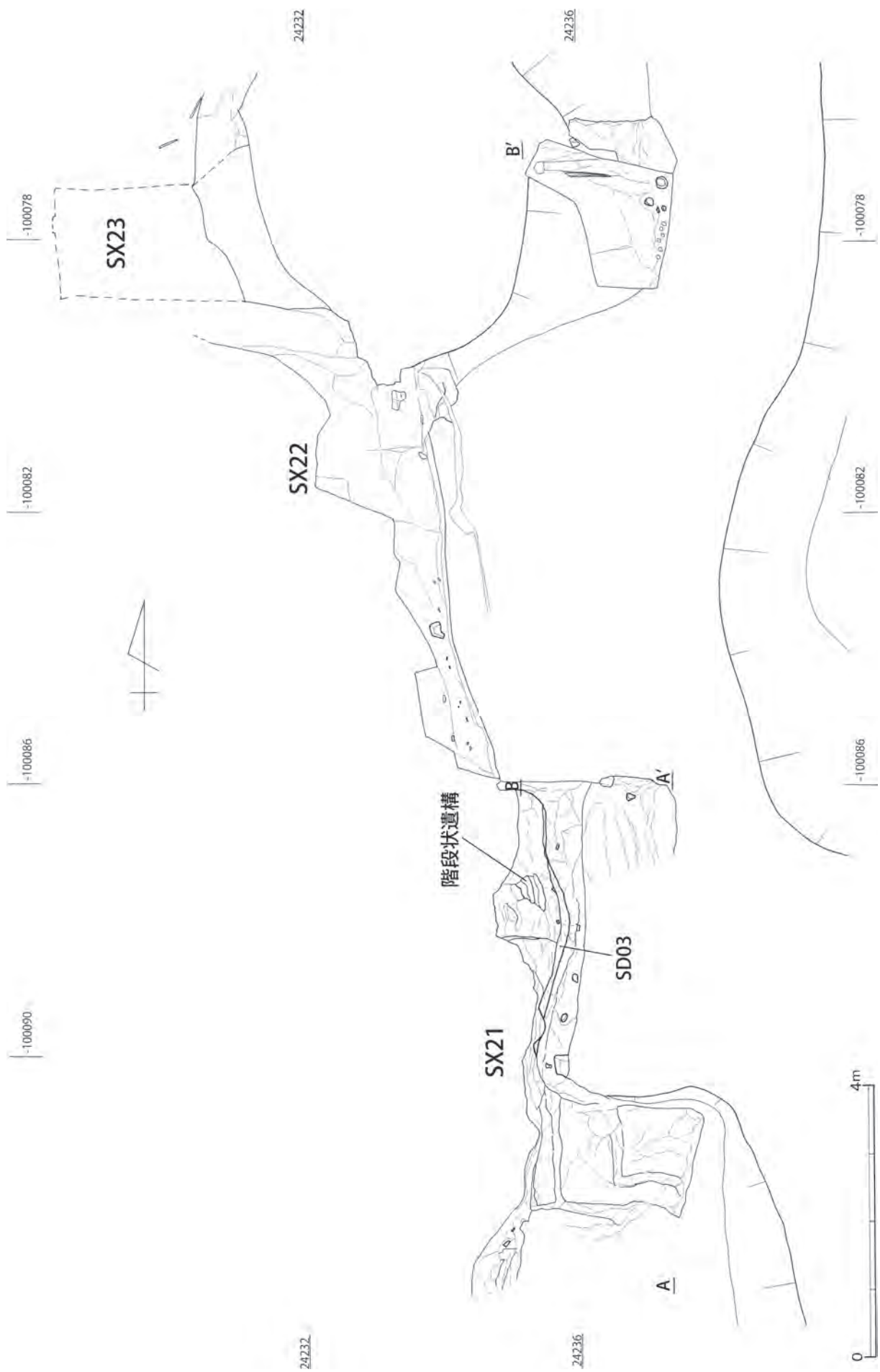


Fig.101 昆布山谷地区第7地点平面図 (S = 1 / 80)

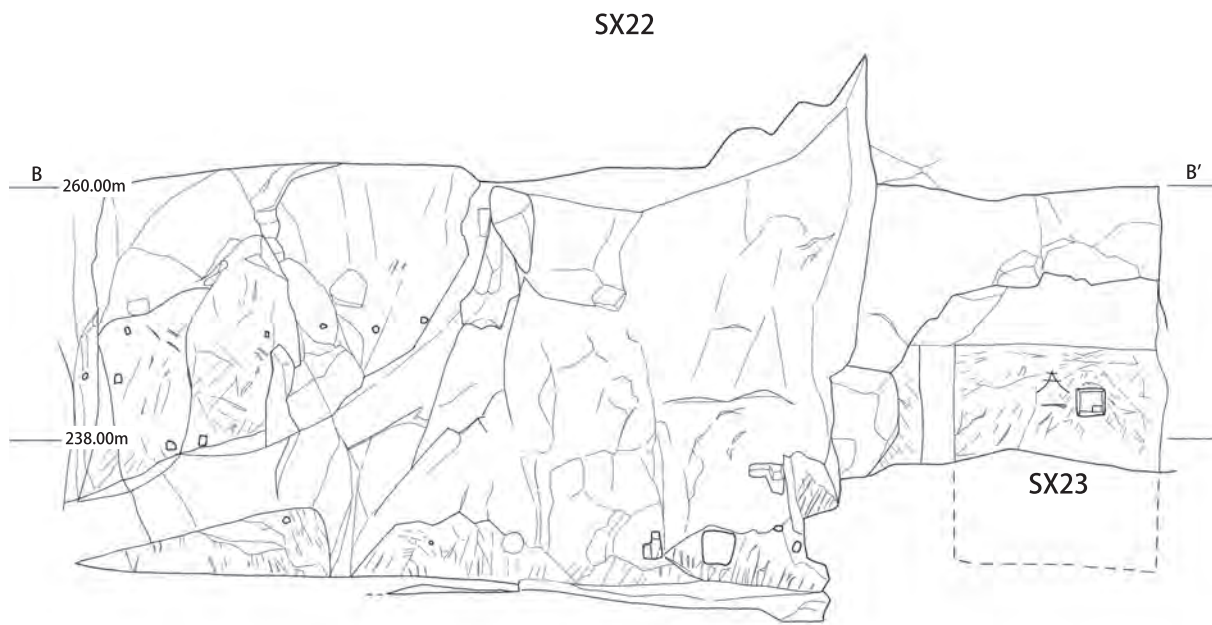
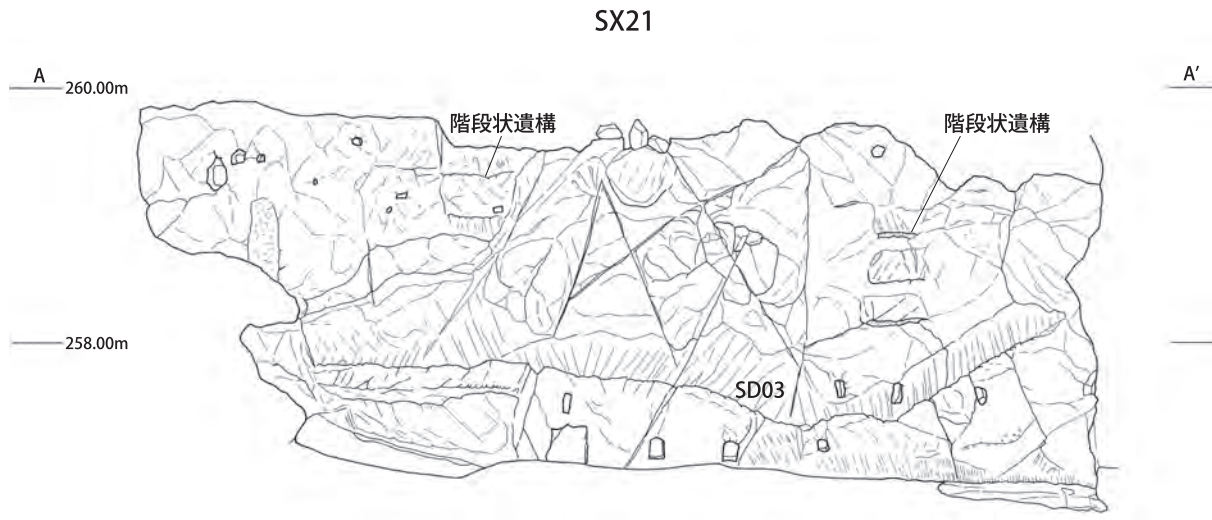


Fig.102 昆布山谷地区第7地点立面図 (S = 1 / 60)

## ②階段状遺構

S X 21 には階段状遺構は2つ掘り込まれていた。一つは、北端部から1.3 m程度南にある階段状加工①で、もう一つは北端部から4.6 m程度南にある階段状加工②である。階段状加工①は段数が3段で、1段目が標高258.1 m、3段目が標高258.9 m、1段当たりの高さは約30 cmである。1段ごとの幅は40～50 cmで、奥行は10 cm程度と非常に狭い。階段状加工②は段数が2段で、1段目が標高259.0 m、2段目が標高259.55 mである。一段ごとの高さは1段目が約30 cm、2段目が約25 cmである。幅は50～60 cmで、奥行は10 cm程度と非常に狭い。階段状遺構①・②はいずれもS X 21の上段に位置する平坦面へと登るための階段とみられるが、検出位置が高所であることに加えて現状では1段あたりの幅が非常に狭く、歩いて登ることは困難である。岩盤をよじ登る際に手をかけるようにして使用されていた可能性も考慮される。

【S X 22】(SX107・108) S X 22 は第7地点北半で検出された岩盤加工遺構である。加工の範囲は東西約9.7 m、高さ約4.4 mで、本年度の調査で検出された範囲における最低点の標高は256.6 m、最高点の標高は261.0 mである。S X 21 との境が積極的に加工されており、S X 21 の一部を切り込んでいる。梁穴が標高258.9 m付近に6つ、標高258.5 m付近に2つ、標高258.0 m付近に2つ掘り込まれている。左右だけでなく上下の間隔もそろっていることや、梁穴の周辺には加工による鑿痕が多く残っていることも注目される。また、S X 22 の東側には岩盤を削って平坦にしており、一部に柱穴のある遺構が検出された。

【S X 23】 S X 23 は、S X 20 とS X 21 の境で検出された、幅1.6 m、高さ1.7 m、奥行約2 mの岩窟状の遺構で、天井や側壁は鑿で丁寧に整えられて直線的に加工されている。入口付近には一部に発破タガネの痕跡があり、爆破により崩されている部分がある。奥壁には中央やや上に文字か記号が縦に二つ刻まれており、その右側には一辺が約20 cmの正方形の掘り込みがある。

## 第3項 S X 25 の調査成果 (Fig.102～106)

### 【S X 25 の概要】

S X 25 は、第6地点の北部で検出された岩盤加工

遺構である。岩盤上に堆積した土砂を除去して遺構全体を確認した結果、階段状遺構・道状遺構(S F 01)・溝状遺構(S D 05)・段状遺構(S X 26)、岩窟状遺構(S X 27)・柱穴(S P 09～24)などが一体となった遺構であることが判明した。規模は、検出された範囲では長軸約17 m、短軸が約2.8 m、現地表面からの比高は最大で5.8 mである。以下では、S X 25 を構成する各遺構について個別に記載する。

### 【埋土の堆積状況】(Fig.105)

S X 25 は表面が山側から流れてきた土砂で覆われていたものの、深く埋没していなかったため、表面を覆っていた腐葉土を除去する程度で検出された。一方、S X 25 の下に設定したトレンチでは、埋没していたS X 25 の続きが検出されたほか、複数の硬化面を含む堆積層が確認できた。これにより、S X 25 南端部が埋没して現地表面が形成されるまでの利用状況の一端が明らかとなった。ここでは主にトレンチで確認された堆積状況について報告する。S X 25 の直上に分厚く堆積している12層は、土質が均質である一方で、埋土には40 cm程度の大きな礫も含まれていることから、水害等による堆積層と判断される。12層は、上面が一部硬化していることから、水害が発生した後には十分な復旧がされておらず、堆積したあとの上面をそのまま道として利用していたようである。また、8層・10層も上面が硬化しており、同様に道としていた可能性がある。後述するが、同様の状況は第8地点の第1トレンチでも確認された。

トレンチ東部では長さ約50 cm、幅約35 cmの石が立てられた状態で出土した。トレンチの周囲の地表面にも並んだ石の一部が露出していることから、第8地点で検出されたS W 06と同様の遺構が所在する可能性が高い。立石東側の埋土はトレンチ埋土とは異なり、しまりの弱い砂質土であったことから、水害等によって流された土砂が堆積している可能性がある。

### 【検出遺構】(Fig.102～105)

#### ①階段状遺構

階段状遺構はS X 25 の南半部にあたり、昆布山谷の道から尾根上へと上るための階段である。昆布山谷地区では、第5・6・7地点で岩盤に加工した階段状遺構が検出されているが、S X 25 の階段状遺構はそ

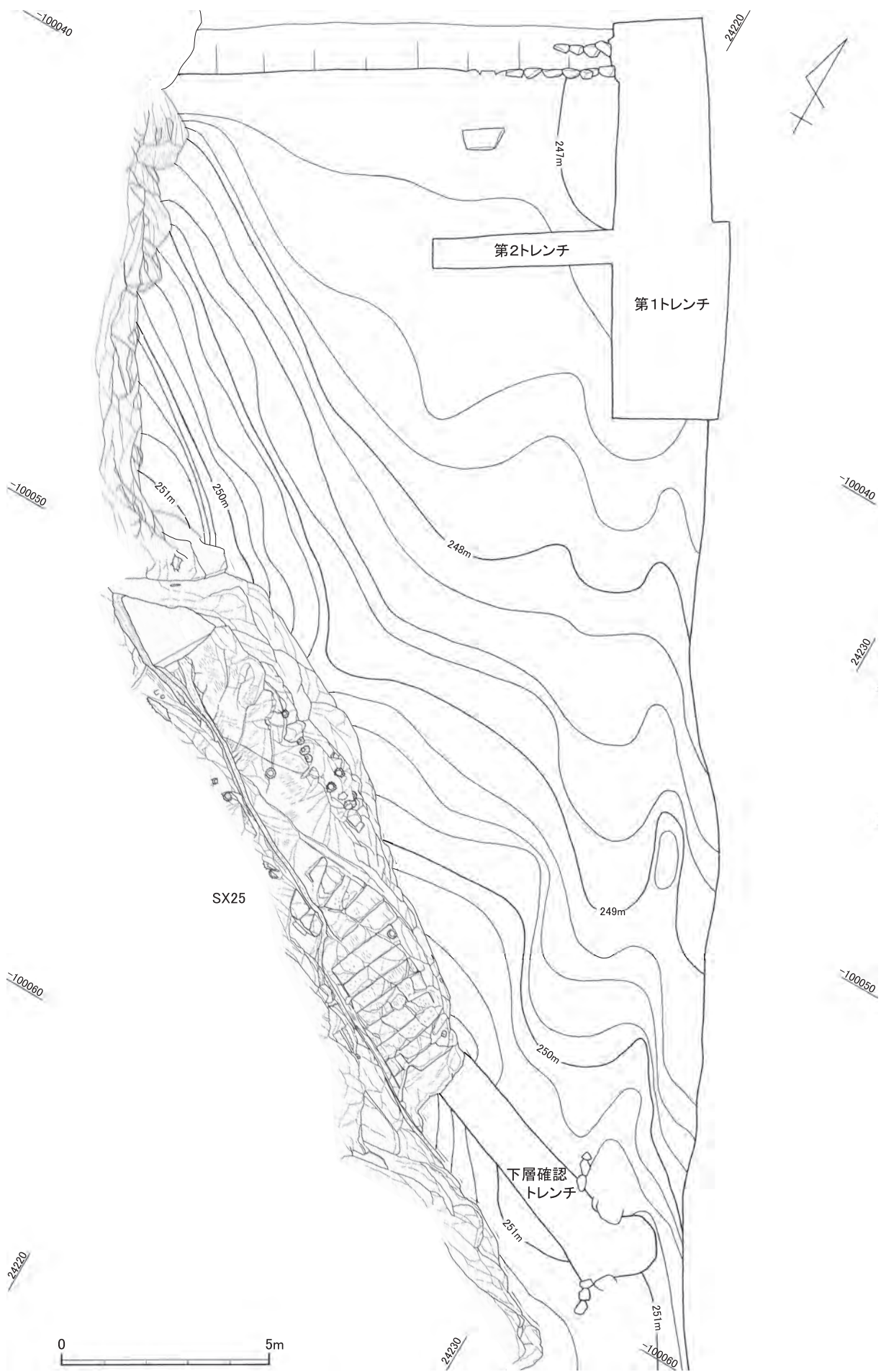


Fig.103 昆布山谷地区第6地点・8地点地形図 (S = 1 / 130)

れらに比べて非常に大きい。検出された範囲においては、長軸で約 9.0 m、短軸で約 2.4 m だが、地下に埋没した部分は全体を検出していないため、さらに範囲が広がる可能性が高い。現地表面から最高部までの比高は約 2.5 m で、S X 25 東側で検出されたかつての道路面まで含めると約 3.0 m である。ステップは 19 段あり、下端部の 5 段と上端部の 3 段を除いて形・大きさともに長方形に揃っているが、15～19 段目は東側の一部が崩落している。また、今回検出された中で最も低い位置にある段は L 字型になっており、東方向に続くようである。一段あたりの大きさは長軸が約 1.7 m、短軸が 35～45cm、一段あたりの高さは約 15cm である。上から 6～10 段目はステップの東側が岩盤の端部まで至っておらず、側桁階段状になっている。

#### ②道状遺構 (S F 01)

階段状遺構の上で、勾配が緩やかでステップが加工されていない範囲である。検出された範囲は長さ 7.8 m、幅 1.6～1.8 m で、北端部が崖状に崩れている。検出された当初は、崩れた先の道のつながりが問題であったが、崩落部よりもさらに北側に道が続いていることや、崩落部の下に柱穴 (S P 24) があることから、本来は橋が架かっており、さらに北側に道がつながっていた可能性がある。

#### ③溝状遺構 (S D 05)

S D 05 は階段状遺構と道状遺構 (S F 01) の西部に位置する遺構で、雨水や S X 25 の西側から流れ込んでくる水などを流すための側溝と考えられる。幅は上場が 13～15cm で下場が約 11cm、深さは場所によるが概ね 12cm で、一部には 20cm と深い箇所もある。

#### ④段状遺構 (S X 26)

S X 25 の西壁沿いで検出された。岩盤の壁面が段状に加工された遺構である。階段や道・溝としての機能とは無関係で、実用的な要素はない。加工の範囲は水平方向が 1.2 m、垂直方向が 23cm である。自然にできた岩盤の窪みを利用しており、台座となる部分が加工されている。段は 2 段あり、奥側の段には丸彫りの地蔵が 2 体置かれていることから、信仰に関連する遺構の可能性が高い。また、S X 25 の埋土からは同様の地蔵が 1 体と、地蔵の破片 (Fig.104-628・629) が出土しており、S X 26 には本来 3 体の地蔵が置か

れていたとみられる。

#### ⑤岩窟状遺構 (S X 27)

S X 27 は階段状遺構上端付近の壁沿いで検出された、岩盤の一部を長方形に掘り窪めた岩窟状の遺構である。高さ約 70cm、幅約 40cm で、奥行 30～78cm の範囲が長方形に加工されている。また、奥壁には縦 54cm、幅 10cm、深さ約 4cm の長方形の掘り込みがある。機能としては S X 26 と同様で、実用目的ではなく信仰に関連する遺構と考えられる。出土した地蔵の内 1 体 (Fig. 104-627) は浮彫で、丸彫りである他の 3 体とは加工方法が異なっていることから、S X 27 に置かれていた可能性が考慮される。

#### ⑥柱穴 (S P 09～24)

S X 25 の階段状遺構北端部に 2 カ所 (S P 9・10)、南壁沿いに 3 カ所 (S P 11・12・15) 道状遺構 10 箇所 (S P 13・14・16～23)、西壁に 1 カ所 (S P 24) に設けられており、いずれも直径が 15～25cm、深さが 20～30cm と小さい柱穴である。階段状遺構の東側に設けられた S P 09・10 は検出位置より手すりの痕跡とも考えられるが、S P 10 よりも北にはうまくつながらない。S X 25 の東側が一部崩落していることから、本来は手すりの穴が掘られていた可能性もある。

S P 12～14 は道状遺構を横断するように並んでいる。また、S P 16～23 は道状遺構東端の南北 3 m の狭い範囲に 8 基の柱穴が集中している。この 8 基は直線に並んでおらず、囲いにもなっていないため、どのように利用されていたのかは検討を要するが、一度にまとめて掘られたのではなく、何らかの必要に応じて少しずつ増えていった可能性もある。S P 24 は S X 25 よりも北端部で、崖状に落ち込んだ箇所に掘られている。検出位置が危険箇所であるため、目視のみの確認ではあるが、S P 09～23 に比べて一回り大きい。S X 25 より北方向には崖状の落ち込みを挟んで道が続いていることから、元々は道と道をつなぐ橋が架けられており、S P 24 には橋脚が立っていた可能性もある。

#### 【出土遺物】 (Fig.106、Tab.31)

622 は端反の坏で、青花の可能性がある。口縁部の内外に圈線があるほか、外面に植物の文様がある。623 は肥前陶器の碗で、外面に鉄絵の文様がある。

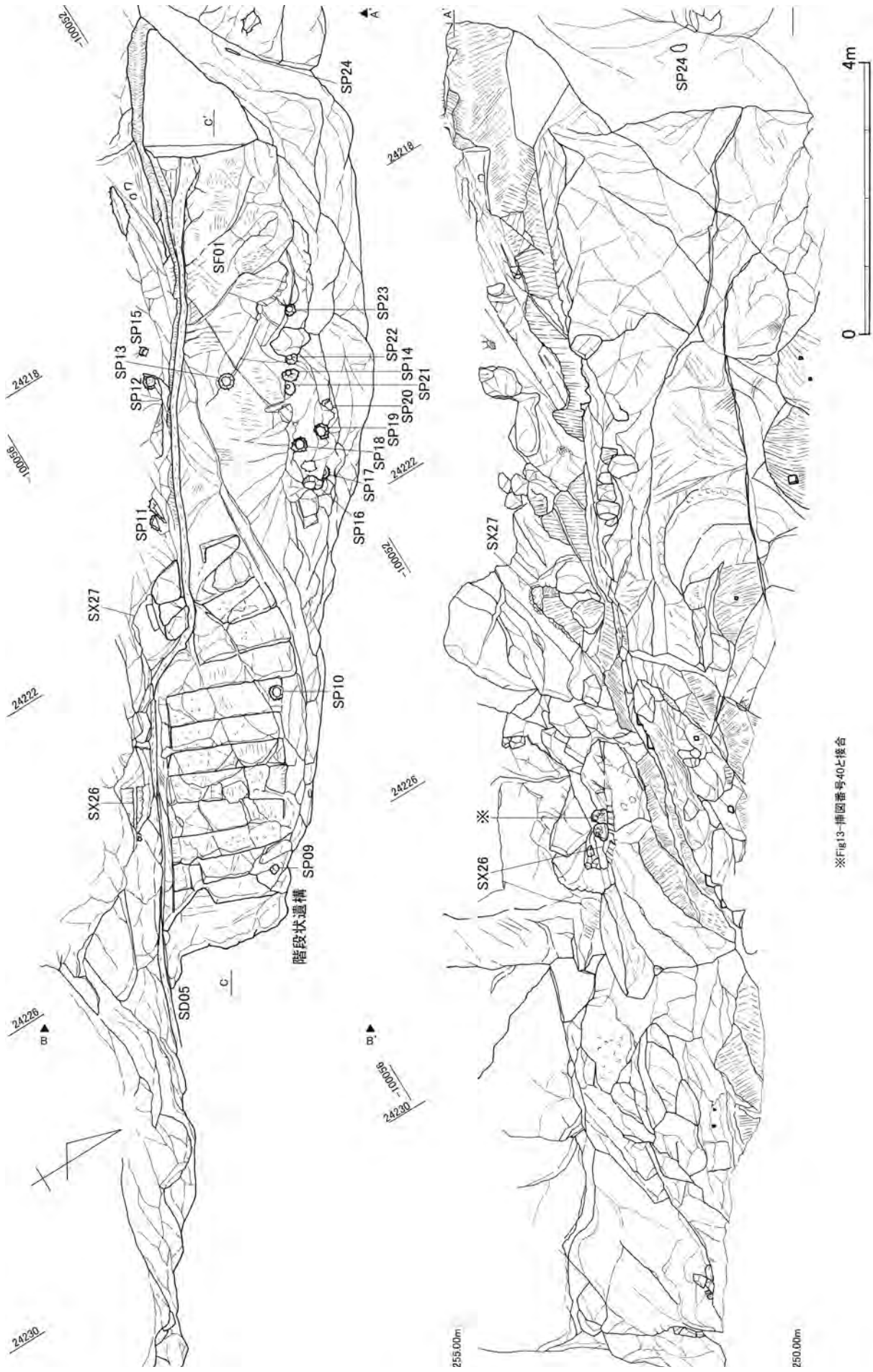


Fig.104 昆布山谷地区第6地点平面図・立面図 (S=1/80)



624は徳利で、体部中央と高台の外面にそれぞれ圏線があり、体部には草花文がある。頸部はなくなっているが、本来は長い鶴首がついていたとみられる。625は石見系陶器の灯明皿である。626は煤瓦で、瓦頭に均整唐草文と「大」のスタンプがある。背部には釘穴が2つある。

627～629は石造物で、いずれも地蔵である。SX25の周囲からは地蔵が4体分出土しており、それらの内、1体が浮彫り、3体が丸彫りである。丸彫りの地蔵の内1体は段状遺構(SX26)の中に入っていたため、取上げなかった。浮彫りの地蔵は白色砂岩製、丸彫りの地蔵は全て緑色凝灰岩(福光石)製である。

627は浮き彫りの地蔵である。厚さ8cmほどで、やや縦長の長方形の石版に地蔵の胸から上が彫り込まれている。側面は上下左右とも研磨されて平らになっているが、四隅を鑿で彫り込んで隅丸方形になっている。裏面には文字のような彫り込みがある。628・629は丸彫りの坐像である。629は首が欠損しているが、それ以外は良好に残っている。SX26に納まっていた2体も1と同様に首が欠失しており、何らかの事由によって破壊された可能性も考えられる。628は蓮華座部分のみだが、SX26に置かれたものと接合したため、何らかの理由で破損したのちに埋没したとみられる。628・629と取り上げなかった2体は、本来SX

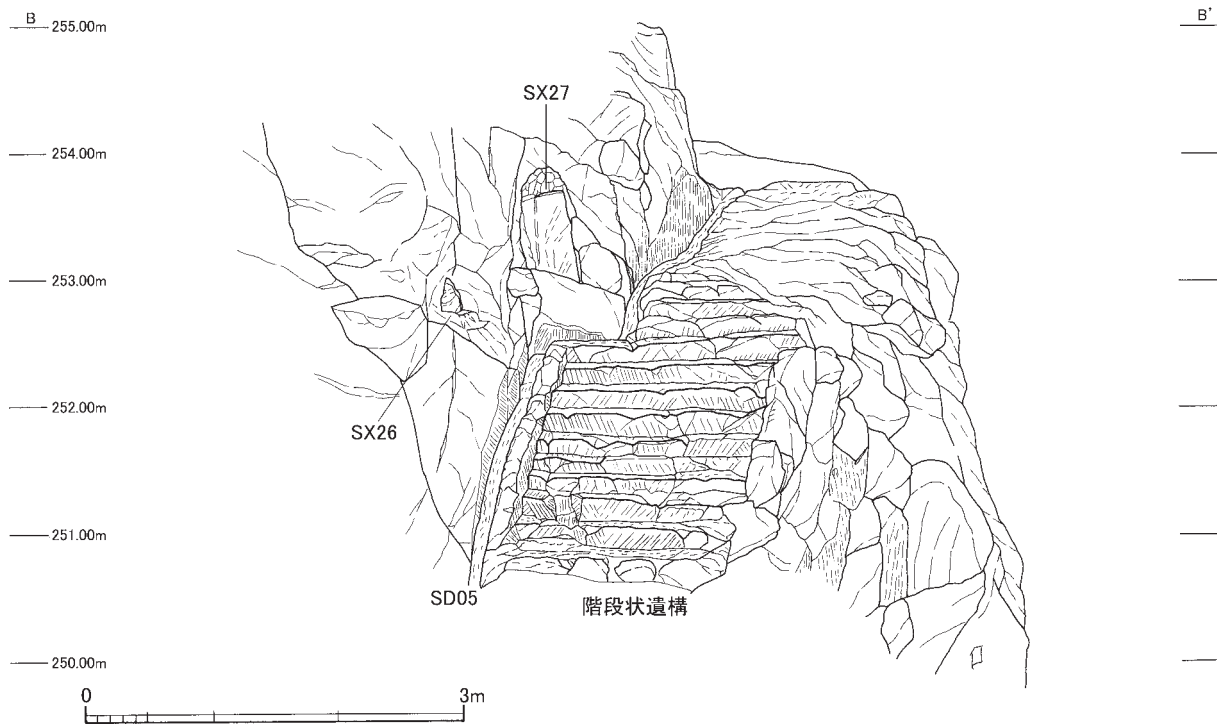


Fig.105 昆布山谷地区第6地点SX25立面図 (S=1/60)

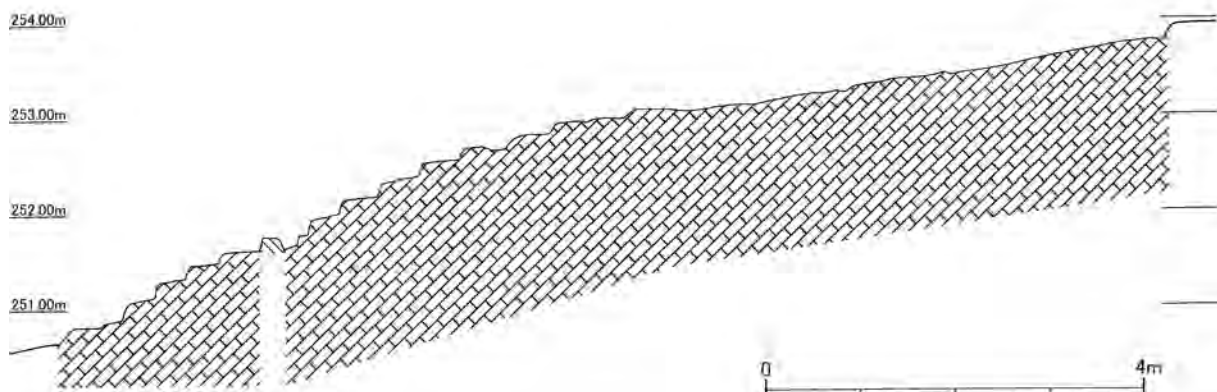


Fig.106 昆布山谷地区第6地点SX25横断面図 (S=1/80)



Fig.107 昆布山谷地区第6地点トレンチ平面図・断面図 (S=1/40)

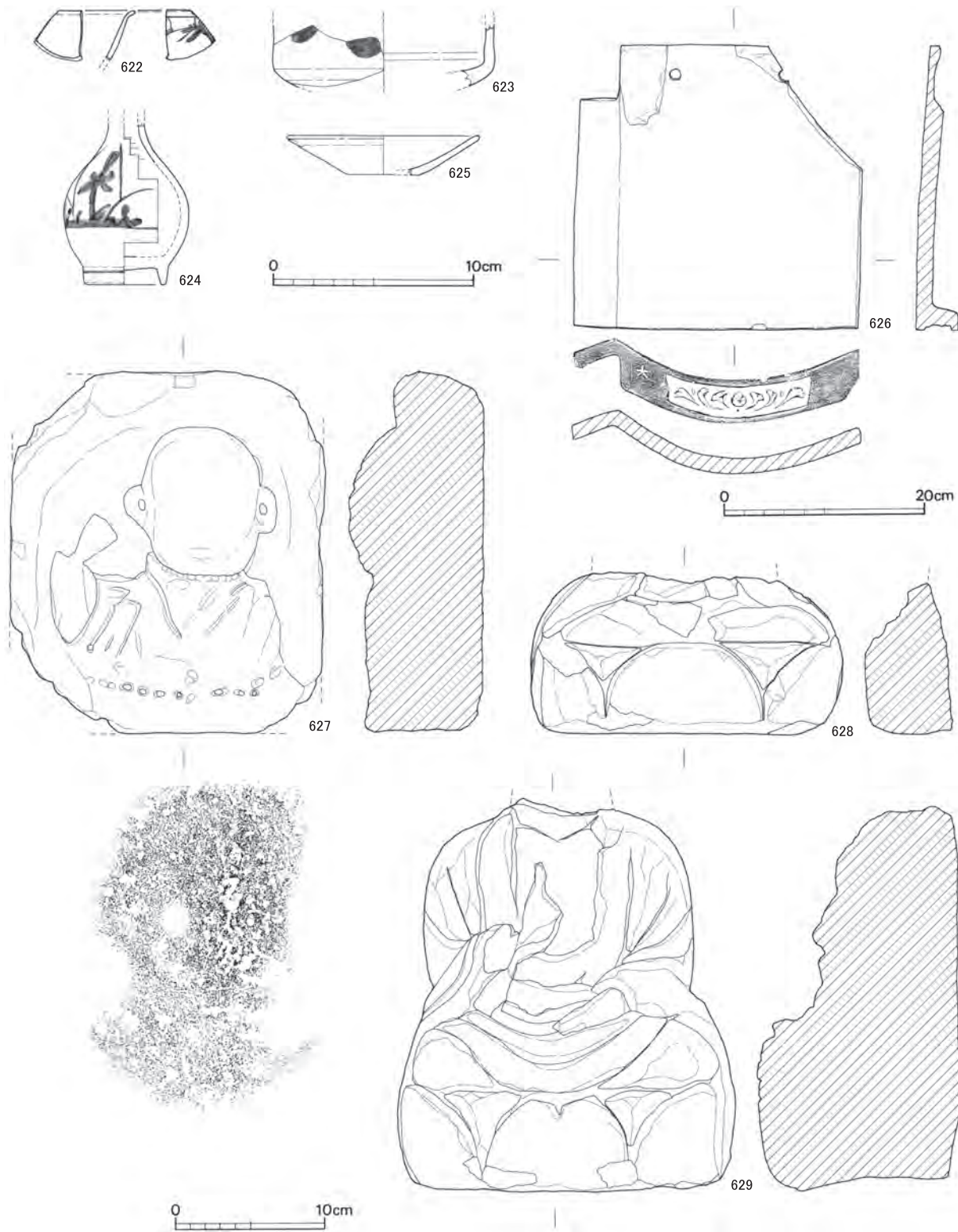


Fig.108 昆布山谷地区第6地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3, 1 / 4, 1 / 6)

Tab.24 昆布山谷地区 6 地点出土遺物観察表

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
622	表土	青花	小坏		(2.5)		透明釉		
623	表土	肥前陶器	碗		(3.1)		長石釉	鉄絵	
624	岩盤階段直上	肥前磁器	瓶		(8.1)	(3.7)	(外)透明釉		
625	岩盤階段直上	石見系陶器	灯明皿?	(9.4)	2.0	(3.6)	長石釉		
挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
626	表採	瓦	軒瓦	28.6	28.8	6.4	暗灰色	2320	
627	表土	石製品	地蔵	24.0	20.8	9.0	灰白色	5420	
628	表土	石製品	地蔵	10.8	20.8	6.0	灰色	1690	
629	表土	石製品	地蔵	26.4	22.5	13.5	灰色	8850	

26 の中に置かれていた可能性がある。

第 4 項 採集遺物 (Fig.109、Tab.25)

第 6 地点南部と第 7 地点では、発掘調査は実施していないが、測量の過程で陶磁器類がいくつか採集された。630・631 はいずれも第 7 地点付近で表採された。630 は肥前陶器の碗で、内外に灰釉が施されているが、底部は露胎するとみられる。器形は体部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁部付近でやや外反する。外面体部に鉄絵による文様が描かれている。17 世紀前半に比定

できる。631 は肥前磁器の段重である。外面体部には型紙摺りによる格子と花の文様と不定型な文様が描かれている。型紙摺りを用いることやコバルトの発色から近代の資料とみられる。

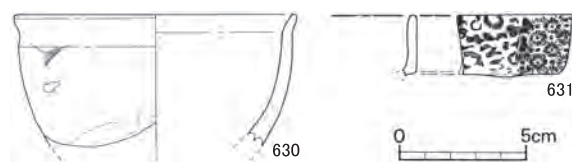


Fig.109 昆布山谷地区第 7 地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

Tab.25 昆布山谷地区 7 地点出土遺物観察表

挿図 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
630	表採	肥前陶器	碗	(11.0)	(5.2)		灰釉	鉄絵	
631	表土	肥前系磁器	段重		(2.5)		透明釉		化粧用

## 第7節 第8地点

### 第1項 調査の概要

第1～7地点の調査では、昆布山谷の谷筋に広がる平坦面の利用状況や、地表面上に露出した岩盤加工遺構の様相が明らかとなっていた。平成28(2016)年度には、谷の景観復元に係る資料の一つとして、谷筋の道の様相を明らかとすることを目的に、谷筋の道にトレンチを設定して調査を実施した。調査着手直前の、平成28年7月に大田市で豪雨が発生し、昆布山谷においても山道が洗掘されるなどの被害が発生したが、この豪雨によって道沿いに道と平坦面を区画していたとみられる石垣の一部が露出した。そのため、石垣の露出箇所を中心として第1トレンチを設定した。調査によって石垣遺構SW06が検出され、道と平坦面との区割りの様相が窺われる資料が得られたほか、平坦面上では礎石が1基検出された。また、平坦面上における遺構の広がりや、道と平坦面とのつながりを確認するため、第1トレンチのほぼ中央から西の平坦面にかけて第2トレンチを設定したが、平坦面上では遺構は検出されなかった。

### 第2項 層序 (Fig.111)

第1トレンチの調査開始当初は、現地表面の直下でかつての道が検出されると想定していたが、調査深度は最大で2mを超えるなど、予想に反して調査量は膨大になった。埋土はほとんどが流入した土砂で、石垣が構築されてから今日に至るまでに何度も水害が発生していたことが窺われた。近代には水害によって埋まった箇所を道として利用していたことも確認された。発掘調査によって、硬化面は5面確認されたが、埋土からは近代の遺物が出土していることから、その多くが近代以降に堆積したと判断される。

第1面は9層上面である。9層は上面が硬化しており、道路面として機能していた時期があると想定される。ただし、9層はトレンチの南端部で一部が確認されたのみで、ほとんどは後世の水害によって流されてしまっている。

第2面は11層上面である。上面が硬化しており、道路面として機能していた時期もあると想定される。9層と同じくトレンチ南端部に一部が残存しているのみで、ほとんどは水害等によって流失している。

第3面は20層・22層の上面である。20層と22層の間には巨大な石があるため分層したが、本来は同一の堆積層であったとみられる。いずれも上面が硬化しており、道路として利用されていたことが想定される。南半部は第4面である23層と一続きになっている。これは、23層が道路面として機能していた頃に発生した水害による土砂が一部残存し、その上面を道路として利用していたためと推測される。

第4面は23層上面で、上面の硬化した整地面である。整地層内からは江戸時代の遺物が出土した。

第5面は23層下面で、SW06の構築面である。一部に平坦な石が敷いてあることから、本来は石敷きの道路であった可能性もある。第5面上面では18世紀後半に比定できる陶磁器類が出土したことから、江戸時代後半には道として整備されており、SW06も構築されていたと考えられる。

近代以降に堆積したとみられる23層よりも上層には、水害による土砂が分厚く堆積しているが、江戸時代に機能していた面にはほとんど水害痕跡が認められないことから、江戸時代においては災害後に復旧が行われていたが、近代以降には十分な復旧が行われなくなった可能性がある。

### 第3項 検出遺構

#### 【SW06】(Fig.111～113)

SW06は第8地点の山道沿いで検出された石垣遺構で、石垣の隅角部を境として北半をSW06-①、南半をSW06-②とする。本来は道と平坦面を区画していた石垣と考えられるが、主に近代以降に発生した水害等によって完全に埋まっており、一部に天端石が見える程度であった。前述したように、平成28年7月3日に発生した豪雨によって山道の土砂が流されたことで地表面上に一部が露出し、その存在が明らかとなった。第8地点に設定したトレンチは東西約2.5m、南北約9.5mであるが、昆布山谷の谷筋には、石垣の上面が露出している箇所がいくつか確認できており、本来は昆布山谷の広い範囲に石垣があったことが想定される。確認できた範囲では、長さ約7.9m、幅約1.5m、高さは最大で1.9mの規模であったが、最上部の石が一部なくなっていることから、本来の高さは最大で2.2m程度であったとみられる。

SW 06-①の積み方は、切込接ぎ風の乱積みだが、基底部分は石の加工や積み方が丁寧である。積み上げられた石は一辺が40～60cmのものが多く、隙間に10～20cmのやや小ぶりな石を詰めている。石の表面には工具の痕跡があり、大きさ・形を揃え、表面を平滑にする意図が認められる。石垣の東側には平坦面に登るための階段を一連で付けており、道から平坦面へともぼる目的とみられる。階段のステップは4段が残っているが、最上段の壁面には裏込め石が露出していることから、本来は5段であったと推察される。一段あたりの高さは約24cmだが、道からつながる一段目は約40cmと高くなっている。ステップの広さは一段目が東西40cm南北54cm、二段目が東西50cm、南北36cm、三段目が東西60cm、南北44cm、五段目が東西60cm、南北50cmとなっており、上の段ほど石垣の反りに合わせて東西幅が大きくなっている。

SW 06-②は、石と石の接ぎ目に隙間がほとんどないほど精緻に積み上げられている。北端部の隅石は算木積み、面は切込み接ぎで、石を多角形に加工している。特徴的な加工としては、算木積みされる石の形に合わせて鍵形に加工された積み石がある。このような加工は大森地内では城上神社でみられ、技術的な系譜が想定される。SW 06-②の下部では土壁の基礎である竹製の木舞が出土しており、昆布山谷の平坦面にはかつて土壁を持つ建物があったと考えられる。基底部分には平らな石をかませており、沈み込みを防ぐ目的とみられる。また、SW 06-②南部の平坦面上には礎石とみられる平らな石が1基検出されており、平坦面上にあった建物の痕跡とみられる。礎石の中心部から石垣までの幅は約80cmと狭く、かつては石垣に沿うようにして建物があったと想定される。

SW 06-①とSW 06-②は石の積み方や構造が異

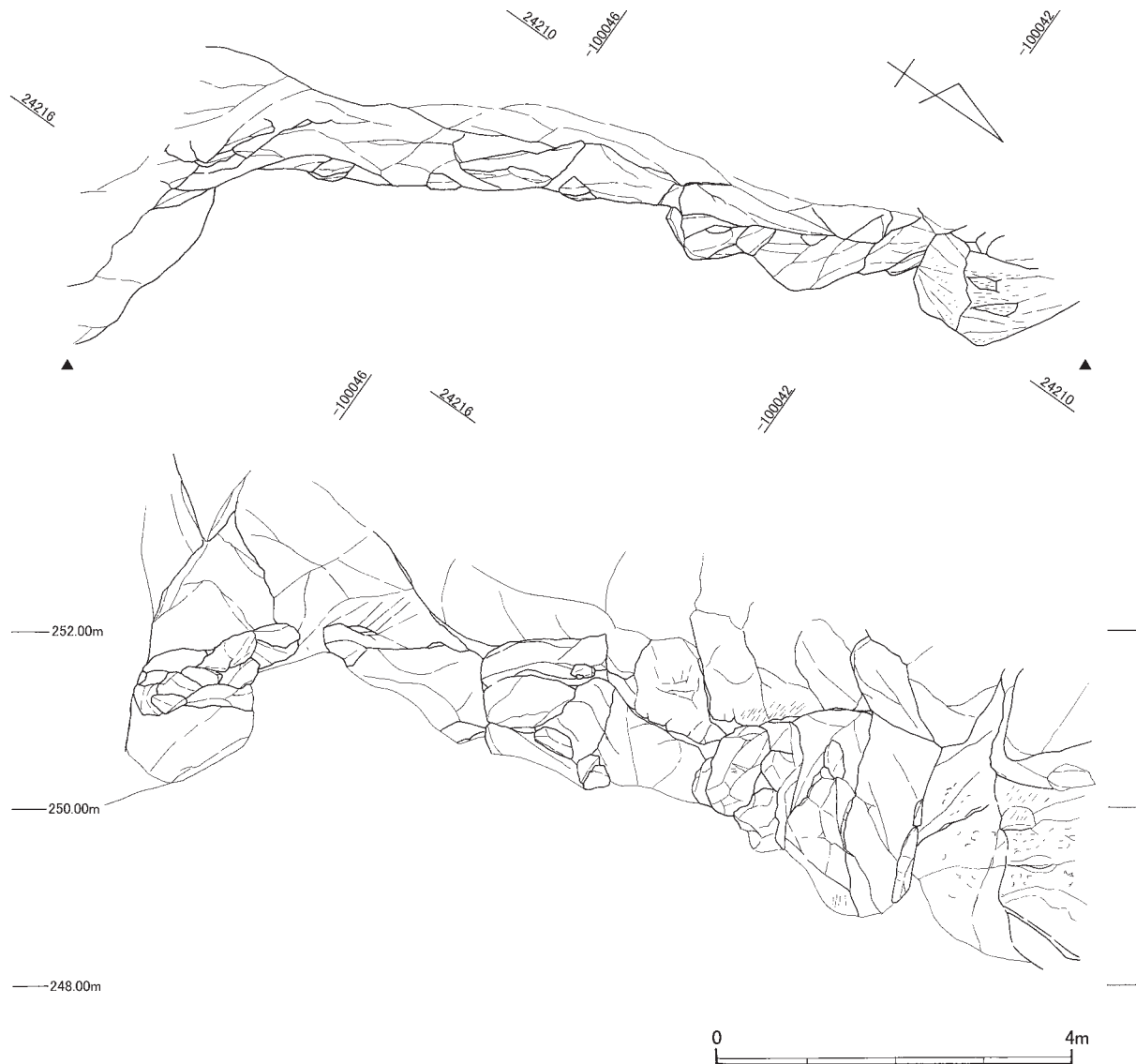
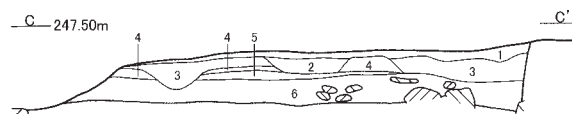
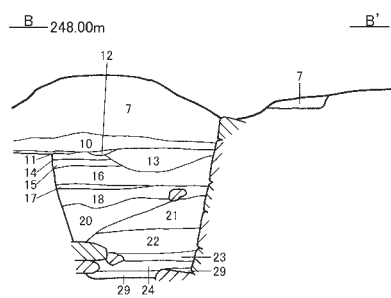
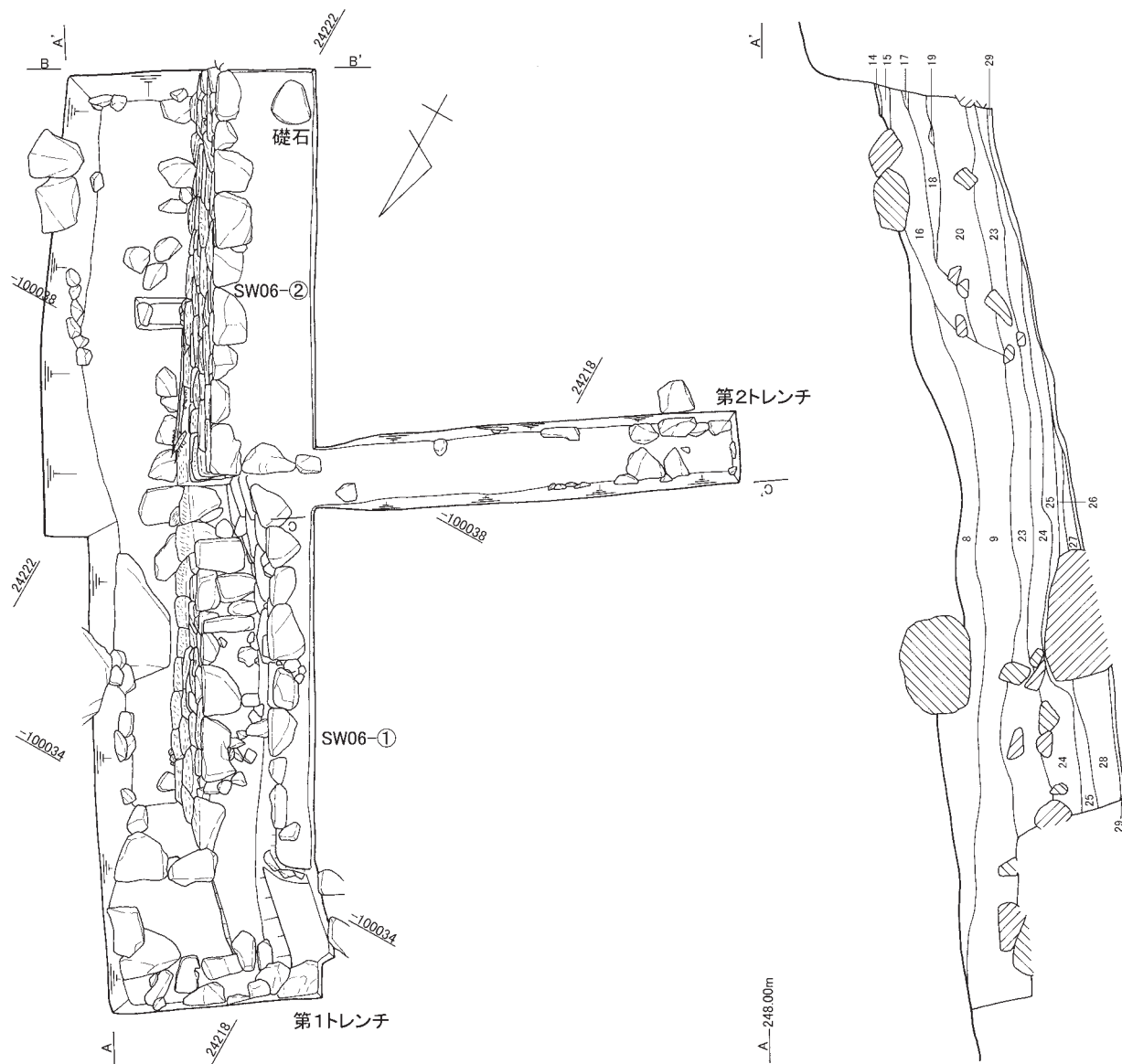


Fig.110 昆布山谷地区第8地点岩盤平面図・立面図 (S = 1 / 80)



- |    |        |       |                               |    |       |     |                           |
|----|--------|-------|-------------------------------|----|-------|-----|---------------------------|
| 1  | 10 YR  | 1.7/1 | 黒色土(表土)                       | 17 | 10 YR | 6/4 | にぶい黄褐色土(粘質、上面硬化、一時期道路面か?) |
| 2  | 10 YR  | 3/2   | 黒褐色土(しまりない)                   | 18 | 5 Y   | 4/2 | 灰オリーブ色土(やや目の粗い砂質土)        |
| 3  | 2.5 YR | 4/2   | 暗灰黄色土                         | 19 | 2.5 Y | 7/4 | 浅黄色土(粘性の強い粘質土)            |
| 4  | 10 YR  | 6/6   | 明黄褐色土(粘質、整地層か?)               | 20 | 2.5 Y | 5/3 | 黄褐色土(しまりがあり、やや粘質)         |
| 5  | 2.5 Y  | 7/6   | 明黄褐色土(粘質、整地層か?)               | 21 | 2.5 Y | 5/2 | 暗灰黄色土(やや粘質)               |
| 6  | 2.5 Y  | 5/2   | 暗灰黄色土(やや砂質で、礫を多く含む)           | 22 | 2.5 Y | 4/2 | 暗灰黄色土(固くしまる)              |
| 7  | 10 YR  | 3/1   | 黒褐色土(1~2センチ大の小礫を多く含む)         | 23 | 2.5 Y | 5/2 | 暗灰黄色土(粘性の強い粘質土)           |
| 8  | 7.5 YR | 2/1   | 黒色土(しまりのない土、1~2センチ大の小礫を少し含む)  | 24 | 2.5 Y | 6/3 | にぶい黄色土(粘性の強い粘質土)          |
| 9  | 2.5 Y  | 4/2   | 暗灰黄色土(やや砂質、2センチ大の小礫を多く含む、洪水層) | 25 | 2.5 Y | 7/3 | 浅黄色土(粘性の強い粘質土)            |
| 10 | 2.5 Y  | 6/3   | にぶい黄色土(やや砂質、1センチ大の小礫を含む)      | 26 | 5 Y   | 5/1 | 灰色土(粘性が強く上面やや硬化、木舞検出面)    |
| 11 | 2.5 Y  | 6/2   | 灰黄色土(ややシルト質、均一)               | 27 | 5 Y   | 6/2 | 灰オリーブ色土(粘性がやや強い粘質土)       |
| 12 | 2.5 Y  | 7/4   | 浅黄色土(粘質で、一部マンガンを含む)           | 28 | 5 Y   | 6/3 | 灰オリーブ黄色土(やや粘質、上面硬化)       |
| 13 | 2.5 Y  | 5/2   | 暗灰黄色土(やや目の粗い砂質土、洪水層か?)        | 29 | 10 YR | 4/2 | 灰黄褐色土(小礫を含み上面硬化、整地層か?)    |
| 14 | 2.5 Y  | 6/4   | にぶい黄色土(緻密な砂質土)                |    |       |     |                           |
| 15 | 5 Y    | 5/1   | 灰色土(砂質土で上面硬化、一時期道路面として機能か?)   |    |       |     |                           |
| 16 | 10 YR  | 4/1   | 褐灰色土(ややしまっている)                |    |       |     |                           |

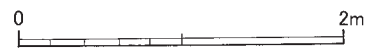


Fig.111 昆布山谷地区第8地点トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 70)



Fig.112 昆布山谷地区第8地点石垣平面図・立面図 (S = 1 / 40)



なっていることに加えて、石垣に切合い関係が認められることから、検出された当初は築造に時期差があると認識していた。しかし、SW 06-①とSW 06-②の面が揃っていることや、8区の東西方向に設定した第2トレンチではSW 06の続きがほとんど検出されず、SW 06-①が構築される前にSW 06-②による土地区画が行われてはいなかったとみられるなどの理由から、SW 06-①とSW 06-②は構築された順番による前後関係はあるものの、ほぼ同時期に構築された石垣と考えられる。

第8地点で出土した遺物は多くが近代に比定でき、江戸時代の資料は最下部から18世紀後半の肥前磁器などが多少出土した程度であった。そのため、SW 06は江戸時代の後半には構築されており、幕末までは災害等があったとしても復旧して使用していたが、近代に入ると災害後の復旧は限定的となり、最終的には現在の地表面まで埋没してしまったと考えられる。

#### 第4項 出土遺物

##### 【陶磁器類】(Fig.114、Tab.33)

632は皿である。高台の畳付けが釉剥ぎされ、砂粒が付着している。634は肥前系の瓶である。633・635はトレンチの底部から出土した資料で、633は肥

前陶器の香炉である。635は肥前磁器の外青磁の碗で、内面口縁部に四方襷文がある。632は17世紀中頃から後半頃の古い資料だが、最下部からは18世紀後半とみられる635が出土していることから、江戸後期までは最下面が道として機能していたと考えられる。

636～638・640～644は表土から出土した。636は肥前磁器の碗で、口縁内部に雷文帯が、外面には植物の文様がある。637は青花の皿である。638は肥前磁器の蓋物である。本来は合子や小壺のようなものと見られるが、小片のため器形の復元が難しい。外面に鳥の文様がある。639は唐津系とみられる小碗で、外面の銅緑釉が口縁の内部まで及んでいる。641は陶胎染付の碗である。642は石見系陶器の瓶である。643は唐津系の鉢で、内外とも藁灰釉で白色の器体に銅緑釉を流しかけている。644は石見焼の鉢である。

645は第8地点の下層から出土した木製品で、断面正方形の棒状に加工されている。

##### 【木舞】(Fig.113)

SW 06-②沿いの、第20層上面から出土した。幅約3cmに割られた竹を縦横にして組まれた状態で出土した。割竹の表面には波状に変色した部分があり、縄などで縛っていた痕跡とみられる。割竹は最大で長さ

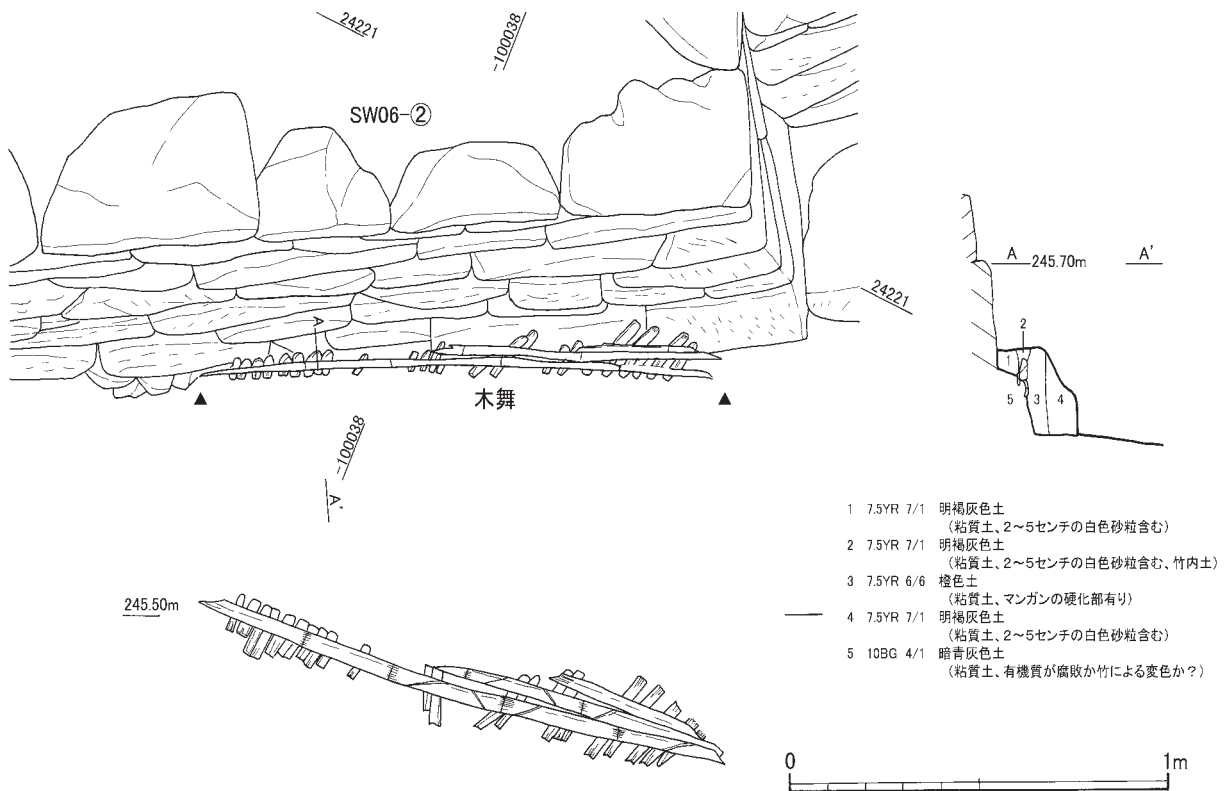


Fig.113 昆布山谷地区第8地点木舞平面図・立面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

145cm だが、片側が破損していることから本来はもっと長かったとみられる。竹の周りには粘土が多く堆積しており、土壁の痕跡の可能性はある。

平坦面上の建物が崩落した後に埋没したと考えられる。出土層位より、明治時代に崩落したとみられるが、建物として利用されていた時期は江戸時代の終わり頃

とみられる。本資料の出土により、第8地点の平坦面には土壁を持つ建物があったことが想定でき、昆布山谷の景観を復元する上で非常に重要な資料といえる。石見銀山遺跡での木舞の出土は3例目で、これまでに石銀藤田地区と宮の前地区で出土している。

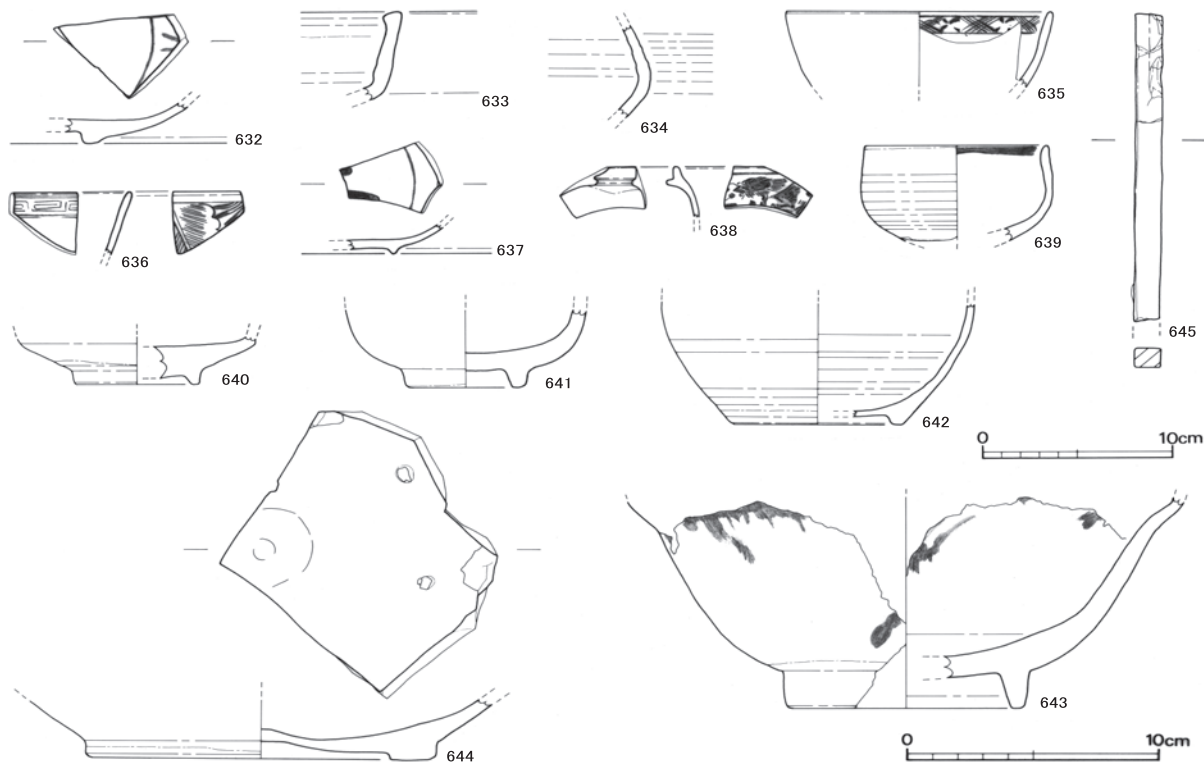


Fig.114 昆布山谷地区第8地点出土遺物実測図 (S = 1・3, 1/4)

Tab.26 昆布山谷地区8地点出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
632	29層整地面直上	肥前磁器	皿		(1.9)		透明釉		
633	23層	肥前陶器	香炉か火入れ		(4.3)		灰釉		
634	23層	肥前磁器	瓶		(4.5)		灰釉		
635	20層	肥前磁器	碗	(10.4)	(3.6)		(内)透明釉 (外)青磁釉	四方禪文	外青磁
636	南半拡張部表土	肥前磁器	碗		(3.0)		透明釉	雷文	
637	南半拡張部表土	青花	皿		(1.4)		透明釉		
638	南半拡張部表土	肥前磁器	蓋物?		(2.4)		透明釉		
639	南半拡張部表土	肥前系陶器	小碗	(7.2)	(4.6)		銅緑釉 灰釉		
640	表土	肥前陶器	碗		(2.3)	(4.8)	長石釉		
641	南半拡張部表土	肥前陶器	碗		(3.8)	4.2	灰釉		
642	南半拡張部表土	石見系陶器	瓶		(5.8)	(6.6)	長石釉		
643	南半拡張部表土	肥前系陶器	鉢		(9.9)	(8.9)	藁灰釉 銅緑釉		
644	表土	石見	鉢		(2.9)	(13.4)	長石釉	胎土目	
挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
645	下層 (灰色粘土層)	木製品	棒状	19.5	1.5	1.2			

# 第5章 総括

## 第1節 昆布山谷地区の調査成果

### 第1項 各地点の調査成果

#### 【第1地点】

第1地点は佐毘売山神社のすぐ南側の平坦面に設定した調査地点で、1・2・8トレンチの計3つのトレンチを設定した。発掘調査では、建物の礎石や石列、19世紀代とみられる製錬炉が検出された。礎石は1トレンチで検出されたSB01のほか、8トレンチでも礎石の可能性のある上面が平らな石が一点検出されている。ただし、8トレンチではSB01よりも下位から検出されているため、時期の異なる建物が存在した可能性がある。また、下層確認トレンチでは、遺構は検出されなかったものの、硬化面が確認できた。

#### 【第2地点】

第2地点は第1地点の南東約60mの位置に設定した調査地点である。明治時代の逆L字形の礎石建物(SB01)や、江戸時代後期の礎石建物(SB02)が検出された。SB01の内部からは選鉱作業に関連するとみられる土坑や石組遺構などが検出されたほか、検出された地番や建物の規模が藤田組の『要書録』に記載されている建物と一致することから、藤田組の選鉱場に比定できる。また、SB01の内部遺構であるSX03には中央が凹んだ固い石があり、かなめ石の可能性がある。そのため、SX03はSX02と併せて唐臼として機能していた可能性がある。第4章でもふれたが、唐臼については絵図などでは確認されていたものの、遺構としての検出例は石見銀山において初であり、貴重な事例といえる。SB01は藤田組が石見銀山の開発に着手した初期段階における生産活動の様子が窺われる遺構として注目できる。藤田組は明治28年には清水谷製錬所を建設し、柑子谷でも近代的な工場を建築して集中的に製錬を行っている。しかし、本地点で検出されたSB01は唐臼などの江戸時代から利用されていた施設を使用しており、近代的な工場とは言えない。藤田組も鉱山経営に着手した当初は、江戸時代から続く技術を引き継いだ、前近代的なものであったとみられる。

SB02は江戸時代後期に比定できる建物跡で、内部には炉跡(SX01)を伴っていたことから、製錬作業に関連する建物であったと推察される。建物の周囲には、敷地境とみられる石積みや、石組の溝が検出されている。また、SB02の上面を含め、第2地点南部を広く覆っていた堆積土の上にSB01が建てられていることが調査によって確認されており、SB01とSB02は併存しない。

下層確認トレンチでは、第1地点と同様に遺構は検出されなかったものの、硬化面が2面確認されており、本地点では江戸時代において何度かの整地が行われたとみられる。

#### 【第3地点】

第3地点は、谷の入口から約400mの奥地に位置する調査地点である。上層ではカマドとみられる被熱した石組遺構をもつ礎石建物(SB01)が、下層では岩盤加工遺構が検出された。礎石建物は19世紀代と推定される。下層確認トレンチでは、周辺の間歩から排出されたズリなどが厚く堆積した層も確認できている。本地点においては岩盤加工遺構からSB01の構築面に至るまでに硬化面は確認されなかった。そのため、本地点は岩盤加工遺構が構築された江戸時代初期と、礎石建物が機能していたごくわずかな期間のみ利用されていたとみられる。

#### 【第4地点】

第4地点は、昆布山谷地区の中央部にあたり、村上坑の道を隔てた向かい側の平坦面に設定した調査地点で、礎石建物跡(SB01)や土坑・石垣・溝跡・道路遺構が検出された。また、下層確認では17世紀代とみられる石垣や、江戸時代初期と推定される岩盤加工遺構が検出されている。第1面で検出された礎石建物は、石垣で区画された敷地内に建てられており、建物内部では床下構造の痕跡とみられる木組遺構が検出された。さらに、通り土間や2連カマド、収納目的とみられる土坑、暖房施設とみられる遺構など、生活に関連する遺構が検出されており、住居として利用されていた建物と考えられる。建物の時期は出土遺物などが

ら19世紀代と推察される。下層確認トレンチでは古い敷地境とみられる石垣が複数検出されており、造成が繰り返された結果、現在の地形が形成されていることが確認された。また、調査地点の東側に設定したトレンチでは幅約2.4mの道跡が検出された。この道跡と敷地境の石垣との間では側溝と考えられる石組の溝(SD01)が検出された。

#### 【第5地点】

第5地点は、第2地点のすぐ南側に位置し、東側には新横相間歩、南側には新横相上坑が所在している。本地点では5面以上の遺構面が確認され、礎石建物跡や溝跡・炉跡・水溜遺構・岩盤加工遺構等が検出された。また、ユリカス廃棄遺構やズリ堆積層も検出され、第5地点周辺における鉱山活動による排出物が集積された状況が確認された。ユリカス・ズリについては、科学分析によって金属成分の解明が期待されたため、一部をサンプルとして採取した。科学分析は現在継続中であるが、現段階での成果を付編として掲載している。

第5地点においては、江戸時代を通じて土地の利用状況や、景観が変わっていったことが層位的に確認できた。岩盤加工遺構は他地点と同様に江戸時代の初期から利用が始まったとみられるが、造成などによる地形の変化に応じて順次加工されていったことも確認できている。金属生産に関わる遺構としては、17世紀前半から中頃の炉跡や、17世紀後半の水溜遺構が検出された。それらの上のユリカス・ズリは18世紀前半頃に集積されたと考えられる。その後、18世紀末から19世紀代には積み上げられたズリの上を造成し、その東側に石垣を築いて平坦面を2段とし、それぞれの段に礎石建物を建てている。特に、下段の第5地点第Ⅱ区で検出されたSB02からは、端反碗を中心として石見銀山編年6期後半の陶磁器類がまとまって出土しており、当該期における陶磁器の組成を示す資料として注目される。調査地点の南側では、明治期の藤田組の鍛冶場と推定される礎石建物跡(SB04)が検出された。建物の内部には2基の鍛冶炉の他、金床の痕跡とみられる土坑や、鞆座とみられる遺構などが検出された。SB04の床面の堆積土についてはサンプル採取を実施し、科学分析によって鍛冶に伴う鍛造剥片が確認されている。

第5地点の東側に設定したトレンチでは、敷地境とみられる石垣(SW07・08)と道路面が検出された。SW07は、第8地点で検出された石垣と同じく、主に近代以降に発生した水害によって埋没していた。石垣は17世紀代と18世紀後半にそれぞれ構築されたと考えられる。

#### 【第6地点】

第6地点は、第5地点から約40m南東に位置する調査地点で、谷が狭まって岩盤が露出している。発掘調査によって岩盤に掘り込まれた階段と、階段から続く道跡、溝跡、柱穴、段状遺構、岩窟状遺構などが検出された。これらの遺構は、昆布山谷の谷筋から尾根上の長楽寺へと向かう参道跡と推定される。

#### 【第7地点】

第7地点は、第6地点のすぐ南側に設定した調査地点である。本地点においては発掘調査を実施せず、遺構の顕在化と確認のみを行った。その結果、溝跡や階段跡などの岩盤加工遺構が確認された。また、道から一段上った平坦面では、高さ約1.7m、幅約1.7m、奥行き約3mの岩窟(SX23)が確認された。SX23は他の岩盤加工遺構と比べて非常に精緻な加工がなされている。奥壁に刻書があることから、信仰に関連する遺構とも考えられるが、利用目的や加工の意図などを明らかとすることはできなかった。類例を待ちたい。

#### 【第8地点】

第8地点は、第5地点と第6地点の中間に位置する調査区である。道路部分を中心にトレンチを設定したほか、平坦面の一部の調査も実施した。発掘調査によって、道と平坦面とを区画する石垣が検出され、石垣の下面では18世紀後半に比定できる道路面も検出された。石垣には道から平坦面へと上るための階段が設けられていたほか、石垣の上面からは礎石も検出された。道路面上に堆積した埋土は、ほぼ全て近代以降に発生した水害によるとみられ、一部には水害によって堆積した土砂の上面を部分的に整備して道路としていた痕跡も確認されている。

### 第2項 調査成果のまとめ

第1～4地点においては上層における遺構確認の他に、下層遺構確認のためのトレンチを設定した。上述のとおり、第4地点では下層確認トレンチにおいて石

垣などが検出されたが、他の地点では明確な遺構は検出されなかった。ただし、いずれの調査地点においても硬化面や造成によるとみられる盛土が確認されている。第3・4地点では、第5地点と同じく、江戸時代初期に岩盤を加工していた痕跡が確認されている。また、いずれの調査地点でも下層からは青花が出土しており、昆布山谷の広い範囲が古くから利用されていたとみられる。なお、第3地点については江戸時代初期に岩盤加工遺構が構築されたのちは、幕末から近代に礎石建物が建てられるまでほとんど利用されていなかったことが判明した。

谷の景観変遷に係る資料として、第5・8地点ではかつての道と平坦面とを区画していた石垣と道の一部が検出された。第8地点で検出されたSW06は高さが最大で2m程度ある大きな石垣で、昆布山谷の道は現在よりもかなり低い位置にあったことが判明した。発掘調査により、SW06は近代以降に発生した水害によって埋没していたことが判明しており、人々の活動のみでなく、災害によっても土地景観が変化していく様子が認められた。なお、SW06は近代以降、水害が発生する度に埋没していったようで、水害によって埋没した上面を限定的に整備して道としていた様子も確認できている。近代における土地整備の様子が窺われる興味深い事例である。また、谷の奥は江戸時代のほとんどの期間において利用されておらず、第3地点よりも下流が主な活動域であったとみられる。なお、各地点の調査成果および文献史料や石造物調査成果をもとにした谷の景観変遷については、次節で記述する。

第3・4・5地点の最下層でそれぞれ確認されたように、江戸時代初期には、各地点で岩盤加工遺構が構築されており、谷の広い範囲が利用されていたことが窺われる。特に、第5地点の下層では、岩盤に縦横の溝を掘り込んでいる様相が確認された。その後、整地や造成などによって平坦面が形成され、居住や鉱山活動などに利用されるようになる。第5地点などで確認されたように、時期によっては廃棄物集積場となるなど、近世をとおして何らかの形で利用されていたようである。第4地点では現在の平坦面より下位から古い石垣が検出されており、区割りや敷地境の変更を伴うような土地の整備があったことが窺われる。

金属生産に関連する遺構は、第1・2・5地点で検出された。第2地点では近代の藤田組の選鉱場が検出され、明治期における選鉱施設の一端が明らかとなった。第5地点では、江戸時代前半における選鉱施設や炉跡が重層的に検出された。

## 第2節 考察

### 第1項 景観の変遷について

#### (1) 絵図の考察

石見銀山については絵図が多く残されており、かつての様相を窺い知る手がかりとなる。ここでは、絵図を検証し、昆布山谷の様相を記述する。

17世紀代の絵図としては元和年間(1615～1624年)に作成された「元和年間石見国絵図」や、正保2(1645)年に作成された「正保石見国絵図」がある。これらはそれぞれ元和年間・正保年間の石見銀山の様子が窺える貴重な資料である。これらの中で昆布山谷に相当する範囲をみると、既に町並みが形成されている様子が認められる。特に、「正保石見国絵図」には、昆布山谷か栃畑谷かの判断が難しいところではあるものの、「御吹屋」の記載があることから、吹屋があったと考えられる。

18世紀代前半の昆布山谷周辺の様相が分かる資料としては、『安田家文書』に所収された長楽寺周辺が描かれた絵図がある。これは、正徳6(1716)年に作成され、長楽寺から御役御衆中宛に提出されたもので、水害によって石垣が流失し、不明瞭となった土地境を証明するための訴訟文と絵図である。この絵図にはおおむね第2地点から第4地点までの西側平坦面から尾根上までが描かれており、現地との照合によって、土地区画や道の位置がほとんど一致することが確認されている。この絵図の中で、最も下流側には「長福寺」と記載されており、明治期の地番などからは第2地点に相当すると考えられる。そのため、この絵図が描かれたころには、この場所に長福寺が所在していたようである。長福寺のすぐ隣は第5地点に相当するが、ここには「茂右衛門家」と記載されている。この時期の第5地点第I区はズリ・ユリカスの廃棄場となっていたことが発掘調査によって判明しているが、その東側にあたる第II区では、トレンチ調査ではある

ものの18世紀代の遺構面を確認しており、調査では検出されなかったが建物遺構があった可能性もある。また、絵図の中で谷筋の道と尾根上に上る道との結節点付近には「長楽寺下坂口」と記載されており、これが第6地点で検出された大きな階段を伴う岩盤加工遺構SX25であるならば、SX25は少なくとも1716年には存在していたことになる。長楽寺は明治10年に、大谷に所在する神宮寺と合併しており、SX25は道としての機能を失っていった可能性がある。

18世紀末から19世紀前半の様子が分かる絵図としては、寛政元(1789)年に描かれた「石見銀山麓絵図」、文政年間(1818～1831)に描かれた「銀山町絵図」がある。これらの絵図にはいずれにも、谷の東側に新横相間歩が、その向かい側に萩峠口番所が描かれている。萩峠口番所は、江戸時代初期に三久須境の尾根上に置かれた役所であるが、寛政元年には新横相間歩付近に移転していることが、これらの絵図から示唆される。仮にそのとおりであったのであれば、第5地点第Ⅱ区で検出された礎石建物跡(SB02)の性格を考える上で重要な情報といえる。SB02は位置的にも時期的にも、上記の萩峠口番所と一致していることに加え、出土遺物には古伊万里や煎茶に使う急須の蓋なども含まれていることから、階層が高い人物が使用する建物であったことが窺われる。そのため、SB02が萩峠口番所であった可能性が考えられる。

## (2) 石造物調査の成果

石見銀山遺跡においては発掘調査以外にも、島根県教育委員会が中心となって平成11年度より石造物調査が実施されている。昆布山谷地区では尾根上の長楽寺墓地、虎岸寺墓地、妙本字上墓地が対象となっている。ここではその概要を述べるが、詳細については各報告書を参照されたい。

石造物調査が実施された地点のうちで、長楽寺墓地、妙本字上墓地では紀年銘が判読できた墓石の年代別の変遷図が作成されている。いずれの調査地点においても造墓数の推移は一致しており、最古の墓石は1500年代まで遡り、17世紀初頭から前半にかけて一度目のピークを迎えている。一方で、17世紀中頃から18世紀前半には大幅に減少するものの、18世紀後半から19世紀前半にかけて再度増加しており、人口が増

加していることが推察される。発掘調査によっても、第4地点では17世紀代の石垣を埋めて地形や地割が変わっていることが、第5地点では18世紀末から19世紀にかけて石垣を構築し、土地の景観や利用方法を大きく変えていることがそれぞれ確認されている。石造物調査・発掘調査からは、昆布山谷においては一時的に低調となる時期があるものの、18世紀後半頃に、再度活性化の様相が認められる。ただし、幕末にかけては造墓数が再び減少しており、人口が減少したようである。いずれも昆布山谷の景観変遷を考える上で重要な成果といえる。

## (3) 昆布山谷の景観変遷

これまで、昆布山谷地区における発掘調査成果と、それらと絵図・文献との比較、石造物調査の成果を概観してきた。これらの成果より、昆布山谷の景観変遷を次のようにまとめることができる。なお、16世紀代については、石造物の紀年銘や文献史料には記録があるものの、発掘調査によっては遺構が確認されなかったため、ここでは割愛する。

17世紀前半には第5地点で確認されたように、谷あいには製錬施設があり、生産活動が行われていたことが窺われる。また、尾根上には寺院や墓地が造られ、人口が増えていく様子が認められる。

17世紀中頃から18世紀前半にかけては発掘調査による遺構・遺物の出土量や、各墓地の造墓数が減少し、昆布山谷全体として衰退している様相がみられる。なお、第3地点などの谷の奥地においては、近世当初に構築された岩盤加工遺構と、幕末～近代に比定できる建物遺構が検出されているものの、その間の遺構面は確認されておらず、江戸時代のほとんどの期間において衰退し、利用されていなかったようである。「石見銀山麓絵図」が描かれた寛政元(1789)年には萩峠口番所も三久須境の尾根上から新横相坑道前に移転していると推察されることから、この頃には谷の奥地には町並みが続いていなかった可能性がある。ただし、第5地点においては、炉跡(SX28、SD05)や大規模な水溜(SK03・04)等の生産施設が集中的に構築されるなど、谷の一部においては活況であったことが窺われる。なお、SK03・04廃絶後の17世紀末頃には第5地点Ⅰ区はユリカスの集積場となるが、これは周

圃では選鉱活動が行われていたことを示すと考えることができる。このような作業場の変更は、開発される間歩と密接に関連していると考えられ、その時点で開発されている間歩の付近に作業場を設けていた可能性がある。

18世紀後半から幕末にかけては、第5・8地点で確認された道の整備や、第4・5地点で検出された区画整備を伴う造成が行われる。また、第1・2地点においても、生産施設を伴う建物遺構が建てられるなど、再び活況となっていた様相が認められる。この頃には谷全体が大規模に整備され、石垣を伴う道や新たな敷地が造られ、吹屋などの生産施設や住居などが新たに建てられていたようである。また、第8地点で検出された石垣の下部からは土壁の内部構造である木舞が出土しており、当時は土壁を持つ建物が谷筋に建てていたことが判明している。

石造物調査においても、この時期にはいずれの墓地でも造墓数が増加しており、人口が増えたことの反映とみられるなど、発掘調査成果と同様の状況が確認されている。ただし、幕末には再び衰退し、明治期の再開発を待つこととなる。

明治19年より藤田組による再開発が始まると、事務所や製錬所などが建設されていき、昆布山谷の周辺でも20以上の施設が建てられたことが『要書録』に記載されている。その遺構としては第2地点のSB01、第5地点のSB04などがあり、明治期における近代化以前の鉱山活動の様子が窺われる。建物には板葺きの、江戸時代までと同様なものと、瓦が葺かれたものがそれぞれ存在していたようである。分布調査では谷の東側において近代の遺物や、近代の採掘によって排出されたズリを用いた平坦面などが確認されているものの、大規模には造成されておらず、近代以前の集落の景観は保持されている。ただし、明治時代以降に発生した水害による土砂は谷筋を徐々に埋めていき、18世紀代に再整備された石垣・溝は現在では完全に埋没してしまっている。さらに、尾根上からの土砂の崩落、草木や倒木などによって、平坦面すらも確認が難しくなりつつある。

## 第2項 第5地点で検出された生産関連遺構について

第5地点第1区の調査では、岩盤加工の直上に15～20cm程度の盛土・整地をし、製錬炉(SX17～19・30)や溝(SD02・09・10・11)、水溜(SK03・04)などの生産に関連する遺構が構築されていることが判明した。これらは17世紀前半から中頃の遺構と推定でき、当地においては比較的短期間に改修や建て替えなどがあったとみられる。本文中では各遺構の紹介にとどまったため、本項ではそれらの機能について、簡単ではあるが現段階での考察を記述する。

### (1) SD02・09・10・11の概要

再度にはなるが、SD02・09・10・11の検出状況及び調査の進展についてまとめる。SD02・09・10・11は第5地点最下部の岩盤に、縦横に掘られた溝である。平成26年度の調査によってSD02・09が検出され、SD02は調査区西側の岩盤沿いと、調査区東方向に掘られていることが判明していた。一方、SD09は第1区の東側で、南北方向に延びており、縁辺部に被熱痕があることから火を用いた岩盤加工なども考慮されていた。また、当時は溝であることが確認されていなかったこともあり、SX05として報告していた。その後、平成29年度の調査では、第5地点第1区の岩盤上にSD02・09・10・11が縦横に掘り込まれていることが、部分的ではあるものの確認され、排水目的で掘り込まれたのみではないことが判明した。

### (2) SD02・09・10・11の機能について

SD02については、岩盤沿いに掘られたSD02①は本来西側からの水が平坦面に入らないようにする排水目的があったとみられるが、第1区の岩盤上が整地された後には、その上に炉跡SX17～19が構築されている。これらは溝による防湿効果を狙って構築された可能性があり、前段階からの継続的な土地利用を示す遺構として注目される。SD09・10・11は検出状況からは構築目的の推察が難しいが、一部に被熱痕があることから、発掘調査によって検出はされなかったものの、上部には本来炉が構築されていた可能性がある。上部に炉があったならば、SD09・10・11はSD02とSX17～19の関係と同じく、炉の使用にあたっての防湿目的として掘り込まれていることが考慮される。参考となる史料としては、文化7(1810)年に銀山

附役人から勘定所へと提出された「銀山諸事ニ付認書差上控」(『山中家文書』所収)がある。この文書は石見銀山における鉱山技術が詳細かつ具体的に記述された解説書である。その中には「火床の地底水抜」として、「①横長六尺斗」「②此所の真上へニ火床作事」「③横式尺位深サ同断、上エ石ふた左右石垣」とあり、長さ六尺と二尺で、深さ同程度(二尺か)の溝を十字に掘って石を積み、石蓋を置いた上を、火床としていることが図面とともに記載されている。あくまでも推察ではあるが、SX09には一部に被熱痕があることから、この火床と同様の遺構であった可能性も考慮される。SX09の上部から製錬炉は検出されていないが、整地の際に壊されてしまっているのかもしれない。SD02・09・10・11は、「銀山諸事ニ付認書差上控」の時期からさかのぼる遺構ではあるが、同様の意図で構築されている可能性がある。

## (2) SK03・04について

SK03・04は第5地点第I区で検出された大規模な石組の水溜遺構で、出土遺物などから17世紀後半に利用されていたと判断される。SK03の南東部には導水溝とみられるSD07も検出されており、調査区外にも水溜や導排水設備が存在していたと考えることができる。そのため、この時期には第5地点の広い範囲が選鉱の場となっていた可能性があり、選鉱に特化した大規模な施設の存在が想定される。17世紀後半は昆布山谷やその周辺では遺構の検出が低調となる時期である。そのような状況下において、本地点ではSK03・04ののちに製錬炉SX28・SD05など、生産にかかわる遺構が継続的に構築されており、他地点とは明らかに様相が異なっている。この時期には、昆布山谷全体としては活動が低調となっていたものの、本地点のように生産体制が維持され、施設が整備された場所もあったことが推定される。

## (3) 製錬遺構SX28・SD05について

SX28・SD05は第5地点第I区で検出された製錬炉とその排滓溝とみられる遺構である。炉の直径は60～70cmと大きく、炉壁や底部に敷き詰めた炭化物なども良好に遺存していた。また、SX28と重複して炉跡SX30が検出されているなど、上述したSK03・04とも合わせて、本地点では17世紀中頃から後半

には活発な生産活動が行われていたことが窺われる。SX28の炉壁や埋土、SD05から出土したカラミについてはサンプリングし、現在継続中ではあるものの科学分析を実施している。そのデータの詳細は付編を参照されたいが、炉壁には鉛が染み込んでいることが、埋土やカラミには銅や鉛などの金属成分が含まれていることが判明している。

## (4) 昆布山谷で検出された石垣について

昆布山谷では第4・5・8地点において石垣が検出されている。それぞれの石垣は時期や目的などによって積み方などの構築技術にも特徴が認められる。

第4・5地点で検出された石垣の多くには、大小の割石と切り石を組み合わせて使用しており、積み方は乱積みで、積み石の隙間には小石を詰めている。この積み方の石垣は、一般的な地割の石垣とみられる第4地点のSW01や、第5地点のSW02など、それほど視覚効果を意識しない箇所に用いられているようである。また、後述する精緻な切り石積みの石垣に比べてコスト的に安価とみられることから、第5地点のSW07や第8地点のSW06①のように、昆布山谷の広い範囲に伸びる可能性のある石垣も、この積み方で構築されている。主には昆布山谷の再活期において、谷の広い範囲が整備された際に用いられているようである。やや時期が古くなるが、SK03・04の側壁は、割石を横積みとしている。これらと同時期の遺構としては、第5地点の道トレンチで検出された石垣(SW08)がある。昆布山谷においては、古い時期には横積みの石垣が構築されていたようである。

一方で、第8地点第1トレンチの南側では、多角形に加工した切石を用いた石垣(SW06②)が検出されている。積み石の表面は鑿によって整えられており、一部には現地合わせをしたとみられる鍵形の加工も認められる。このような石垣は視覚的な効果が高いが、積み石の加工に技術と手間を要することから構築にかかるコストも高くなるとみられる。この、多角形の石を積み上げる石垣は、のちに銀山地内やその周辺でも社寺や重要な建物などに用いられるようになるが、SW06②はその初現である可能性がある。実際に、佐毘売山神社や城上神社、藤田組の火薬庫などに同様の石垣が認められる。SW06②は18世紀後半に構築さ



れた石垣であるが、並んで検出された SW06 ①などの同時期の石垣と比べて明らかに精緻な積み方をしている。当該期は昆布山谷が再び活況を呈してくる時期にあたるが、整備箇所や資金の多寡、もしくは整備にかかる関係者によっては、かけるコストも異なっていたことが窺われる。

### 第3節 総括

昆布山谷地区においては8年間にわたる長期的な調査によって、谷の広い範囲に調査地点を広げることができ、谷全体を対象として集落の変遷を窺うことのできる資料が得られた。当初の目的であった16世紀代の遺構は検出されなかったが、近世から近代にかけての谷の開発や居住・生産活動に関連する遺構が多数検出された。谷に広がる集落全体を対象として、利用状

況や景観変遷を追える資料が得られたことは、非常に重要な成果と言える。また、石造物調査や藤田組の『要書録』を中心とする文献史料調査、金属生産に関連するズリやユリカス・カラミなどを対象とした科学分析調査を並行して実施することで、発掘調査のみでは明確にしえないことも明らかとなりつつあり、まさに総合調査といえる成果が得られた。

今後は、昆布山谷以外の谷や、大森町においても土地利用や景観の変遷について調査を進め、相互に比較検討を進めることによって、石見銀山全体の特徴や変遷の把握が期待される。また、石見銀山のみならず、日本各地の鉱山遺跡との比較研究を進め、国内鉱山の変遷や、それぞれの集落の特徴を明らかとしていくことも重要である。昆布山谷の調査成果が、今後の調査研究の一助となれば幸甚である。

### 引用・参考文献

- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第1冊【遺跡の概要】
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第2冊【発掘調査・科学調査編】
- 島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 中田健一・新川 隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000～2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10～14
- 大田市教育委員会 2006～2017『石見銀山遺跡発掘調査概要』15～25
- 石見銀山歴史文献調査団編 2008『石見銀山歴史文献調査報告書』Ⅳ 島根県教育委員会
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2016～2018『石見銀山近代資料集』第一～三集
- 新川 隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会
- 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 尾村 勝 2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷—文献史料と分布調査成果からみる—」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 関西近世考古学研究会 2013『関西近世考古学研究 21 中世末から近世の地鎮め遺構の諸様相』

---

西尾克己 2013 「石見銀山遺跡出土の在り系陶器・石見焼について（1）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』

3 島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014 「石見銀山遺跡出土の在り系陶器・石見焼について（2）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』

4 島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988 『古伊万里』別冊太陽 日本のあるところ 63 平凡社

平田正典 1979 『石見粗陶器史考—原点の模索と丸物師の生活史—』黒潮社

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2012 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』 1

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2012 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』 2

守岡正司・新川隆 2011 「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』 I

島根県教育委員会・大田市教育委員会